

年報の発刊にあたって

令和3（2021）年度は、独立行政法人国立文化財機構第5期5ヶ年中期計画（2021～2025）の初年度です。今期中期計画において、当研究所の果たすべき社会的使命と役割について「我が国の文化財の研究を、有形・無形文化財等を対象に、基礎的なものから先端的、実践的なものまで総合的に行い、我が国の文化財研究の拠点としての役割を果たすとともに、この成果をもとに文化財の保護に貢献する。また、文化財担当者の研修、地方公共団体への専門的な助言を行う。さらに、保存科学・修復技術に関する我が国の中核としての役割を果たす。また、世界の文化遺産保護に関する国際的な研究交流、保護協力、人材育成、情報の収集と活用等を実践するとともに、これらに係る国内外での連携の推進を通じ、文化遺産保護における国際協力の拠点としての役割を担う」と定めています。

この使命を全うするため、文化財情報資料部では美術工芸品等に関する基礎的な研究業務に加え、有形・無形の文化財に関する様々な情報の収集と発信に関する調査研究に力点をおいて業務を推進しています。また海外の文化財関係機関と協力し、積極的に英語による情報発信にも取り組んでおります。

無形文化遺産部では、従来の伝統的な音楽や演劇、芸能、工芸技術といった無形文化財や民俗芸能、風俗・慣習等に加え、民俗技術などの無形民俗文化財の調査研究を進めるとともに、音声・映像による記録を作成し、文化財の保存に必要な用具や資材の生産技術等に関する保存技術についても調査研究を進めています。ところで今般の新型コロナウイルス感染症拡大は、特に無形文化遺産の分野に大きな影響を与えており、公演や行事の中止・延期が多発しました。当部では関連団体等と協力しながら、これらの情報を可能な範囲で収集するとともに、当研究所のホームページや報告書等により積極的に公開しております。

また、保存科学研究センターでは、文化財の保存に関する科学的な調査研究、修復のための材料・技術に関する実践的な基礎研究を行うとともに、国立文化財機構における保存修復業務に関する一体的な研究環境の構築を

推進しています。併せて「近代文化遺産研究室」を「修復技術研究室」に改め、近代文化遺産に用いられている新たな材料の修復技術や災害等で被災した文化財の修復技術等の研究を進めていきます。

さらに、文化遺産国際協力センターでは、アジア諸国をはじめとした各国からの要請に基づいて、文化財専門家養成や保存修復に関する技術移転等、相手国の実情に応じた共同研究や研修事業をリモート等も積極的に取り入れて行うなど文化の力による国際貢献に力を注いでいます。

さて、国立文化財機構本部に設置された文化財防災センターと連携して、当研究所は東日本ブロックの中核拠点として位置づけられました。近年多発する自然災害等の教訓を活かし、無形文化遺産も含めて予防や減災の観点も取り入れた調査・研究を引き続き研究所全体で取り組んでまいります。そのため、部・センターを横断したプロジェクトチームを結成するとともに、真空凍結乾燥機などの調査研究に必要な機器の整備を積極的に進めています。

ところで、世界各国から要請も強い国際的な文化遺産保護支援に関する調査研究活動を行うにあたっては、国内の関係機関や関連分野の専門家との協力体制を充実・発展させることが肝要です。その意味で、「文化遺産国際協力コンソーシアム」（平成18年創設）の存在は大きく、その活動がさらに広まることが囑望されており、事務局運営を文化庁より任されている当研究所としても、引き続きその活動に積極的に関わっていきたいと考えています。

今後とも、より効率的かつ効果的な組織運営を心がけながら、当研究所が文化財保護に関する総合的な調査研究の拠点施設としてさらに発展するよう努力してまいりますので、皆様の御支援、御協力をお願い致します。

令和4（2022）年6月

独立行政法人国立文化財機構
東京文化財研究所
所長 齊藤 孝正

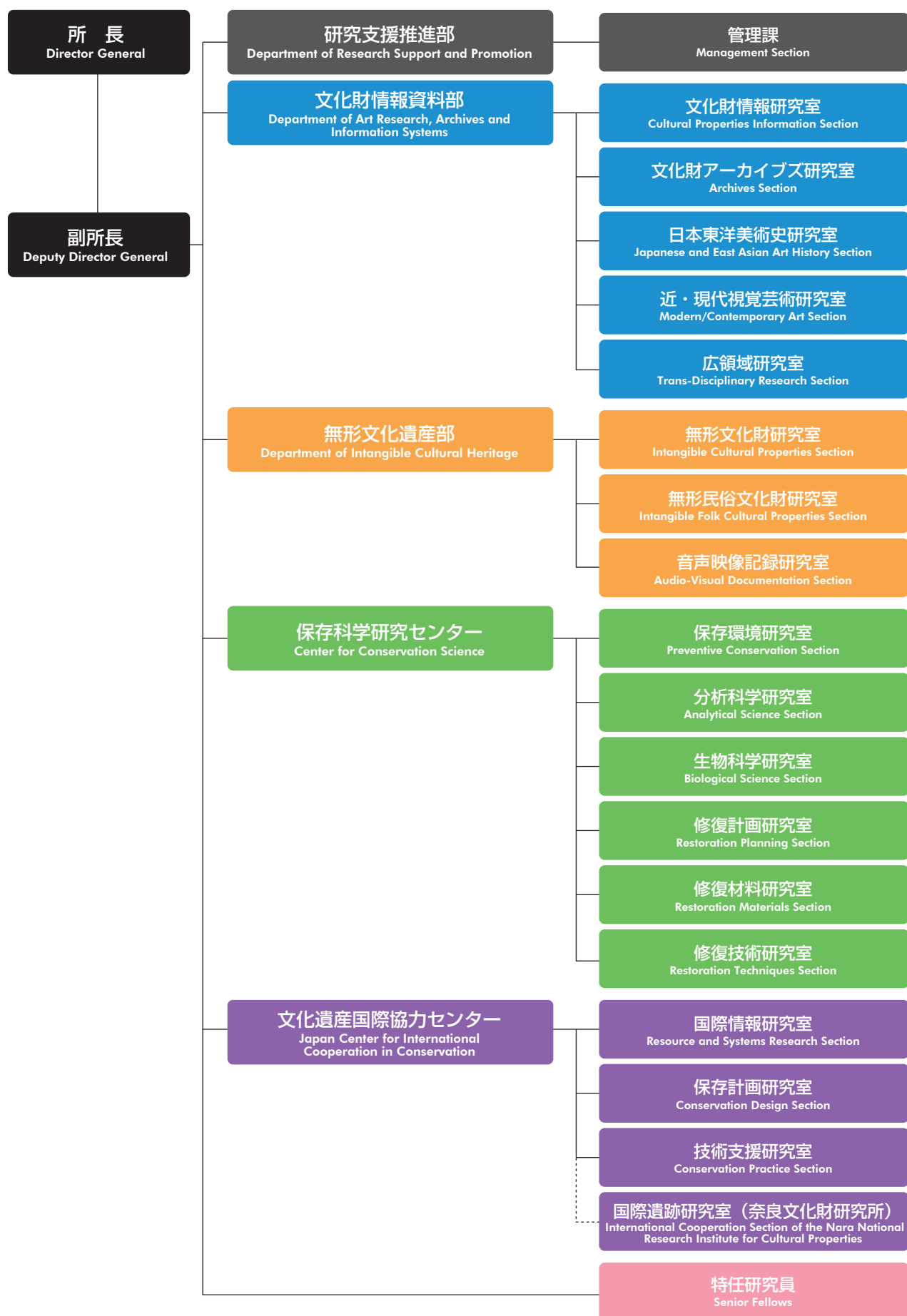
目 次

1. 機 構	3
1. 組織図	4
2. 組織の概要と職員	5
所長・副所長／研究支援推進部	5
文化財情報資料部	6
無形文化遺産部	7
保存科学研究センター	7
文化遺産国際協力センター／特任研究員	9
2. 年度計画及びプロジェクト報告	10
1. 年度計画(令和3年度)とプロジェクトとの対応	11
2. プロジェクト報告	23
① 有形・無形の文化財に関する調査研究事業	25
② 保存修復に関する調査研究事業	32
③ 国際協力・交流等に関する事業	39
④ 情報収集・成果公開に関する事業	44
⑤ 刊行物に関する事業	55
⑥ 指導助言・研修等に関する事業	60
⑦ その他の事業	65
3. 外部資金等による研究活動	67
1. 科学研究費助成事業	70
2. 受託調査研究・外部機関との共同研究及び外部資金による研究	98
3. 成果公開	110
4. 個人の研究業績	114
5. 研究交流	130
1. 職員の海外渡航	131
6. 資 料	132
1. 主な所蔵資料	133
1. 図書資料	133
2. その他の資料	133
2. 研究所関係資料	134
1. 設立の経緯	134
2. 年代別重要事項	134
3. 歴代所長(昭和5年～令和3年度)	137
4. 名誉研究員	138
5. 2021(令和3)年度予算等	139
3. 独立行政法人国立文化財機構中期計画	143
4. 東京文化財研究所関係事業索引	164

1. 機 構

1. 組織図	4
2. 組織の概要と職員	5
所長・副所長／研究支援推進部	5
文化財情報資料部	6
無形文化遺産部	7
保存科学研究センター	7
文化遺産国際協力センター／特任研究員	9

1. 組織図



2. 組織の概要と職員

所長・副所長

所長 齊藤 孝正 (日本陶磁史)

副所長 早川 泰弘^{*1} (分析化学)

^{*} 1 令和3年4月1日付昇任

研究支援推進部

組織概要 研究支援推進部は、東京文化財研究所の事務部門として、管理課に総務係、企画渉外係、財務係、契約係を置き、総務、人事、他機関との渉外、国際交流、財務管理、会計、施設管理等の業務を通じ研究支援を行っている。
本年度も継続して、各係内の担当業務の整理を行うなど合理化を検討・実施し、各研究部門との連携を深め、研究所の円滑な運営に努めた。

総務係

東京文化財研究所における業務方法書の変更、中期計画及び年度計画の取りまとめ、事業年度の業務実績についての評価委員会の評価に関する事務を行っている。また、情報公開に関する事務、秘書業務に関する事務、文書の授受・発送に関する事務、文化庁等の他機関、法人本部及び各施設並びに所内の連絡調整に関する事務、人事管理に関する事務（アソシエイトフェロー、有期雇用職員、客員研究員、調査・研究アシスタントの任免に関する事務を含む）、共済組合に関する事務、栄典及び叙勲に関する事務等を行っている。

企画渉外係

海外渡航に関する事務、研修及び国際研究集会等の実施に関する事務、国際交流等に係る政府機関及び関係団体との連絡調整に関する事務等を行っている。また、外部資金に関する事務、在外日本古美術品修復協力事業に関する事務、寄付金の受入、研究所視察及び見学の受入と対応、所蔵の写真、出版物等の使用許可に関する事務、規定の制定・改廃に関する事務等を行っている。

財務係

財務諸表の作成に関する事務、決算報告書の作成に関する事務、監事及び会計監査人の監査に関する事務、予算・決算に関する事務、資金管理及び出納に関する事務等を行っている。

契約係

物品及び役務の調達、契約の執行に関する事務、給与計算及び給与の支払いに関する事務、諸謝金及び、旅費の執行に関する事務、物品、建物及び設備等の管理に関する事務等を行っている。

研究支援推進部長	川島 美奈子 ^{*1}
管理課長	安達 佳弘 ^{*1}
総務係長	井上 裕介
事務補佐員	並木 沙保里 ^{*2}
事務補佐員	荻堂 惟智乃
事務補佐員	桜井 春香
事務補佐員	内山 海優
事務補佐員	高木 貴紀 ^{*3}
企画渉外係長	三本松 俊徳
任期付専門職員	廣原 大樹 ^{*4}
任期付専門職員	佐々木 薫 ^{*5}
事務補佐員	石川 絵梨子 ^{*6}
事務補佐員	上野山 礼
財務係長	田口 晃章 ^{*7}
事務補佐員	岸 薫美
事務補佐員	坂田 茉梨衣
事務補佐員	高畠 さやか ^{*8}
事務補佐員	川上 由恵 ^{*9}
契約係長	鈴木 道夫 ^{*1}
事務補佐員	安藤 遥 ^{*10}
事務補佐員	辻 光紗
事務補佐員	田中 亜純
事務補佐員	吉岡 かいな
事務補佐員	白木 真理
事務補佐員	溝口 径子
事務補佐員	田中 有花 ^{*2}
事務補佐員	森 菜梨恵 ^{*11}

^{*} 1 令和4年3月31日付転出

^{*} 2 令和3年10月31日付退職

^{*} 3 令和3年12月1日付採用、令和4年3月31日付退職

^{*} 4 令和3年7月31日付退職

^{*} 5 令和3年10月1日付採用

^{*} 6 令和3年7月15日付退職

^{*} 7 令和3年4月1日付東京国立博物館から異動

^{*} 8 令和3年6月30日付退職

^{*} 9 令和3年10月18日付採用

^{*} 10 令和4年1月31日付退職

^{*} 11 令和4年1月1日付採用

組織概要 文化財情報資料部は、文化財に関する調査研究を実施するとともに、調査研究の成果・情報についてのアーカイブ化を進め、適した情報インフラストラクチャを整備し、研究の成果・情報の適宜公開を行う。また国内外の研究機関との研究交流を実施する。調査研究においては、1) 黒田清輝(1866-1924)の遺言により造られた黒田記念館に設置された美術研究所以来の黒田周辺の作家等との交流を中心とした近現代作品の研究を進めるとともに、2) 日本及び東アジアの美術に関する調査研究を行い、美術史研究に資する高質な資料や情報を作成・提供する。また、3) 時代や地域などにとらわれない横断的な広領域にわたるテーマを設定し、人文学のほか、自然科学的研究手法の応用を進め、多角的な視点から研究を進める。あわせて、黒田記念館における作品と研究成果の展示について当部が担当する。4) 研究情報のアーカイブ化においては、文献資料、過去の調査記録等のデジタル化を推進し、研究のための閲覧促進を目的とする画像データベースを作成・運用する。画像資料にとどまらず文献資料及び研究情報を付加した文化財の専門的アーカイブを構築する。5) 研究成果の公開の一環として、『美術研究』(年3冊)、『日本美術年鑑』(年1冊)ほかの公刊、オープンレクチャーを開催する。所内各部門の研究情報の共有化のために総合研究会を企画・開催し、各年度の研究や事業を総括した年報編集の事務を取り扱う。6) 研究情報発信のため、所内広報委員会の情報システム部会ならびにアーカイブ委員会下にあるアーカイブズ・ワーキンググループ協議会を運用・管理し、ウェブサイト及び外部公開データベースの充実を図る。さらに、資料閲覧室で架蔵図書等の諸資料の公開閲覧を担う。

文化財情報研究室

情報システムセキュリティの確保に留意しつつ、調査研究及びウェブを活用した成果公開のための情報基盤の整備を行うとともに、文化財情報データベースを拡充する。また、ウェブサイトの構築・運用を通じて研究成果公開を行う。さらに、文化財情報及び情報技術の文化財保護への活用について研究を行う。

画像情報室：光学理論やデジタル技術を応用した最先端の画像形成技術を開発・駆使し、視覚的な研究情報を提示する。

文化財アーカイブズ研究室

文化財に関する画像や図書等の情報・資料を収集・整理し、文化財情報統合アーカイブを作成し、全所的にとりまとめて公開する。

資料閲覧室：受け入れた文化財関連の図書や定期刊行物、展覧会カタログ、写真資料などを整理し、月・水・金曜日に一般の利用者に公開するほか、各種の書誌や研究情報のデータベースを作成する。また、所蔵資料のデジタル化と目録作成を進め、提供する。

日本東洋美術史研究室

江戸時代までの日本と東アジアの美術を研究する。また、美術の価値形成の多様性を解明するため、美術史研究のための資料学的な基盤を整備する。

近・現代視覚芸術研究室

明治以降の日本美術を研究する。近現代美術に関わる研究資料を収集・整理し、研究手法を開発するとともに、現代美術の動向を調査・研究する。

広領域研究室

美術のジャンルや時代、地域を横断する課題に取り組み、文化財に関わる諸分野と連携して、広い視野から文化財を研究し、その材料・技法・制作過程等を明らかにする。

文化財情報資料部長	塩谷 純	(日本近代絵画史)
文化財情報研究室長	二神 葉子	(考古科学)
文化財アーカイブズ研究室長	江村 知子	(日本絵画史)
日本東洋美術史研究室長	小林 達朗 ^{*1}	(日本中世絵画史)
近・現代視覚芸術研究室長	塩谷 純	(日本近代絵画史)
広領域研究室長	小林 公治	(物質文化史)
主任研究員	小野 真由美	(日本中近世絵画史)
主任研究員	安永 拓世	(日本近世絵画史)
主任研究員	橘川 英規	(美術資料)
研究員	小山田 智寛	(美学・情報学)
研究員	米沢 玲	(仏教美術史)
研究員	吉田 暁子 ^{*2}	(日本近代絵画史)
専門職員	城野 誠治	(画像情報・文化財写真)
アソシエイトフェロー	野城 今日子 ^{*3}	(日本近現代彫刻史)
アソシエイトフェロー	谷口 每子	(画像形成)
アソシエイトフェロー	黒崎 夏央 ^{*4}	(仏教彫刻史)
研究補佐員	谷口 每子	(画像形成)
研究補佐員	安岡 みのり	(ウェブ作成)
研究補佐員	尾野田 純衣	(美術資料)
研究補佐員	寺崎 直子 ^{*5}	(日本絵画史)
研究補佐員	大前 美由希	(現代美術)
研究補佐員	田村 彩子	(資料保存)
研究補佐員	阿部 朋絵	(美術資料)
研究補佐員	鈴木 良太	(日本近代絵画史)
研究補佐員	大谷 優紀	(日本彫刻史)
研究補佐員	藤井 糸子	(データベース)
研究補佐員	山本 祥子	(美術資料)
研究補佐員	酒井 かれん	(画像形成)
研究補佐員	小林 真美 ^{*6}	(中国美術史)
研究補佐員	横尾 千穂 ^{*6}	(日本現代美術史)
客員研究員	三上 豊	(近現代美術)
客員研究員	丸川 雄三	(情報学)
客員研究員	田中 潤	(近代史料)
客員研究員	片山 まび	(東洋陶磁史)
客員研究員	田中 淳	(日本近代絵画史)
客員研究員	齋藤 達也 ^{*7}	(フランス近代美術)
客員研究員	永崎 研宣	(人文情報学・仏教学)
客員研究員	津田 徹英	(日本彫刻史)
客員研究員	川瀬 由照	(日本彫刻史)
客員研究員	山梨 絵美子 ^{*2}	(日本近代絵画史)
兼務	久保田 裕道 ^{*7}	(無形文化遺産部)
兼務	西 和彦 ^{*7}	(文化遺産国際協力センター)
兼務	早川 典子 ^{*7}	(保存科学研究センター)
併任	皿井 舞 ^{*8}	(東京国立博物館)

* 1 令和4年3月24日逝去

* 2 令和3年4月1日付採用

* 3 令和3年4月30日付退職

* 4 令和3年11月1日付採用

* 5 令和3年12月31日付退職

* 6 令和3年8月1日付採用

* 7 令和3年3月31日付兼務解除

* 8 令和4年3月31日付併任解除

組織概要 無形文化遺産部は、無形文化財（伝統的工芸技術、古典芸能）、無形民俗文化財（風俗慣習、民俗芸能、民俗技術）及び文化財保存技術という、日本における無形文化遺産の全体を対象として、その保存継承に資する基礎的な調査研究を実施している。内容は多岐にわたっており、保護対象の確定や適切な保護手法の確立のためには、無形文化遺産を構成する諸要素の専門的な調査・研究が重要である。また、人によって伝承されるために、年代や社会情勢の変化に伴って変容する要素も大きい。このため、文献的研究の蓄積に加えて、伝承の実態に即した調査研究を実施している。

重要な保護手法である音声・映像による記録については、その作成の実施とともに新たな手法開発についての研究を行っている。無形文化遺産保護にとって、音声・映像記録は、記録保存的役割はもちろんのこと、その伝承ツールとしても重要な意味を持つ。このため、無形文化遺産部では、他機関では行うことのできない希少演目等の記録保存事業を実施すると同時に、既存の記録活用のために、デジタルアーカイブ構築に向けての研究を行っている。

このほかに、無形文化遺産分野についてアジアを中心に海外との研究交流も実施している。

無形文化財研究室

古典芸能、伝統的工芸技術などの無形文化財、及び文化財保存技術について、伝承実態の調査や技法技術の変遷の研究など、その保護に資するための基礎的調査研究を行っている。

無形民俗文化財研究室

風俗慣習、民俗芸能、及び民俗技術などの無形民俗文化財について、その保護に資するための基礎的調査研究を、現在における伝承の実態、伝承組織、公開のあり方等の実地調査に基づいて行っている。また、映像記録作成、公開事業等、現実的な問題について全国の関係者との協議を実施し、その対策の検討も行っている。

音声映像記録研究室

無形文化遺産に関する記録のアーカイブ化、記録作成手法について研究を行っている。また、無形文化財、無形民俗文化財の現状を把握し、後世へ継承するために、それらの音声・映像記録を作成している。

無形文化遺産部長	早川 泰弘 ^{*1}	(分析化学)
無形文化財研究室長	前原 恵美	(古典芸能)
無形民俗文化財研究室長	久保田 裕道	(民俗芸能)
音声映像記録研究室長	石村 智	(文化遺産学)
主任研究員	今石 みぎわ	(民俗学)
研究員	鎌田 紗弓 ^{*2}	(古典芸能)
研究員(文化財防災センター)	後藤 知美	(民俗学)
アソシエイトフェロー	佐野 真規	(映像アーカイブ)
研究補佐員	牛村 仁美	(工芸技術)
研究補佐員	金 昭賢	(古典芸能)
研究補佐員	鈴木 昂太	(民俗芸能)
研究補佐員	中田 翔子	(映像人類学)
研究補佐員	狩野 萌 ^{*3}	(民俗学)
研究補佐員	館野 太郎 ^{*3}	(演劇学)
研究補佐員	橋本 かおる ^{*3}	(古典芸能)
客員研究員	星野 厚子 ^{*4}	(古典芸能)
客員研究員	齊藤 裕嗣 ^{*4}	(古典芸能・民俗芸能)
客員研究員	山崎 剛	(工芸技術)
客員研究員	谷垣内 和子	(古典芸能)
客員研究員	伊藤 純	(民俗学)
客員研究員	俵木 悟	(民俗芸能)
客員研究員	松山 直子 ^{*4}	(工芸技術)
客員研究員	今岡 謙太郎 ^{*4}	(古典芸能)
客員研究員	永井 美和子 ^{*4}	(修復技術)
客員研究員	大西 秀紀	(古典芸能)
客員研究員	菊池 健策	(民俗学)
客員研究員	森下 愛子	(工芸技術)
客員研究員	宮田 繁幸	(民俗芸能)
客員研究員	神野 知恵	(民俗芸能)

* 1 令和 3 年 4 月 1 日付兼務

* 2 令和 3 年 4 月 1 日付採用

* 3 令和 3 年 10 月 1 日付採用

* 4 令和 4 年 3 月 31 日付退職

保存科学研究センター

組織概要 保存科学研究センターは、文化財の保存科学・修復技術に関する調査・研究を行うナショナルセンターとしての役割を担っている。科学的な方法を用いて、文化財を取り巻く環境の調査や文化財の材料及び構造に関する調査を行い、文化財の保存や理解に役立つ知見の集積・発信を行っている。また、文化財の置かれた環境履歴を調査し、適切な修復材料・技術の改良・開発、評価及びメンテナンス手法に関する研究を行っている。得られた研究成果は紀要『保存科学』を通じて、すみやかに公開している（ウェブにてフリーアクセスコンテンツ）。これらの知見をもとに、「文化財の虫害菌に関する調査・助言」「文化財の材質・構造に関する調査・助言」「美術館・博物館等の環境調査と援助・助言」「文化財の修復及び整備に関する調査・研究」の 4 項目について、地方公共団体に対して協力を行い、地域の文化財保護の質的向上に寄与している。また、国立文化財機構内の 2 研究所・4 博物館に加え、2018（平成 30）年 7 月に設立された文化財活用センターの保存修復担当の研究員を保存科学研究センターの併任とし、文化財の構造・材質調査や文化財の保存管理上の課題解決等について、相互に連携して、随時取り組む体制を構築している。さらに、2020（令和 2）年 10 月に設立された文化財防災センターの東日本ブロック中核拠点として、地域防災体制の構築や多様な文化財の防災・減災のための技術開発等に取り組んでいる。

保存環境研究室

博物館・美術館など展示・収蔵施設における文化財の安全な保存環境の確立のため、温度湿度、光、空気汚染物質などが文化財に与える影響を調べ、劣化を抑制する研究を行っている。劣化因子の測定方法の基準化を図るとともに、各施設の担当者と連携し、現場での環境モニタリングや、改善のための実証研究も行っている。災害等における一時保管場所の保存環境の整備に関する研究に重点を置いている。

分析科学研究室

様々な科学的分析手法によって文化財の構造・材質を調査し、劣化状態を含む文化財の物理的・化学的な特徴を明らかにする研究を行っている。X線や光を使った非破壊的な手法を中心に、各種可搬型機器を用いた調査方法の開発とその応用によって、文化財の構造・制作技法のみならず美術史・工芸史・考古学等との連携により制作年代・生産地研究などへ視野を拡げ、文化財の総合研究を実現、牽引している。

生物科学研究室

昆虫やカビなど、生物による文化財の劣化機構の解明とその防除方法に関する調査研究を行っている。博物館や美術館などの展示・収蔵環境にある文化財、歴史的建造物や古墳などの屋外にある文化財の生物が原因となる劣化現象の発生原因と解決方法について調査研究を行うとともに、生物が発生・繁殖することによる観覧者や作業員などの人体への影響も視野に入れた対策の開発に力を入れている。

修復計画研究室

文化財の持つ本質的な価値をできるだけ改変することなく次の世代へと伝えていくために、その文化財を構成する材料の特性を確認し、それが置かれている環境を調査し、適切な修復と保存の方針を策定していくための研究を行っている。併せて、通常環境においてだけではなく、自然災害等による文化財の被害を最小限に止めるための計画策定に関して、防災・災害後の保全処置の両面において研究を進めている。

修復材料研究室

膠や漆などの伝統的材料、近代になり開発され使用されてきたものなど、従来文化財修復に使用されてきた修復材料の評価と改良を行うとともに、新しい修復材料の開発評価、及び修復への適用方法の検討を行っている。併せて、安全な文化財修復を実現するために、文化財の伝統的制作技法や材料製作に関する調査研究を行っている。

修復技術研究室

水害や地震、火災によって被災した文化財、また、近代に制作された大型構造物や機械器具、工業製品など多様な材料から成る文化財について、保存修復処置技術に関する新しい材料や技法に関する情報収集、技術・材料の調査及び開発を行っている。これらの文化財を、その特性や来歴を含め、次世代に適切に伝えていくための保存手法・保存活用、防災計画のあり方等を研究している。

保存科学研究センター長	建石 徹 ^{*1}	(保存科学、防災)
保存環境研究室長	秋山 純子	(保存科学)
分析科学研究室長	犬塚 将英	(物理計測)
生物科学研究室長	佐藤 嘉則	(微生物生態学)
修復計画研究室長	朽津 信明	(地質学)
修復材料研究室長	早川 典子	(高分子化学)
近代文化遺産研究室長	建石 徹 ^{*1}	(保存科学、防災)
研究員	倉島 玲央	(有機化学)
研究員(文化財防災センター)	水谷 悦子	(環境工学)
研究員	芳賀 文絵 ^{*1}	(保存科学)
アソシエイトフェロー	中村 舞	(保存科学)
アソシエイトフェロー	鳥海 秀実	(絵画保存修復)
アソシエイトフェロー	島田 潤 ^{*1}	(昆虫学)
研究補佐員	岡部 迪子	(保存科学)
研究補佐員	相馬 静乃	(保存科学)
研究補佐員	白石 明香	(保存科学)
研究補佐員	中村 恵里花	(染色技術)
研究補佐員	高橋 佳久 ^{*2}	(保存科学)
研究補佐員	紀 芝蓮 ^{*2}	(保存科学)
研究補佐員	小野寺 裕子	(保存修復)
研究補佐員	矢花(篠崎) 聡子 ^{*3}	(分子生物学)
研究補佐員	山田 祐子	(絵画保存修復)
研究補佐員	平戸 杜飛 ^{*4}	(保存科学)
事務補佐員	小安 友利恵	
客員研究員	酒井 清文 ^{*2}	(酵素工学)
客員研究員	藤井 義久	(木材科学)
客員研究員	北原 博幸	(建築環境学)
客員研究員	本多 貴之	(高分子分析)
客員研究員	山本 記子	(装填修理技術)
客員研究員	貴田 啓子	(保存科学)
客員研究員	岡田 健	(文化財学)
客員研究員	片山 葉子	(環境微生物学)
客員研究員	宇高 健太郎	(東洋絵画材料)
客員研究員	刈田 重賀	(航空史)
客員研究員	簡 佑丞 ^{*2}	(土木史)
客員研究員	古田嶋 智子	(保存科学)
客員研究員	稲葉 政満	(製紙科学)
客員研究員	伊庭 千恵美 ^{*1}	(建築学)
連携併任	富坂 賢	(東京国立博物館)
連携併任	鳥越 俊行	(東京国立博物館)
連携併任	和田 浩	(東京国立博物館)
連携併任	瀬谷 愛	(東京国立博物館)
連携併任	横山 梓	(東京国立博物館)
連携併任	大原 嘉豊	(京都国立博物館)
連携併任	福士 雄也	(京都国立博物館)
連携併任	降幡 順子	(京都国立博物館)
連携併任	荒木 臣紀	(奈良国立博物館)
連携併任	木川 りか	(九州国立博物館)
連携併任	志賀 智史	(九州国立博物館)
連携併任	渡辺 祐基	(九州国立博物館)
連携併任	高妻 洋成	(奈良文化財研究所)
連携併任	脇谷 草一郎	(奈良文化財研究所)
連携併任	田村 朋美	(奈良文化財研究所)
連携併任	松田 和貴	(奈良文化財研究所)
連携併任	柳田 明進	(奈良文化財研究所)
連携併任	吉田 直人	(文化財活用センター)
連携併任	間瀬 創	(文化財活用センター)

*1 令和3年4月1日付採用

*2 令和4年3月31日付退職

*3 令和3年12月31日付退職

*4 令和3年4月1日付採用、12月31日付退職

組織概要 文化遺産国際協力センターは、文化遺産の保存修復及び調査研究の分野においてわが国が国際協力を推進するためのナショナルセンターとしての役割を担っており、国内外の教育研究機関や民間団体等とも連携しながら、世界各地で積極的な協力活動を実施している。その活動内容は、文化遺産保護に関する国際情報の収集・研究・発信、文化遺産保護国際協力事業の実施、文化遺産の保存修復に関する技術移転・人材育成協力等、多岐にわたっている。

国際情報研究室

国際社会における文化遺産に関する理念や法制度等、文化遺産の保護制度や施策に関して、国際動向や国際協力等の情報を収集・分析している。また、国際研修等を通じて情報発信している。

保存計画研究室

アジア諸国等の文化遺産の保存・管理・整備・活用に関し、現地政府機関等と協力しながら、調査研究及び計画立案、さらには事業実施にあたっての技術的助言等を行っている。また、紛争や自然災害時における被災文化遺産の救済や復興活動にも協力している。

技術支援研究室

文化遺産の修復手法や材料及び技術に関する調査研究や人材育成への協力など、技術移転を通じて諸外国への支援を行っている。

文化遺産国際協力センター長	友田 正彦	(建築学)
国際情報研究室長	西 和彦 ^{*1}	(建築学)
保存計画研究室長	金井 健	(建築学)
技術支援研究室長	加藤 雅人	(製紙科学)
主任研究員	前川 佳文	(壁画保存修復)
主任研究員	安倍 雅史	(考古学)
アソシエイトフェロー	牧野 真理子 ^{*2}	(考古学)
アソシエイトフェロー	境野 飛鳥 ^{*3}	(保護制度)
アソシエイトフェロー	間倉 裕生 ^{*4}	(考古学)
アソシエイトフェロー	五木田 まきは ^{*4}	(文化資源学)
アソシエイトフェロー	五嶋 千雪 ^{*3}	(現代美術)
アソシエイトフェロー	浅田 なつみ	(建築学)
アソシエイトフェロー	牛窪 彩絢	(宗教学)
アソシエイトフェロー	ヴァル エリフ ベルナ	(建築学)
アソシエイトフェロー	片淵 奈美香	(染織品保存科学)
アソシエイトフェロー	清水 綾子	(東洋絵画保存修復)
アソシエイトフェロー	藤井 郁乃 ^{*5}	(保護制度)
アソシエイトフェロー	邱 君妮 ^{*6}	(博物館学)
アソシエイトフェロー	前田 康記 ^{*7}	(建築学)
アソシエイトフェロー	松浦 一之介 ^{*7}	(考古学・景観保護)
アソシエイトフェロー	大川 柚佳 ^{*8}	(西洋絵画保存修復)
研究補佐員	藤澤 綾乃	(考古学)
事務補佐員	石田 智香子	
事務補佐員	岡崎 未来	
事務補佐員	廣野 都未	
客員研究員	大河原 典子	(日本画)
客員研究員	杉山 恵助	(東洋絵画修復)
客員研究員	山田 大樹	(地域計画)
客員研究員	境野 飛鳥 ^{*9}	(保護制度)
兼務	二神 葉子 ^{*10}	(文化財情報資料部)
兼務	石村 智 ^{*10}	(無形文化遺産部)

- * 1 令和4年3月31日付転出
- * 2 令和3年8月31日付退職
- * 3 令和3年7月31日付退職
- * 4 令和4年3月31日付退職
- * 5 令和3年4月1日付採用
- * 6 令和3年9月1日付採用
- * 7 令和3年10月1日付採用
- * 8 令和3年10月18日付採用
- * 9 令和3年8月1日付採用
- * 10 令和4年3月31日付兼務解除

特任研究員

飯島 満 (古典芸能)
中山 俊介 (船舶工学)

2. 年度計画及びプロジェクト報告

1. 年度計画(令和3年度)とプロジェクトとの対応	11
2. プロジェクト報告	23
①有形・無形の文化財に関する調査研究事業	25
②保存修復に関する調査研究事業	32
③国際協力・交流等に関する事業	39
④情報収集・成果公開に関する事業	44
⑤刊行物に関する事業	55
⑥指導助言・研修等に関する事業	60
⑦その他の事業	65

1. 年度計画(令和3年度)とプロジェクトとの対応

令和3年度独立行政法人国立文化財機構に係る年度計画

独立行政法人通則法(平成十一年法律第百三十三号)第三十一条の規定により、令和3年3月25日付け2受文庁第4932号で認可を受けた独立行政法人国立文化財機構中期計画に基づき、令和3年度の業務運営に関する計画を次のとおり定める。

I 国民に対して提供するサービスその他業務の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置

1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信(略)

2. 文化財及び海外の文化遺産の保護に貢献する調査研究、協力事業等の実施

(1) 新たな知見の開拓につながる基礎的・探求的な調査研究

①有形文化財、伝統的建造物群に関する調査研究

1) 我が国の美術を中心とする有形文化財等に関する調査研究

ア 国内外の文化財に関する様々な情報について分析し、それらの情報を文化財保護に対して活用するための調査研究を実施する。また、イギリス・セインズベリー日本藝術研究所と共同研究を行う。その他機関との連携も図りつつ、文化財情報の公開・活用のための、より望ましい手法等の研究を行う。 シ05

イ 近世以前の日本をはじめとする東アジア地域における美術作品を対象として、基礎的な調及び研究を進める。また年紀資料をはじめとする基盤となる資料情報の充実を図る。併せて、これにかかる国内外との研究交流を推進する。 シ02

ウ 日本の近・現代美術を対象として、東京文化財研究所蔵の資料をはじめ他機関や個人が所蔵する作品および資料の調査研究を行い、これに基づき研究交流を推進する。併せて、これまで蓄積してきた美術関係者情報の整備・発信に努め、また主に現代美術に関する資料の効率的な収集と公開体制の構築を目指す。 シ03

エ 美術作品を中心とする有形文化財についての歴史的位置づけ及びそれに基づくより深い理解を得ることを目的として、種々の美術工芸品を主な対象として、その表現・技術・材料等について、自然科学や人文科学における様々な隣接諸分野とも連携した多角的調査研究を実施し、その成果公開を行う。さらに、新たな独創的研究視点や手法の検討・開発にも取り組む。 シ04

2) 建造物及び伝統的建造物群に関する調査研究

古材調査等を中心とする古代建築の調査研究を推進する。また、近世・近代を中心とした我が国の文化財建造物の保存・修復・活用に関する基礎データの収集、未指定建造物の調査、歴史的建造物の今後の保存と復原に資するための調査・研究を行い、纏まったものより順次公表を行う。伝統的建造物群及びその保存・活用に関する調査研究を推進し、保存活用を行っている各自治体等への協力を行う。

3) 歴史資料・書跡資料に関する調査研究

近畿を中心とする古寺社や旧家等が所蔵してきた歴史資料・書跡資料等に関して、原本調査、記録作成を悉皆的に実施するとともに、当麻寺・仁和寺等の資料について公表に向けて整理研究を行う。

【中期目標・計画上の評価指標】・評価軸による具体的な研究成果

- (関連指標) 論文等数
- (関連指標) 報告書等の刊行数

【評価軸】・我が国の美術工芸品や建造物の価値形成の多様性及び歴史・文化の源流の究明等に寄与しているか。

- 有形文化財の保存修復等に寄与しているか。

②無形文化財、無形民俗文化財等に関する調査研究

1) 重要無形文化財の保存・活用に資する調査研究等

無形文化財等の伝承実態およびそれらに関わる文化財保存技術に関する基礎的な調査研究及び資料の収集を行うとともに、伝承が困難なため現状記録を要する対象を精査し、記録作成を実施する。調査研究等に際しては関連する他分野の研究者、伝承者・保存団体、技術保持者・保持団体等との連携を図り、当該調査研究等に基

づく成果の一部については、一般向けの公開講座等を通して公表する。

また、これまでに研究所で収集・保管してきた記録・資料の整理を行い、必要に応じて媒体転換等の措置を講ずる。 △01 △02

2) 重要無形民俗文化財の保存・活用に資する調査研究等

我が国の風俗慣習、民俗芸能、民俗技術等無形の民俗文化財、及び文化財の保存技術のうち、近年の変容の著しいものを中心に、現在における伝承の実態、伝承組織、公開のあり方等を明らかにするとともに、各地の保存団体や保護行政担当者等とこれら研究成果及び問題意識の共有化を図る。特に災害下における伝承の復興や、後継者不足等により継承の危機にある伝承を重点的に調査研究の対象とする。

さらに、無形文化遺産の記録やその所在情報を継続的に収集し、その情報の整理・公開に努めるとともにネットワーク構築を図る。 △02

3) 無形文化遺産保護に関する研究交流・情報収集等

日本と関連の深いアジア諸国等との間において研究員の交流や無形文化遺産関連調査を行う等、無形文化遺産分野における研究交流事業を実施する。ユネスコ無形文化遺産保護条約に関する調査研究を進める。 △05

【中期目標・計画上の評価指標】・評価軸による具体的な研究成果

- ・(関連指標) 論文等数
- ・(関連指標) 報告書等の刊行数

【評価軸】・無形文化財、無形民俗文化財等の伝承・公開に係る基盤の形成に寄与しているか。

③記念物、文化的景観、埋蔵文化財に関する調査研究

1) 史跡・名勝の保存・活用に資する調査研究

我が国の史跡・名勝に関し、以下の調査研究を行う。

ア 遺跡等の整備に関連する資料の収集・調査・整理等を行う。また、遺跡の保存・活用に資する研究集会を開催するとともに、過年度開催した研究集会の成果の取りまとめ及び公表を行う。さらに平城宮跡等で活用に関する実践的研究を行う。

イ 庭園調査を行うとともに、庭園に関する基礎資料の収集・整理を進める。

2) 古代日本の都城遺跡に関する調査研究

国家の形成過程や当時の生活実態の解明に向けて、遺跡の発掘調査、出土品・遺構等に関する調査研究及び伝統的建造物に関する基礎的調査研究を行う。

ア 古代都城の解明のため、平城宮跡東院地区、平城京跡、興福寺東金堂院地区、藤原宮大極殿院地区、藤原京跡、及び飛鳥地域の宮殿・寺院の発掘調査を行う。

イ 出土遺物及び遺構に関する調査、分析、復原的研究を総合的・多角的に行い、調査研究が纏まったものより順次公表する。

ウ 飛鳥時代の壁画古墳について東アジアを主とする古墳、壁画、絵画資料等の事例との比較研究を行うとともに、東アジアにおける工芸美術史・考古学研究の一環として、日中韓の古代寺院出土遺物を中心とした資料の調査を行う。また、飛鳥時代木造建築に関する研究として、藤原宮・京跡や飛鳥・藤原地域に所在する寺院の構造や出土部材の研究を行う。

エ アジアにおける古代都城遺跡、生産遺跡及び陶磁器に関する調査研究並びに研究協力について、日本の古代都城及び北魏洛陽城等に関する中国社会科学院考古研究所との共同研究と学術交流の推進、中国の生産遺跡（鞏義市黃冶窯跡・白河窯跡及び生産品）に関する河南省文物考古研究院との共同研究、三燕文化出土の金属器・陶器等の調査・分析を中心とする遼寧省文物考古研究院との共同研究、日韓古代文化の形成と発展過程に関する韓国国立文化財研究所との研究者の発掘現場交流を含む共同研究等を、協定等に基づいて行う。また、調査研究が纏まったものより順次公表する。

3) 重要文化的景観等の保存・活用に資する調査研究

文化的景観の保存・活用、及び文化的景観における生活・生業に関する情報収集、調査研究を行う。また、得られた成果を公表し、全国の文化財保護行政担当者、研究者と共有する。

4) 全国の埋蔵文化財に関する基盤的な調査研究

我が国の埋蔵文化財及びその保存・活用に資し、以下の調査研究を行う。

ア 全国の遺跡のうち災害痕跡のみられる遺跡や、官衙・古代寺院を中心とした資料収集及び分析に有効な指標や手法についての研究を進め、その成果をデータベース化して順次公開する。

イ 古代官衙・集落遺跡に関する研究集会を開催し報告書を刊行する。古代瓦に関する研究集会を開催する。

5) 水中文化遺産に関する調査研究

我が国の水中文化遺産の保存と活用の体制を構築するため、水中文化遺産の保存並びに活用に関する調査研究を行い、水中遺跡のハンドブックの製作、発行に資する。

【中期目標・計画上の評価指標】・評価軸による具体的な研究成果

- (関連指標) 論文等数
- (関連指標) 報告書等の刊行数

【評価軸】・記念物の保存・活用に寄与しているか。

- ・古代国家の形成過程や社会生活等の解明に寄与しているか。
- ・文化的景観に関する保存・活用並びに研究の進展に寄与しているか。
- ・埋蔵文化財に関する研究の深化に寄与しているか。

(2) 科学技術を応用した研究開発の進展等に向けた基盤的な研究

①文化財の調査手法に関する研究開発の推進

1) デジタル画像の形成方法等の研究開発

さまざまな光源を用いた高精細デジタル撮影により、文化財が本来有する情報を目的に応じて正確・詳細に視覚化するための調査・研究を行い、その成果を公開する。その一環として、ガラス乾板等の過去に撮影された写真原版からの画像の取得手法及び色彩復元に関する調査研究を行う。 シ05

2) 埋蔵文化財の探査・計測方法の研究開発

埋蔵文化財の調査における新たな手法の開発・導入と応用に関する研究を行う。特に、情報取得手段としての遺跡探査、地質の検証、遺構・遺物の計測や記録内容情報抽出についての手法及び資料の製作技法や形態・物性に基づく資料分析、一般にむけてのAR・VR、ゲーム等の利用を含めた成果を活用する方法について研究を進める。

3) 年輪年代学を応用した文化財の科学的分析方法の研究開発

出土遺物、建造物、美術工芸品等の木造文化財の年輪年代調査を実施し、考古学、建築史学、美術史学、歴史学等の研究に資するとともに、各地の年輪データの蓄積を進める。また、デジタル技術等を活用した年輪年代調査や、年輪年代学的手法による同一材推定の応用等、分析方法の研究開発を進め、これらの研究成果を公表する。

4) 動植物遺存体の分析方法の研究開発

平城宮跡・藤原宮跡等、各地の遺跡から出土する動植物遺体の調査を実施して古環境や動植物資源利用の歴史を明らかにするとともに、多様な調査手法について基礎的な研究を行う。また、環境考古学研究の基礎となる現生標本を継続的に収集して、公開する。

5) 文化財の調査・研究成果を社会・教育実装するためのICTを用いた普及・啓発手法の開発

文化財の調査・研究成果の公開を主眼としてAR・VR、ゲーム等の利用を含め、一般に向けた成果の活用について検討を行う。特に、小中学校のプログラミング教育必修化や新型コロナウイルスによる新しい生活様式に対応した形での文化財情報の活用を検討する。

6) 物質文化・地質情報等を基とした防災・減災・復興・復旧の歴史的研究

都城発掘調査部や地方公共団体等が実施する発掘調査によって得られる地層データについて、その取得、分析、公開などの手法を研究し、災害史の基礎資料として発掘調査データを活用することを検討する。また、これらの記録手法として三次元計測や画像解析の研究を進める。

【中期目標・計画上の評価指標】・評価軸による具体的な研究成果

- (関連指標) 論文等数
- (関連指標) 報告書等の刊行数

【評価軸】・科学技術を的確に応用し、文化財の保存・修復の調査手法の正確性、効率性等の向上に寄与しているか。

②文化財の保存修復及び保存技術等に関する調査研究

1) 文化財の生物劣化の機構解明と環境調和型対策に関する研究

文化財建造物、古墳内環境など生物制御が困難な空間にある文化財を対象として、分子生物学的手法を用いた生物劣化の機構解明を行うとともに、被災文化財を含めた虫菌害被害に対して環境低負荷型の処置方法について研究を行う。 ホ01

2) 文化財の保存環境と維持管理に関する調査研究

博物館美術館等の文化財保管施設における環境変動要因、特に空気質等に関する調査を実施し、最適な環境条件を設定するための検討を行う。また、被災文化財の一時保管場所を念頭に置いて、文化財防災センターと協力して様々な施設における環境調査を実施し、安定した保存環境を設定するための方策について検討する。 ホ02

3) 文化財の材質・構造・保存状態に関する研究

各種の可搬型及び据置型分析装置を用いた文化財の材質・構造・劣化状態に関する調査研究を行う。日本絵画における顔料の変遷等の研究を進めるとともに、美術工芸品等に用いられている鉛や青銅の腐食に関する調査研究及びその対策に関する検討を行う。 ホ03

4) 屋外文化財の保存修復計画に関する調査研究

屋外に存在する人文資料や自然史資料を対象に、その劣化状況を適切に評価し、価値を回復して人々に有効に伝えるための適切な保存修復方法を検討する。 ホ04

5) 文化財の修復技法及び修復材料に関する調査研究

美術工芸品及び建造物等の修復にこれまで使用されてきた伝統材料及び今後使用が想定される新しい修復材料と新規修復方法に関する科学的調査を実施し、その物性評価を行う。関連する伝統材料・製作技法についても科学的調査と情報集積を開始する。また、修理技術者に必要な科学に関して、今までの成果を元にアウトリーチ活動の検討を進める。 ホ05

6) 文化財の修復技術に関する調査研究

災害によって被災した文化財資料の応急処置または保存修復処置に係る技術や方法に関する調査研究を行う。近代以降に使われるようになった新しい保存修復技術や方法に関する調査研究を行う。様々な技術や方法を、保存修復処置を行う現場に効果的に適用するための研究を行う。 ホ06

7) 考古遺物の保存処理法に関する調査研究

鉄製遺物の効果的な新規の脱塩法を確立するための基礎研究を行う。また、木製遺物の保存処理における薬剤含浸を効率化する新たな手法の確立と実用化に向け、実践的な基礎研究を行う。

8) 遺構の安定した保存のための維持管理方法に関する調査研究

遺構の劣化要因として塩害および乾湿繰り返しに着目し、これらの劣化因子が遺構を破壊するメカニズムに関する基礎研究を実施する。また遺構の周辺環境がこれらの劣化の進行におよぼす影響を検討することで、それらの進行を抑制する環境制御法、及び脱塩などの処置法などについても検討する。

9) 考古遺物を中心とした文化財の材質調査に関する調査研究

イメージング技術を活用した考古遺物等の非破壊調査を進め、古代の材料・技法に関する調査研究を行う。光学的手法を用いて各種色料（顔料、染料、ガラス着色剤など）の基礎データを収集するとともに、劣化による変化を明らかにするための実験を行う。また、蛍光X線分析等の機器分析の標準化にむけての実験及び基礎データの収集を行う。

10) 高松塚古墳・キトラ古墳の恒久的保存に関する調査研究

ア 文化庁が行う高松塚古墳・キトラ古墳の壁画等の調査及び保存・活用に関して技術的に協力する。 ホ p. 38

イ 壁画の安定した保存と公開活用を行うための適切な保存環境について調査研究を行う。

ウ 壁画の安定した保存と公開活用を行うため、大分県や熊本県に所在の装飾古墳及び宮崎県に所在の横穴墓において温熱環境調査及び石材などの劣化状態調査を行い、適切な石室内の熱水分環境について検討を行う。

【中期目標・計画上の評価指標】・評価軸による具体的な研究成果

- ・（関連指標）論文等数
- ・（関連指標）報告書等の刊行数

【評価軸】・科学技術を的確に応用し、文化財の保存・修復の質的向上に寄与しているか。

(3) 文化遺産保護に関する国際協働

①文化遺産保護に関する国際協働の総合的な推進

1) 文化遺産保護に関する国際情報の収集・研究・発信

海外の文化遺産に関する情報の収集、諸外国の文化遺産保護施策・スキーム等に関する調査研究を行う。

ア 文化遺産の調査や保護に関わる国際的議論の場への参加等を通じて情報の収集を行うとともに、文化遺産の保護をめぐる今日的課題等に関する調査研究を行い、その成果を研究会の開催や出版物の刊行等により国内外に情報発信する。 コ01

イ 英国等の研究機関との間で文化遺産に関する研究交流を行う。

2) 文化遺産保護に関する研究及び協力事業の推進

国際共同研究等を通じて諸外国の多様な文化遺産の保存や活用等に関する理念と技術の両面における研究を進め、国際協力を推進するための基盤を強化するとともに、その成果をもとにアジア地域を主とする諸外国において文化遺産保護協力事業を実施する。

ア 文化遺産保護に関する研究及び協力事業を以下のように実施し、成果を広く公表する。

（ア）アジア地域等の文化遺産に関する調査研究及び保護協力事業を実施する。特にカンボジア・アンコール遺跡群（西トップ遺跡及びタ・ネイ遺跡）やミャンマー、カザフスタン等について研究及び協力事業を実施する。 コ02 コ03

（イ）上記各事業と連携しつつ、文化遺産保護に関する研究会やワークショップの開催等を通じて国内外の専門家との情報の共有化を図る。 コ02 コ03

3) 文化遺産保護に関する人材育成等

諸外国の文化遺産担当者等を対象とした研修や技術的支援等を通じて文化遺産の保存や活用に関する人材育成を進める。

ア 政府間機関文化財保存修復研究国際センター（ICCROM）ほか国内外の諸機関等と連携し、紙文化遺産等に関する国際研修や国際ワークショップを通じて技術及び知識を海外の文化遺産担当者と共有するとともに、協力ネットワークを構築する。 コ05

イ ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）等が実施する研修への協力を行う。

4) 海外に所在する日本古美術品等の保存に関する協力

在外日本古美術品の保存修復に協力し、さらに成果を報告書等で公開することにより、日本が持つ伝統的保存修復に関わる知識と経験の共有を行う。 コ04

【中期目標・計画上の評価指標】・文化遺産保護の国際協働に関する取組状況（諸外国の研究機関等との共同研究等の実施件数）

【評価軸】・文化遺産国際協力を推進するとともに、国際協力推進体制について中核的な役割を担っているか。

②アジア太平洋地域の無形文化遺産保護に関する調査研究

アジア太平洋無形文化遺産研究センターは、アジア太平洋地域における無形文化遺産の保護のための調査研究の推進拠点として、以下の事業を行う。

- ・アジア太平洋地域における無形文化遺産保護のための持続的研究情報収集
- ・無形文化遺産のSDGsへの貢献に関する研究・無形文化遺産保護と災害リスクマネジメントに関する研究
- ・国際会合等への出席やユネスコ及び関連機関との連携を通じた無形文化遺産保護関連の国際的動向の情報収集

【中期目標・計画上の評価指標】・アジア太平洋地域の無形文化遺産保護に関する取組状況（国際協力事業の実施件数）

【評価軸】・アジア太平洋地域の無形文化遺産の保護に向けた調査研究等の国際協力を推進しているか。

(4) 文化財に関する情報資料の収集・整備及び調査研究成果の公開・活用

①文化財情報基盤の整備・充実

文化財関係の情報を収集して国内外に発信するため、その計画的収集、整理、保管、公開並びに電子化の推進による専門的アーカイブの拡充を行うとともに、調査研究に基づく成果としてのデータベースを構築・運用する。

- 1) 国内外の文化財情報の文化財保護への活用、研究成果の効果的な発信及び研究の実施に資するデータベースを構築・運用する。特に、各種データベースを横断的に検索する総合検索を充実させる。また、調査研究の遂行に資する情報基盤としての所内情報システムを整備・充実させる。 シ05
- 2) 文化財情報のデジタルアーカイブに関する実践研究を行う。データの長期保管および公開活用に関して、技術面・法律面含めたガイドラインを作成する。
- 3) 調査研究及び文化財防災に役立つデータベースの充実並びにアーカイブ機能の更新及び拡張を行う。 シ06
- 4) 文化財に係る図書、雑誌等の収集、整理、公開、提供を充実させる。 シ06

【中期目標・計画上の評価指標】・文化財に関するデータベースのアクセス件数（前中期目標の期間の実績以上）

- ・（関連指標）データベースのデータ件数

②調査研究成果の発信

文化財に関する調査研究の成果について、定期的に刊行するとともに、公開講演会、現地説明会、シンポジウムの開催等により、多角的に発信する。また、研究所の研究・業務等を広報するためウェブサイトを活用するとともに、日本語はもとより多言語でのページを充実させる。

1) 定期刊行物の刊行

- ・『東京文化財研究所年報』
- ・『東京文化財研究所概要』
- ・『東文研ニュース』
- ・『美術研究』（年3冊）
- ・『日本美術年鑑』
- ・『無形文化遺産研究報告』
- ・『無形民俗文化財研究協議会報告書』
- ・『保存科学』
- ・『奈良文化財研究所紀要』
- ・『奈良文化財研究所概要』
- ・『奈文研ニュース』
- ・『埋蔵文化財ニュース』

2) 公開講演会、現地説明会、シンポジウムの開催等

- ・公開講座（オープンレクチャー） シ08
- ・公開講演会

- 現地説明会

3) ウェブサイトの充実

- 東文研総合検索・学術情報リポジトリ
- なぶんけんブログ等(コラム作寶樓等)

シ05

【中期目標・計画上の評価指標】・(関連指標)学術情報リポジトリ等によるウェブサイトにおける論文等の公開件数

③展示公開施設の充実

平城宮跡資料館、藤原宮跡資料室、飛鳥資料館の展示等を充実させ、来館者の理解を促進するとともに、日本博関連展示を行う。

1) 特別展・企画展

(平城宮跡資料館)

- 特別企画展第1部「平城宮跡史跡指定120周年記念展」(仮称)/第2部「木津川河床遺跡地震痕跡展」(仮称)(4月29日～5月30日)
- 特別展「森蘊と奈良」展(仮称)(8月7日～9月12日)予定
- 特別展「地下の正倉院展」(10月9日～11月7日)予定
- 企画展「発掘された平城2020・2021」(4年1月29日～3月27日)予定

(飛鳥資料館)

- ミニ展示「収藏品セレクション」(仮)(4月23日～5月16日)
- 企画展「第12回写真コンテスト作品展「飛鳥の木」(仮)」(7月2日～8月29日)
- 特別展「掘り出された仏教 飛鳥地寶」(仮)(9月17日～11月28日)
- 企画展「飛鳥の考古学2021」(4年1月21日～3月13日)

2) 定期的に勉強会や研修を開催し、平城宮跡解説ボランティアを育成するとともに、解説ボランティアとの連絡会議等を通じて、より効果的かつ効率的な制度運用を行う。

【中期目標・計画上の評価指標】・公開施設来館者に対する満足度アンケート(特別展・企画展)(満足度が前中期目標の期間と同程度の水準を維持)

- (関連指標)公開施設における特別展・企画展の開催件数(年2～3回程度)
- (関連指標)公開施設の来館者数

(5) 地方公共団体等を対象とする文化財に関する研修及び協力等

①文化財に関する研修の実施

- 1) 文化財の担当者研修、博物館・美術館等の保存担当学芸員研修を行う。ホ08
- 2) 研修受講生を対象としたアンケート及び派遣元自治体を対象とした研修成果の活用状況に関するアンケート調査を引き続き行い、その結果を踏まえ、より充実した研修計画を策定する。ホ08

【中期目標・計画上の評価指標】・研修成果の活用状況(アンケートによる研修成果の活用実績が80%以上)

②文化財に関する協力・助言等

国・地方公共団体や大学、研究機関との連携・協力体制を構築し、これらの機関が所有・管理する文化財に関する情報の収集、知見・技術の活用、本機構が行った調査研究成果の発信等を通じて、文化財に関する協力・助言を行う。

- 1) 文化財活用センターを中心に地方公共団体等からの要請に応じ、文化財及びその保存・活用に関する協力・助言・調査支援・情報提供等を行う。シムホ
- 2) 蓄積されている調査研究の成果を活かし、他機関等との共同研究及び受託研究を行う。
- 3) 地震・水害等により被災した地域の復旧・復興事業に伴い、地方公共団体等が行う文化財保護事業への支援・協力をを行う。

【中期目標・計画上の評価指標】・専門的・技術的な援助・助言の取組状況(行政、公私立博物館等の各種委員等への就任件数、依頼事項への対応件数等)

③平城宮跡、飛鳥・藤原宮跡等の公開・活用事業への協力

文化庁、国土交通省が行う平城宮跡、飛鳥・藤原宮跡等の公開・活用事業に協力する。また、NPO法人平城宮跡サポートネットワーク及び周辺自治会等が行う各種ボランティア活動に協力する。

- 1) 文化庁、国土交通省が行う平城宮跡、飛鳥・藤原宮跡等の公開・活用事業への協力
 - 文化庁が行う平城宮跡、藤原宮跡の整備、管理事業への協力
 - 文化庁が行うキトラ古墳壁画保存管理施設の管理・運営と古墳壁画の公開事業への協力
 - 国土交通省が行う平城宮跡第一次大極殿院を中心とする復原、整備・活用等への協力

- 国土交通省の平城宮いざない館展示室4(詳覧ゾーン)に関する学芸業務・連絡調整への協力
- 2) NPO法人平城宮跡サポートネットワーク及び周辺自治会等が行う各種ボランティア活動への協力

④連携大学院との連携教育等の推進

連携大学院との連携教育や大学への教育協力を実施し、今後の我が国の文化財保護における中核的な人材を育成する。

- 1) 東京藝術大学、京都大学、奈良女子大学との間での連携大学院教育等の推進及び奈良大学への教育協力の実施
 - 東京藝術大学大学院：システム保存学(保存環境学、修復材料学) **ホ** p. 64
 - 京都大学大学院：共生文明学(文化・地域環境論)
 - 奈良女子大学大学院：人文科学(比較文化学)
 - 奈良大学：「文化財修景学」

(6) 文化財防災に関する取組 **防** p. 65

①地域防災体制の構築

地方公共団体、美術館、博物館、大学等研究機関、地域史料ネット等の文化財等関係団体の連携及び協力を深め、地域の文化財の防災体制を構築する。

- 1) 地方公共団体、美術館、博物館、大学等研究機関、地域史料ネット等の文化財等関係団体との協議、情報交換会を開催する。
- 2) 都道府県が策定する文化財保存活用大綱、市町村が策定する文化財保存活用地域計画及び都道府県並びに市町村が策定する地域防災計画を収集し、地域文化財の防災体制に関する調査研究を行う。

②災害時ガイドライン等の整備

災害発生時において多様な文化財の迅速な救援活動を実現するために必要となる各種のガイドライン等の策定を行う。

- 1) 各分野の文化財の防災に関する課題を整理する。
- 2) 各分野の文化財の災害時における救援活動に必要なガイドライン等の検討を行う。

③レスキュー及び収蔵・展示における技術開発

平常時における文化財の収蔵及び展示における技術開発並びに災害時における文化財のレスキューに関する技術開発を行う。

- 1) 博物館、美術館及び社寺等における文化財等の災害に対する安全対策の調査研究を行う。
- 2) 保存科学等に基づく被災文化財等の劣化診断、安定化処置及び修理、保存環境、被災現場の作業環境等に関する調査研究を行う。

④文化財防災を促進するための普及啓発

文化財防災に関する指導、助言、研修等の啓発及び普及活動を行うとともに、文化財防災センターでの取組等を広く国内外へ情報発信する。

- 1) シンポジウム、講演会、研究集会、地方公共団体担当者等への研修会、地域の防災体制構築のための人材育成等を実施する。
- 2) 文化財防災に関する取組についてウェブサイトでの公開とパンフレット等の作成を行い、国内外への情報発信に努める。

⑤文化財防災に関係する情報の収集と活用

文化財防災に関する情報の収集を進め、我が国の文化財防災システムを機能的に運用するための情報の活用方法を検討する。

- 1) 文化財が被災した災害事例及び文化財防災の先進事例に関する情報を収集し、整理して共有化を図る。
- 2) 多様な文化財の防災に資するデータベース構築のためのデータ収集を進めるとともに、文化財防災への活用方法の調査研究を行う。
- 3) 歴史災害痕跡に関するデータ収集を行い、データベース等の運用及び活用を進める。
- 4) 地域文化財の防災に資するための文化遺産リスト作成に関する調査研究を行う。
- 5) 諸外国の防災の取組や被災文化財の保全処置方法に関する新たな知見の入手に努めるとともに、我が国の経験を活かし、諸外国の文化財防災に貢献する。

【中期目標・計画上の評価指標】・防災・救援のための連携・協力体制構築への取組状況(都道府県内各種会合等への会議等参加数)

- 文化財防災に関する技術開発への取組状況（論文等数、報告書等の刊行数）
- 文化財防災に関する普及啓発への取組状況（シンポジウム等の開催件数）

II 業務運営の効率化に関する目標を達成するためにとるべき措置

1. 業務改善の取組

(1) 組織体制の見直し

- 国際業務の推進体制の整備の一環として、2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会に向けて、機構内における組織体制を整備する。
- 情報セキュリティの確保・維持の重要性に鑑み、本部情報担当部門の設置について、検討を継続する。
- 本部に設置した文化財防災センターの組織体制を整備する。

(2) 人件費管理の適正化

国家公務員の給与水準とともに業務の特殊性を十分考慮し、対国家公務員指数は国家公務員の水準を超えないよう取り組み、その結果について検証を行うとともに、検証結果や取組状況を公表する。

(3) 契約・調達方法の適正化

- ① 契約監視委員会を実施する。
- ② 施設内店舗の貸付・業務委託について引き続き企画競争を実施する。

(4) 共同調達等の取組の推進

周辺機関との共同調達について、有用性が確認された以下の案件について引き続き実施する。

上野地区 再生PPC用紙、トイレトペーパー、廃棄物処理、古紙等売買、複写機賃貸借、
トイレ洗浄機器等賃貸借
京都地区 再生PPC用紙、トイレトペーパー
九州地区 再生PPC用紙、トイレトペーパー、ガソリン

(5) 一般管理費等の削減

① 機構内の共通的な事務の一元化による業務の効率化

情報システムについては、機構共通事務システム・ネットワークの運用を継続し、業務の効率化及び情報の共有化を図る。機構各施設で導入しているアプリケーション等の共通化を検討し、管理事務の効率化を図る。

② 計画的なアウトソーシング

以下の業務の外部委託を継続して実施する。

- (東京国立博物館) • 警備及び看視案内の一部並びに売札及び清掃業務
 - 資料館業務の一部
 - 施設内店舗業務
- (京都国立博物館) • 警備業務及び設備保全業務の一部並びに清掃業務
 - 会場運営業務
 - 代表電話対応及び受付業務
- (奈良国立博物館) • 建物設備の運転・管理業務
 - 警備及び看視案内の一部並びに売札及び清掃業務
- (九州国立博物館) • 建物設備の運転・管理業務等
 - 警備業務、看視案内業務及び清掃業務
- (東京文化財研究所・奈良文化財研究所) • 警備業務、清掃業務及び建物設備の運転・管理業務等

③ 使用資源の減少

- 省エネルギー
光熱水量の使用状況を把握し、管理部門を中心に引き続き節減に努める。
- 廃棄物減量化
使用資源の節減に努め、廃棄物の減量化に引き続き努める。

- リサイクルの推進
廃棄物の分別収集を徹底し、リサイクルを引き続き推進する。

2. 業務の電子化

機構ウェブサイトにおいて、機構に関する情報の提供を引き続き行う。新たなコミュニケーションツールの導入を検討し、ICTを活用しての生産性向上を図る。

3. 予算執行の効率化

収益化単位の業務及び管理部門の活動と運営費交付金の対応関係を明確にし、引き続き効率的な予算執行に務める。

III 財務内容の改善に関する目標を達成するためにとるべき措置

1. 自己収入拡大への取組

(1) コロナ禍における「新しい生活様式」を踏まえた事業展開において、誘客につながる魅力的な展覧環境の構築に努めるとともに、新たな自己収入の確保に取り組む。

(2) 機構全体において、展示事業等収入額について年度計画予算額を上回ることを目指す。

(3) 機構全体において、寄附金等の外部資金獲得により財源の多様化を図る。

(機構共通)

- 文化財活用センターが中心になって運用する国立文化財機構寄附ポータルサイト等を通して、寄附促進のための情報提供等を行う。

(文化財活用センター)

- 前年度から開始した東京国立博物館と共同した所蔵品の修理に対する寄附金募集活動を引き続き実施する。

(4) 保有資産の有効利用の推進

(博物館4施設)

- ① 講座・講演会等を開催する。
- ② 講堂等の利用案内を関係団体、学校等外部に対し積極的に行う。
- ③ 国際交流及び日本文化の紹介や入館者の拡大を目的としたコンサート等を実施し、施設の有効利用を図る。

(文化財研究所2施設)

セミナー室、講堂等一般の利用の供することが可能な施設の有料貸付を実施するとともに、展示公開施設におけるミュージアムショップの運営委託等、施設の有効利用の推進を引き続き図る。

- 【中期目標・計画上の評価指標】
- (関連指標) 展示事業等収入額
 - (関連指標) その他寄附金等収入額

2. 固定的経費の節減

固定的経費の節減のため、II 1.(5) 一般管理費等の削減に関する事項に取り組む。

3. 決算情報・セグメント情報の充実等

独立行政法人会計基準に従い、引き続き適切な決算情報・セグメント情報の開示を実施する。

IV 予算(人件費の見積もりを含む)、収支計画及び資金計画

1. 予算

別紙のとおり

2. 収支計画

別紙のとおり

3. 資金計画

別紙のとおり

V その他業務運営に関する目標を達成するためにとるべき措置

1. 内部統制

内部統制委員会、リスク管理委員会を開催する。また、内部監査及び監事監査等のモニタリングを実施し、必要に応じて見直しを行うとともに、各種研修を実施し、職員の意識並びに資質の向上を図る。

2. その他

(1) 自己評価

運営委員会、外部評価委員会の開催等、外部有識者の意見を踏まえた客観的な自己評価を実施し、その結果を組織、事務、事業等の改善に反映させる。

(2) 情報セキュリティ対策

多様化するサイバー攻撃やセキュリティの脅威に対する組織的対応強化を図るため、政府機関の情報セキュリティ対策のための統一基準群を踏まえた規定の整備及び適時適切な見直し、役職員の研修及び教育を実施する。

計画的な情報セキュリティ対策の点検及び情報セキュリティ監査の実施により、情報セキュリティ対策の実施状況を把握するとともに、その強化を図る。

3. 施設設備に関する計画

施設設備に関する計画に沿った整備を推進する。

総合的・計画的な防火対策を重点的に進める計画を策定するため、各施設の防災設備等について現地調査の実施、整備・取組内容の検討を進める。

京都国立博物館本館（重要文化財）耐震改修に向け、本館中庭機械室を解体し、跡地の埋蔵文化財発掘調査を実施する。また耐震改修工事基本計画の策定を進める。

4. 人事に関する計画

(1) 中長期的な人事計画の策定を検討する。その際、理事長の裁量によって、一定数の職員を配置できる仕組みを併せて検討する。

(2) 職員の能力向上と組織のパフォーマンス向上を目的とした評価制度の導入について、検討を継続する。

(3) 性別、年齢、国籍、障がいの有無等にとらわれない、能力や適性に応じた採用・人事を引き続き行う。

(4) 女性の活躍を推進し、制度改正を含めた就業環境の整備及び教育・研修を引き続き実施する。

(5) 職員のキャリアパスの形成のため、職位に応じた人事交流等の実施を企画・立案する。

(6) 働き方改革関連法の施行に対応した取り組みを実施する。

令和 3 年度 予算

(単位：百万円)

区 分	国立博物館等	文化財研究所等	合 計
収 入			
運営費交付金	6,153	2,480	8,633
施設整備費補助金	198	0	198
展示事業等収入	2,012	78	2,090
受託収入	125	511	636
その他寄附金等	689	91	780
計	9,177	3,160	12,337
支 出			
管理経費	1,502	466	1,968
うち人件費	613	236	849
うち一般管理費	889	230	1,119
業務経費	6,663	2,092	8,755
うち人件費	1,842	1,041	2,883
うち収集保管事業費	1,509	0	1,509
うち展覧事業費	2,549	0	2,549
うち教育普及事業費	352	0	352
うち博物館研究事業費	294	0	294
うち博物館支援事業費	117	0	117
うち基礎研究事業費	0	433	433
うち応用研究事業費	0	188	188
うち国際遺産保護事業費	0	132	133
うち情報公開事業費	0	280	280
うち研修協力事業費	0	18	18
施設整備費	198	0	198
受託事業費	125	511	636
その他寄附金等	689	91	780
計	9,177	3,160	12,337

令和 3 年度 収支計画

(単位：百万円)

区 分	国立博物館等	文化財研究所等	合 計
費用の部	7,748	2,962	10,710
経常経費	7,748	2,962	10,710
管理経費	1,431	414	1,845
うち人件費	620	238	858
うち一般管理費	811	176	987
事業経費	5,747	2,404	8,151
うち人件費	1,967	1,066	3,033
うち収集保管事業費	607	0	607
うち展覧事業費	2,370	0	2,370
うち教育普及事業費	310	0	310
うち博物館研究事業費	266	0	266
うち博物館支援事業費	102	0	102
うち基礎研究事業費	0	319	319
うち応用研究事業費	0	139	139
うち国際遺産保護事業費	0	106	106
うち情報公開事業費	0	227	227
うち研修協力事業費	0	36	36
うち受託事業費	125	511	636
減価償却費	570	144	714
財務費用	0	0	0
臨時損失	0	0	0
収益の部	7,748	2,962	10,710
運営費交付金収益	4,573	2,138	6,711
展示事業等の収入	2,012	78	2,090
受託収入	125	511	636
その他寄附金等	468	91	559
資産見返負債戻入	570	144	714
財務収益	0	0	0
臨時利益	0	0	0
純利益	0	0	0
目的積立金取崩	0	0	0
総利益	0	0	0

令和 3 年度 資金計画

(単位：百万円)

区 分	国立博物館等	文化財研究所等	合 計
資金支出	9,177	3,160	12,337
業務活動による支出	7,179	2,818	9,997
投資活動による支出	1,981	331	2,312
財務活動による支出	17	11	28
資金収入	9,177	3,160	12,337
業務活動による収入	8,979	3,160	12,139
運営費交付金による収入	6,153	2,480	8,633
展示事業等による収入	2,012	78	2,090
受託収入	125	511	636
その他寄附金等	689	91	780
投資活動による収入	198	0	198
施設整備費補助金による収入	198	0	198
財務活動による収入	0	0	0

2. プロジェクト報告

凡 例

- (1) プロジェクトは、年度計画との対応（11～22頁）に従って、以下の①～⑦の分類項目ごとに各部・センターごとに配列し、プロジェクトの略番と頁を記した。
略番で用いられている担当部門の略号は、シ：文化財情報資料部、ム：無形文化遺産部、ホ：保存科学研究センター、コ：文化遺産国際協力センター、広：広報委員会 である。
- (2) 各プロジェクト報告の掲載頁では、表題の右側に上記略番を記すとともに、頁左上にプロジェクトの担当部門を示した。
なお、ウェブ公開版では、担当部門をシンボルカラー（文化財情報資料部：青、無形文化遺産部：黄、保存科学研究センター：緑、文化遺産国際協力センター：紫）で色分けしている。
- (3) 年度計画との対応一覧への逆引きのため、右上に年度計画の記号を記した。
- (4) また、各プロジェクト報告の掲載頁では、プロジェクトの目的、成果とその公表（論文、報告、発表、刊行物）及び研究組織の各項目を立てて内容をまとめた。なお、研究組織で下線がついている職員はプロジェクトリーダーである。

① 有形・無形の文化財に関する調査研究事業

略番	プロジェクト名	（年度計画の記号）	頁
シ 01	文化財に関する調査研究成果および研究情報の共有に関する総合的研究	2-(1)-①-1)-ア	25
シ 02	日本東洋美術史の資料学的研究	2-(1)-①-1)-イ	26
シ 03	近・現代美術に関する調査研究と資料集成	2-(1)-①-1)-ウ	27
シ 04	美術作品の様式表現・制作技術・素材に関する複合的研究と公開	2-(1)-①-1)-エ	28
ム 01	無形文化財の保存・継承に関する調査研究	2-(1)-②-1)	29
ム 02	無形民俗文化財の保存・活用に関する調査研究	2-(1)-②-2)	30
ム 05	無形文化遺産保護に関する研究交流・情報収集	2-(1)-②-3)	31

② 保存修復に関する調査研究事業

略番	プロジェクト名	（年度計画の記号）	頁
ホ 01	文化財生物劣化の分子生物学的手法による機構解明と環境調和型対策	2-(2)-②-1)	32
ホ 02	文化財の保存環境にかかる調査研究	2-(2)-②-2)	33
ホ 03	文化財の材質・構造・状態調査に関する研究	2-(2)-②-3)	34
ホ 04	屋外文化財の劣化要因と保存対策に関する調査研究	2-(2)-②-4)	35
ホ 05	文化財修復材料と伝統技法に関する調査研究	2-(2)-②-5)	36
ホ 06	多様な文化財の修復技術に関する調査研究	2-(2)-②-9)	37
ホ 07	高松塚古墳・キトラ古墳の恒久的保存に関する調査研究	2-(2)-②-10)	38

③ 国際協力・交流等に関する事業

略番	プロジェクト名	（年度計画の記号）	頁
コ 01	文化遺産保護に関する国際情報の収集・研究・発信	2-(3)-①-1)-ア	39
コ 02	アジア諸国等文化遺産保存修復協力	2-(3)-①-2)-ア-（ア）（イ）	40
コ 03	保存修復技術の国際的応用に関する研究	2-(3)-①-2)-ア-（ア）（イ）	41
コ 04	在外日本古美術品保存修復協力事業	2-(3)-①-4)	42
コ 05	国際研修	2-(3)-①-3)-ア	43

④ 情報収集・成果公開に関する事業

略番	プロジェクト名	（年度計画の記号）	頁
シ 05	文化財情報の分析・活用と公開に関する調査研究	2-(1)-①-1)-ア、 2-(2)-①-1)、2-(4)-②-3)	44
シ 06	専門的アーカイブと総合的レファレンスの拡充	2-(4)-①-2)3)	46
シ 08	令和3年度オープンレクチャー（調査・研究成果の公開）	2-(4)-②-2)	47
ム 03	無形文化遺産に関わる音声・画像・映像資料のデジタル化	2-(1)-②-1)	48
—	プロジェクトの一部として実施した研究集会・講座等		49

⑤ 刊行物に関する事業

略番	プロジェクト名	(年度計画の記号)	頁
シ 07	令和元年版『日本美術年鑑』刊行事業・出版事業『美術研究』	2-(4)-②-1)	55
ム 04	無形文化遺産部出版関係事業	2-(4)-②-1)	55
ホ 07	『保存科学』第61号の出版	2-(4)-②-1)	56
広 -	『東京文化財研究所概要』、『TOBUNKENNEWS』		56
- -	プロジェクトの一環として刊行された刊行物		57

⑥ 指導助言・研修等に関する事業

略番	プロジェクト名	(年度計画の記号)	頁
ホ 08	博物館・美術館等保存担当学芸員研修（上級コース）	2-(5)-①-1)	60
シ -	文化財の収集・保管に関する指導助言	2-(5)-②-1)	60
ム -	無形文化遺産に関する助言	2-(5)-②-1)	61
ホ -	文化財の虫菌害に関する調査・助言	2-(5)-②-1)	61
ホ -	文化財の修復及び整備に関する調査・助言	2-(5)-②-1)	62
ホ -	文化財の材質・構造に関する調査・助言	2-(5)-②-1)	63
ホ -	美術館・博物館等の環境調査と援助・助言	2-(5)-②-1)	63
ホ -	東京藝術大学との間での連携大学院教育の推進	2-(5)-④-1)	64

⑦ その他の事業

略番	プロジェクト名	(年度計画の記号)	頁
- -	文化財防災センター事業	2-(6)	65

文化財に関する調査研究成果および研究情報の 共有に関する総合的研究^(※01)

研究組織 江村知子、橘川英規、安永拓世、米沢玲、二神葉子、小山田智寛、小林公治、塩谷純、吉田暁子、小林達朗、小野真由美、城野誠治、阿部朋絵、田村彩子（以上、文化財情報資料部）、山梨絵美子、永崎研宣（以上、客員研究員）、久保田裕道（無形文化遺産部、文化財情報資料部兼務）、早川典子（保存科学研究センター、文化財情報資料部兼務）、西和彦（文化遺産国際協力センター、文化財情報資料部兼務）

目的 国内外の諸機関との連携を見据え、当研究所の文化財に関する調査研究の成果・データをより国際的標準に見合うかたちに整え、効果的に共有してゆくための研究を行う。あわせて地方公共団体と文化財に関する情報の提供と共有を行うことを視野に入れる。

成果

1. 調査研究の成果の公開と、研究情報の国際発信

- 当研究所刊行の論文等を国立情報学研究所が運営する学術機関リポジトリデータベース（IRDB）を通じて公開する作業を進め、『美術研究』、『無形文化遺産研究報告』、『保存科学』、各種報告書など148件を今年度新たに追加し、合計14タイトル3,836件の論文・刊行物のフルテキストを掲載・公開した。
- 展覧会カタログ所載記事・論文のデータを「東京文化財研究所美術文献目録」として、世界最大の共同書誌目録データベースであるOCLCのセントラル・インデックスに情報提供し、今年度は2018（平成30）年の文献情報5,712件を追加した。
- 新型コロナウイルス感染症拡大防止を目的として、中止・延期・臨時休館等の影響を受けた、日本の美術館・博物館の展覧会情報を収集したデータベース（1408件）を作成、公開した。

https://www.tobunken.go.jp/materials/exhibition_covid19

2. 国内外の関連機関との共同研究・協議

- 京都府所蔵昭和初期文化財調書の約20,000点のデジタル画像のうち約14,300件のメタデータを追加したほか、調査撮影フィルムのデジタル化を進め、データベース構築を行い、公開活用のための協議を行った。
- Getty研究所のGetty・リサーチ・ポータルに当研究所所蔵の所蔵資料を公開するための協議を行い、共同研究の成果について北米美術図書館協会（ARLIS/NA）での発表を英語で行った。
- イギリス・セインズベリー日本藝術研究所と日本美術及び同研究に関する英語文献・記事情報の採録に関する運用面での協議をオンラインで行った。

発表

- Anne Rana, Emura Tomoko, Building Bridges: Working Together to Disseminate Japanese Art Literature（研究の架橋：日本美術資料の情報発信についての国際協働）49th Annual Conference of Art Libraries Society of North America（北米美術図書館協会第49回年次大会） 21.5.13



セインズベリー日本藝術研究所とのオンライン協議



オンライン開催の北米美術図書館協会（ARLIS/NA）での発表

日本東洋美術史の資料学的研究^(シ02)

研究組織 小林達朗、小野真由美、塩谷純、二神葉子、城野誠治、小林公治、江村知子、安永拓世、橘川英規、小山田智寛、米沢玲、吉田暁子(以上、文化財情報資料部)、早川泰弘(副所長)、津田徹英(客員研究員)ほか

目 的 近世以前の日本を含む東アジア地域における美術作品を対象として、基礎的な調査研究及び光学調査を進め、研究の基盤となる資料情報の充実を図る。併せて、これにかかる国内外の研究交流を推進する。

成 果

1. 研究基盤となる資料整備

美術史研究のためのコンテンツ(日本美術史年記資料集成)作成として、平成11(1999)年以降の展覧会図録から年記のある作品の資料を順次収集して入力した。入力された資料は569件に達した。

2. 研究交流の推進

日本の美術工芸に関する研究会を4回行った(2021(令和3)年4月27日、5月25日、7月16日、2022(令和4)年1月25日)。所外の研究者による発表は以下の通り(所内の研究者による発表については、下記発表の項を参照)。

- ・梅沢恵(神奈川県立金沢文庫)「辟邪絵」の主題についての復元的考察」令和3年度第1回文化財情報資料部研究会 21.4.27
- ・山本聡美(早稲田大学文学学術院)「中世六道絵における阿修羅図像の成立」令和3年度第7回文化財情報資料部研究会 22.1.25
- ・阿部美香(名古屋大学人文学研究科附属人類文化遺産テキスト学研究センター)「六道釈から読み解く聖衆来迎寺本六道絵」令和3年度第7回文化財情報資料部研究会 22.1.25

また平安～鎌倉期にかけての仏画に関する調査研究の成果をオープンレクチャーで発表した。

3. 報告書の刊行

令和2年度に刊行した報告書『タイ所在日本製漆工品に関する調査研究－ワット・ラーチャプラディットの漆扉－』の英語版を刊行した。

論 文

- ・安永拓世：「与謝蕪村筆『十宜図』(川端康成記念会蔵)の史的位置」『美術研究』434 pp.35-62 21.8

発 表

- ・江村知子：「新出の住吉廣行筆「酒吞童子絵巻」(ライプツィヒ民族学博物館蔵)について」令和3年度第2回文化財情報資料部研究会 21.5.25
- ・小林達朗：「皆金色阿弥陀絵像の出現とその意味－転換期の時代思潮の表象」第55回オープンレクチャー 21.11.5
- ・米沢玲：「カナダ・モントリオール美術館所蔵の熊野曼荼羅図について」令和3年度第7回文化財情報資料部研究会 22.1.25

刊行物

- ・『Lacquered Door Panels of Wat Rajpradit－Study of the Japan-made Lacquerwork Found in Thailand－』22.3

近・現代美術に関する調査研究と資料集成^(シ03)

研究組織 塩谷純、橘川英規、吉田暁子、城野誠治、黒崎夏央(以上、文化財情報資料部)、三上豊、丸川雄三、田中淳、齋藤達也(以上、客員研究員)

目 的 日本の近・現代美術を対象として、東京文化財研究所蔵の資料をはじめ他機関や個人が所蔵する作品及び資料の調査研究を行い、これに基づき研究交流を推進する。併せて、これまで蓄積してきた美術関係者情報の整備・発信に努め、また主に現代美術に関する資料の効率的な収集と公開体制の構築を目指す。

成 果

- 黒田記念館に収蔵される黒田清輝油彩画作品149点の撮影(カラー写真、近赤外写真、蛍光写真)を行った。
- 既刊『久米桂一郎日記』中のフランス語部分の和訳を完了しウェブ上で公開、また黒田清輝・久米桂一郎間で交わされた書簡のうち12通の翻刻・解題を『美術研究』434・435号に研究資料として掲載した。
- 戦後の日本美術教育に大きな影響を及ぼした創造美育協会に関する研究会を開催、本部事務局長を務めた島崎清海の資料について中村茉貴氏による発表と討議を行った(9月24日)。
- 岸田劉生の静物画について、部内研究会で口頭発表した(2月24日)。
- 2018年に寄贈を受けた美術評論家三木多聞資料のうち、1960年代の展覧会資料を貼付したスクラップブックを整理・デジタル化し、当研究所ウェブサイトで公開した。
- 黒川公二氏(佐倉市立美術館)の協力を得て調査を実施している美術評論家鷹見明彦の資料のうち、1980年代後半から鷹見が没する2011年までの間に画廊で撮影された展覧会会場写真を納めたアルバムを整理し、そのリストを当研究所ウェブサイトで公開した。

論 文

- ・塩谷純、伊藤史湖、田中潤、齋藤達也：「書簡にみる黒田清輝・久米桂一郎の交流(二)」『美術研究』434 pp.71-105 21.8
- ・塩谷純、伊藤史湖、田中潤、齋藤達也：「書簡にみる黒田清輝・久米桂一郎の交流(三)」『美術研究』435 pp.73-97 21.12

発 表

- ・吉田暁子：「岸田劉生による「手」という図像 静物画を中心に」令和3年度第8回文化財情報資料部研究会 22.2.24



黒田清輝油彩画作品の撮影

美術作品の様式表現・制作技術・素材に関する複合的研究と公開^(シ04)

研究組織 小林公治、小林達朗、二神葉子、塩谷純、江村知子、小野真由美、米沢玲、安永拓世、橘川英規、小山田智寛、吉田暁子、黒崎夏央、大谷優紀(以上、文化財情報資料部)、早川泰弘(副所長)、倉島玲央(保存科学研究センター)

目 的 絵画や彫刻、工芸といった美術作品は、その表現のあり方、制作に用いられた技術、そして利用された素材などが複合し一体となって成立したものである。本プロジェクトでは、こうしたそれぞれの構成要素がどのような実態を持ち、またどのようにに関わりあっているのか、関連する諸分野を広く渉猟しつつ多視点的に分析し、その関係の解明を目指すものである。こうした研究の実施により、美術「作品」に対するより深い理解の醸成が期待されるであろう。

成 果

○螺鈿及び漆器類ほかに関わる調査研究、研究協議等

- 2021(令和3)年5月13日、6月16日に都内個人蔵螺鈿漆器類について調査を実施した。7月30日にMIHO MUSEUMにて春日社に伝わる螺鈿漆器に関する聞き取り調査を行い、31日に京都角屋もてなしの文化美術館にて同館所蔵螺鈿の調査を実施した。11月1日に東京国立博物館にて中国・朝鮮螺鈿漆器の調査を東博研究員の立会いで行った。11月11日、12月3日、2022(令和4)年2月28日には同館にて南蛮漆器ほかのCTスキニング調査に参加した。1月25日に慶應義塾大学ミュージアム所蔵品調査を行った。また2月21日に東京大学総合図書館所蔵品の調査を実施したうえで3月15日に同館所蔵救世主像聖龕の塗膜調査について保存科学研究センターと研究協議を実施した。
- 個人蔵の伝平等院須弥壇剥落螺鈿貝片を借用し、2021(令和3)年9月6日、保存科学研究センター及び外部研究者と研究協議及び調査を開始したほか、併せて個人蔵の長崎螺鈿(青貝細工)箱についても同様の体制で調査を進めた。

○研究成果公開

- 2021(令和3)年7月16日に開催した第4回文化財情報資料部研究会にて発表を行った。
- 2021(令和3)年9月18・19日にオンライン開催された日本文化財科学会第38回大会にてポスター発表した。
- 2022(令和4)年2月13日に九州大学が主催したオンライン国際シンポジウムにおいて口頭発表した。

○研究データの整備と公開

『美術研究』のバックナンバーについてよりの確な文献検索と発見向上への便宜を提供するため、検索用キーワードの抽出作業を実施した。また中国関連文献について中国語インデックスの作成も進めた。このインデックスについては今後検索ページを整備のうえ公開していく計画である。



東京国立博物館での調査風景(2021年11月1日)

発 表

- 小林公治：「近現代日本における「南蛮漆器」の出現と変容ーその言説をめぐってー」第4回文化財情報資料部研究会 21.7.16
- 倉島玲央、早川典子、小林公治：「多変角測色計による貝類切片の分光分析」日本文化財科学会第38回大会(ポスター受賞) 21.9.18-19
- 小林公治：「秋草と螺鈿ー岬町理智院蔵秀吉像厨子から見る輸出器物としての南蛮漆器ー」九州大学主催国際シンポジウム「越境する文化：モノ、ひと、思想の軌跡と交流」 22.2.13

無形文化財の保存・継承に関する調査研究 (△01)

研究組織 前原恵美、久保田裕道、石村智、鎌田紗弓、佐野真規 (以上、無形文化遺産部)、早川典子 (保存科学研究センター)、飯島満 (特任研究員)

目 的 我が国の無形文化財、並びに文化財保存技術の伝承形態を把握し、その保護に資するため、伝承の基礎となる技法・技術の実態や変遷の調査研究、及び資料の収集を行い、現状記録の必要な対象を精査して記録作成を行う。

成 果

1. 無形文化財に関する調査研究

ア) 芸能分野：古典芸能 (歌舞伎・文楽・三味線音楽ほか) に関する調査研究・芸能にかかる文化財保存技術、道具・原材料の調査研究

イ) 工芸分野：伊勢型紙の製作技術に関する研究

2. 現状記録を要する無形文化遺産の記録作成

ア) 諸芸：講談及び落語 (正本芝居噺) の実演記録を作成 (新型コロナウイルス感染症拡大により延期)

イ) 平家：復元曲の実演記録を作成 (菊央雄司氏ほかによる復元曲1曲)

ウ) 宮園節：伝承曲の実演記録を作成 (宮園千碌氏ほかによる古典曲・新曲各1曲)

3. 研究調査に基づく成果の公表

ア) 第15回公開学術講座「樹木利用の文化ー桜をつかう、桜で奏でるー」(東京文化財研究所ほかでリモート収録、3月30日ウェブ公開)

イ) 無形文化遺産と新型コロナウイルス フォーラム3「伝統芸能と新型コロナウイルスーGood Practiceとは何かー」(東京文化財研究所、2021 (令和3) 年12月3日)。

論 文

- ・前原恵美「常磐津節《将門》の音楽分析ー〈オトシ〉と〈ナガシ〉の機能をめぐってー」『桐朋学園大学研究紀要』2020年第47集 pp.1-17 21.10
- ・鎌田紗弓「明治前期東京の歌舞伎囃子方：劇場出勤動向および共演関係の解明に向けて」『無形文化遺産研究報告』16 pp.41-85 22.3

報 告

- ・前原恵美ほか「楽器を中心とした文化財保存技術の調査報告5」『無形文化遺産研究報告』16 pp.29-40 22.3
- ・『無形文化遺産と新型コロナウイルスフォーラム3「伝統芸能と新型コロナウイルスーGood Practiceとは何かー」報告書』 22.3
- ・『第14回公開学術講座「竹と日本の伝統的な管楽器」報告書』 22.3



フォーラム3の様子



「第15回公開学術講座」収録の様子

発 表

- ・Megumi Maehara: A diversity – focused approach to musical instruments, Conference on the Exploring and Safeguarding Shared ICH in East Asia 21.9.10 (オンライン開催)
- ・前原恵美ほか (鼎談)「コロナ禍における研究機関の取り組み」第29回楽劇学会大会 21.7.11 (オンライン開催)

刊行物

- ・『及川尊雄旧蔵 紙媒体資料目録』 22.3
- ・パンフレット「日本の芸能を支える技」Ⅷ 能装束 22.3

無形民俗文化財の保存・活用に関する調査研究 (△02)

研究組織 久保田裕道、石村智、今石みぎわ(以上、無形文化遺産部)、後藤知美(無形文化遺産部併任、文化財防災センター)

目 的 風俗慣習、民俗芸能、民俗技術等無形民俗文化財のうち、近年の変容の著しいものを中心に、その実態を把握するために資料収集と現地調査を行う。また、無形民俗文化財研究協議会を実施し、その成果を報告書にまとめる。さらに、これまで収集・保管してきた無形民俗文化財についての記録・資料の整理を行う。また選定保存技術については、国により選定された技術及び未選定の技術について情報を収集し、その中で重要なものについては現地調査・記録作成を行う。

成 果

1. 新型コロナウイルス感染症拡大防止のため実地調査を控え、感染症が無形民俗文化財に与える影響について情報を収集するとともに、継続的な調査も行った。継続的研究として風俗慣習分野では正月儀礼等について、民俗芸能分野ではシシ系芸能や武術を伴う芸能等について、民俗技術分野として箕の製作技術等について、伝承や保護の実態についての情報収集を行っている。
2. 無形文化遺産の防災に関する調査研究として、東日本大震災被災地である宮城県女川町、福島県浪江町荻宿地区の調査を継続。また無形文化遺産総合データベースの改修を進め、あわせて映像アーカイブスとライブラリーの構築を行った。
3. 第16回無形民俗文化財研究協議会を「映像記録の危機を乗り越えるために」をテーマに12月17日に開催し、6件の事例報告及び登壇者による総合討議を行った。その模様は映像配信を行い(令和4年1月15日～2月15日公開)、成果は『第16回無形民俗文化財研究協議会報告書』にまとめた。
4. 選定保存技術については、金属煮色着色の技術に関する映像記録の編集作業を実施(令和2年度国宝重要文化財等保存・活用事業「金属煮色着色文化財保存技術伝承事業」における記録を行った。

論 文

- 久保田裕道「無形文化遺産としての『生活文化』」『無形文化遺産研究報告』16 pp.87-101 22.3

報 告

- 久保田裕道「無形文化遺産に関わる情報の記録と活用について」『第29回文化遺産国際協力コンソーシアム研究会報告書』文化遺産国際協力コンソーシアム pp.13-18、27-35 22.3

発 表

- 久保田裕道「Diversity in intangible cultural heritage as seen through lion dances」Unesco Mongolian National Commission / ICHCAP オンライン 21.9.10
- 今石みぎわ「映像による記録作成とアーカイブ化にかかる実践的課題」国立歴史民俗博物館共同研究「映像による民俗誌の叙述に関する総合的研究ー制作とアーカイブスの実践的方法論の検討」第1回研究会 オンライン 21.6.12
- 後藤知美「地域社会に残された水害の記憶ー水害常襲地・埼玉県の実例からー」東京文化財研究所令和3年度第5回総合研究会 東京文化財研究所 22.2.1

刊行物

- 東京文化財研究所編『第16回無形民俗文化財研究協議会報告書』22.3



感染症対策をして開催された南信州獅子舞フェスティバル(長野県飯田市)

無形文化遺産保護に関する研究交流・情報収集 (△05)

研究組織 石村智、金昭賢(以上、無形文化遺産部)、二神葉子(文化財情報資料部)、宮田繁幸、松山直子、神野知恵(以上、客員研究員)

目 的 無形文化遺産保護に関わる国際的動向の情報収集を図り、アジアを中心とする海外の研究機関等との研究交流を実施し、国内外の無形文化遺産保護に貢献する。

成 果

1. 韓国文化財庁国立無形遺産院との研究交流では、本研究所の研究員の派遣と相手機関研究員の受け入れを予定していたが、新型コロナウイルス感染症拡大(以下、「コロナ禍」)のため中止せざるを得なかった。代わりに両国のコロナ禍における無形文化遺産保護の現状について情報交換を行った。
2. 無形文化遺産の国際的な動向に関する調査研究では、コロナ禍のためオンラインでの開催となったユネスコ無形文化遺産条約第16回政府間委員会(パリ:12月13日～18日)に2名のスタッフ(石村・二神)がリアルタイムで傍聴し、情報収集を行った。なお、本調査の成果は『無形文化遺産研究報告』第16号において報告した。
3. アジア太平洋無形文化遺産研究センター(IRCI)への協力では、研究者フォーラム「無形文化遺産研究の進展と課題ー持続可能な未来に向けてー」(10月29日)、国際シンポジウム「無形文化遺産の貢献ーより良い学びと持続可能なまちづくりにに向けてー」(12月21日～22日)、に1名のスタッフ(石村)がリソースパーソンとして出席した。
4. ユネスコ・イコモス共催国際会議『Culture, Heritage and Climate Change (ICSM CHC)』に1名のスタッフ(石村)が専門家として参加し、気候変動と文化遺産保護の問題について各国の専門家と議論を行うとともに、ポスター発表を行った。
5. コロナ禍における無形文化遺産の現状と課題について、国内外の情報を収集し、それをウェブサイト及びSNSによって発信した。また、ユネスコのウェブサイトにはコロナ禍における日本の無形文化遺産の現状と課題の報告を掲載した。

論 文

- 石村智:「無形文化遺産としてのカヌー文化」『モノ・コト・コトバの人類史:総合人類学の探求』雄山閣 pp.203-218 22.3

報 告

- 二神葉子:「無形文化遺産の保護に関する第16回政府間委員会における議論の概要と今後の課題」『無形文化遺産研究報告』16 pp.1-27 22.3
- 石村智:「オセアニアにおける無形文化遺産保護条約の現状と課題」『日本オセアニア学会Newsletter』132 pp.1-11 22.3

発 表

- 石村智:「Geoarchaeological information and cultural heritage disaster risk management: Cases in Japan」ユネスコ・イコモス共催国際会議『Culture, Heritage and Climate Change (ICSM CHC)』オンライン開催 21.12.7
- 石村智:「無形文化遺産としてのカヌー文化:近年の動向」日本オセアニア学会第39回研究大会 オンライン開催 22.3.1

文化財生物劣化の分子生物学的手法による機構解明と環境調和型対策^(ホ01)

研究組織 佐藤嘉則、島田潤、小野寺裕子、矢花(篠崎)聡子、岡部迪子、犬塚将英、早川典子、朽津信明、建石徹(以上、保存科学研究センター)、片山葉子、藤井義久、北原博幸(以上、客員研究員)、間瀬創(保存科学研究センター併任、文化財活用センター)

目 的 文化財の生物劣化現象は、自然災害あるいは日常の管理において保存環境が悪化すると起こるが、それを早期に発見して、機序を解明し対策を講じることは極めて重要である。本研究では文化財建造物、古墳内環境など生物制御が困難な空間にある文化財を対象として、分子生物学的手法を用いた生物劣化機構の解明を行うとともに早期発見のための診断技術確立し、環境低負荷型の処置方法について研究を行うことを目的とする。

成 果

1. 木造の文化財建造物で竹材の加害痕跡にある虫糞を用いて、PCR法を応用した分子生物学的手法によって加害種を特定する技術確立し、その成果を論文として発表した。
2. DNAを識別子とした文化財害虫の検出システム(DNAバーコーディング)構築に向けて、新たに文化財害虫の収集を進め、形態学的、分子生物学的解析を経て国際機関へのデータ登録を進めた。
3. 湿度制御温風処理の技術開発に関して、専門家研究会に参加し(12月)、国内3例目の実証実験に向けた準備を進めた。また、これまでに開発した殺虫処理効果判定法の供試虫の変更にに向けて人工飼育法確立の検討を進めた。
4. 博物館・美術館等での環境カビ測定法の標準化と基準値策定に向けた基礎研究として、アデノシン三リン酸(ATP)測定法を活用した調査を行い、収集したデータの統計学的解析を進めた。
5. 国内の鍾乳洞や古墳環境において行った微生物叢解析のデータ解析を進め、微生物劣化に関わる群集の特定や生態学的な役割や物質循環に関する基礎研究を進めた。



木造文化財建造物から虫糞を採集する様子

論 文

- 佐藤嘉則：「博物館・美術館収蔵物のカビ対策システム化の現状と課題」『博物館研究』56(12) pp.11-14 21.11
- 佐藤嘉則：「微生物による文化財の劣化と対策～古墳・洞窟壁画の微生物劣化～」『日本防菌防黴学会誌』50(1) pp.19-24 22.1.10
- 佐藤嘉則：「文化財の加害生物種特定に向けた新たな試み」『木材保存誌』48(2) pp.1-6 22.3
- 篠崎(矢花)聡子、小峰幸夫、島田潤、佐藤嘉則：「竹材から得たフラスを用いて加害種を特定する分子生物学的手法の確立」『保存科学』61 pp.1-12 22.3

発 表

- 間瀬創、佐藤嘉則：「博物館におけるATP拭き取り検査ーカビ集落の活性評価と機器の特徴についてー」文化財保存修復学会第43回大会 紙上開催 21.7.15
- 小峰幸夫、篠崎(矢花)聡子、佐藤嘉則ほか：「文化財を加害したシバンムシ科甲虫のDNAバーコーディングによる同定法の検討」文化財保存修復学会第43回大会 紙上開催 21.7.15
- 佐藤嘉則、岡部迪子、犬塚将英：「低酸素濃度殺虫法に用いる脱酸素剤からの有機酸発生」文化財保存修復学会第43回大会 紙上開催 21.7.15
- 小野寺裕子、小峰幸夫、森島一貴、佐藤嘉則：「空調設備のない収蔵施設の保存環境改善ー岐阜県関市春日神社の事例研究ー」文化財保存修復学会第43回大会 紙上開催 21.7.15
- 佐藤嘉則：「微生物による文化財の劣化と対策 ～古墳・洞窟壁画の微生物劣化～」日本防菌防黴学会 第48回年次大会 WEB開催 21.9.9
- 松野美由樹、片山葉子、犬塚将英、佐藤嘉則ほか：「虎塚古墳の壁画剥落片に形成された独特な微生物叢」日本文化財科学会第38回大会 WEB開催 21.9.19

ほか2件

文化財の保存環境にかかる調査研究 (ホ02)

研究組織 秋山純子、相馬静乃（以上、保存科学研究センター）、伊庭千恵美（客員研究員）、佐野千絵（名誉研究員）、水谷悦子（保存科学研究センター併任、文化財防災センター）、吉田直人、間瀬創（以上、保存科学研究センター併任、文化財活用センター）

目 的 博物館・美術館などの展示・収蔵施設における文化財の劣化抑制を目的として、収蔵および展示空間に対し、文化財に影響を与える汚染物質の軽減と温湿度変化の影響を検討するためのデータを収集する。また、被災文化財等の一時保管場所を想定した保存環境について、環境整備に必要な温湿度・空気質等の状況を把握し、環境改善のための調査研究を行うことを目的とする。

成 果

1. 空調や建物の改修を実施した博物館・美術館等において、改修による効果を実証するため環境調査を実施し、改修をする際の検討材料となるデータを収集した。また、持続可能な環境維持を検討するため、展示室・収蔵庫の空調にかかる消費電力を測定し、空調の稼働と温湿度状況について調査を開始した。
2. 標高900mの場所に位置する空調のない神社において、常に外気との行き来があり、霧に多く見舞われる環境下の展示室及び収蔵庫の温湿度データを収集・解析し、高湿度の環境改善を検討した。
3. 展示ケース内の空気質改善のため、空気清浄機による効果を確認した。その状況を踏まえて、空気質の現状と改善に向けた研究会を博物館等の保存科学担当者向けに実施した（2022（令和4）年1月31日（月）「第3回保存環境調査・管理に関する講習会－空気清浄化のための化学物質吸着剤－」）。
4. 一時保管場所として使用されているプレハブ式収蔵庫の空気質と温度の関係を確認するため、温湿度調査を行った。また、空気質改善のため温度と換気量との関係をシミュレーションし、改善策を検討した（『保存科学』61号）。
5. 博物館・美術館等の展示照明について、D65照明での文化財への影響を検証した（日本文化財科学会ポスター発表）。
6. 民俗有形文化財が保管されている小学校の一部の教室で環境調査を開始した。民俗文化財の環境保全対策に役立つデータを収集・解析していく予定である。

論 文

- ・水谷悦子ほか：「プレハブ式高気密高断熱収蔵庫におけるアセトアルデヒドの放散挙動の把握と換気量による低減」『保存科学』61 pp.43-55 22.3

発 表

- ・秋山純子ほか：「特定波長域を遮光した光照射下における黄色系染料の変退色挙動」日本文化財科学会第38回大会 WEB開催 21.9.18



一時保管場所での調査の様子



一時保管場所における空気質調査の様子

文化財の材質・構造・状態調査に関する研究 (木03)

研究組織 犬塚将英、建石徹、高橋佳久、紀芝蓮（以上、保存科学研究センター）、早川泰弘（副所長）、城野誠治（文化財情報資料部）、岡田健、古田嶋智子（以上、客員研究員）

目 的 各種の可搬型分析機器を用いた文化財の材質・構造に関する調査方法を確立し、日本絵画における顔料の変遷についての研究を進めるとともに、金工品等における黄銅（真鍮）材料の利用実態を明らかにする。新たに可搬型回折装置を導入し、各種文化財の保存状態等に関する調査研究を進める。

成 果

1. 可搬型分析装置を用いたその場分析
 - 可搬型蛍光X線分析装置による材料調査として、平等院鳳凰堂の鉄製金具に施された装飾について新知見を見出すとともに、平安期から江戸期の絵画や経典に使われている顔料についてデータの蓄積を図った。
 - 可搬型ハイパースペクトルカメラの実用化に向けた分析方法・分析条件の最適化を行い、既知の試料を用いた標準データの取得を行った。
2. 金属材料の腐食性生物評価とその対策
 - 現代アート作品の金属装飾部分の腐食生成物の分析、及び化学物質の発生源の調査を実施した。
 - 真鍮製品表面の腐食生成物の分析、及び保存対策に関する考察を行った。
3. 研究成果発表
 - 論文2件、学会発表2件の研究成果発表を行うとともに、東京国立博物館所蔵の平安仏画2点（重要文化財）に関する光学調査報告書を刊行した。

論 文

- 早川泰弘：「琉球の美術工芸品」『ぶんせき』7 21.7
- 紀芝蓮、犬塚将英：「文化財の2次元的な分光分析を行うためのハイパースペクトルカメラの性能評価」『保存科学』61 pp.93-107 22.3



ハイパースペクトルカメラを用いた基礎実験

発 表

- 早川泰弘：「日本絵画における白色顔料の変遷」中国伝統色彩学術年会 WEB開催 21.11.12-13
- 犬塚将英ほか：「鉛金属の腐食と空気環境との関係についての調査事例」文化財保存修復学会第43回大会 紙上開催 21.7.15

刊行物

- 『東京国立博物館所蔵平安仏画 光学調査報告書』21.9

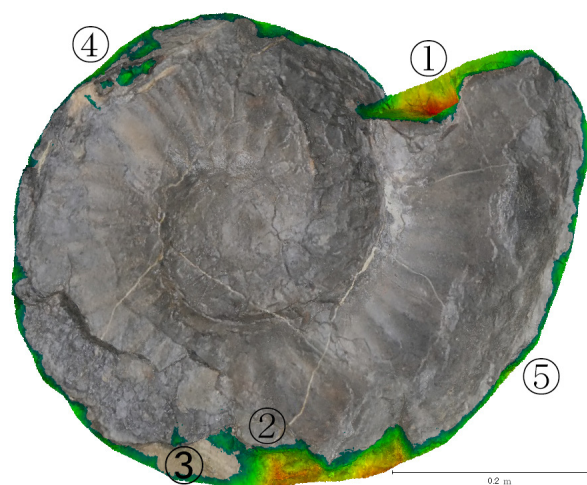
屋外文化財の劣化要因と保存対策に関する調査研究 (ホ04)

研究組織 朽津信明、白石明香(以上、保存科学研究センター)、前川佳文(文化遺産国際協力センター)

目 的 屋外に所在する石造・木質文化財を対象に、覆屋の機能・遺構の露出展示に関する課題として、周辺環境等の劣化要因の究明及び修復材料・技術に関する研究を行う。また、石塔など石造文化財の災害事例及び災害対策に関する基礎的調査を行う。また、現在一時保管場所での長期的な保管を余儀なくされている被災文化財に関して、その保存・修復方法に関する研究を進める。

成 果

1. 史跡である南相馬市の薬師堂石仏において、過去に撮影されていた写真に基づいて撮影時の形状を復元し、現状と比較することで劣化の進行について検証した。
2. 市指定天然記念物である天草市アンモナイト館で化石面の三次元計測を行い、覆屋建設前に取られていたレプリカの形状と比較することで、覆屋の保存効果について検証した。
3. 県指定有形文化財である茨城県の直牒洞において、表面を覆って沈着する緑色生物の繁茂と光環境との関係を調査し、繁茂を軽減する環境条件について解明した。
4. 名勝である田代の七ツ釜において、滝の修復以前に撮影されていた写真から形状を復元し、現状を計測して比較することで、名勝の修復について検証した。



アンモナイト化石の比較検証データ 色の付いた箇所が変異(劣化)箇所

論 文

- 朽津信明：「文化財としての自然史資料の現地保存」『保存科学』61 pp.13-31 22.3

発 表

- 朽津信明、犬塚将英：「常陸太田市・直牒洞の光環境と緑色生物」文化財保存修復学会第43回大会 21.7.15
- 白石明香、朽津信明：「過去の写真・三次元データを用いた薬師堂石仏の崩落の検証」文化財保存修復学会第43回大会 21.7.15

- 朽津信明、白石明香、藤隆宏、後誠介、柳沼由可子、西山賢一：「新宮市・九重の土砂災害慰霊碑の三次元印刷」日本文化財科学会第38回大会 21.9.19
- 朽津信明、白石明香、廣瀬浩司：「天草市・アンモナイト館における化石の現地保存とその評価」日本応用地質学会2021年度研究発表会 21.10.14-15

文化財修復材料と伝統技法に関する調査研究 (木05)

研究組織 早川典子、倉島玲央(以上、保存科学研究センター)、前原恵美(無形遺産部)、江村知子、安永拓世(以上、文化財情報資料部)

目 的 美術工芸品や建造物等文化財の修復に貢献するため、修復材料・技法についての科学的調査を行い、その有効性についての評価を行う。また、文化財の構成材料や修復に関連し、伝統的材料・用具とそれらを使用する技法についての調査を行い、科学的評価を踏まえた記録を作成することで、文化資産の客観的な情報集積を目的とする。さらに、得られた成果をもとに研究会や研修等を行い、研究で得られた知見を文化財修復の現場へと還元する。本研究には被災資料の処理に関する研究も含む。

成 果

令和3年度は「文化財修復のための技術と材料に関する調査研究」と「伝統材料・技法に関する複合的調査研究」の2項目に分けて事業を推進した。

1. 文化財修復のための技術と材料に関する調査研究の研修事業としては、「文化財修理技術者のための科学知識基礎研修」を9月29日より3日間の日程で開催した。これは文化財修復に関する科学の研修としては、国内初めての試みであり、大学の教授職や修復技術分野での責任者等の応募も多く、開催後のアンケートも好評で継続を期待するものであった。また、実際の研究としては酵素を使用して過去に使用したデンプンの除去の検討やフノリ精製方法の検討と評価、補絹に用いる劣化絹の新規作成方法の実験開始、臼杵磨崖仏の石室表面再接着材料の現地試験の開始など、様々な研究のスタートアップを行った。
2. 伝統材料・技法に関する複合的調査研究としては、文化庁の行う美術工芸品修理に用いる用具・材料の調査に協力し、今後の生産確保の難しいとされる材料について、科学的な評価と安全な保存方法の検討を行っている。今年度は、掛軸・巻子の修理に必須な宇陀紙材料であるノリウツギについて、その保存に用いられる薬剤が環境被害が懸念されるものであるため、代替手法の検討実験を開始した。また、生産が途絶えた刃物などについて形状記録を取るため3Dスキャナーを購入し、現場との調査方法の検討を行い、令和4年度以降のデータベース作成の基礎資料とした。

論 文

- 早川典子ほか：「文化財修復に使用されるフノリの精製効果に関する評価」『保存科学』61 pp.67-77 22.3
- 島海秀実：「絵画修復における欠損部分の補完と補彩に関する考察」『文化財保存修復学会誌』65 pp.36-49 22.3
ほか3件

発 表

- Reo Kurashima, et al. : Characteristics of lacquer coating films extracted from Gluta usitata before and after UV irradiation, ICOM-CC 19th Triennial Conference 21.5.17-21
- 倉島玲央ほか：「多変角測色計による貝類切片の分光分析」日本文化財科学会第38回大会 21.9.18-19
- 倉島玲央ほか：「タンパク質を混合した漆塗膜の表面状態と機械的強度の関係」文化財保存修復学会第43回大会 21.7.15
- 早川典子ほか：「植物由来染織文化財の種同定における非破壊赤外分光分析利用の可能性－葛・芭蕉を中心に－」文化財保存修復学会第43回大会 21.7.15

ほか5件



文化財修理技術者のための科学知識基礎研修

多様な文化財の修復技術に関する調査研究 (ホ06)

研究組織 建石徹、芳賀文絵、中村舞(以上、保存科学研究センター)、中山俊介(特任研究員)、荻田重賀(客員研究員)

目 的 近年多発する災害、水害や地震、火災によって被災した文化財、また、近代に制作された大型構造物や機械器具、工業製品などの文化財の保存修復処置は、その多様な材質、状態により、従来の方法のみでは対処できない可能性がある。本研究では、そのような多様な文化財に対する保存修復技術に関する新しい材料や技法について情報収集、調査及び開発を行う。これらの研究を通して、多様な文化財の特性や来歴を含め、次世代に適切に伝えていくための保存手法・保存活用、防災計画のあり方等を明らかにすることを目指している。

成 果

1. 被災文化財の保存修復技術に関する調査・研究

- 東日本大震災における被災資料保管環境管理について、宮城県の事例をもとに、施設タイプによる保存環境傾向について整理し、報告した。また、同じく被災資料の保存処置に関して、水損紙資料を中心としたレスキューから復旧までの事例を報告した。
- 津波、洪水被災をした紙資料からは、乾燥後も臭気を確認されることがあるが、その資料からの揮発成分、また臭気の軽減方法について検討を行った。まずは被災資料から揮発する成分について調査を実施した。
- 被災資料の応急処置方法の検証として、真空凍結乾燥機をはじめとした、水損紙資料の乾燥処置による資料への影響の検証を試みている。今年度は実験環境を整備するとともに、模擬試料を作成し処置を行った。併せて、東日本大震災での水損資料処置に携わる実務担当者との意見交換を行う等、情報収集を行った。(文化財防災センター連携)

2. 近代文化遺産の保存修復技術に関する調査・研究

- 近代文化遺産の活用に関する調査を行い、活用事例に関するアンケート調査結果について、報告を行った。
- 上記アンケート調査結果に基づき、各地の特徴ある活用を実施している国指定品を中心とした文化財の現地調査を実施した。
- 全国に所在する漆喰装飾の材料技法に関する現地調査を実施し中間報告としてまとめた。
- 航空資料の保存に関する調査を実施した。また、南九州市知覧特攻平和会館と協力し、陸軍四式戦闘機「疾風」(1446号機)をはじめとした近代文化遺産の保存、及び展示保管環境について検討を行った。
- 2019(令和元)年に発行した『コンクリート造建造物の保存と修復』の英語版を刊行した。

発 表

- 中村舞ほか：「産業遺産における活用－文化財の活用に関するアンケート調査結果－」産業遺産学会 21.11.27
- Toru Tateishi, et al.: The History of Japan's System for the Protection of Cultural Properties and Fire, Disaster and Crime Prevention Measures for Museums, Temples and Shrines, ICCROM, "PREVENT: Building Capacities for Mitigating Fire Risk at Heritage Places", 21.11.26(文化財防災センター連携)
- 芳賀文絵ほか：「宮城県における被災資料の保管環境管理について」第43回文化財保存修復学会大会 紙上開催 21.7.15
- 森谷朱ほか：「宮城県における被災資料の保全活動について」第43回文化財保存修復学会大会 紙上開催 21.7.15
- 芳賀文絵：被災文化財の保存と活用－東北歴史博物館における文化財保存の取り組み－ 東京文化財研究所令和3年度第2回総合研究会 東京文化財研究所 21.9.1

刊行物

- 『Conservation and Restoration of Concrete Structures』21.8

高松塚古墳・キトラ古墳の恒久的保存に関する調査研究^(ホ07)

研究組織 建石徹（保存科学研究センター）、早川泰弘（副所長）、朽津信明、犬塚将英、秋山純子、早川典子、佐藤嘉則、芳賀文絵、倉島玲央、鳥海秀実、島田潤（以上、保存科学研究センター）、片山葉子、宇高健太郎（以上、客員研究員）、水谷悦子（保存科学研究センター併任、文化財防災センター）

目 的 文化庁が行う高松塚古墳・キトラ古墳の壁画の調査及び保存・活用に関して技術的に協力する。また、キトラ古墳壁画の彩色及び漆喰の状態調査並びに展示環境の制御とモニタリング方法の調査研究を行う。

成 果

1. 高松塚古墳壁画に関しては、修理施設内での歩行性害虫調査、浮遊菌・付着菌・落下菌調査に加え、浮遊粒子数測定、ATP測定と空気質調査を行った。温湿度推移のモニタリングを継続し、安全な保存環境の維持に努めた。また高松塚古墳壁画の適切な場所で保存管理・公開が行われることを見据え、これまでの環境調査データをもとにして古墳壁画の保存環境管理指針の策定に関する研究を行い学会発表と学術誌への成果報告を行った。
修復後のメンテナンス作業に関連する調査研究としては、漆喰部分・補填箇所について、状態変化の有無に関する確認を定期的に行った。
2. キトラ古墳壁画に関しては、本年度は修理報告書を刊行した。関連して、全ての漆喰片に関する処置情報のカルテをデジタル情報に変換し、検索システムを作成した。
「四神の館」における保存及び公開の際の環境管理について調査協力を行った。集中メンテナンスや壁画の蓋の検討など、保存状況の改善について協議や検討を行った。また、十二支「辰」「巳」「申」が存在すると推定される泥に覆われている漆喰片のうち「巳」について、これまでのX線透過撮影結果を踏まえ、蛍光X線分析による調査を実施した。また、泥に転写された午の状態について、今後の修復のための状態調査を行なった。

論 文

- 犬塚将英ほか：「蛍光X線分析による泥に覆われたキトラ古墳壁画の調査」『保存科学』61 pp.57-65 22.3
- 岡部迪子ほか：「国宝高松塚古墳壁画仮設修理施設における微生物環境管理指針の検討」『保存科学』61 pp.33-42 22.3

発 表

- Noriko Hayakawa, et al. : Application of Cell Lytic Enzymes to Remove Biofilm from the Surface of East Asian Paintings, ICOM-CC 19th Triennial Conference 21.5.17-21
- 岡部迪子ほか：「国宝高松塚古墳壁画仮設修理作業室におけるカビ環境管理指針の検討」日本防菌防黴学会第48回年次大会 WEB開催 21.9
- 水谷悦子ほか：「壁画構成材料の乾湿による膨張、収縮の測定」日本文化財科学会第38回大会 21.9.18-19
- 犬塚将英ほか：「蛍光X線分析による泥に覆われたキトラ古墳壁画の調査」日本文化財科学会第38回大会 21.9.18-19 WEB開催

刊行物

- 『国宝キトラ古墳壁画修理報告書』22.3



キトラ古墳壁画十二支「午」の保存環境状態調査

文化遺産保護に関する国際情報の収集・研究・発信^(コ01)

研究組織 西和彦、松浦一之介（2021年10月から）、藤澤綾乃、石田智香子（以上、文化遺産国際協力センター）、二神葉子（文化財情報資料部）、石村智（無形文化遺産部）、境野飛鳥（客員研究員、2021年7月まで文化遺産国際協力センターアソシエイトフェロー）

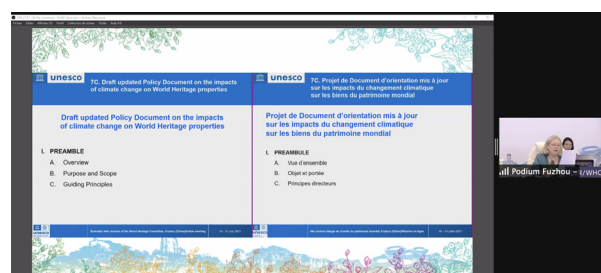
目 的 海外の文化遺産に関する情報の収集、諸外国の文化遺産保護施策等に関する調査を行う。国際情勢に鑑みつつ優先度の高い国の文化遺産保護関連の法令について条文を和訳し、法令集として刊行する。また世界遺産委員会などユネスコ等が行う主要な国際会合へ出席して情報の収集を行うとともに、文化遺産の保護をめぐる今日的な課題等に関する調査研究を行い、その成果をインターネットなど多様な媒体を通じて国内外に情報発信する。

成 果

1. 文化遺産保護に関する情報収集のための国際会議やシンポジウム等については、世界遺産委員会等を始めとして、第32回国際文化財保存修復研究センター総会などそのほぼ全てが新型コロナウイルス感染症の影響によりオンライン開催となった。これらに参加して情報収集を行った。
2. 文化遺産保護関連の法令の収集・分析及び翻訳作業については、カナダ政府の元担当者に依頼したカナダの文化財保護制度の概説を含む『各国の文化財保護法令シリーズ[26]カナダ』を刊行した。
3. 例年行っている「世界遺産研究協議会」については、令和2年度に引き続き我が国の文化財の「整備」をテーマとして取り上げ、オンライン配信のかたちで開催した。

刊行物

- 『各国の文化財保護法令シリーズ[26]カナダ』東京文化財研究所 22.3
- 『世界遺産研究協議会「整備」をどう説明するか(第2部)』東京文化財研究所 22.3



中国・福州で開催された拡大第44回世界遺産委員会（オンライン）



令和3年度世界遺産研究協議会第2部討論会

アジア諸国等文化遺産保存修復協力^(コ2)

研究組織 金井健、友田正彦、安倍雅史、間舎裕生、浅田なつみ、ヴァルエリフベルナ、岡崎未来（以上、文化遺産国際協力センター）、山田大樹（客員研究員）

目 的 東南アジア、西アジア及びその周辺地域における文化遺産の保存活用に関する調査研究の実施ならびに当該地域で行われる文化遺産の保存修復事業への協力を通じて、我が国が有する文化遺産保護に関する技術移転を図るとともに、この分野での国際協力を推進する。

成 果

1. カンボジア アンコール・タネイ寺院遺跡保存整備事業に対する支援等

ア) アンコール・シエムレアプ地域保存整備機構 (APSARA) との共同調査の実施

東門の修復工事(再構築)の完了確認及び要修整箇所の調査、アンコール保存事務所(ACO)保管のタネイ寺院遺跡出土彫像遺物の調査、東門周囲の水はけ改善に向けた外周壁東面の発掘調査と排水対策案の検討、中央伽藍建物群の危険箇所の確認と構造補強案の再検討(2022(令和4)年1月9日～24日)

イ) アンコール遺跡保存国際調整委員会 (ICC-Angkor) 技術会合への参加等(オンライン)
ICC-Angkorアドホック専門家会合への参加(2021(令和3)年6月28日～29日、10月11日)、ICC-Preah Vihear第6回・第7回技術会合の傍聴(9月29日、2022(令和4)年3月22日)、在カンボジア日本大使館のタネイ寺院遺跡視察への資料提供(11月9日)、ICC-Angkor第28回総会及び第35回技術会合への参加(2022(令和4)年3月24日～25日)

2. ネパールの被災文化遺産保護に関する支援

JICA短期専門家派遣による考古学発掘調査及び測量調査手法に関するネパール文化観光航空省考古局(DoA)職員への技術移転及びハヌマンドカ王宮内シヴァ寺院基壇部の現状調査(2021(令和3)年12月3日～19日)、ネパール復興庁(NRA)主催の国際会議ICNR2021への参加(12月7日～9日)

3. オンライン研修及び研究会

ア) 国別テーマ研修・インドネシア「文化遺産の保護に資する研修」(ACCU奈良事務所主催)への協力(2021(令和3)年10月8日～21日)

イ) 研究会(ウェビナー)「考古学と国際貢献：イスラエルの考古学と文化遺産」の開催(2022(令和4)年2月20日)

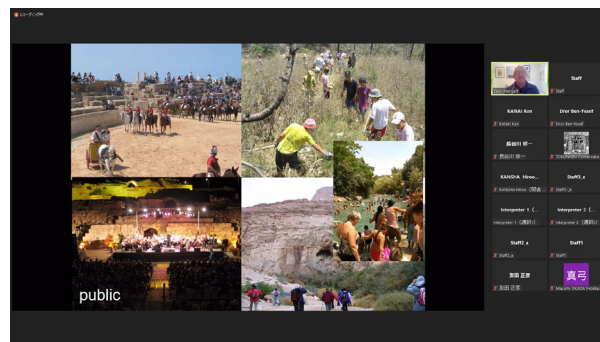
ウ) オンライン国際研修「3次元写真測量による文化遺産の記録」の開催(2022(令和4)年3月15日)

発 表

- ・金井健「建築遺産における写真の役割」ACCU奈良事務所 国別テーマ研修・インドネシア 21.10.14
- ・間舎裕生「日本の調査隊によるイスラエルの考古学調査の歴史」研究会 考古学と国際貢献：イスラエルの考古学と文化遺産 22.2.20

刊行物

- ・『考古学と国際貢献：イスラエルの考古学と文化遺産 研究会記録』東京文化財研究所 22.3
- ・『大陸部東南アジアの古代木造建築を考える』東京文化財研究所 22.3
- ・“Exploring the Ancient Wooden Architecture in Mainland Southeast Asia” Tokyo National Research Institute for Cultural Properties, 22.3
- ・『アジア諸国等文化遺産保存修復協力 令和3年度成果報告書』東京文化財研究所 22.3



研究会(ウェビナー)「考古学と国際貢献：イスラエルの考古学と文化遺産」ゼエヴ・マルガリート博士の発表

保存修復技術の国際的応用に関する研究 (コ03)

研究組織 加藤雅人、前川佳文、安倍雅史、牛窪彩絢、ヴァルエリフベルナ（以上、文化遺産国際協力センター）、朽津信明、犬塚将英（以上、保存科学研究センター）、水谷悦子（保存科学研究センター併任、文化財防災センター）

目 的 文化遺産保護に関して諸外国が有する問題は、それぞれの地域、環境に応じて多種多様であり、他国で実績のある既存の手法をそのまま適用することが必ずしもできない。本プロジェクトでは国内の専門家及び諸外国の研究機関とネットワークを構築し、壁画をはじめとする不動産文化財を中心に、保存修復技術の最新動向を踏まえた基礎的・基盤的研究を行うことを目的とする。また、得られた成果は文化遺産国際協働の場で応用し、保存修復技術発展への貢献を目指す。

成 果

1. ミャンマー・バガン遺跡における煉瓦造寺院外壁及び壁画の保存に向けた調査研究と技術指導

当初計画では、7月と1月に同遺跡 Me-taw-ya 寺院及び Lokahteikpan 寺院での現地専門家を対象とした人材育成事業及び保存修復事業を実施する予定であったが、新型コロナウイルス感染症拡大の影響から当初計画を変更してオンライン会議を開催し、維持管理に係る助言を行った。また、これまでの活動成果の一部をまとめて出版した。(オンライン会議:2021(令和3)年4月24日、6月6日、7月3日、9月11日、12月19日、2022(令和4)年2月19日)

2. スタッコ装飾及び塑像に関する研究調査

当初計画では、6月と10月に地中海沿岸地域での調査を計画していたが、新型コロナウイルス感染症拡大の影響からこれを延期し、欧州専門家とのリモートによる意見交換会を年3回開催した。また、緊急事態宣言が解除された10月より、国内のスタッコ装飾を対象にした調査を行った。(意見交換会:2021(令和3)年5月29日、7月31日、9月11日)

3. 壁画断片の保存修復方法に関する研究

様々な要因で剥離・剥落した壁画断片の保存修復方法について、新たな技法の開発を目標にした各種実験研究を行った。

4. トルコ・アンカラ ハチバイラムヴェリ大学(AHBV)との壁画保存修復に係る共同研究に向けた合同会議（オンライン会議：2021(令和3)年12月15日）

論 文

- Maria Letizia Amadori, Yoshifumi Maekawa, et al.: Organic Matter and Pigments in the Wall Paintings of Me-Taw-Ya Temple in Bagan Valley, Myanmar, MDPI 21.11

発 表

- 前川佳文、ダニエレ・アンジェロットほか:「ミャンマー・バガン遺跡における複合文化財として捉えた煉瓦造寺院の保存修復」日本文化財科学会第38回大会 21.9.18-19

刊行物

- 独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所／前川佳文、嶋原由美『世界遺産ミャンマー・バガン遺跡 華麗なる壁画の世界』雄山閣 21.11
- 『スタッコ装飾及び塑像に関する研究 令和3年度成果報告書』東京文化財研究所 22.3

在外日本古美術品保存修復協力事業 ^(コ04)

研究組織 加藤雅人、友田正彦、片渕奈美香、清水綾子（以上、文化遺産国際協力センター）、江村知子、米沢玲（以上、文化財情報資料部）、三本松俊徳、佐々木薫（以上、研究支援推進部）、大河原典子、杉山恵助（以上、客員研究員）

目 的 日本の文化財は欧米を中心に海外でも多く所蔵されている。しかし、日本文化財の保存修復専門家は海外にほとんどおらず、多くの博物館などで適切な処置に窮している。そこで、本事業では海外で所蔵されている日本文化財の保存修復に関する助言等の協力を行う。また、本格的な修復が必要な絵画作品に関しては日本で修復して返還する。さらに、日本とは異なる条件にある海外所在作品に関して、その保存修復方法の研究を行い、成果を公開、共有する。

成 果

令和3年度は、2件の作品修復を進めた。また、既に修復が終わり、所蔵館に返還した作品については報告書を作成した。

1. 作品修復

- ・「女房三十六歌仙扇面貼交屏風」
モントリオール美術館（カナダ）所蔵。紙本金地着色。
屏風6曲1双。
本作品の修復を行った。
- ・「熊野曼荼羅」
モントリオール美術館（カナダ）所蔵。絹本着色。掛軸1幅。
本作品の修復を行った。

2. 報告書

- ・『在外日本古美術品保存修復協力事業 親鸞聖人絵伝 No.2015-4 修復報告』
ナショナル・ギャラリー・オブ・ビクトリア（オーストラリア）所蔵「親鸞聖人絵伝」（絹本着色、掛軸4幅）の修復報告書を作成、刊行した。

刊行物

- ・『在外日本古美術品保存修復協力事業 親鸞聖人絵伝 No.2015-4 修復報告』東京文化財研究所 22.3



表装の解体（「熊野曼荼羅」）



修復工房へ搬送するための作品梱包（「女房三十六歌仙扇面貼交屏風」）

国際研修 (コ05)

研究組織 加藤雅人、五木田まきは、大川柚佳(以上、文化遺産国際協力センター)、早川典子(保存科学研究センター)

目 的 近年、日本の材料や道具、保存修復の理念が諸外国の文化財修復に応用されるようになってきた。このような状況において、海外の保存修復関係者に直接日本の技術や知識を伝える場が求められている。そこで、国内外において関係諸機関との共催あるいはそれらの機関の協力を得て研修等を開催することで、保存修復関係者への技術移転と情報共有を行う。

成 果

本事業では「紙の保存と修復」(文化財保存修復研究国際センター (ICCROM) との共催)、「ラテンアメリカにおける紙の保存と修復」(ICCROM、メキシコ文化省国立人類学歴史機構 国立文化遺産保存修復調整機関 (CNCPC-INAH) との共催)を毎年行う予定としている。本年度は、新型コロナウイルス感染症拡大により上記研修の中止を余儀なくされた一方で、これらの最適化を図るために今までの研修の評価を行った。また、新型コロナウイルス感染症が蔓延するような状況への対応も見据え、研修へのオンライン化導入に関してその可能性から検討した。

1. これまでの研修の評価

- 運営資料のデジタル化
1992 (平成4) 年度及び1998 (平成10) 年度分
- 国際研修「紙の保存と修復」評価アンケート
アンケート回収期間：
2022 (令和4) 年3月～5月
実施者：東京文化財研究所、ICCROM
対象者：過去の研修修了者
内 容：研修内容の活用実態の調査

2. オンライン化導入に関わる検討

- 意見交換会
期 日：2021 (令和3) 年5月14日
方 法：研究所における会議とオンラインの併用
参加者：国際研修事業関係者、教育機関等での実技指導経験者
内 容：リモートでの講義、実技指導の手法や課題等についてのヒアリング
- 国際研修におけるIT技術導入のための実証実験
期 日：2021 (令和3) 年9月1日、9月8日～15日、11月24日～25日
会 場：東京文化財研究所
研修生：研究所職員
講 師：装潢修理技術者、研究所職員
内 容：講義 (伝統的接着剤、紙)、装潢修理技術実習 (卷子修復)、ディスカッション
- 報告書
内 容：実証実験内容及び結果、ディスカッション、事後アンケート
公開方法：PDFデータを東京文化財研究所刊行物リポジトリに掲載

刊行物

- 『国際研修「紙の保存と修復」リモート開催の可能性』 (PDF版のみ) 東京文化財研究所 22.3



IT 技術導入のための実証実験

文化財情報の分析・活用と公開に関する調査研究 (シ05)

研究組織 二神葉子、塩谷純、江村知子、小林公治、小林達朗、小野真由美、安永拓世、橘川英規、小山田智寛、米沢玲、吉田暁子、城野誠治、谷口母子、安岡みのり、酒井かれん、横尾千穂(以上、文化財情報資料部)
 広報委員(情報システム部会): 友田正彦(文化遺産国際協力センター長) 各部署情報システム部会員: 安達佳弘、鈴木道夫(以上、研究支援推進部)、橘川英規(文化財情報資料部)、石村智(無形文化遺産部)、倉島玲央(保存修復科学センター)、加藤雅人(文化遺産国際協力センター)
 広報委員(年報部会): 早川泰弘(副所長) 各部署年報部会員: 井上裕介、三本松俊徳(以上、研究支援推進部)、小野真由美(文化財情報資料部)、前原恵美(無形文化遺産部)、佐藤嘉則(保存修復科学センター)、金井健(文化遺産国際協力センター)

目 的 高精細デジタル撮影により、文化財が本来有する情報を目的に応じて正確・詳細に視覚化する調査・研究を行い、その成果を公開する。また、東京文化財研究所で行われる調査研究に関する情報や、国内外の文化財に関する多様な情報について分析し、それらを文化財保護に対して活用するための調査研究を行う。さらに、それらの情報の効果的な公開手法に関する調査研究を行うとともに、調査研究の遂行に資する情報基盤としての所内情報システムを整備・充実させる。

成 果

1. デジタル画像の形成方法の研究開発

ア) 運営費交付金や外部資金による他プロジェクトと連携し、奈良国立博物館所蔵の仏画、黒田記念館所蔵黒田清輝作品のうち油彩画、首里城火災による被災文化財などの文化財の光学的調査、記録作成を実施し、一部は報告書を編纂した。また、成果を論文等で発表した。

イ) 『ものの記憶－読み解き・伝え・遺す－』を2021(令和3)年6月30日付、『国宝 絹本着色春日権現験記巻十一・巻十二 光学調査報告書』を2022(令和4)年3月15日付で刊行した。

ウ) 沖縄県立博物館・美術館と共同で、同館所蔵の仲座久雄撮影ガラス乾板及び関連調査を行うとともに、ガラス乾板の画像のデジタル化に関する技術開発を行った。

2. 文化財情報に関する調査研究

ア) 文化財情報の適切な発信に関する調査研究を進め、学会や論文を通じて発表した。

イ) 展示収蔵施設の学芸員、自治体の担当者などの文化財の実務家を対象に、9月21日に「文化財の記録作成に関するセミナー「文化財保護と記録作成・画像圧縮の原理」」を開催した。

3. 東京文化財研究所が行う調査研究成果の発信

ア) 研究情報の発信の一環としてウェブサイトを運用し、ウェブデータベースの新規公開、既存データベースへのデータ追加や機能改善、ウェブサイトの適宜更新を実施した。また、メールマガジン、ソーシャルメディアを通じて、当研究所のウェブサイト更新情報、及び新型コロナウイルス感染症拡大に伴う国際機関を中心とした取組みに関する情報を発信した。

イ) 2021(令和3)年6月30日付で『東京文化財研究所年報2020』を刊行した。編集にあたっては、各部・センターの年報部会員の協力を得た。

ウ) 研究成果紹介のためのパネル展示をエントランスロビーで行った。令和3年度は無形文化遺産部による「記録で守り伝える無形文化遺産」を展示した。

4. 調査研究及び研究成果発信のための文化財情報基盤の整備・充実

ア) 各職員の端末を含むネットワーク機器及びソフトウェアの保守・監視を行い、国立文化財機構内施設の担当者と連携してセキュリティ水準の維持向上に努めた。なお、所内の情報基盤整備及びセキュリティ関連業務は、各部・センターの情報システム部会員と連携している。

イ) 従来、個別の物理サーバで運用されていたウェブサーバ等を仮想化基盤上に集約し、バックアップサーバの導入を行うなどネットワークの安定運用に努めた。また、テレワーク環境整備の一環としてウイルス対策ソフトをクラウド化した。

論 文

・城野誠治:「ものの記憶－記録を遺し伝える－」『ものの記憶－読み解き・伝え・遺す－』 pp. 108-133 21.6
ほか4件

発 表

・二神葉子:「文化財の記録作成の意義」文化財の記録作成に関するセミナー「文化財保護と記録作成・画像圧縮の原理」 21.9.21
ほか1件

刊行物

・『ものの記憶－読み解き・伝え・遺す－』 21.6
・『春日権現験記巻十一・巻十二 光学調査報告書』 22.3

ウェブサイトアクセスランキング(令和3年度 上位10位まで)

1	ガラス乾板データベース	6	『日本美術年鑑』所載美術界年史(彙報)
2	東京文化財研究所トップ	7	年紀資料集成
3	書画家人名データベース	8	黒田清輝日記(日付別)
4	『日本美術年鑑』所載物故者記事	9	異体字リスト
5	『美術画報』所載図版データベース	10	写真原板データベース(4×5カラー)

ウェブサイトの主な更新履歴(定期刊行物の公開、活動報告、公募情報を除く)

年 月 日	更新内容	関係部局
21. 4. 6	『日本の芸能を支える技Ⅶ 箏 国井久吉』刊行	無形文化遺産部
21. 4. 14	『無形文化財の保存・継承に関する調査研究プロジェクト報告書 「伝統芸能における新型コロナウイルス禍の影響」をめぐる課題』公開	無形文化遺産部
21. 4. 14	『及川尊雄収集 紙媒体資料』公開	無形文化遺産部
21. 4. 14	『【シリーズ】無形文化遺産と新型コロナウイルス フォーラム1「伝統芸能と新型コロナウイルス」報告書』	無形文化遺産部
21. 4. 16	デジタルブック版『未来につながる人類の技 20 内部造作の保存と修復』公開	保存科学研究センター
21. 5. 11	『「保存と活用のための展示環境」に関する研究会－照明と色・見えの関係－(令和3年3月4日(木)開催)』の動画公開	保存科学研究センター
21. 6. 4	無形文化遺産(伝統技術)の伝承に関する研究報告書 絹織製作技術』公開	無形文化遺産部
21. 6. 22	文化財修復技術者のための科学知識基礎研修 参加者募集	保存科学研究センター
21. 6. 24	無形文化遺産の伝承に関する研究会Ⅳ「型紙と型染」開催	無形文化遺産部
21. 7. 28	「琵琶製作の記録 石田克佳」(映像記録) 公開	無形文化遺産部
21. 8. 31	第14回公開学術講座「日本の伝統的な管楽器と竹材」公開	無形文化遺産部
21. 9. 30	第55回オープンレクチャー かたちを見る、かたちを読む 開催	文化財情報資料部
21.11.30	「Art news articles」(「美術界年史(彙報)」英訳) 公開	文化財情報資料部
21.12.28	【シリーズ】無形文化遺産と新型コロナウイルス フォーラム3 「伝統芸能と新型コロナウイルス－Good Practiceとは何か－」公開	無形文化遺産部
22. 1. 17	研究会「考古学と国際貢献：イスラエルの考古学と文化遺産」開催	文化遺産国際協力センター
22. 2. 1	浅田正徹氏採譜楽譜(通称「浅田譜」)原稿の所蔵・デジタル化進捗状況一覧 公開	無形文化遺産部
22. 3. 1	「及川尊雄収集紙媒体資料データベース」公開	無形文化遺産部

専門的アーカイブと総合的レファレンスの拡充 ^(※06)

研究組織 江村知子、橘川英規、安永拓世、米沢玲、二神葉子、小山田智寛、小林公治、塩谷純、吉田暁子、小林達朗、小野真由美、城野誠治、寺崎直子、尾野田純衣、大前美由希、田村彩子、阿部朋絵、鈴木良太、藤井糸子（以上、文化財情報資料部）、山梨絵美子、永崎研宣、片山まび、川瀬由照（以上、客員研究員）、久保田裕道（無形文化遺産部、文化財情報資料部兼務）、早川典子（保存科学研究センター、文化財情報資料部兼務）、西和彦（文化遺産国際協力センター、文化財情報資料部兼務）

目 的 当研究所が行う文化財の調査・研究の成果を集約するとともに、専門性の高い資料や情報を蓄積・整理する。あわせてデータベースの継続的拡充を行い、資料閲覧室を窓口にして文化財に関する総合的レファレンスを充実させる。

成 果

1. 全所的な文化財情報の発信：アーカイブWGを例年通り4回(4月21日、9月27日、12月23日、3月23日)開催し、アーカイブの拡充と積極的に情報発信を推進するための協議を行った。
2. 当研究所が所蔵する昭和30年代の文化財調査写真を利用し、現代の画像技術を応用して、現在損傷を受けてしまっている、与謝蕪村筆「寒山拾得図襖絵」(重要文化財)の復原を、所蔵者の妙法寺(香川県丸亀市)と共同研究として開始した。現地調査撮影を行い、その成果の一部を口頭にて発表した。
3. 売立目録デジタルアーカイブの改良：元年度より資料閲覧室にて公開しているデジタルアーカイブの校正作業を進め、より正確なデータ提供に努めた。
4. 通常は資料閲覧室を週に3回公開してきたが、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により令和2年度に引き続き事前予約制とし、週1回(5月は臨時休室、11月からは週2回)開室した。開室日・利用者数は減少したが、デジタル資料のオープンアクセス化の増加や、インターネット公開のデータベースの拡充、遠隔複写サービスなどを積極的に行い、研究支援を実践した。

資料閲覧室事業の運営

1. 年度内資料受け入れ数
和漢書947件 洋書138件、展覧会図録・報告書等849件、雑誌2,465件(合計4,399件)
2. 年度内閲覧室利用状況
公開日総数69日・年間利用者合計570人

発 表

- ・安永拓世：「香川・妙法寺の与謝蕪村筆「寒山拾得図襖」一画像資料を活用した復元的研究」第55回オープンレクチャー 東京文化財研究所 21.11.5

報 告

- ・安永拓世：「東京文化財研究所の写真資料から浮かび上がる与謝蕪村筆「寒山拾得図襖」」『Tobunken News』76 21.12



妙法寺での蕪村作品の調査



感染防止対策を行って開室している資料閲覧室

令和3年度オープンレクチャー（調査・研究成果の公開）^{（シ08）}

研究組織 小林達朗、小野真由美、塩谷純、二神葉子、小林公治、江村知子、橘川英規、安永拓世、小山田智寛、米沢玲、吉田暁子、黒崎夏央（以上、文化財情報資料部）

目 的 文化財情報資料部の研究成果の一部を外部講師を交えて広く一般に公開する。

成 果

1. 2021（令和3）年11月5日、専門家はもとより広く一般からも聴講者を募集し、オープンレクチャー「かたちを見る、かたちを読む」を開催した。研究所内部より2名の講演を行った。

それぞれの講演テーマは次の通りである。

- ・小林達朗（東京文化財研究所文化財情報資料部 日本東洋美術史研究室長）
「皆金色阿弥陀絵像の出現とその意味－転換期の時代思潮の表象」
- ・安永拓世（東京文化財研究所文化財情報資料部 主任研究員）
「香川・妙法寺の与謝蕪村筆「寒山拾得図襖」－画像資料を活用した復元的研究－」

2. 外部からの聴講者は新型コロナウイルス感染症予防に鑑み、抽選制とし、35名の参加を得た。参加者からのアンケート結果では、参加者の85パーセントから「満足した」「おおむね満足した」との回答を得ることができた。



第55回オープンレクチャーの様子

無形文化遺産に関わる音声・画像・映像資料のデジタル化^(△03)

研究組織 石村智、鎌田紗弓、牛村仁美、金昭賢(以上、無形文化遺産部)、飯島満(特任研究員)

目 的 無形文化遺産部が所蔵する音声・画像・映像資料のデジタル化。無形文化遺産部所蔵のアナログ資料を中心に、これまでに収集蓄積してきた分野を補完する資料の媒体転換を重点的に実施する。併せて、デジタル化を済ませた音声資料は、インデックス付与を含む整理を推進する。この事業は、将来的には資料のデータベース公開と音声・画像等の配信を目指すものである。

成 果

1. 映像資料については、再生不可となることが危惧されるHi 8、DVCを中心に媒体変換を行った。
2. 音声記録のデジタル化は、令和2年度に引き続き、1960年代に放送された純邦楽関連のテープ録音を中心に収録内容を確認した。また、民謡のオープンリールテープ録音についてもデジタル化を実施し、収録内容の確認を行った。
3. カセットテープに関しては、旧芸能部所蔵テープのうち、寺事の現地録音を中心に内容確認を行った。
4. 写真資料に関しては、石井雅子撮影歌舞伎舞台写真のデジタル化されたものの整理を行い、その一覧表を『無形文化遺産研究報告』第16号で公開した。
5. 無形文化遺産関連の音声映像資料155点(作成DVD2点・作成BD153点)を所蔵資料として新たに登録した。

発 表

- 石村智：「資料紹介：石井雅子撮影歌舞伎舞台写真デジタルデータ一覧」『無形文化遺産研究報告』16 pp.147-157 22.3

「文化財の記録作成に関するセミナー「文化財保護と記録作成・画像圧縮の原理」」^(④シ05の一部として実施)

文字や写真による文化財や収蔵品の記録作成(ドキュメンテーション)は、調査研究・保存活用のための基礎的なデータを取得する活動である。文化財保護法の改正に伴い、文化財の記録作成の重要性が増している。その一方で、今日主に行われているデジタル媒体での記録に関する技術的な情報は、十分に提供されているとはいえない。そこで、標記のセミナーを開催し、主に行政組織における記録作成及び画像圧縮の原理をテーマとした標記のセミナーを開催した。

日 時：2021(令和3)年9月21日(火) 13:00～17:30

会 場：東京文化財研究所 セミナー室・会議室

参加者：59名

プログラム：

二神葉子(東京文化財研究所)「文化財の記録作成の意義」

中野慎之(文化庁)「文化財保護と記録作成」

今泉祥子(千葉大学)「デジタル画像圧縮の原理」

無形文化遺産部

プロジェクトの一部として実施した研究集会・講座等

第15回無形文化遺産部公開学術講座^(①ム01の一部として実施)

無形文化遺産部では、無形文化財ならびに文化財保存技術の伝承形態を把握し、その保護に資するため、毎年、公開学術講座を行っている。今年は、「樹木利用の文化―桜をつかう、桜で奏でる―」として、新型コロナウイルス感染症拡大を鑑みて無観客収録し、後日、東文研ウェブサイトにて記録映像を公開した。本講座では、日本人に古来より親しまれてきた桜を起点に、樹木利用の視点から伝統芸能、民俗技術における樹木利用の現状と課題を共有し、解決の糸口を模索した。内容は、講演、報告のほか、桜の樹木で胴が作られている小鼓についての実演家インタビュー、小鼓組み立てのデモンストレーション、囃子演奏「水」で構成した。

会 場：東京文化財研究所セミナー室と地下ロビー、及びリモートによる収録

主 催：東京文化財研究所

開催形態：本講座は新型コロナウイルス感染症拡大を鑑みて無観客収録とし、編集した記録映像を2022(令和4)年3月30日より東文研ウェブサイトにて期間限定配信(令和4年度、内容を補追した上で報告書刊行予定)。

プログラム：

【趣旨説明】前原恵美(東京文化財研究所)

【講演】川尻秀樹(岐阜県立森林文化アカデミー)「様々な樹木利用の現状と課題」

【報告】今石みぎわ(東京文化財研究所)「民俗世界における樹木利用―桜を中心に―」

前原恵美(東京文化財研究所)「無形文化財と桜」

【インタビュー】藤舎呂英(藤舎流囃子方)「小鼓という楽器の魅力」

聞き手：前原恵美(東京文化財研究所)

【小鼓組み立てのデモンストレーション】藤舎呂英

【演奏】「水」(作曲：藤舎呂英)

囃子：藤舎呂英、藤舎呂近(以上小鼓)

藤舎雪丸(大鼓)、藤舎英心(太鼓)

笛：福原寛瑞

【座談会】「樹木利用の文化と無形の文化財」

川尻秀樹(岐阜県立森林文化アカデミー)

藤舎呂英(藤舎流囃子方)

今石みぎわ(東京文化財研究所)

前原恵美(東京文化財研究所)



第3回保存環境調査・管理に関する講習会 ― 空気清浄化のための化学物質吸着剤 ― (②ホ02の一部として実施)

本講習会は、保存環境の調査、評価方法、また、環境改善や安全な保管のための資材・用具等に関して、高いレベルでの共通理解を得ることを目的としている。第1・2回は文化財活用センター主催で開催されたが、第3回は同センターと東京文化財研究所が共同で開催した。テーマは「化学物質吸着剤」で、適切な化学物質吸着剤の選択と効果的な使用に不可欠な、吸着現象、吸着剤の原理や構造、吸着効率に関わる環境要因等への理解を深めるために、これらについて科学的見地から解説を行った。

日 時：2022(令和4)年1月31日(月) 13:30～16:00

会 場：東京文化財研究所 会議室

主 催：東京文化財研究所、文化財活用センター

参加者：30名

講演者：

吉田直人(文化財活用センター)「展示・収蔵空間における空気環境の問題と現状について」

中平卓矢(ピュアテック株式会社)「吸着現象と化学物質吸着剤の科学」

文化財修復技術者のための科学知識基礎研修 (②ホ05の一部として実施)

近年、文化財の保存修復に関する科学的研究が大きく進み、様々な知見が得られている、一方で、その知見を読み解き、現場で活用する力も文化財修復の上で必要とされてきている現状がある。

本研修では、文化財修復に必要とされる科学の基礎的な知識についての普及を目的とし、最新の研究成果を盛り込みつつ、文化財修復現場で直接必要となる情報を講義した。

日 時：2021(令和3)年9月29日(水)～10月1日(金)

会 場：東京文化財研究所 会議室

参加者：15名

1. 科学知識基礎1、2 早川典子
2. 溶液と接着について 早川典子
3. 伝統接着剤1(糊、フノリ) 早川典子
4. 伝統接着剤2(漆・膠等) 早川典子
5. 紙の科学 加藤雅人
6. 実験器具・薬品の取り扱い 倉島玲央
7. 生物対策 佐藤嘉則

令和3年度世界遺産研究協議会 『整備』をどう説明するか

(③コ01の一部として実施)

令和2年度から続く第二部として、我が国の文化財における「整備」を国際的観点から俯瞰し、これを対外的にどのように説明するかというテーマに関して研究協議会を実施した。開催形態は新型コロナウイルス感染症拡大の影響を鑑みオンライン開催とした。また、内容自体が翻訳に関わるものであることから、同時あるいは逐次通訳では十分に意図が伝わらない可能性があると考えられたため、日本語字幕を付すかたちで申込者に限定した動画配信とした。

日 時：セッション1：2021（令和3）年8月30日（月）～10月1日（金） 公開
 セッション2：2022（令和4）年1月14日（金）～2月25日（金） 公開
 会 場：動画配信
 参加者：270名

内 容：

セッション1【事例報告】

高田和徳（御所野縄文博物館）「変化する遺跡公園 —実験・検証による整備とその活用—」
 吉岡泰英（元福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館）「『史跡公園』を目指した一乗谷の史跡整備」
 Douglas Comer (Cultural Site Research and Management) "World Heritage Authenticity and SEIBI"
 Duncan McCallum (Historic England) "The approach to reconstruction at nationally important historic sites in England"

セッション2【討論】

Douglas Comer、市原富士男（文化庁）、稲葉信子（筑波大学）、Richard Mackay (Mackay Strategic Pty. Ltd.)、
 Duncan McCallum、友田正彦（東京文化財研究所）、西和彦（東京文化財研究所）、松浦一之介（東京文化財研究所）

文化遺産国際協力センター

プロジェクトの一部として実施した研究集会・講座等

考古学と国際貢献：イスラエルの考古学と文化遺産

（③コ02の一部として実施）

文明揺籃の地であるユーラシア大陸南西部には多くの考古遺跡が存在し、欧米を中心とした調査隊が19世紀から発掘調査を行ってきた。同地域に対しては日本も同様に調査研究の膨大な蓄積があり、さらに近年では、遺跡を有する国の研究者が主体となった調査も盛んに行われるようになってきている。中でも文化遺産保護の熱心な取り組みがみられるイスラエルを対象に、同国の実務者より国立公園として進められている史跡整備の現状について、また日本国内の研究者による同国の考古学及び関連分野の研究についての講演を行うとともに「考古学と国際貢献」をテーマとした講演者によるパネルディスカッションを行った。

日 時：2022（令和4）年2月20日（日）14:00～17:00

会 場：ウェビナー

使用言語 日本語・英語（同時通訳）

参加者：76名

プログラム：

趣旨説明 金井健（東京文化財研究所）

講演

ゼエヴ・マルガリート（イスラエル国立公園局保存開発部長）「イスラエル国立公園における考古遺跡の管理」
 ドロール・ベン＝ヨセフ（イスラエル国立公園局北部地区担当官）「ローマ時代初期のガリラヤ地方—考古学的視点から—」
 間舎裕生（東京文化財研究所）「日本の調査隊によるイスラエルの考古学調査の歴史」
 岡田真弓（北海道大学観光学高等研究センター准教授）「イスラエルにおける史跡整備と国立公園制度の役割」
 長谷川修一（立教大学文学部キリスト教学科教授）「イスラエルにおける遺跡保存と活用の課題—テル・レヘシュの例から—」

パネルディスカッション

モデレーター 長谷川修一

パネリスト ゼエヴ・マルガリート、ドロール・ベン＝ヨセフ、岡田真弓、間舎裕生

刊行物：『考古学と国際貢献：イスラエルの考古学と文化遺産 研究会記録』東京文化財研究所 22.3

文化財情報資料部

プロジェクトの一部として実施した研究集会・講座等

総合研究会 ^{（④シ）}

総合研究会は、各研究部・センターの研究員がプロジェクトの成果や経過を発表し、その内容に関して所内の研究者間で自由に討論する場である。令和3年度は下記のスケジュールで開催した。

- 第1回 2021(令和3)年6月1日(火)
建石徹(保存科学研究センター、文化財防災センター)「文化財防災センターの現状と展開」
- 第2回 2021(令和3)年9月7日(火)
芳賀文絵(保存科学研究センター)「被災文化財の保存と活用ー東北歴史博物館における文化財保存の取り組みー」
- 第3回 2021(令和3)年10月5日(火)
米沢玲(文化財情報資料部)「光明寺所蔵の羅漢図についてー光学調査とアーカイブの活用事例ー」
- 第4回 2021(令和3)年11月2日(火)
五木田まきは(文化遺産国際協力センター)「マヤ地域の文化遺産と地域社会」
- 第5回 2022(令和4)年2月1日(火)
後藤知美(無形文化遺産部、文化財防災センター)「地域社会に残された水害の記憶ー水害常襲地・埼玉県の事例からー」

文化財情報資料部

プロジェクトの一部として実施した研究集会・講座等

文化財情報資料部研究会^(4シ)

文化財情報資料部では、ほぼ月に1回のペースで美術史研究者を中心とする研究会を開催して、それぞれの研究やプロジェクトの成果を発表し、さらに討議によって充実を図っている。2021(令和4)年度の開催内容は下記の通り(肩書は発表時のもの)。

- 4月27日(火) 梅沢恵(神奈川県立金沢文庫)「『辟邪絵』の主題についての復元的考察」
- 5月25日(火) 江村知子(文化財情報資料部文化財アーカイブズ研究室長)「新出の住吉廣行筆『酒吞童子絵巻』(ライプツィヒ民族学博物館蔵)について」
- 6月29日(火) 小山田智寛(文化財情報資料部研究員)「東京文化財研究所の文化財データベースシステムの開発と運用について」
- 7月16日(金) 小林公治(文化財情報資料部広領域研究室長)「近現代日本における『南蛮漆器』の出現と変容ーその言説をめぐってー」
コメンテーター：小池富雄(静嘉堂文庫美術館)、日高薫(国立歴史民俗博物館)、山崎剛(金沢美術工芸大学)
- 9月24日(金) 中村茉貴(東京経済大学図書館史料室臨時職員)「『創造美術協会』の活動記録にみる戦後日本の美術教育ー島崎清海資料を手掛かりに」
- 11月30日(火) 二神葉子(文化財情報資料部文化財情報研究室長)「世界遺産条約の履行に関する最近の国内外の動向」
- 1月25日(火) 米沢玲(文化財情報資料部研究員)「モンテリオール美術館所蔵熊野曼荼羅図について」
山本聡美(早稲田大学文学部教授)「中世六道絵と文学・唱導 中世六道絵における阿修羅図像の成立」
阿部美香(名古屋大学人文学研究科附属人類文化遺産テキスト学研究センター共同研究員)「六道釈から読み解く聖衆来迎寺本六道絵」
- 2月24日(木) 吉田暁子(文化財情報資料部研究員)「岸田劉生による『手』という図像ー静物画を中心にー」
コメンテーター：田中淳(大川美術館)
- 3月17日(木) 木内真由美、古家満葉(長野県立美術館)「生誕100年松澤宥展：美術館による調査研究から展覧会開催まで」
井上絵美子(ニューヨーク市立大学ハンターカレッジ校)「松澤宥とラテン・アメリカ美術の交流についてーCAyC(Centro de Arte y Comunicación / 芸術とコミュニケーションのセンター)資料を中心に」
橘川英規(文化財情報資料部主任研究員)「松澤宥によるアーカイブ・プロジェクトData Center for Contemporary Art(DCCA)について」

東文研 総合検索 (④シ05の一部として実施)

東京文化財研究所が所蔵する図書や雑誌、展覧会カタログ、画像等の資料、東京文化財研究所の定期刊行物、国内外の美術関係文献等について、メタデータを横断的に検索することが可能なウェブデータベースで、デジタルデータを公開する「研究資料データベース」も含め、29件のデータベース、約172万件のデータを検索対象とする。検索画面は日英両言語に対応している。当研究所の定期刊行物については、本文のPDFデータを閲覧することも可能である。なお、日本国外における美術展覧会・映画祭開催情報、及び日本国外で出版された書籍情報に関しては、英国セインズベリー日本藝術研究所が採録した情報を受け入れている。

www.tobunken.go.jp/archives/

研究資料データベース (④シ05の一部として実施)

東京文化財研究所が作成、収集した研究資料の画像データやテキストデータを検索・閲覧することができるウェブデータベース。現在、24件のデータベース、10万件余りのデータを公開しており、全てのデータベースを横断的に検索可能で、一部を除き「東文研 総合検索」からの横断検索にも対応している。

www.tobunken.go.jp/materials/

インターネット公開 及川尊雄旧蔵 紙媒体資料目録データベース (①ム01の一部として実施)

本目録は、当研究所に寄附された、日本の伝統楽器や関連資料の蒐集家・^{おいかわたか お}及川尊雄氏（1942-2018）旧蔵紙媒体資料（2,208点）のWebデータベースである。先の『及川尊雄収集 紙媒体資料目録』（2021年3月、当研究所無形文化遺産部）刊行後に見つかった資料を加えた上で、当研究所に寄附された資料に絞り込んで、ひとまとまりの資料として捉えた方がよいメモ類などを再整理した。併せて、資料の基本情報に内容に関連するキーワードを加え、より幅広い研究活用に供するWebデータベースとして公開した。

www.tobunken.go.jp/materials/oikawa

いんたんじぶる (①ム02の一部として実施)

無形文化遺産の情報収集・情報発信を目的として作成した一般向けサイトで、改修を行った。「コレクション欄」の「動画アーカイブ」「ブックス」のページから無形文化遺産関連動画、関連PDFへのアクセスが可能。「無形文化遺産総合データベース」への導入的役割を果たすとともに、伝承者と研究者や関係者とのネットワーク構築を目指す。

無形文化遺産総合データベース (①△01の一部として実施)

文化財防災センターで作成する文化財データベース(非公開)に連動した形で、無形文化遺産に関するデータのみ、公開用データベースとして管理・運営するもの。全国都道府県の協力を得て、情報の確認を行っている。また、それに連動した映像アーカイブも管理。閲覧のための映像ライブラリーも構築中。

琵琶製作の記録(短編) 石田克佳 琵琶製作の記録(長編) 石田克佳 大鼓の革製作の記録(短編) 畑元 徹 (①△01の一部として実施)

無形文化遺産部では、文化財保存のための技術について調査、記録を継続的に実施し、その一環として映像記録の撮影・編集の上、許諾の得られた映像を東文研ウェブサイトより公開している。今年度は「琵琶製作の記録」(短編及び長編)を2021(令和3)年7月28日より、「大鼓の革製作の記録」(短編)を2022(令和4)年3月31日より公開した。



大鼓の革を縫う畑元徹氏

令和元年版『日本美術年鑑』刊行事業・出版事業 『美術研究』（調査・研究成果の公開）^{⑤シ07}

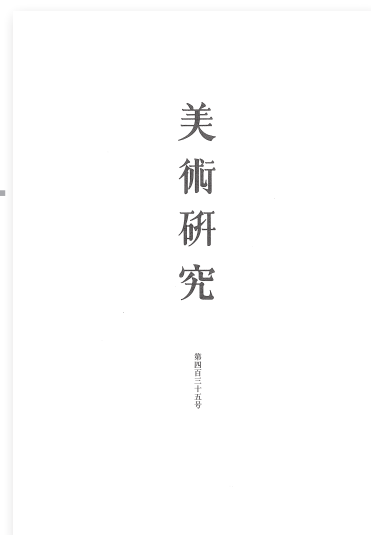


『日本美術年鑑』

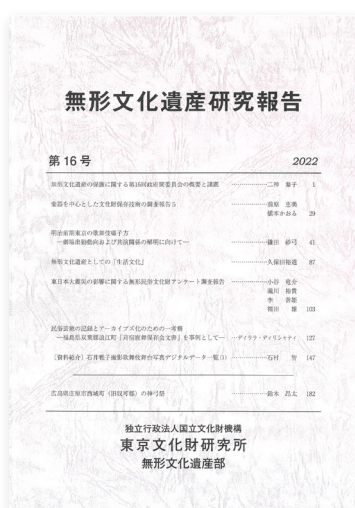
日本美術年鑑は、我が国の各年の美術活動と美術研究・批評の状況を記録した刊行物である。文化財情報資料部では当研究所の前身である帝国美術院附属美術研究所が1936（昭和11）年から始めた『日本美術年鑑』の編集を引き継ぎ、刊行を継続してきた。令和元年版は、B5版、533ページとなった。出版に際し、東京美術商協同組合、株式会社東京美術倶楽部より助成を受けた。

『美術研究』

1932（昭和7）年1月、当研究所の前身である帝国美術院附属美術研究所の初代所長・矢代幸雄の提唱により第1号を刊行。以来90年近く日本・東洋の古美術ならびに日本の近代・現代美術とこれらに関する西洋美術についての論説、研究ノート、書評、展覧会評、研究資料・図版解説等を掲載している。本年度は434号、435号、436号を刊行した。出版に際して、東京美術商協同組合、株式会社東京美術倶楽部より助成を受けた。



無形文化遺産部出版関係事業^{⑤04}

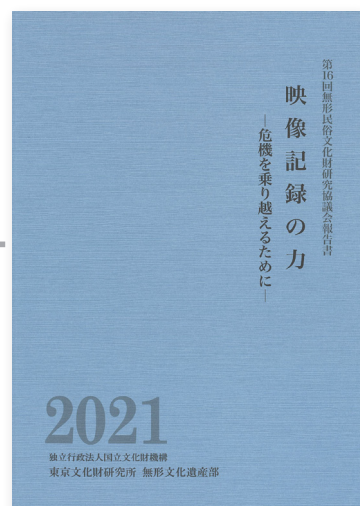


『無形文化遺産研究報告』第16号

無形文化財や無形民俗文化財、文化財保存技術、無形文化遺産保護の国際的な動向等に関する研究論文、調査報告、資料紹介等を掲載している。第16号には報文7件、資料紹介1件の計8件を掲載。2022年3月刊行、182ページ。

第16回無形民俗文化財研究協議会報告書 『映像記録の力 ー危機を乗り越えるためにー』

無形文化遺産部では毎年テーマを定め、保存会関係者・行政担当者・研究者などが一堂に会して無形の民俗文化財の保護と継承について研究協議する会を開催している。第16回にあたる令和3年度は「映像記録の力ー危機を乗り越えるためにー」と題して開催し、報告・総合討議の内容などを報告書にまとめた。2022年3月刊行、93ページ。



『保存科学』第61号の出版 (ホ07)



『保存科学』は文化財の保存と修復に関する科学的調査、研究報告などを報文・報告・資料のカテゴリーで掲載した学術誌であり、1964(昭和39)年に第1号を創刊している。令和3年度は、建石徹編集委員長、友田正彦委員、間瀬創委員(文化財活用センター)、貴田啓子委員(東京藝術大学)の4名からなる編集委員会を編成し、投稿された論文に対して査読を行い、報文1報、報告5報、資料3報の計9報の掲載を決定した第61号を刊行した。2022年3月刊行、115ページ。

広報委員会

『東京文化財研究所概要』、『TOBUNKENNEWS』

『東京文化財研究所概要』、『TOBUNKENNEWS』はそれぞれ、各部・センターからの部会員で構成される東京文化財研究所広報委員会の概要部会、ニュース部会が作成し、編集事務はいずれも研究支援推進部企画渉外係が担当している。



『東京文化財研究所概要』は研究所の組織や活動内容を、写真を多用して日英2ヶ国語により簡潔に紹介している。令和3年度の概要はA4判38ページ。

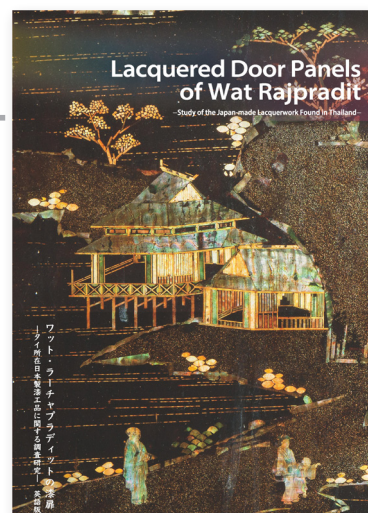
『TOBUNKENNEWS』はウェブサイト公開した毎月の「活動報告」から、紙媒体に適した記事を精選し、文化財保存に関するコラム、刊行物紹介等とともに掲載している。A4判。令和3年度はNo.74(7月刊、60ページ)、No.75(10月刊、30ページ)、No.76(12月刊、26ページ)、No.77(3月刊、38ページ)を刊行した。



Lacquered Door Panels of Wat Rajpradit —Study of the Japan-made Lacquerwork Found in Thailand—

本書は、2021（令和3）年3月に刊行した報告書『タイ所在日本製漆工品に関する調査研究—ワット・ラーチャプラディットの漆扉』の英語版である。タイ・バンコク所在の同寺に関するこれまでの調査研究成果を報告するもので、標記報告書の英訳に加え、タイ文化省芸術局及びワット・ラーチャプラディットによる報文を新たに掲載した。2022年3月刊行、166ページ。

（①シ02の一環として刊行）



『ものの記憶—読み解き・伝え・遺す—』

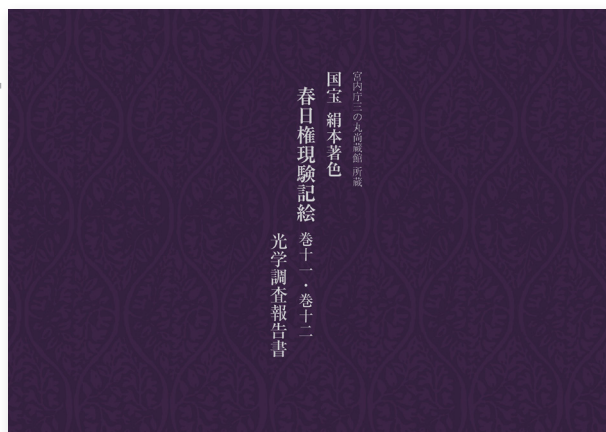
文化財や美術作品の記録に広く用いられる写真について、撮影が手軽になった反面、最大限の情報の取得や、対象を観察し記憶することへの注意が希薄化した面もある。このような危機感から本報告書では、被写体の「記憶」に結びつく写真のあり方や、過去の写真からの情報取得について、油画、版画、水墨画などさまざまな作品の写真を通じて検討した。2021年6月刊行、135ページ。

（④シ05の一環として刊行）

『宮内庁三の丸尚蔵館所蔵 国宝 絹本着色 春日権現験記絵 巻十一・巻十二 光学調査報告書』

東京文化財研究所が宮内庁三の丸尚蔵館と共同で実施する、鎌倉時代を代表する絵巻物「春日権現験記絵」全20巻の光学調査のうち、巻十一・巻十二に関する報告書である。さまざまな光源での撮影や蛍光X線分析による材料や技法に関する調査結果のほか、作品解説、輿車表現に関する論考を掲載した。2022年3月刊行、114ページ+口絵141ページ。

（④シ05の一環として刊行）





『フォーラム3「伝統芸能とコロナウイルスーGood Practice とは何か」報告書』

2021（令和3）年12月3日に東京文化財研究所で行われた【シリーズ】無形文化遺産と新型コロナウイルス フォーラム「伝統芸能とコロナウイルスーGood Practice とは何か」をもとに、一部追補し、報告書として刊行。2022年3月刊行、125ページ。

（①ム01の一環として刊行）

『第14回 東京文化財研究所 無形文化遺産部 公開学術講座「竹材と日本の伝統的な管楽器」報告書』

第14回公開学術講座は、新型コロナウイルス感染症拡大のため、2021（令和3）年3月20日、東京文化財研究所にて無観客で開催し、その記録映像を編集して期間限定で東文研ウェブサイトにて公開したが、その内容をさらに追補の上、報告書として刊行。2022年3月刊行、88ページ。

（①ム01の一環として刊行）



パンフレット『日本の芸能を支える技』Ⅷ 能装束 佐々木能衣装

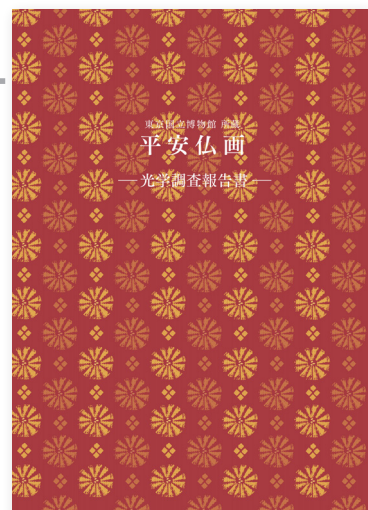
2017（平成29）年より継続的に行っている、芸能を支える文化財保存技術の調査と並行して、その製作者と技術に焦点を当てたパンフレットを順次刊行している。2022年3月刊行、12ページ。

（①ム01の一環として刊行）

『東京国立博物館所蔵 平安仏画 光学調査報告書』

東京国立博物館が所蔵する重要文化財「准胝観音像」及び「准胝仏母像」に関する光学調査報告書。本報告書では、カラー・近赤外線・蛍光写真及び蛍光エックス線分析による調査結果を収録した。2021年9月刊行、160ページ。

（②ホ03の一環として刊行）



Conservation and Restoration of Concrete Structures



Independent Administrative Institution
National Institutes for Cultural Heritage
Tokyo National Research Institute for Cultural Properties

『Conservation and Restoration of Concrete Structures』

本書は、近代文化遺産研究室が令和2年度に刊行した「コンクリート造建造物の保存と修復」の英訳版である。国内外のコンクリート造建造物の保存と修復に関して、各分野の専門家の論考や、国内外の修復事例をまとめたものを広く海外の専門家にも紹介し、日本の近代文化遺産への取り組みを広めるために刊行した。2021年8月刊行、144ページ。

(②ホ06の一環として刊行)

『世界遺産研究協議会「整備」をどう説明するか(第2部)』

本冊子は、2021(令和3)年8月～9月(セッション1)、2022(令和4)年1月～2月(セッション2)にオンライン配信のかたちで開催された「世界遺産研究協議会「整備」をどう説明するか(第2部)」の講演内容を書き起こしたものである。その他、今年度の世界遺産委員会の報告、整備に関連する憲章の和訳を掲載している。日本語、2022年3月刊行、104ページ。

(③コ01の一環として刊行)



各国の文化財保護法令シリーズ [26]
Series of statements for protecting cultural property [26]

カナダ

【史跡モニュメント法、カナダ国立公園法】

Canada

Historic Sites and Monuments Act
Parks Canada Agency Act

『各国の文化財保護法令シリーズ [26] カナダ』

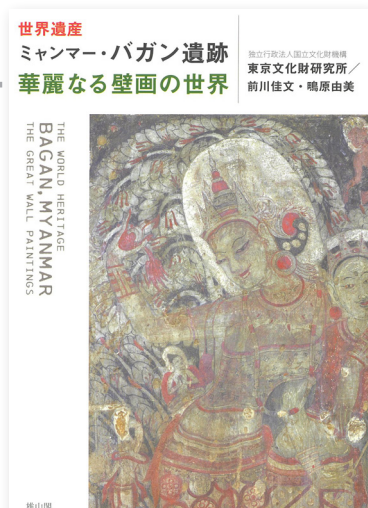
カナダの文化財保護に関する法令について、その中核をなす法律2種(史跡モニュメント法及びカナダ国立公園局法)を和訳し、さらにカナダ政府の元担当者に依頼してカナダの文化財保護制度の概説を付して刊行した。日本語及び英語、2022年3月刊行、117ページ。

(③コ01の一環として刊行)

『世界遺産 ミャンマー・バガン遺跡 華麗なる壁画の世界』

2016年から続くミャンマーの世界遺産バガン遺跡での活動の一部をまとめたもの。図像学的調査を通じて得られた成果の中から58件の寺院壁画について解説するとともに、同国宗教文化省考古国立博物館局バガン支局の職員を対象に実施している壁画の保存修復の様子を伝える。日本語、2021年11月刊行、197ページ、市販品(雄山閣)。

(③コ03の一環として刊行)



博物館・美術館等保存担当学芸員研修(上級コース)^(ホ08)

研究組織 建石徹、朽津信明、犬塚将英、早川典子、佐藤嘉則、秋山純子、芳賀文絵、島田潤、相馬静乃(以上、保存科学研究センター)、水谷悦子(保存科学研究センター併任、文化財防災センター)ほか

目的 1) 文化財の担当者研修、博物館・美術館等の保存担当学芸員研修を行う。
2) 研修の体系を完成させるとともに、研修受講生を対象としたアンケート及び派遣元自治体を対象とした研修成果の活用状況に関するアンケート調査を行い、その結果を踏まえ研修計画を策定する。

成果

1. 第1回博物館・美術館等保存担当学芸員研修(上級コース)を実施した(7月5～9日、受講者16名)。
2. 今年度より基礎的な内容の講習を文化財活用センターが担当し、保存科学・保存修復関連の各論を当所の各研究室が受け持つ形となり、それぞれ基礎コースと上級コースに分かれて実施した。
3. 上級コースでは以下の講義を実施した:文化財の科学調査(分析科学研究室)、文化財IPM・生物被害対策(生物科学研究室)、屋外資料の劣化と保存(修復計画研究室)、保存環境に関する理論と実習(保存環境研究室)、多様な文化財の保存と修復(修復技術研究室)、修復材料の種類と特性(修復材料研究室)、文化財修理の実務、博物館の防災。
4. 研修終了後にカリキュラム各項目の理解度や有用度、今後の要望等に関するアンケート調査を行った。参加者から有益と評価された。



多様な文化財の保存と修復に関する講義

文化財の収集・保管に関する指導助言^(シ)

研究組織 塩谷純、二神葉子、江村知子、小林達朗、小林公治、小野真由美、安永拓世、橘川英規、小山田智寛、米沢玲、吉田暁子(以上、文化財情報資料部)

目的 これまでに蓄積された文化財に関する調査・研究の成果を生かし、国や地方公共団体からの要請に応じて、専門的な見地からその収集・保管等に関する指導助言を行うことにより、文化財保存の質的向上に貢献する。

成果

1. 文化庁アートプラットフォーム事業によるデータベース「日本の画廊調査 1945年以降(仮称)」の公開に向けた効率的な画廊情報の収集支援
2. 文化審議会世界文化遺産部会臨時委員
3. 国立歴史民俗博物館運営会議委員・資料収集委員会委員
4. 国際交流基金・欧米ミュージアム基盤整備支援事業評価委員
5. 熊野速玉大社所蔵の国宝古神宝類に関する保存・現状調査・保存計画の協議と助言
6. 八尾市史の編纂に関する助言
7. 田辺市立美術館での講演
8. 和泉市立久保惣記念美術館での講演
9. 美術史学会への『美術史』ウェブ公開にむけての情報提供・助言
10. 文化財調査に関する協力・助言
茨木市立文化財資料館、春日大社、岐阜市歴史博物館、慶應義塾大学ミュージアム、角屋もてなしの文化美術館、甲賀市教育委員会、東京大学総合図書館、徳川美術館、南蛮文化館、広島県立美術館、大和文華館、和歌山県立博物館、田辺市立美術館、逸翁美術館、馬事文化財団、和泉市立久保惣記念美術館

無形文化遺産に関する助言^(ム)

研究組織 早川泰弘(部長)、石村智(音声映像記録研究室長)、久保田裕道(民俗文化財研究室長)、前原恵美(無形文化財研究室長)ほか

目 的 これまでに蓄積された無形文化遺産に関する調査・研究の成果を活かし、国や地方公共団体等からの要請に応じて、専門的な見地から保存・伝承・活用等に関する助言を行うことにより、無形文化遺産の継承に資する。

成 果

これまでに蓄積された無形文化遺産に関する調査・研究の成果を活かし、国や地方公共団体等からの要請に応じて、専門的な見地から指導・助言を行うことにより、無形文化財、無形民俗文化財、文化財保存技術等の無形文化遺産継承に貢献した。

助言の依頼は国(11件)、地方自治体(15件)、関連団体(6件)の合計31件で、以下の通りである。

○国への助言

- 文部科学省への教科用図書検定調査審議会第6部会音楽小委員会に関する助言1件
- 文化庁への文化審議会無形文化遺産部会等に関する助言2件
- 文化庁への伝統芸能用具・原材料に関する調査委員会における当該調査及び助言1件
- 文化庁への工芸技術記録映画製作監修委員としての助言1件
- 文化庁への審査に関する助言5件
- 文化庁への調査員としての楽器を中心とした文化財保存技術に関する助言1件

○地方自治体への助言

- 山形県への文化財保護審議会・文化財保存活用大綱策定作業部会に関する助言2件
- 山梨県への文化財保護審議会に関する助言1件
- 神奈川県への民俗芸能記録保存調査企画調整委員会に関する助言1件

- 千葉県への博物館資料審査委員会に関する助言1件
- 東京都への東京都民俗芸能大会実行委員会に関する助言1件
- 島根県への古代文化センターに関する助言1件
- 沖縄県への武術的身体表現を伴う行事調査に関する助言1件
- 静岡市への文化財保護審議会・民俗文化財調査に関する助言3件
- 武蔵野市への文化財保護委員会に関する助言1件
- 草津市への青花紙保存継承懇話会専門家委員としての助言1件
- 京都市への京都芸術センター伝統芸能文化創成プロジェクト推進会議に関する助言1件
- 西条市への石鎚黒茶委員会に関する助言1件
- 岩手県文化財愛護協会への助言1件

○関連団体への助言

- 国立歴史民俗博物館への共同研究への助言2件
- 日本芸術文化振興会への国立劇場文化デジタルライブラリーに関する助言1件
- 公益社団法人全日本郷土芸能協会への運営に関する助言1件
- 一般財団法人日本青年館への全国民俗芸能大会企画に関する助言1件
- 公益財団法人ポーラ伝統文化振興財団への伝統文化ポーラ賞に関する助言1件

文化財の虫菌害に関する調査・助言^(ホ)

研究組織 佐藤嘉則、島田潤、小野寺裕子、矢花(篠崎)聡子、岡部迪子、建石徹(以上、保存科学研究センター)

目 的 これまでに蓄積された文化財の生物被害対策に関する調査・研究の成果を活かし、国や地方公共団体等からの要請に応じて専門的な見地から生物被害対策の技術的な協力・助言を行うことにより、文化財の保存に関する質的向上に貢献する。

成 果

1. これまでに蓄積された文化財の生物被害対策に関する調査・研究の成果を活かし、国や地方公共団体等からの要請に応じて専門的な見地から技術的な協力・助

言を行うことにより、文化財の保存に関する質的向上に貢献した。

2. 主な虫菌害問題の相談元は、国や地方公共団体の博

物館、美術館、図書館、教育委員会や社寺などの文化財保存担当あるいは文化財修復工房等であった。



木造建造物の甲虫被害

3. 対応件数は合計で36件あり、電話、電子メール、WEB会議などで対応し、必要に応じて現地での調査を行い現地の問題解決に努めた。
4. 相談内容は、虫菌害の同定相談から殺虫・殺菌処理に使用する薬剤に関することなどの一般的な相談案件ほか、屋外の木造建造物の甲虫害、遺構や古墳などでのカビ発生、藻類の発生など生物種を問わず多岐にわたる相談があった。特に木造建造物の甲虫害については相談件数が多く、一年を通して対応が必要な案件もあった。
5. 現場の対応とあわせて、啓発・普及活動の一環で生物被害に関する研修講師を5件担当した。その際に生物科学研究室で作成した啓発普及ポスターを配布し、広報普及活動を行った。

保存科学研究センター

2-(5)-②-1)

文化財の修復及び整備に関する調査・助言^(ホ)

研究組織 朽津信明、建石徹、早川典子、倉島玲央、芳賀文絵、中村舞(以上、保存科学研究センター)、中山俊介(特任研究員)

目 的 国・地方公共団体や大学、研究機関との連携・協力体制を構築し、これらの機関が所有・管理する文化財に関する情報の収集、知見・技術の活用、本機構が行った調査研究成果の発信等を通じて、文化財に関する協力・助言を行う。
地方公共団体等からの要請に応じ、文化財及びその保存・活用に関する協力・助言・専門的知識の提供等を行う。

成 果

1. 令和3年度に実施した各地の国宝、史跡や重要文化財等の保存や修復に関する指導助言は以下のとおりである。

国宝高松塚古墳壁画、国宝臼杵磨崖仏、国宝平等院鳳凰堂、国宝東照宮東西廻廊、国宝キトラ古墳壁画、国宝教王護国寺五重塔、特別史跡王塚古墳、史跡端島炭鉱跡、史跡佐渡金銀山遺跡、史跡足尾銅山、史跡葦山反射炉、史跡高島炭坑跡、史跡原爆ドーム(旧広島県産業奨励館)、史跡原城跡、史跡日野江城跡、史跡下藤キリシタン墓地、史跡屋形古墳群、史跡吉見百穴、史跡築瀬二子塚古墳、史跡旧新橋停車場跡及び高輪築堤跡、重要文化財通潤橋、重要文化財旧志免鉱業所竪坑櫓、重要文化財氷川丸、重要文化財熊野磨崖仏、重要文化財奥州御島頼賢碑、重要文化財祇園橋、重要文化財厳島神社大鳥居、重要文化財二条城杉戸絵、重要文化財琉球芸術調査写真(鎌倉芳太郎撮影)、重要文化財松浦武四郎関係資料、重要文化財羅漢寺石仏、重要文化財祇園橋、重要文化財輪王寺相輪櫓、重要文化財那谷寺本堂、重要文化財法隆寺金堂壁画、重要文化財金剛峰寺奥院経蔵、天然記念物風連鍾乳洞、天然記念物龍河洞、熊本県内被災古墳。

2. 地方自治体指定その他の文化財の保存と修復に関する指導助言は以下のとおりである。

首里城、川崎市民ミュージアム、東京都第五福竜丸、長崎県史跡日本二十六聖人殉教地、富山市大山恐竜足跡化石群、栃木市星野遺跡、航空協会航空関連紙資料、東京都公文書館所蔵資料、智積院建造物建具彩色修理。



臼杵磨崖仏での接着剤選定試験

文化財の材質・構造に関する指導・助言^(ホ)

研究組織 犬塚将英(保存科学研究センター)、早川泰弘(副所長)

目的 様々な文化財資料について、その材質や構造を明らかにするために、科学的調査を実施する。可搬型の機器を用いて、文化財資料が置かれている場所での現地調査も実施する。

成果

令和3年度は、蛍光X線分析・X線回折分析・ハイパースペクトルカメラによる材質調査、及びX線透過撮影による構造調査などの調査・助言を実施した。調査を行った作品、所蔵先は以下の通りである。

1. 材質調査

- 板絵(法明寺)
- 画材(秋田県立近代美術館)
- 建造物(伊豆の国市)
- 日本画(絵金蔵保存会)
- 歴史資料(高萩市)
- 漆工品(東慶寺)
- 日本画(筑波大学)
- 能装束(関市(東京国立博物館寄託品))
- 日本画(法華寺)
- 漆工品(東京国立博物館)
- 能装束(関市)
- 青銅製資料(多治見市)
- 工芸品(札幌大学)
- 山車の裝飾部材(那須烏山市)
- 目地材(目黒区)



日本画の材質調査

2. 構造調査

- 甲冑(刈谷市)
- 骨壺(佐倉市)
- 考古資料(明治大学)
- 漆工品(東慶寺)
- 甲冑(日本甲冑武具研究保存会)

美術館・博物館等の環境調査と援助・助言^(ホ)

研究組織 秋山純子、建石徹(以上、保存科学研究センター)、早川泰弘(副所長)、水谷悦子(保存科学研究センター併任、文化財防災センター)、吉田直人、間瀬創(以上、保存科学研究センター併任、文化財活用センター)

目的 国・地方公共団体や大学、研究機関との連携・協力体制を構築し、これらの機関が所有・管理する文化財に関する情報の収集、知見・技術の活用、本機構が行った調査研究成果の発信等を通じて、文化財に関する協力・助言を行う。

成果

1. 国指定品の所有者以外による公開、公開承認施設申請に関わる資料保存環境調査の相談窓口は令和元年度より文化財活用センターに一本化された。
当所では、公立美術館・博物館、社寺等から保存環境に関する相談を受け、空調設備のない神社での温湿度計測を行い、温湿度環境の状況把握と環境改善のため

の検討を行った。空気質の問題がある展示ケースや収蔵庫において、空気清浄機の効果や換気方法の検討などを行った。美術工芸品の保管環境だけでなく、有形民俗文化財の保管環境に関して、現場の状況確認を行った。

2. 令和2年度に引き続き、新型コロナウイルス感染症に対する博物館等でのウイルス除去・消毒作業に対し、消毒による文化財への影響が懸念されたため、文化庁・文化財活用センター・東京文化財研究所保存科学研究センターの3者が協力し、対応に当たった。博物館、美術館、文書館等の展示室や収蔵庫における消毒について

での対処の仕方や換気などについてそれぞれの状況に応じた助言を行った。

文化庁主催の公開承認施設会議で「文化財所有者及び文化財保存展示施設設置者におけるウイルス除去・消毒作業に係る対応について」と題して報告し、博物館等における消毒に関する質問に回答した。

保存科学研究センター

2-(5)-④-1)

東京藝術大学との間での連携大学院教育の推進^(ホ)

研究組織 朽津信明、犬塚将英、早川典子、佐藤嘉則（以上、保存科学研究センター）、安倍雅史、前川佳文（以上、文化遺産国際協力センター）、渡邊尚恵（東京藝術大学）

目 的 連携大学院教育の推進

連携大学院教育を実施し、今後の我が国の文化財保護における中核的な人材を育成する。

東京藝術大学、京都大学、奈良女子大学との間での連携大学院教育等の推進

・東京藝術大学大学院：システム保存学（保存環境学、修復材料学）

成 果

緊急事態宣言中はオンライン講義を中心にを行い、解除後には対面講義を中心に教育を進めた。

また、副査として博士論文の審査にも積極的に加わった。

1. 今年度開講した授業及び担当教員、受講者数

保存環境計画論（前期、火曜1限）2単位

朽津信明・犬塚将英・佐藤嘉則 16人（聴講1人）

修復計画論（前期、木曜1限）2単位

朽津信明・安倍雅史・前川佳文 5人

修復材料学特論（前期、木曜2限）2単位

早川典子・前川佳文 6人

保存環境学特論（後期、火曜1限）2単位

犬塚将英・佐藤嘉則 10人

文化財保存学演習

講師：前川佳文

「古代より現代に伝わる 壁画技法の魅力」

日時：5月11日（火）13：00～17：30 18人

2. 成績評価等、文化財保存学専攻運営への協力

教室会議（11回）、入試合同判定会議（2回）、博士・修士学位審査会への協力

3. 博士審査副査 朽津信明、前川佳文



日本画の材質調査

文化財防災センター事業

研究組織 建石徹、秋山純子（以上、保存科学研究センター）、水谷悦子、後藤知美（以上、文化財防災センター）、二神葉子、小山田智寛（以上、文化財情報資料部）、久保田裕道（無形文化遺産部）

目 的 2020（令和2）年10月に国立文化財機構に設立された文化財防災センターの東日本ブロック中核拠点として、地域防災体制の構築、災害時ガイドライン等の整備、レスキュー及び収蔵・展示における技術開発、普及啓発、文化財防災に関する情報の収集と活用を進める。

成 果

1. 地域防災体制の構築

北海道・東北ブロックにおける道県内での文化財防災に関する取組や、道県内及び広域での災害対応体制の構築状況の把握を目的に、北海道及び東北6県の文化財主管部局を対象にヒアリングを実施した。

2. 災害時ガイドライン等の整備

（1）無形文化遺産の防災事業の検討

有形の文化財と比べて災害時の対応に係る枠組が整備されていないと考えられる無形文化遺産の防災事業について、有識者会議を設置・開催し、検討した。5名の外部有識者に、事務局が提案した無形文化遺産の防災に関する検討課題について議論を交わしていただいた。さらに、無形文化遺産の防災全体での議論を踏まえ、令和4年度以降、文化財防災センターが取組むべき事業の方向性や内容についてご意見を頂いた。

3. レスキュー及び収蔵・展示における技術開発

（1）文化財建造物及び展示収蔵環境の防火対策に関する研究

2019（令和元）年に発生した首里城火災時の特殊な熱湿気環境が収蔵されていた美術工芸品に及ぼす影響の検証を目的として調査研究を行った。初年度である令和3年度は、国営沖縄記念公園事務所、美ら島財団と首里城に関する資料・データの提供に関する取り交わしを行い、調査研究を進める体制を構築した。搬出された美術工芸品が一時保管されている沖縄県立大学、沖縄県立博物館において、漆芸家らとともに主な収蔵品である漆工品の状態調査を行い、今後修理を進めるうえでの課題を共有した。また、ヒアリング調査や文献をもとに、火災時の熱湿気環境を検証するうえでの基礎情報となる、火災による建物の被害状況、消火活動、建築の壁体構成、開口条件、室容積、収蔵庫内の温湿度データ等の情報を整理した。

（2）災害時の一時保管施設の確保と環境整備に関する調査研究

福島県教育委員会と文化財防災センター、東京文化財研究所の共同研究として、旧警戒区域から搬出した文化財を一時保管している福島県文化財センター白河館のプレハブ式収蔵庫でのアセトアルデヒド発生の改善方法の提案のため、環境調査を実施した。本研究で得られた成果を福島県教育委員会と協議し、今後の施設運用に役立てることができた（2022（令和4）年3月9日）。本研究の成果を『保存科学』61号（2022（令和4）年3月17日刊行）で報告した。

（3）被災資料の応急処置等の技術開発

水損紙資料の応急処置に関する技術開発のための調査研究を行った。今年度は、①過去の被災紙資料に関する情報収集、②実験環境の整備・試料作製を実施した。

4. 普及啓発

（1）文化財防災に関する研修

① 文化財レスキューと心理社会的支援

2021（令和3）年11月13日に、山形県内を中心とした文化財担当職員や学芸員等を対象として下記の研修会を開催した。

日 時：2021（令和3）年11月13日（土） 10：00～16：30

会 場：東北芸術工科大学（対面及びオンラインによる）

参加者：対面（12人）、オンライン（18人）

テーマ：文化財レスキューと心理社会的支援

- ・文化財防災センターの紹介（建石徹）
- ・山形県における文化財防災の取組（高橋詩織）
- ・山形県文化遺産防災ネットワークについて（佐藤琴）

- ・資料保全と災害支援－歴史資料保存活動がなぜ、災害に強い地域づくりに貢献できるか－（J.F.モリス）

- 歴史文化遺産は個人と地域のレジリエンスを促進し、災害時の保護要因となる！

(上山真知子)

②令和3年文化財防災センター講演会「文化財防災体制の構築とその未来～文化財防災センター設置から1年を経て～」

オンライン講演会。2022(令和4)年3月9日文化財防災センター公式You Tube チャンネルにて放映を開始した。2022(令和4)年3月28日現在で142回視聴。

テーマ：文化財防災体制の構築とその未来～文化財防災センター設置から1年を経て～

- 米国のHeritage Emergency National Task Force (HENTF) (日沖和子)
- 文化財防災センターの活動 (小谷竜介)
- みどりのヘリテージマネージャーの活動とこれからの役割 - 天然記念物等の保全管理をととして - (山田 裕司)
- 総括 (高妻洋成)

5. 文化財防災に関する情報の収集と活用

(1) 文化財防災総合データベースシステムの構築

災害発生時に、文化財の被害状況等の把握・情報収集に資する文化財防災データベースシステム構築のため、全国の文化財に関するデータの整理作業を実施した。令和2年度に引き続き、都道府県及び文化庁から提供を受けた文化財データについて、有形文化財(美術工芸品)を中心に実施した。

また、現時点でのデータ整理作業が完了し、データベースへの登録が完了している無形の文化財について、都道府県文化財主管課のデータ確認に応じてデータの更新作業を実施した。

論文

- 水谷悦子、中尾真梨子、秋山純子、芳賀文絵、佐野千絵：「プレハブ式高気密高断熱収蔵庫におけるアセトアルデヒドの放散挙動の把握と換気量による低減」『保存科学』61 pp.43-55 22.3

発表

- Toru Tateishi, Etsuko Mizutani, Ayae Haga, The History of Japan's System for the Protection of Cultural Properties and Fire, Disaster and Crime Prevention Measures for Museums, Temples and Shrines, PREVENT: Building Capacities for Mitigating Fire Risk at Heritage Places, ICCROM オンライン 21.11.16



無形文化遺産協議会の様子



文化財建造物の防火対策に関する調査 飛び火を受けた檜皮の事例(崇道天皇社)

3. 外部資金等による研究活動

1. 科学研究費助成事業.....	70
2. 受託調査研究・外部機関との共同研究及び外部資金による研究	98
3. 成果公開	110

1. 科学研究費助成事業

研究種目	研究課題	研究代表者
基盤研究（A）	アジア螺鈿文化交流史の構築－物質文化史の視点から	小林 公治
基盤研究（B）	対外交流史の視点によるアジア螺鈿の総合的研究－大航海時代を中心に－	小林 公治
	日本美術の記録と評価についての研究－美術作品調書の保存活用	江村 知子
	絵画に使用された絹・自然布の非破壊分析方法の開発と製法・修復に関する総合的調査	早川 典子
	ポンペイ遺跡壁画における無機物を主体とした保存修復材料による補強技法の確立	前川 佳文
	白鳳時代の壁画の構造と材料に関する研究	犬塚 将英
	紙文化財補修用材料としての高機能化楮繊維の開発	稲葉 政満
新学術領域研究 （研究領域提案型）	イラン東部へのウルク文化の拡大に関する考古学的研究	安倍 雅史
特別研究員奨励費 （外国人）	日本の無形文化遺産保護におけるジェンダーに関する研究	久保田 裕道
研究成果公開促進費 （学術図書）	旅館おかみの誕生	後藤 知美
基盤研究（C）	常磐津節の音楽分析のための基盤研究	前原 恵美
	江戸時代の絵画における基底材に関する基礎的研究	安永 拓世
	ポスト 1968 年表現共同体の研究：松澤宥アーカイブズを基軸として	橘川 英規
	鍾乳洞における照明植生を軽減する光環境に関する実験的研究	朽津 信明
	様々な文化財に使用された彩色材料への赤外線画像による画的調査の検討	秋山 純子
	地域文化の表象としての「箕」の形態に関する学際的研究*	今石 みぎわ
	従属栄養微生物による硫黄化合物の分解とそれに伴う腐食性ガス生成	片山 葉子
	イランの乾燥地帯における農業施設の建築構法および建築技術者の存在形態に関する研究	浅田 なつみ
	近現代建造物の価値評価における同時代性に着目した文化財の現状変更概念の再考	金井 健
	マヤ地域の博物館における文化遺産保全と地域発展に向けた文化資源マネジメントの研究	五木田 まきは
若手研究	中世日本における中国美術の受容と羅漢の作例に関する調査研究	米沢 玲
	木材からの化学物質放散挙動の解明と博物館における選定指標の提案	古田嶋 智子
	古典的膠の製造方法と各用途適性の体系化	宇高 健太郎
	南西諸島における風葬の定着過程に関する研究*	牛窪 彩絢
	組積造建造物の通電による脱塩の適応可能性に関する検討	水谷 悦子
	初期合成染料の染色堅牢性評価と変退色挙動の検討	片淵 奈美香
	近現代建造物に適応した文化財保存理念の展開に向けた基礎的研究	金井 健
研究活動スタート支援	近代の河川工事絵馬にみる河川管理のあり方と地域社会の接点：利根川中流域を中心に	後藤 知美
	被災文化財保全のための一時保管と処置方法の最適化に向けた研究	芳賀 文絵
	カジリムシ目昆虫における外部寄生性の進化に伴う形態変化の解明	島田 潤

* 令和 4 年度に繰り越し

2. 受託調査研究・外部機関との共同研究及び外部資金による研究

研究課題	研究代表者	依頼元
(1) 受託調査研究		
国宝高松塚古墳壁画恒久保存対策に関する調査等業務	建石徹	文化庁
特別史跡キトラ古墳保存対策等調査業務	建石徹	文化庁
美術工芸品保存修理用具・原材料調査事業	早川典子	文化庁
文化遺産国際協力コンソーシアム事業	友田正彦	文化庁
ブータンの歴史的建造物保存活用に関する拠点交流事業	金井健	文化庁
(2) 共同研究		
航空資料保存の研究	建石徹	一般財団法人日本航空協会
沖縄県立芸術大学所蔵 重要文化財琉球芸術調査写真（鎌倉芳太郎撮影）のデジタル化に関する共同研究	早川泰弘	公立大学法人沖縄県立芸術大学
エアロゾル消火薬剤が文化財に与える影響	早川泰弘	千葉科学大学
ゲッティ・リサーチ・ポータルへのデジタル資料の提供・公開	江村知子	The J. Paul Getty Trust
(3) 助成金一覧		
バガン遺跡群（ミャンマー）寺院祠堂壁画の保存修復	前川佳文	公益財団法人住友財団
近世の奄美・沖縄諸島における風葬の普及に関する文献史学的研究*	牛窪彩絢	公益財団法人高梨学術奨励基金
無形文化遺産における木材の伝統的な利用技術および民俗知に関する調査研究*	今石みぎわ	公益財団法人三菱財団
収蔵庫・展示室の建材等から放散する有機酸等の定量評価のための開発研究	犬塚将英	公益財団法人ポーラ美術振興財団
コロナ禍における伝統芸能の「グッド・プラクティス」に関する研究	前原恵美	一般財団法人 カワイサウンド技術・音楽振興財団

3. 成果公開

研究課題
事業の一部として実施した研究集会・講座等
第 29 回文化遺産国際協力コンソーシアム研究会（ウェビナー） 「文化遺産にまつわる情報の保存と継承～開かれたデータベースに向けて～」
令和 3 年度文化遺産国際協力コンソーシアムシンポジウム（ウェビナー）「海と文化遺産—海が繋ぐヒトとモノ—」
第 30 回文化遺産国際協力コンソーシアム研究会（ウェビナー）「文化遺産 × 市民参画 = マルチアクターによる国際協力の可能性」
受託研究の一環として刊行された刊行物
『国宝キトラ古墳壁画修理報告書』
『文化遺産国際協力コンソーシアム国際協力調査「海域交流ネットワークと文化遺産」令和 3 年度 調査報告書』
『Report on the 28th JCIC-Heritage Seminar “Cultural Heritage and the SDGs III: Roles of Cultural Heritage in Local Communities”』
『第 29 回文化遺産国際協力コンソーシアム研究会（ウェビナー） 「文化遺産にまつわる情報の保存と継承～開かれたデータベースに向けて～」 報告書』
『Report on the 29th JCIC-Heritage Seminar “Preservation and inheritance of information related to cultural heritage -For Whom and What Purpose-”』
『令和 3 年度文化遺産国際協力コンソーシアムシンポジウム（ウェビナー）「海と文化遺産—海が繋ぐヒトとモノ—」 報告書』
『第30回文化遺産国際協力コンソーシアム研究会（ウェビナー）「文化遺産 × 市民参画 = マルチアクターによる国際協力の可能性」 報告書』
『ブータンの伝統的民家 西部中央編 ティンブー、ブナカ、パロ、ハー』
『Understanding Our Heritage / Pema Visits A Rammed Earth House』

* 令和 4 年度に繰り越し

アジア螺鈿文化交流史の構築—物質文化史の視点から

研究組織 小林公治（文化財情報資料部）、倉島玲央（保存科学研究センター）、吉田邦夫（東京大学総合研究博物館）、能城修一、本多貴之（以上、明治大学）、猪熊兼樹、鳥越俊行（以上、東京国立博物館）、末兼俊彦（京都国立博物館）、神谷嘉美（金沢大学）、安藤真理子（奈良国立博物館）、高田智仁（研究協力者、サイアム大学）

目 的 本研究では、唐の螺鈿をアジア螺鈿史の始発点として位置付け、それが東・東南・南アジアなどにいつどのように伝わり、それぞれの地域でどのような発展を遂げたのかを具体的に検証する。また始発点たる唐の螺鈿がどのように形成されたのか、その系譜を探るため西・中央アジアや殷周代の螺鈿との関係性についても検討を行う。

本研究は代表者に加え、研究分担者・協力者らが行う様々な個別的学際研究を総合化することで、実証的にアジア螺鈿史全体像の構築と各地各時代それぞれの文化交流実態を明らかにしていくものである。

成 果

令和3年度は、年度当初から年度末まで新型コロナウイルス感染症拡大による緊急事態宣言やまん延防止等重点措置が断続的に発令・実施されていたことにより、計画していた海外調査は一回も実施できずに終わったが、感染状況が小康化した年度後半では国内諸機関との調整を行い何力所かにおいて以下の調査を実施したほか、令和2年度からの研究協力者によるタイ国立図書館での第2次経典表板近世螺鈿調査を行った。また、懸案となっている甲賀市水口所在の十字形洋剣（水口レイピア）の報告書発刊に向けた協議や3D復原模型の制作なども実施した。

- 11月30日、奈良文化財研究所における漆塗膜下墨書銘南蛮漆器類光学調査協議、奈良国立博物館での南蛮漆器類CT調査協議。12月1日春日大社での螺鈿器を使用する句祭及び同伝世螺鈿器物調査。12月2日大和文華館での同館所蔵漆器類調査。1月5日徳川美術館における同館所蔵東洋螺鈿器調査。1月6日南蛮文化館での南蛮漆器類熟覧調査及びポータブルマイクロスコープによる樹種調査。1月7日茨木市立文化財資料館での礫刑キリスト像調査及び岐阜市歴史博物館での南蛮漆器類他の樹種調査。1月28日の犬山城白帝文庫における蒔絵漆器及び螺鈿器調査。2月21日の東京大学総合図書館における同館所蔵の茨木市千提寺出自キリシタン器物調査。3月18日の奈良国立博物館における広島県立美術館所蔵南蛮漆器書見台のCTスキニング調査をそれぞれ実施した。
- 11月1日から2月4日にかけて、タイ国立図書館にて同館所蔵貝多羅葉経典螺鈿表板の第2次悉皆調査実施。

発 表

- 小林公治：「近現代日本における「南蛮漆器」の出現と変容—その言説をめぐって—」第4回文化財情報資料部研究会 21.7.16
- 小林公治：「秋草と螺鈿—岬町理智院蔵秀吉像厨子から見る輸出品としての南蛮漆器—」九州大学主催国際シンポジウム「越境する文化：モノ、ひと、思想の軌跡と交流」 22.2.13



南蛮文化館での調査風景（2022年1月6日）



東京大学総合図書館での調査風景（2022年2月21日）

対外交流史の視点によるアジア螺鈿の総合的研究 —大航海時代を中心に—

研究組織 小林公治(文化財情報資料部)、吉田邦夫(東京大学総合研究博物館)、能城修一(明治大学)、末兼俊彦(京都国立博物館)、早川典子(保存科学研究センター)、城野誠治(文化財情報資料部)

目 的 「アジアの特産物」である「螺鈿」は、多源独立的に発生発展したのではなく、中心的・先進的地域の影響や技術・工人の移動を伴いながら消長を繰り返してきたと見られる。本研究ではこの問題を具体的に跡付ける事を目的とし、人類が地球的規模で移動を開始した15-17世紀(大航海時代)を中心として、日本本土や朝鮮半島、また沖縄や中国の螺鈿を取り上げ、人文学及び自然科学的方法により、螺鈿器に内包される交流の実態を明らかにしようとするものである。

成 果

令和3年度も新型コロナウイルス感染拡大によりこれまで延期を余儀なくされてきた中国での調査を実施できなかったため、国内調査に切り替え、2022(令和4)年1月19日宮内庁正倉院事務所において正倉院宝物中の唐代螺鈿鏡分析方法などに関する聞き取り調査、続く20日に神戸市内の白鶴美術館において同館所蔵唐代螺鈿鏡の調査、また21日には加西市に所在する古代鏡展示館において同館所蔵の唐代螺鈿鏡及び平脱鏡の熟覧調査を実施し、その制作素材及び制作技術について検討及び意見交換を行った。



正倉院事務所での調査風景(2022(令和4)年1月19日)

日本美術の記録と評価についての研究 —美術作品調書の保存活用

研究組織 江村知子(文化財情報資料部)、並木誠士(京都工芸繊維大学)、多田羅多起子(広島大学)

目 的 本研究では、田中一松(1895-1983)及び土居次義(1906-1991)の研究資料のデジタル化による保存活用を実施しながら、日本美術の記録のあり方と評価プロセスを明らかにすることを目的とする。田中、土居、さらに相見香雨(1874-1970)の調査記録などとも比較検討を行いながら、この100年間にどのように日本美術は記録され、語られてきたのか解明する。本研究で主に扱う田中一松と土居次義は、自らの足と、手と、眼の力を駆使して势力的なアナログ調査活動を展開し、目を見張るような質・量の調査を実施し研究基盤を形成した。本研究はこうしたアナログ研究資料をデジタルの特質を活かして保存活用し、未来にも活かすことを目指す。デジタル化作業と各種資料との比較・考察により、田中と土居による半世紀以上に及ぶ文化財関係業務、日本絵画の調査研究の実態を把握することができる。個々の作品研究において有益な情報が集約できるばかりでなく、数多くの作品がどのように評価・位置付けがなされ、日本美術史が語られてきたか、という問題を本研究課題によって明らかにすることを目指す。

成 果

田中一松資料の調査研究とデジタル化を進め、保存状態に問題のある資料は修復処置を行った。

土居次義資料についても、調査研究と写真資料を中心にしたデジタル化を進めた。細部を比較するために撮影された大量の写真のデジタル化の進行に伴い、調査ノートの記録との照合で評価の観点を具体的に再現することができる形を整えた。

令和3年度は最終年にあたるため、シンポジウム「日本美術の記録と評価—美術史家の調査ノート」をオンラインで開催し、約40名の方々にご参加いただいた。2020(令和2)年度に東京国立博物館で開催した展覧会「日本美術の記録と評価—調査ノートにみる美術史研究のあゆみ」のウェブサイト(<https://www.tobunken.go.jp/exhibition/202007/>)も引き続き公開しつつ、さらに特徴的な資料を紹介・公開するウェブサイトを作した。<https://www.tobunken.go.jp/researchnote/202203/>

論 文

- 多田羅多起子:「日本におけるモレッリ法受容の一樣相—土居次義による障壁画研究への応用にいたるまで—」『藝術研究』34、広島芸術学会、2021年9月

発 表

- 江村知子:「田中一松資料にみるコレクション形成の足跡—個人コレクターとの親交」、多田羅多起子「土居次義資料にみる美術史研究者への道」、並木誠士「学術コレクションとしての田中・土居ノート」、オンラインシンポジウム「日本美術の記録と評価—美術史家の調査ノート」22.1.8



ウェブ公開コンテンツ



オンラインシンポジウムの様子

絵画に使用された絹・自然布の非破壊分析方法の開発と製法・修復に関する総合的調査

研究組織 早川典子(保存科学研究センター)、安永拓世(文化財情報資料部)、高柳正夫(東京農工大学)

目 的 本研究は、絵画の基底材を科学的に調査し、その情報を美術史的に、あるいは保存修復上で活用することを目的とする。主に絹繊維と自然布を対象とする。
絹については、繊維断面形状の測定を非破壊で行い系統的にデータベース化することで、時代的変遷や産地の同定を可能とし、さらに、修復材料の基礎資料することを目的とする。
自然布については、近年は赤外分光分析による非破壊分析が可能になったが、セルロースとは判定されるがその植物種の識別は不可能とされてきている。本研究では、多変量解析の手法を用いることで植物繊維の非破壊同定を可能とすることを旨とする。

成 果

令和3年度は研究開始3年目になるため、絹と自然布・それぞれについて、基礎データの収集を目的として研究を遂行した。

絹については、令和2年度に引き続き製作年代の明らかな作品についてhiroXデジタルマイクロスコープRH8800を用いて、35倍、50倍、200倍、500倍で複数箇所を撮影し、三次元形状の記録を行った。今年度は、特に今までのデータの少なかった大陸の絹について調査を行った。

また、絵画修復に用いる補絹用の絹の製作を紫外線照射により行い、その強度試験なども行った。従来の補絹用絹は電子線劣化を用いてきたが、現在製作を依頼している期間での装置の更新が予定されていないことから、ほかの方法を用いての改良を検討を開始した次第である。

自然布については、多変量解析の基礎データベースを作成するために、試料の収集を行った。群馬県の岩島の大麻・(群馬)など由来の明瞭な自然布材料を収集した。また、これらのデータベースを用い、多変量解析を利用した判別フローを作成した。

葛と伝世されてきた資料について、このフローを用いて非破壊分析したところ、芭蕉と識別された。これを確定させるために、脱落片のクロスセクションを観察したところ、芭蕉と確定し、判別フローの有効性が示された。この成果を6月に学会発表した。

発 表

- ・早川典子ほか：「植物由来染織文化財の種同定における非破壊赤外分光分析利用の可能性－葛・芭蕉を中心に－」文化財保存修復学会第43回大会 紙上開催 21.7.15

ポンペイ遺跡壁画における無機物を主体とした保存修復材料による補強技法の確立

研究組織 前川佳文(文化遺産国際協力センター)、朽津信明(保存科学研究センター)

目 的 近年、ポンペイ遺跡に残る壁画は、主に19世紀以降、繰り返し行われてきた修復で使用された材料が原因となり様々な傷みが発生している。中でも、彩色層や漆喰層の補強を目的に塗布された補強材には基本的に合成樹脂などの有機修復材料が使われており、経年劣化に伴い発生する変色や、壁画が本来有する通気性能を低下させるなど、保存及び鑑賞するうえでの大きな妨げとなっている。本研究ではこの問題点に着目し、無機物を主体とする保存修復材料を用いた壁画の彩色層及び漆喰層の補強技法確立を目指す。

成 果

5年計画の第2年次にあたる令和3年度は、新型コロナウイルス感染症拡大の影響から当初計画にあった現地調査が実施できなかった。そこで計画を変更し、文献資料を活用したポンペイ及びエルコラーノ遺跡における保存修復史に着目した研究を行った。

交付された補助金の一部は令和4年度へと繰り越し、令和3年度に実施できなかった研究内容も含め計画を見直し、現地調査を実施する予定である。

白鳳時代の壁画の構造と材料に関する研究

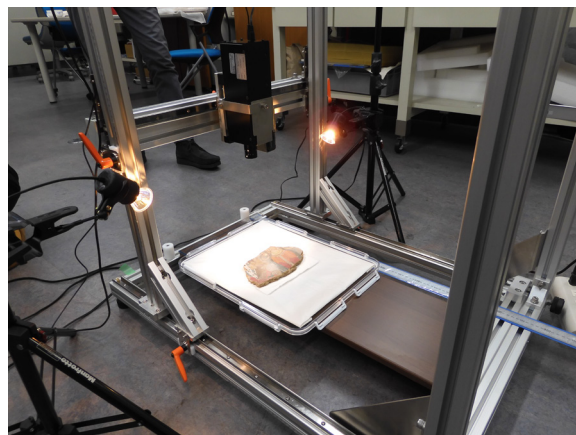
研究組織 犬塚将英(保存科学研究センター)、早川泰弘(副所長)、高妻洋成(兼任、奈良文化財研究所)、降幡順子(兼任、京都国立博物館)

目 的 我が国の絵画史において重要な位置を占める法隆寺金堂壁画の今後の保存・活用に関する検討を行うために必要な壁体、下地層、彩色材料の構造・材質及び劣化状態を正確に把握することを目的とする。法隆寺金堂壁画及び関連する白鳳時代の壁画を調査対象とし、可搬型分析装置を用いてそれらの構造・材質を非破壊・非接触な手法で明らかにする。

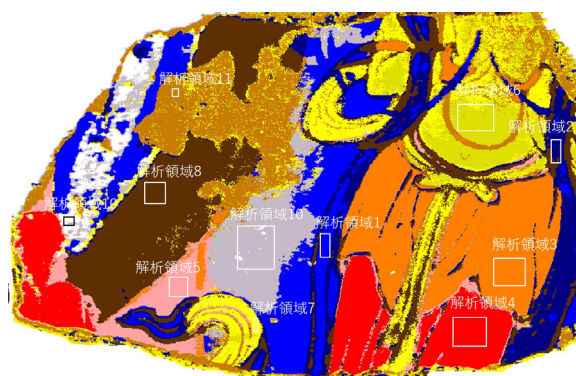
成 果

法隆寺金堂壁画のうち、火災に遭った壁画の現時点での劣化状態や火災の影響を研究する上で、火災をまぬかれた内陣小壁の分析結果は基準とすることができるので重要である。内陣小壁のうちいくつかを調査対象の候補とし、現地調査を数回実施することを予定していた。現地調査では、テラヘルツイメージングを用いた下地層の構造調査や可視分光分析等を用いた彩色材料の材質調査を想定していた。また、法隆寺金堂壁画との比較を行うために、白鳳時代に描かれた法隆寺金堂壁画以外の仏教壁画の分析調査も予定していた。しかし、令和2年度に引き続き、令和3年度も新型コロナウイルス感染拡大及びそれに伴う東京都への緊急事態宣言が発令されたこと等の影響により、これらの現地調査を実施することができなかった。

このような状況において、法隆寺金堂壁画のうち火災に遭った壁画片の分析調査を実施することを念頭に置き、東京文化財研究所にて基礎研究を行った。本研究では可搬型分析装置を用いた非破壊・非接触な手法による分析調査を実施するのだが、そのためには安全を確保するための分析装置の治具の設計及び製作が本研究の中で重要な位置を占める。令和2年度に開発と製作を行った専用治具にハイパースペクトルカメラを固定して、法隆寺金堂壁画以外の壁画片についての分析調査を行い、分析調査の安全性、分析条件、データの精度等の評価を行った。



専用治具を用いた調査風景



反射分光データを用いたマッピングの例

紙文化財補修用材料としての高機能化楮繊維の開発

研究組織 稲葉政満(客員研究員)、半田昌規(広島市立大学)、貴田啓子、加瀬谷優子、岩田直美(以上、東京藝術大学)、藤本真人(愛媛県紙産業技術センター)、西田典由(愛媛県原子力センター)

目 的 虫食い文書の修復に用いられる漉込み法(leaf casting)用に開発した高機能化繊維である高度外部フィブリル化楮繊維は、本紙との接着性が高まるなど、新規な高機能材料として紙本修理の改善が期待される。しかし、石臼式摩砕機(マスコロイダー)による高度外部フィブリル化楮繊維の製造過程には、石臼の状態や原料繊維の状態など影響する因子が多いため、これらについて検討し、最適な製造方法を確立することを目的とする。

3

外部資金等による研究活動

成 果

本年度は研究開始1年目になるため、試料調製用の楮皮の切断調整と東京藝術大学(貴田が担当)に石臼式摩砕機を新規に導入し、予備的試験を実施した。

新規に導入した石臼式摩砕機では条件を変えて種々試みたが、愛媛大学所有の同型機で行えた高度外部フィブリル化楮繊維の製造が行えなかった。そこで、愛媛県産業技術センターに東京藝術大学の臼を送り、両者の比較試験を実施した。その結果愛媛大学所有の臼では製造できるが、東京藝術大学所有の新しい臼では製造できないことが、判明した。両者の臼を比較したところ、臼外周部のフラット面の幅が東京藝術大学のは6.4mmであるのに対して愛媛大学のは8.4mmと異なっていた。そのため、同一クリアランスでの水のみ排出時間でも倍以上の時間差があることが明かになった。このことが東京藝術大学の臼ではその外周部における楮繊維の滞留時間が短く、そこで生じると考えられる楮繊維の外部フィブリル化率が低い原因と考えられた。また、臼内周部の歯も愛媛大学のは摩耗しており、楮繊維の切断頻度にも影響しているのではないかと考えている。

愛媛大学の臼を使用して製造した高度外部フィブリル化楮繊維の重合度分布変化をサイズ排除クロマトグラフ多角度光散乱検出器(SEC-MALLS)で測定したところ、摩砕処理10パスおよび20パス試料ではセルロースの分子量はほぼ同等の分布を示したが、ヘミセルロースと考えられるピークは低分子側へシフトした。40パス試料ではセルロースの分子量も含めて大きく低分子化していた。この成果を7月に学会発表した。

発 表

- 貴田啓子ほか：「ナノセルロース製造法を応用した修復用楮繊維材料の評価」文化財保存修復学会第43回大会 21.7.15-8.31

イラン東部へのウルク文化の拡大に関する考古学的研究

研究組織 安倍雅史(文化遺産国際協力センター)

目 的 前4千年紀(ウルク期)に、南メソポタミアに世界最古の都市文明が誕生した。しかし、南メソポタミアは広大な沖積平野であるため、金属や貴石など文明生活を営むうえで必要不可欠な資源が存在せず、こうした資源を周辺地域から獲得する必要があった。この結果、誕生したばかりの都市国家群は競って周辺地域に進出し、交易ルート沿いに交易拠点を形成していった。この現象は、「ウルク文化の拡大」と呼ばれている。

筆者が2018(平成30)年より調査しているイラン東部のカレ・クブ遺跡は、現在、確認されているなかで最北東のウルク文化の交易拠点である。この研究では、カレ・クブ遺跡の調査を通じ、イラン東部へのウルク文化の拡大を研究する。

成 果

2年計画の第1年次にあたる令和3年度は、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、現地に渡航することができず、カレ・クブ遺跡の発掘調査を実施することができなかった。そのため、令和3年度は、今までの発掘調査成果の取りまとめを行い、研究成果の発表を中心に行った。

交付された補助金の一部は令和4年度へと繰り越し、令和4年度以降、集中して発掘調査を進める予定である。

論 文

- Mohammad Hossein Azizi Kharanaghi, Masashi ABE, Sepideh Jamshidi Yeganeh and Afshin Akbari: Eastern Iran Prehistoric Archaeological Project: First Season of Archaeological Excavations at Kale Kub, South Khorasan Province (2018), Relative and Absolute Chronology. *Journal of Archaeological Studies* 12(24): pp.127-151 21.6

発 表

- 安倍雅史ほか: 「カビール砂漠を超えたウルク文化ー東部イラン、南ホラーサーン州カレ・クブ遺跡第2層出土の物質文化の研究ー」 日本西アジア考古学会第26回大会 21.7.4
- Masashi Abe and Hossein Azizi Kharanaghi: Preliminary Results of the Excavations at Kale Kub in South Khorasan Province, Eastern Iran, the Third International Conference on Archaeology of Southeastern Iran, 21.12.4

日本の無形文化遺産保護における ジェンダーに関する研究

研究組織 久保田裕道(無形文化遺産部)、ヤンセヘルガ(日本学術振興会特別研究員)

目 的 日本での法的に保護された無形文化遺産に関して、包括的なジェンダー分析を行う。その研究目的は、性別の状況(男女比率、性別の表現、性別による制限された参加の頻度、及びその他の関連要因)を分析し、無形文化遺産における男女間ギャップを評価することにある。そして既存のシステムの長所と短所から教訓を引き出し、その教訓に基づき男女平等を主流化できるシステムを提案する。

3

外部資金等による研究活動

成 果

本研究プロジェクトの2年次にあたって、まず実地調査については、令和3年度前期中期は新型コロナウイルス感染防止を鑑み控えた。代わりに、東京都内でのヒアリング調査を行った。

令和3年度後期は、香川県と沖縄県で実地調査を行った。加えて東京都でのヒアリング調査及びオンラインによる調査も行った。

調査内容については、まず伝承者に対する調査として、獅子舞、民謡、豊年祭、鹿踊り、囃子についてヒアリング調査を行った。また専門家と行政担当者に対する調査として、沖縄空手、沖縄の民俗文化、風流踊、埼玉県が無形民俗文化財、島根県の無形民俗文化財、人形芝居についてヒアリング調査を行った。

論 文

- ヤンセヘルガ：「Intangible cultural heritage and societal gender structures: An interview study focusing on changes in gender roles and gender restrictions in Japanese float festivals」『International Journal of Intangible Heritage』16 pp.46-61 21.11

発 表

- ヤンセヘルガ：「Intangible Cultural Heritage and Gender」 International workshop on Intangible Cultural Heritage and Sustainable Development, organized by Ahmedabad University, UNESCO ICHCAP, and UNESCO Bangkok 21.10.5

旅館おかみの誕生

研究組織 後藤知美（無形文化遺産部併任、・文化財防災センター）

目 的 本研究は、旅館を家業とする家族の一員として旅館営業に関わることとなった女性、いわゆるおかみを対象にするものである。今やおかみの姿は、旅館のシンボルとして定着し各旅館の経営戦略に大いに活用されている。しかし意外なことに、彼女たちの職業について歴史的変遷を実証的に明らかにしたものはない。さらに言えば、家族従業者としての性格と、職業人としての性格を併せ持つおかみは、女性労働研究に新たな視座をもたらす可能性がある研究対象でもある。本研究は、明治時代初めから現代にいたるまで、日本のメディアでおかみがどのように取り上げられてきたかを新聞・雑誌記事をもとに分析を行い、おかみイメージの形成について考察する。そのうえで、日本国内の2つの温泉観光地で実際に旅館で働く女性に、業務や家族・地域社会との関係について聞き取り調査を行い、イメージと現実の関わりを明らかにする。

成 果

本研究は、平成28年度に筑波大学大学院人文社会科学研究科に提出した博士論文「旅館のおかみに関する民俗学的研究—マスメディアにおけるイメージ形成と働く女性—」を基礎としながら、収集資料や聞き書きデータを再整理・再検討したうえで内容の改訂を行ったものである。

- 改訂は、博士論文提出後に新たに収集した資料や、東京オリンピックや新型コロナウイルス感染症の流行等、近年の観光業界や宿泊業界に大きな影響を与えた出来事も踏まえた上で行った。
- 成果は単著として出版予定である。
- 本研究は日本学術振興会の研究成果公開促進費（学術図書）の助成を得た。

刊行物

- 『旅館おかみの誕生』藤原書店、22.5

常磐津節の音楽分析のための基盤研究

研究組織 前原恵美 (無形文化遺産部)

目 的 常磐津節は素浄瑠璃 (演奏会形式) のほか、歌舞伎や日本舞踊とも緊密に関連してきた代表的な三味線音楽であるが、音楽そのものの研究は進んでいない。その原因の一つは、公刊譜がほとんどないことにあると考える。そこで本研究では、①常磐津節音楽分析の基礎となる「譜」を五線譜及び文化譜 (三味線音楽で最も汎用性のある記譜法) で提示し、②「譜」を用いた音楽分析によって音楽構造を明らかにする手法を確立すること、を目的とする。

3

外部資金等による研究活動

成 果

令和3年度は、引き続き対象視聴覚資料の情報収集を行うとともに、以下の2点を進めた。

まず、令和2年度に取り上げた儀式性の高い祝儀ものに続き、ドラマティックで筋立てが明確な時代物に着目し、音声・映像資料が比較的多く残る《忍夜恋曲者》(通称：将門) について、音源より五線譜に採譜し、「場」及び「芸系」の多様性を前提として作品の「骨格部分」(「場」や「芸系」により変わらない共通部分) を抽出して基本的な音楽構造を明らかにする試論を執筆した。とりわけ、音楽の大きな構成部分を区切るナガシ、より小さな区切りであるオトシについて、音 (浄瑠璃及び三味線) の動きと物語の場面との連動について分析し、一定の法則性を結論付けた。

また、令和4年度に向けた準備として、祝儀ものと時代物に続き、世話物であり、かつ所作事 (舞踊曲) の性格が強く、音声・映像資料が多く残っている《乗合船恵方萬歳》(通称：乗合船) を取り上げ、当情人物の属性と音楽構成の関連性について分析を進めた。

なお、本研究は、新型コロナウイルス感染症拡大により資料収集及び聞き取り調査に大幅な遅れが生じたため、研究期間を延長し、令和4年度を最終年度とすることになった。

論 文

- 前原恵美「常磐津節《将門》の音楽分析－〈オトシ〉と〈ナガシ〉の機能をめぐって－『桐朋学園大学研究紀要』47 pp.1-17 21.10

江戸時代の絵画における基底材に関する基礎的研究

研究組織 安永拓世(文化財情報資料部)

目 的 日本の絵画の基底材(下地になる素材)は、江戸時代以降、中国の書画の影響を受けて、紙や金箋などの特殊な素材も用いられた。日本の文人画(南画)において、紙を使用した早い例としては、与謝蕪村がよく知られるものの、蕪村に師事した呉春が描いた「白梅図屏風」(逸翁美術館蔵)には、より特殊な基底材が用いられている。国の重要文化財指定では、その基底材を絹とみなしているが、明らかに絹とは異なる繊維が確認できる。本研究の目的は、この特殊な基底材を解明し、作品の素材と表現の関係を検討することにある。

成 果

1. 本研究は、令和2年度が3年計画の最終年度であったが、新型コロナウイルス感染症拡大のため、計画を1年間繰り下げた。しかし、令和3年度も、調査や出張に大幅な制限がかかり、計画通りには進捗しなかった。
2. そのため、令和2年度までの成果を学会発表などにまとめることで、研究成果とした。具体的には、当研究所保存科学研究センターの早川典子氏、及び東京農工大学の高柳正夫氏・八木千尋氏のご協力を得て、呉春筆「白梅図屏風」に類似する染織文化財である葛布と芭蕉布を赤外分光分析することで、両者の種同定を試みた。また、こうした研究成果によって得られた赤外分光分析の結果と、デジタルマイクロスコープや高精細画像等による光学的観察、及び繊維断面(クロスセクション)の観察から、より「白梅図屏風」の基底材に類似した染織文化財は、芭蕉布である可能性が高いという見通しを得られた。
3. 呉春の基底材選択に大きな影響を与えたであろう与謝蕪村の絵画表現について、池大雅の表現との比較を具体的に検討し、それらを論文にまとめることで、今年度の研究成果とした。
4. 呉春筆「白梅図屏風」と類似した基底材に描かれた新たな絵画作品を一点入手し、その光学的な調査と分析を進めた。

論 文

- 安永拓世「与謝蕪村筆「十宜図」(川端康成記念会蔵)の史的位置」『美術研究』434 pp.35-62 21.8

発 表

- 早川典子、八木千尋、山府木碧、安永拓世、菊池理予、高柳正夫「植物由来染織文化財の種同定における非破壊赤外分光分析利用の可能性ー葛・芭蕉を中心にー」文化財保存修復学会第43回大会発表 紙上開催 21.7.15

刊行物

- 高階秀爾、板倉聖哲、大橋美織、守安収、安永拓世『浦上玉堂関係叢書 浦上玉堂親子の藝術』別冊 浦上家史編纂委員会 21.5

ポスト 1968 年表現共同体の研究：松澤宥アーカイブズを基軸として

研究組織 橘川英規、塩谷純（以上、文化財情報資料部）、三上豊（客員研究員）、河合大介（岡山県立大学）

目 的 ベトナム反戦運動、フランスでは「五月革命」、社会主義圏では「プラハの春」が起こり《20 世紀の転換点》と称される「1968 年」、日本では戦後日本の政治的・経済的枠組みを問う声が高まり、表現活動においても大きな分岐点であった。本研究では、国際的なコンセプチュアル・アートの先駆者で、東洋的な宗教観、宇宙観、現代数学、宇宙物理学等を組み入れ、かつ同時代の人物（美術、建築、音楽、文学、舞踏）との交渉も多岐にわたる作家・松澤宥（1922-2006）のアーカイブズから見出せる「表現共同体」を検証することで、1968 年以後の中心とした時代における表現者たちの相互関連性、表現活動のジャンル越境性を明らかにする。

成 果

- 令和2年度は第3年度（最終年度）であったが、新型コロナウイルス感染症拡大のため、1年間の延長をしたが、本年度も同じ要因による様々な制限によって、当初計画通りに研究進展を進展させることができず、より緊急性が高い、以下の発表・調査等に限定して遂行した。

◎22/2/15 長野県立美術館「生誕100年 松澤宥」展を視察、担当学芸員と研究協議を行った。

◎3/17 文化財情報資料部令和3年度第9回研究会にて、研究発表「松澤宥によるアーカイブ・プロジェクト Data Center of Contemporary Art (DCCA) について」を実施、ほかの発表者及び関係者と情報共有を実施した。

◎3/17 本年度を期限としていた松澤宥アーカイブズの借用について、補助事業期間延長に合わせて、松澤宥の遺族と協議して、1年間延長することとした。

発 表

- 橘川英規：「松澤宥によるアーカイブ・プロジェクト Data Center of Contemporary Art (DCCA) について」文化財情報資料部令和3年度第9回研究会 22.3.17

刊行物

- 「1951 年の松澤宥：RATI の会の疾走、詩から総合芸術へ」『生誕100年 松澤宥』長野県立美術館 pp.67-68 22.3



研究会（3.17）での意見交換の様子

鍾乳洞における照明植生を軽減する光環境に関する実験的研究

研究組織 朽津信明、佐藤嘉則、犬塚将英(以上、保存科学研究センター)、片山葉子(客員研究員)、西山賢一(徳島大学)、西澤智康(茨城大学)

目 的 鍾乳洞では、見学者のために人工照明が当てられている場所に藻類や蘚苔類などの緑色生物が繁茂し、鍾乳石などの鑑賞を妨げる場合があり、これらの生物は総称して「照明植生」と呼ばれている。本研究では、照射する照明を工夫することにより、見学者に違和感を与えることのない光源を選定しながら、また、見学者の安全性を十分確保する照度を前提とし、その中でなるべく照明植生の繁茂を制御できるような条件を模索することにより、鍾乳洞の保存・活用に寄与することを目標とする。

成 果

1. 風連鍾乳洞で鍾乳石を覆って繁茂していた藻類を単離し、実験室でそれに照明を当てて繁茂条件を特定する実験を開始した。その際、既に開発してある、緑色生物が繁茂しにくいと想定される白色光源も対比実験に使用し、実験的に緑色生物を繁茂させにくい光源環境を解析中である。
2. 関連調査として、地質露頭のような自然史資料、古墳、横穴墓、窯跡などの人文資料で鍾乳洞と条件が似ている対象で緑色生物が繁茂している事例、そして繁茂していない事例を調査し、緑色生物を繁茂させずに公開活用を進める、主として人文的な条件について絞り込みを行った。
3. 関連調査として、茨城県指定文化財である直牒洞において、他の条件が同等と思われる箇所では緑色生物が繁茂する箇所としない箇所とで照度条件を実測して比較し、藻類繁茂の目安となる閾値として、年間積算照度がおおよそ $5.44 \times 10^4 \text{ lxh}$ と $2.06 \times 10^4 \text{ lxh}$ との間になることを明らかにした(画像)。

(なお、当初計画では今年度で終了の予定だったが、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により期間を延長し、令和4年度を最終年度とすることにした)

発 表

- 朽津信明、犬塚将英：「常陸太田市・直牒洞の光環境と緑色生物」文化財保存修復学会第43回大会 紙上開催 21.7.15



直牒洞における計測
緑色生物の繁茂が著しい地点2と、乏しい地点3とで照度条件を比較し、また洞内での年間積算照度を1地点で計測することで、緑色生物繁茂の閾値を推測した。

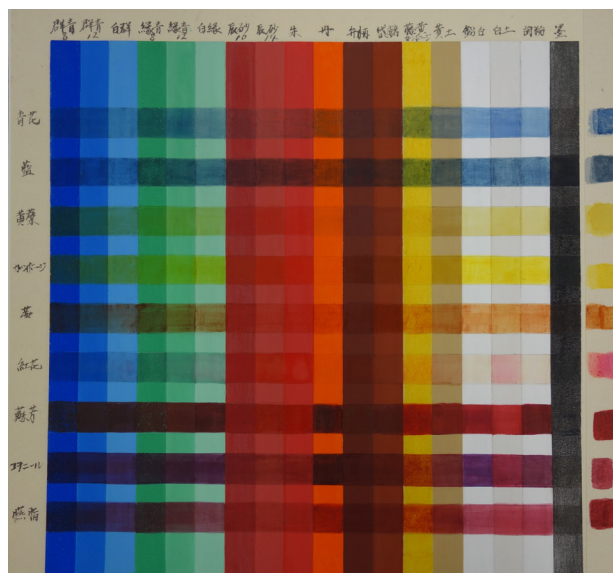
様々な文化財に使用された彩色材料への赤外線画像による面的調査の検討

研究組織 秋山純子 (保存科学研究センター)

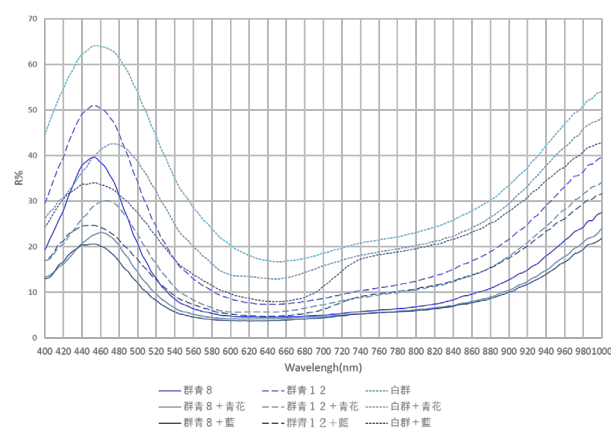
目的 本研究の目的は様々な文化財に使用された彩色材料の面的調査に赤外線画像を適用し、その有効性を明らかにすることである。本研究では歴史資料や浮世絵などの刷物、染織品等に使用された彩色材料に対して、赤外線画像を使った調査が有効であるか検討を行う。赤外線画像の適用事例を増やして、簡便かつ安全な調査法として確立することができれば、文化財を「活用」する際の情報提供に役立てることができると考えられる。そのためには赤外線画像で何がどこまで分かるのかをしっかりと押さえ、様々な文化財に対し赤外線画像の検証を重ねていく必要がある。

成果

- 九州国立博物館所蔵の「黄絹地鳳凰牡丹扇面模様紅型裂」他2点の染織作品について、高精細スキャナを使用し、ゆがみのない高精細なカラー画像と赤外線画像の撮影を行った。これまで染織作品に使用された彩色材料について、赤外線画像に注目して検討されることは少なく、今回の調査によって、染織作品に使用された顔料・染料について、赤外線画像で見分けられることが確認された。特に緑色の箇所は赤外線画像で黒く写っているため、青色と黄色を混ぜた染料ではなく、顔料が使用されている可能性があることが分かった。しかし今年度、彩色材料の科学分析が新型コロナウイルス感染症拡大のため行えず、確認することができなかった。令和4年度はどのような彩色材料であるのか、分析を進める予定である。
- 顔料と染料を塗り重ねた自作のカラーチャートに関して、保存科学研究センター分析科学研究室にご協力いただき、ハイパースペクトルカメラを使用し、様々な塗り重ねパターンの分光スペクトルを得ることができた。このことにより、既知の彩色材料の組み合わせでどのようにスペクトルが変化するかを把握することができたので、今後様々な作品の彩色調査の際に、より確実に分析結果の解釈をすることができるようになった。



自作カラーチャート (顔料+染料)



青色箇所の分光スペクトル

従属栄養微生物による硫黄化合物の分解とそれに伴う腐食性ガス生成

研究組織 片山葉子(客員研究員)、佐藤嘉則(保存科学研究センター)

目 的 硫化カルボニル(COS)は、大気中の濃度は500 pptv前後と低いものの、低濃度であっても精密機器や顔料などに含まれる金属類を腐食する性質を有することから、より高い注意喚起が必要な気体状硫黄化合物である。しかし、COSの生物による代謝に関しては未だ不明の部分が多い。本研究では細菌及び真菌によるCOSの発生や分解について調べ、微生物を発生源とするCOSによる金属などの劣化軽減に資する知見を得る事を目的とする。

成 果

今年度は、低濃度の気体状硫黄化合物を高感度に検出する蛍光光度検出器(FPD)を備えたガスクロマトグラフ(GC-FPD)を用いて、細菌及び真菌による硫化カルボニルの分解ならびに発生について調べた。

1. 強力なCOS分解真菌として土壌から分離されたTHIF08株は、*Trichoderma harzianum*と同定された。THIF08株は、真菌で初めてCOS分解酵素が酵素タンパク質レベルならびに遺伝子レベルで確認され、硫黄代謝に関わる新たな情報の取得が今後も期待される。そこで広く研究に供試されることを可能とするために、NITEの菌株保存施設に本菌株の寄託手続きを行った。
2. GC-FPDを用いてpptvレベルの低濃度硫黄化合物の定量を可能とするために、液化アルゴン下の濃縮後、加熱導入によるCOSならびに関連する硫黄化合物の高感度分析条件を検討した。
3. これまでの研究でCOS発生活性を有する真菌の報告は決して多くはなく、土壌環境から高頻度で検出されることが知られるグループに限られている。そこで、NBRCに保存されている近縁の真菌株の中から9株を選び、COS放出試験を実施するための条件検討並びにこれらの菌株のCOS発生を、上記2の濃縮法を用いて調べた。
4. 虎塚古墳の剥落片から分離された従属栄養性細菌について、COS分解活性の有無を調べた。その結果、調査した22株の細菌のうち、15株に100ppmv COSの分解(3時間以内に初期濃度の70%以上の濃度低下)と、分解に伴う微量のH₂Sの生成が確認された。これまでの調査で土壌からは多様なCOS分解微生物が見出されている。一方、長期間密閉された状態におかれる本古墳の環境においても、COS分解活性を保持する細菌が高い頻度で見出されることを初めて明らかにした。

論 文

- Masaki Y. et al.: 「Fungal carbonyl sulfide hydrolase of *Trichoderma harzianum* strain THIF08 and its relationship with clade D β -carbonic anhydrases」『Microbes & Environ.』36, ME20058
- Ihara et al.: 「Direct comparison of bacterial communities in soils contaminated with different levels of radioactive cesium from the first Fukushima nuclear power plant accident」『Sci Total Environ.』756, 143844
- Li et al.: 「The active microbes and biochemical processes contributing to deterioration of Angkor sandstone monuments under the tropical climate in Cambodia – A review」『J Cult Heritage』47, 218-226

他3報

発 表

- 飯塚瑠翔ほか: 「糸状菌の硫黄代謝におけるガス状硫化カルボニルを介した代謝系に関する研究」 第37回日本木材保存協会年次大会 21.5.25-26
- 飯塚瑠翔ほか: 「糸状菌における気体状硫化カルボニルを基質とする硫黄獲得経路に関する研究」 第72回日本木材学会大会 21.3.15-17

ほか2件

イランの乾燥地帯における農業施設の建築構法および建築技術者の存在形態に関する研究

研究組織 浅田なつみ(文化遺産国際協力センター)

目 的 イランの乾燥及び中乾燥地帯の農村における地域特有の農業施設に焦点をあて、それを形成してきた自然条件及び社会条件などの諸条件を読み解きつつ、土煉瓦と木材を用いた建築構法を明らかにすることを目的とする。同時に、伝統的な建築技術を有する建築技術者の実態把握を行い、建築構法と生産組織の変容について相互関係を検討しながら、地域の農業遺産の保全体制の在り方に関して考察を行う。本研究期間では、イラン東部の平地型農村ナシュティファンとその近郊農村を対象とし、(1) 垂直軸型風車をはじめとした農業施設の構法、(2) 伝統的な建築技術を有する技術者の存在形態、(3) 地域社会ならびに行政による文化遺産保全体制構築状況に関して基礎的情報を収集する。それらを踏まえ、地域における伝統的な農業遺産の保全の在り方に関して考察を行う。

成 果

今年度は、イランの文化遺産保護、農業遺産に関する資料の収集を行い、また、イランに在住する現地協力者を通じて、調査対象となる農業施設を管轄する文化遺産行政職員及び建物の所有者、若手研究者等に対して、質問票の送付やオンラインヒアリング等で現地情報の収集に努めた。これにより、(1) イランの文化遺産保護に係る国内の行政組織や法的枠組み、またそれに関する現在の諸課題(2) 調査対象とする風車群に関するイラン国内での既往研究、文化遺産インベントリー作成状況等について、基本情報および最新の状況を把握した。

近現代建造物の価値評価における同時代性に着目した文化財の現状変更概念の再考

研究組織 金井健(文化遺産国際協力センター)

目 的 近年、ル・コルビュジェとフランク・ロイド・ライトの建築作品群が世界遺産に登録され、我が国でも丹下健三設計の代々木競技場の世界遺産登録を標榜する民間活動が起こるなど、20世紀の建築遺産の社会的な認知度は確実に高まっている。しかし、我が国の文化財保護の現場では、これら近現代建造物の保存の実践によって、社寺建築を下地に発達してきた制度上のずれに起因する様々な問題が顕在化している実状がある。こうした状況を打開するため、本研究では、現状変更の取扱いを文化財保護の実践的業務の核心として捉え、近現代建造物の保存再生事例と文化財建造物の現状変更事例の比較検討を通じて、その概念を近現代建造物の特性を含みうるかたちに再構築する道筋を示すことを目指す。加えて、現状では互いに接点が乏しい保存再生の設計者と文化財建造物の修理技術者の間に、近現代建造物の保存に対する共通理解を醸成していくことで、さらなる実用的な研究への応用を展望する。

成 果

- 令和3年度は、年度当初からの政府等による新型コロナウイルス感染症拡大防止に関する要請を受け、当研究に係る現地調査や関係者へのインタビューなどの活動を自粛しつつ、文献資料の収集と整理を進めた。
- 収集した資料の分析に基づく論文を執筆し、日本建築学会計画系論文集に投稿した。

論 文

- 金井健：「近現代建造物に適応した文化財保存理念の展開に向けた基礎的研究(その2)：未指定の文化財の改修事例にみられる保存の認識と改変の論理」『日本建築学会計画系論文集』(審査中)

マヤ地域の博物館における文化遺産保全と地域発展に向けた文化資源マネジメントの研究

研究組織 五木田まきは (文化遺産国際協力センター)

目 的 本研究は、ユネスコ世界文化遺産であり、古代マヤ文明を代表する遺跡の一つであるコパン遺跡を有するホンジュラス共和国・コパン・ルイナス市を対象としている。地域住民と共に実践する博物館を拠点とした活動を通じて地域社会の新たな価値を活用して地域の課題に対峙する文化資源マネジメントの在り方を実践的に検証することを目的とする。対象地の地域資源を掘り起こすためのフィールド調査、博物館を拠点とした教育的活動に加え、その過程における住民の意識変容や活動プロセスを分析するための聞き取り調査や参与観察に基づき、持続可能な社会への発展可能性も視野に入れた保存と発展の共存モデルの提示を目指す。

成 果

4年計画の第4年次にあたる令和3年度は、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、当初予定していた2週間程度のホンジュラスにおける現地調査、国外での学会等への参加は実施することができなかった。

そのため、研究計画を一部変更し、既得データの分析と論文執筆に重点を置いて研究を行った。また、現地情報及び今後の調査計画の打合せのため、7月6日と8月3日に金沢大学を訪問し、関係者と情報交換・協議を行った。なお、研究課題を1年延長し、交付された補助金の一部は令和4年度へと繰り越すこととし、令和3年度に実施できなかった調査を実施する予定である。

報 告

- 五木田まきは：「マヤ地域の文化遺産と地域社会」東京文化財研究所令和3年度第4回総合研究会 21.11.2

中世日本における中国美術の受容と 羅漢の作例に関する調査研究

研究組織 米沢玲 (文化財情報資料部)

目 的 本研究は、中世日本の仏教美術における中国美術の受容について、造形作品の様式的側面とあわせて、その信仰背景における儀礼や安置空間を考証し、礼拝対象としての絵画あるいは彫刻の宗教的意味や機能との関連性を考察するものである。考察対象は中世に制作された羅漢の造形作品とし、実地調査によって検証を進める。

成 果

令和2年度に引き続き、新型コロナウイルス感染症拡大に伴う移動の制限により予定していた作品調査は十分に遂行することができなかった。年度の前半には文献資料の蒐集を中心としたが、7月には東京・光明寺羅漢図(元時代)の関連作品として京都・東福寺所蔵の維摩居士像(元時代)の調査を行った。年度後半には、現段階での研究成果として東京文化財研究所総合研究会における口頭発表(21.10.5)、室町時代の五百羅漢像(154軀)が安置される天台山羅漢寺(山梨県)の現地調査、光明寺羅漢図の彩色原材料調査を行った。山梨・羅漢寺は創建当初の堂宇が失われており、五百羅漢像は現在収蔵庫に安置されているが、羅漢寺が位置する昇仙峡は急峻な溪谷沿いに築かれた仏教寺院であり、その周辺環境が中国・天台山のものに近似することが指摘できる。五百羅漢像の安置空間として、中世後期に至っても中国・天台山を強く意識して信仰が形成されていた可能性を示すものであり、令和4年度以降に更なる検討を行っていく。

報 告

- 米沢玲：「光明寺所蔵の羅漢図についてー光学調査とアーカイブの活用事例ー」東京文化財研究所令和3年度第3回総合研究会 21.10.5

木材からの化学物質放散挙動の解明と博物館における選定指標の提案

研究組織 古田嶋智子(客員研究員)

目 的 博物館では展示室や展示ケース、収蔵庫や収納箱などに使用される木材からの酢酸やギ酸の放散が資料に有害な影響を及ぼすために深刻な問題となっている。資料保全のためには酢酸などの放散が小さい木材を使用するべきだが、木材の種類により放散量が異なり、材の選定を困難にしている。また、木材は化学物質を吸着・脱離する。これらは放散とは異なる現象であるが、放散と混同されやすいため区別が必要である。本研究は、博物館で木材を安全に使用するために木材からの酢酸、ギ酸の放散挙動の解明、及び放散挙動を考慮した木材の選定指標の確立を目指す。

成 果

1. 窒素ガス吸着による比表面積の取得

木材の化学物質の吸着特性を得るためにガス吸着法を用いた比表面積測定を行った。試験体は、令和2年度までの放散試験で用いた国産のナラ、キリ、ヒノキ、スギ材とした。測定結果をもとにBET法にて比表面積を算出した結果、各材により比表面積には差異があることがわかった。この結果から、材により化学物質の吸着性能が異なることを確認した。

2. サンプリングバッグによる化学物質吸着試験の実施

本研究の対象化学物質である酢酸に対する木材の吸着性能を確認するため、サンプリングバッグに1で示した木材片を設置、既知の濃度である酢酸を添加して木材の酢酸に対する吸着性能を確認する試験の準備を進め、試験を行った。

その他、上記木材を内装材料として使用している国内博物館の収蔵庫を中心とした空気質調査、及び化学物質の脱離試験の実施を計画していたが、新型コロナウイルス感染症拡大を受けて中止、延期とした。

古典的膠の製造方法と各用途適性の体系化

研究組織 宇高健太郎 (客員研究員)

目 的 古典的膠について、各用途適性までを含め広範に体系化する。該材料は、従来の膠製品には見られなかった、淡色かつ不光沢、高浸透性、といったその性状から、多くの文化財修復案件等において活用されている。本研究では、こうした材料の継続的かつ恒常的な利用を可能たらしめるべく、より安定的な製造方法の検討を進める。また膠の応用材料である墨等について、製造条件がその性状等に及ぼす影響を明らかにする。これらの材料の差異が書画表現等に及ぼす影響について検証し、関連知見の一般化とさらなる応用展開を目指す。

成 果

古典的膠の製造方法に関して、令和2年度からさらに広範な範囲で体系化を進めた。

抽出温度及び時間のほか、特に原料皮革等の加工方法について製品性状との関連を詳細に検討し、より安定的に明色の製品を得られる条件の解明を進めた。膠製品の暗色化については、ケラチンを主とした微細な毛ないし表皮組織等の混入が主要因子であると考えられ、本年度公開となった特許は主にその解決を企図したものである。本年度の追加実験においてもやはりこれを支持・補強する結果が得られ、また、加えて、他の副次的因子及びその解決に関しても有用と考えられる結果をさらに得た。

膠やその代表的応用物である墨をはじめとした各種伝統的書画材料の活用及び応用等について検討した。書画文化財の制作においてはそれぞれ適した技法材料が相応の理由のもとに選定され、表現の依代とされてきたものと考えられる。

令和2年度に引き続き、墨における主要な色料である煤について、走査型電子顕微鏡及びレーザ回折・散乱式粒度分布測定装置を用いて、粒子径及び凝集体規模の測定をさらに広範に進めた。また、一般的に用いられてきた基底材である和紙や宣紙について、厚みや組織、吸水性や墨滲みの発生様態等を検証した。さらに、墨液様分散系における生薬その他各種の添加材料の影響を検証した。それらの成果を応用し、こうした伝統材料の定量的加工についても好適な方法を確立した。

特 許

- 宇高健太郎、早川典子：「膠の製造方法」特開2021-167366 (P2021-167366A) 21.10.21 (公開)

発 表

- 宇高健太郎、寺師太郎、加藤清隆、平諭一郎、間瀬康夫：「伝統的煤及び膠を用いた近似墨液インク並びに機械的料紙加工等を含む文化財リマスターシステムの開発」文化財保存修復学会第43回大会 紙上開催 21.7.15
- 宇高健太郎：「膠の概要と関連資料等について」膠2021 オンライン公開研究会 21.11.27

組積造建造物の通電による脱塩の適応可能性に関する検討

研究組織 水谷悦子（保存科学研究センター併任、文化財防災センター）

目 的 塩類風化の被害を受ける歴史的組積造建造物においては、歴史的価値の保存及び構造上の観点から適切な脱塩により蓄積塩を減らし、潜在的な劣化リスクを低減することが望ましい。電気的脱塩工法は通電による電気泳動を利用してイオンを材料から除去する方法であり港湾部のRC建造物の維持管理に用いられている。本研究は組積造建造物に対する新規脱塩手法としての電気的脱塩手法の開発に向けて、まずは煉瓦単体を対象に電気的脱塩による脱塩効果の検証と、脱塩条件の最適化に向けて通電時のイオン輸送メカニズムを明らかにすることを目的とする。

3

外部資金等による研究活動

成 果

1. 多孔質材料中における塩溶液の移動性状の把握

対象とする焼成レンガの通電していない状況下における塩溶液の移動性状に関して実験により検討した。材料中で塩が析出していない状況においても、焼成レンガが有する表面電荷に由来する電気粘性効果に伴い、塩溶液の移動速度が塩溶液の物理的特性から想定されるものより、大幅に低下することが確認された。このことは表面電荷を有する材料では、移流拡散によって生じるイオンの輸送が抑制されることを示唆している。またCT画像の画像解析により、多孔質材料中における塩析出の経時変化と結晶生成に伴う材料の空隙構造の変化の定量化が可能になった。溶液輸送の理論式であるKozeny-Carman式に、得られた塩の析出量と空隙構造に関するパラメータを考慮することで、塩の析出量と溶液の輸送速度低下の関係を示した。

2. 通電による脱塩効果の検証

通電に伴う脱塩効果を検証するため、NaCl塩溶液を含ませた焼成レンガの脱塩実験を実施した。まず実験装置の仕様（左図）と溶出液の組成について検討した。溶出液の組成については、通電時の陽極側でのpHの低下

抑制とワーカビリティの観点で決定した。今年度は大気圧条件下で飽和状態になるまで塩溶液を含浸させたレンガを実験装置に設置し、通電させない場合と一定期間通電させた場合で脱塩効果の比較をした。通電をせず濃度拡散のみ生じる場合と比較し、通電し濃度拡散と電気泳動に伴うイオンの移動が生じる場合は脱塩量が2倍近くまで増加することを確認した（右図）。

論 文

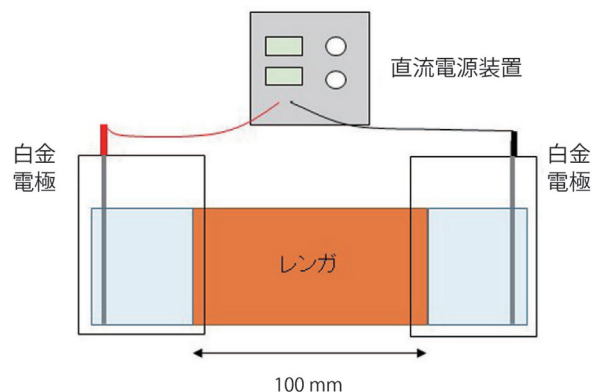
- 水谷悦子：「歴史的組積造建築における塩類風化メカニズムと多孔質材料中の塩溶液の移動性状に関する研究」京都大学大学院工学研究科博士論文 22.3

発 表

- Etsuko Mizutani, et al.: Evaluation of change in pore network structure caused by halite crystallization, Salt Weathering Symposium on Building and Stone Sculpture 2021, 21.9.22

刊行物

- Etsuko Mizutani, et al.: Evaluation of change in pore network structure caused by halite crystallization, Proceedings of SWBSS 2021, TU Delft Open (ISBN : 978-94-6366-439-4), pp.173-182



実験装置概要

a. 通電なし
(濃度拡散のみ)



脱塩実験後のレンガの様子

b. 20V 7日間通電
(濃度拡散 + 電気泳動)



初期合成染料の染色堅牢性評価と変退色挙動の検討

研究組織 片渕奈美香（文化遺産国際協力センター）

目 的 近年、近代染織品の文化財としての重要性の高まりに伴い、保存修復に関わる研究が求められている。近代染織品に用いられている初期合成染料を始めとする新規素材は、様々な外的要因に対する堅牢性の乏しさが経験的に指摘されているが、その詳細については明らかでない点が多い。本研究では、明治期の日本で用いられた主な初期合成染料を対象として、染織文化財の保存修復・展示に関わる外的要因の中でも、とくに重要であると考えられる光による染色堅牢性や変退色に関わる知見や情報の収集を行うことを目的とする。

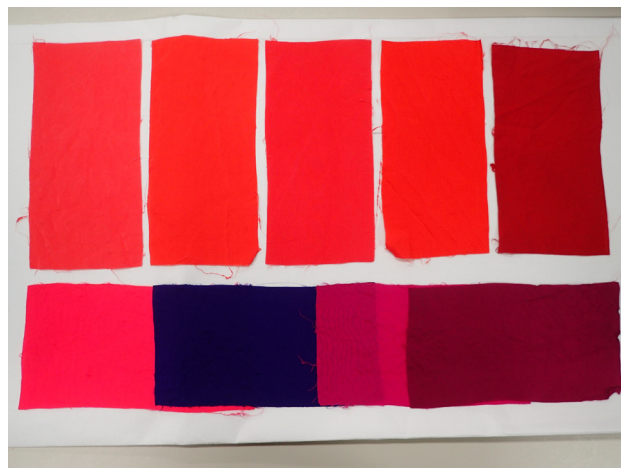
成 果

1年目である令和3年度は、主に文献調査と実験のための準備を行った。以下にその概要を示す。

1. 文献調査では、本研究で対象とする明治期の日本で用いられた主要な初期合成染料について、先行研究や当時の染色技術書、また明治年間の輸入統計などを用いて、候補とする酸性染料5点、塩基性染料4点、直接染料1点、計10点の合成染料を選定した。次に、これらの各染料について、英国染料染色学会(The Society of Dyers and Colourists)と米国繊維化学技術・染色技術協会(The American Association of Textile Chemists and Colorists)によって共同で管理されているカラーインデックスと呼ばれるデータベースを用いて、染料ごとに記載されている基本情報(染料部属、化学構造、発明年代、歴史的名称などについて)の情報収集を行った。また、同じく日本において発行されていた『染料便覧』に記載されている情報も併せて調査した。
 2. 実験準備については、露光試験の実験計画策定とともに、試料布の準備を行った。合成染料は、染料部属と呼ばれる染料の種類ごとに最適な染色方法が異なるため、これらについても調査した。
- 以上をもとに、令和4年度から実験を進める計画である。

論 文

- ・片渕奈美香ほか：「初期合成染料が用いられた着物地の光による変退色—色彩画像解析を用いた評価法の検討—」『保存科学』61 pp.79-92 22.3



選定した初期合成染料を用いて作成した試料布



露光試験に用いるキセノンフェードメータの例

近現代建造物に適応した文化財保存理念の展開に向けた基礎的研究

研究組織 金井健(文化遺産国際協力センター)

目 的 日本の近現代建造物は世界の文化芸術の一翼を担う重要な存在として評価され、文化財としての理解も進んでいる。しかし、近現代建造物を実際に保存しようとすると、従来の文化財の考え方では費用と時間がかかりすぎる、どう保存するのが適切かの物差しがはっきりしない、そもそも所有者が文化財とすることを好まないなど、往々にして様々な障害につきあたる。また、近現代建造物が保存に至る経緯は時々々の社会情勢や善意の出資者の登場など偶然によるところが大きく、保存の考え方や方法もまちまちであり、社会が共有する文化財としてのコンセンサスが得られているとはいえない。本研究の目的は、現代社会において近現代建造物が文化財として積極的に捉えられる共通認識として、文化財の保存理念を近現代建造物の関係者(ステークホルダー)間で共有しうるかたちに敷延していくための諸条件を明らかにすることである。

成 果

- 令和3年度は、年度当初からの政府等による新型コロナウイルス感染症拡大防止に関する要請を受け、当研究に係る現地調査や関係者へのインタビューなどの活動を自粛しつつ、文献資料の収集と整理を行い、後継研究である「近現代建造物の価値評価における同時代性に着目した文化財の現状変更概念の再考」(21K04474)に引き継いだ。
- 令和2年度に収集した資料の分析に基づいて執筆した論文が2021(令和3)年6月刊行の日本建築学会計画系論文集に掲載された。
- 新型コロナウイルス感染症が一旦収束した12月に以下の近現代建造物の現地調査を行い、また、関係者へのインタビューを行った(調査対象/インタビュー対象)。
12月2日 旧函館区公会堂/文化財建造物保存技術協会、函館市教育委員会文化財課
12月3日 遺愛学院(旧遺愛女学校)本館/文化財建造物保存技術協会、遺愛学院事務局
12月22日 広島平和記念資料館、世界平和記念聖堂(現地調査のみ)
12月23日 旧広島陸軍被服支廠/広島県総務局経営企画チーム

論 文

- 金井健:「近現代建造物に適応した文化財保存理念の展開に向けた基礎的研究(その1):文化財保護法下における「文化財」概念の創出と変容」『日本建築学会計画系論文集』第86巻 pp.1804-1814、21.6



遺愛学院本館 1911年建築当初のアスファルトルーフィング葺(現在は鉄板葺)とされており今回の保存修理工事でも現状維持の予定)



旧広島陸軍被服支廠 1913年建築の鉄筋コンクリート構造(木骨煉瓦造の木部を鉄筋コンクリートに置き換えて不燃化を図ったとみられる)

被災文化財保全のための一時保管と処置方法の最適化に向けた研究

研究組織 芳賀文絵 (保存科学研究センター)

目 的 将来の災害、資料の被災に備えて、現在個々の地域・施設の経験により実施されている文化財の一時保管とレスキュー後の処置について、処置の方法の違いによる資料の物理的状態と保管する収蔵環境について評価が行われたうえで、最適な条件について汎用化していくことが必要である。本研究は、被災資料に取られた処置条件による資料状態の違い、また、それら資料が保管される一時保管場所の環境整備の要点について検証することを目的とする。

3

外部資金等による研究活動

成 果

令和3年度は、東日本大震災におけるレスキュー資料を収蔵している、廃校を利用した文化財収蔵施設を対象に、主にその温湿度特性に着目し、害虫調査、資料状態調査等の結果を比較検証した。これらの結果から、一般室を文化財収蔵室としての運用に対する基礎データを作成した。

発 表

- 芳賀文絵ほか：「空調機が稼働していない収蔵庫における木質材料の吸放湿挙動 ータイプの異なる部屋の比較ー」第43回文化財保存修復学会大会 紙上開催 21.7.15

1. 廃校を利用した一時保管収蔵施設における温湿度傾向と害虫捕獲数等の検証

廃校を利用した文化財収蔵施設について、温湿度に着目して、過去に調査を実施した浮遊菌、害虫調査結果を整理し、その傾向について検証した。廃校における階層、利用状態、収蔵資料と設置した害虫捕獲トラップにおいて、捕獲された虫の種類を温湿度傾向から評価した。収蔵室として利用されている空間と、廊下やオープンスペースとの捕獲害虫傾向の違い、害虫の温湿度による増減の傾向を明らかにした。

2. 一時保管収蔵施設の温湿度傾向と保管資料の劣化状態調査

文化財収蔵施設に保管されている、民具を中心とした金属資料から落下した錆を採取し、①年間を通じた錆の落下傾向、②落下錆の物性調査を行った。年間傾向の調査は写真記録及び重量計測、物性調査は、XRF、XRD及び蒸気吸着特性を実施した。

3. 一時保管収蔵施設における民俗資料の保存管理についての協議

民具をはじめとした民俗資料における、必要な保存環境について事例調査を行った。美術工芸品と異なり、厳密な温湿度環境が整備できない状況における民俗資料の保管事例と、そこにおける緩やかな環境管理について調査し、今後一時保管収蔵庫において求められる環境特性について検証した。

カジリムシ目昆虫における外部寄生性の進化に伴う形態変化の解明

研究組織 島田潤 (保存科学研究センター)

目的 寄生生物は非常に小型なものが多いことから、寄生性獲得に伴い小型化してきたと考えられてきた。本来、小型な生物が寄生先の環境に適応して進化してきたと考えられるが、寄生性獲得と小型化を分けて形態を比較した研究はこれまでになかった。本研究では小型化した生物とそこから寄生性を獲得したことが判明している生物を比較することで、寄生性獲得に必要なだったとされる変化を、形態的特徴を中心に明らかにすることを目指す。

本研究では、カジリムシ目昆虫（チャタテムシ類、シラミ類）における寄生性の進化を解明する第一段階としてチャタテムシ類における小型化・単純化の変化の過程を解明する。

成果

本研究では、チャタテムシ類における小型化・単純化の変化の過程を解明するために外部形態と内部構造の比較を行う。外部形態の観察は電子顕微鏡と光学顕微鏡を用いる予定であり、内部構造に関しては大型放射光施設 SPring-8 で得られる断層画像を用いた3次元モデリングにより比較する予定である。

今年度は、令和4年度に予定している SPring-8 での試料の観察に向けて、試料のサンプリング調査、新規 PC の設置を行った。また、一部試料の電子顕微鏡観察を行った。

1. サンプリング調査

本研究ではチャタテムシ類全4亜目においてそれぞれ2種ずつ用いる。これまでに収集したサンプルに加え、今年度は野外でのサンプリング調査を行った。今年度行った調査により、本研究に用いる予定であるチャタテムシのサンプルを全て収集した。

2. PC の設置

令和4年度に予定している SPring-8 での撮影にて得られるデータはとて多く、解析には相応の高性能な PC が必要となる。本年度はその準備段階として、高性能な PC を購入し設置した。また、この高性能 PC を用いて、これまでに得た他昆虫の SPring-8 のデータの一部解析を予備的に行い、動作確認を行った。

3. 試料の観察

電子顕微鏡を用い、チャタテムシ3種の外部形態の構造を観察し、比較に用いる形態の検討を行った。



カジリムシ目昆虫；
a チャタテ科の一種、b コナチャタテ科の一種、c シラミ類の一種
(スケールバー 1mm)

国宝高松塚古墳壁画恒久保存対策に関する調査等業務

研究組織 建石徹、朽津信明、犬塚将英、秋山純子、早川典子、佐藤嘉則、芳賀文絵、倉島玲央、鳥海秀実、島田潤（以上、保存科学研究センター）、片山葉子、宇高健太郎（以上、客員研究員）、水谷悦子（保存科学研究センター併任、文化財防災センター）

目 的 文化庁が行う高松塚古墳・キトラ古墳の壁画の調査及び保存・活用に関して技術的に協力する。

成 果

国宝高松塚古墳壁画の恒久的な保存方針に基づき、壁画の修理、修理環境の保全及び壁画の保存・活用に係る調査・研究業務を実施した。

1. 壁画の制作技法に関する事項

- 可搬式のハイパースペクトルカメラを用いて壁画を安全に分析するための基礎実験等を実施した。また、テラヘルツ波イメージング装置を用いて、天井石2を対象に壁画の保存状態調査を実施した。
- 高松塚古墳壁画の保存活用に資するため、壁画の模擬試料を複数種作成し、構成部材の耐久性等を検討した。
- 壁画の維持管理方針やその具体的内容について、科学的・学術的な助言を文化庁へ行った。また、維持管理の作業内容を検討するため、月に1回程度、修理施設等で文化庁及び関係者との協議を行った。修復処置を施した代表的な箇所4点につき、目視状態観察と測色を含めた経過観察を継続的に行った。
- 壁画の修理作業に関する各種データの整理とアーカイブ化を行い、報告書の作成準備を行った。修復作業及び修理材料の記録等に関するデジタルデータを整理し、検索可能な状態とした。

2. 壁画の保存環境の維持管理に関する事項

- 高松塚古墳壁画を良好な環境で保存活用するため、修理施設の温湿度、並びに空気質、浮遊粒子、浮遊微生物、付着微生物、並びに落下微生物（年2回）、生息生物のモニタリング調査（年4回）を実施し、適切な保存環境の維持管理を行った。
- 高松塚古墳壁画が適切な場所で保存管理・公開が行われることを見据え、これまでの環境調査データをもとにして古墳壁画の保存環境管理指針の策定に関する研究を行い学会発表と学術誌への成果報告を行った。



環境班による浮遊菌調査

3. その他

- 今年度行われた国宝高松塚古墳壁画仮設修理施設（国営飛鳥歴史公園内）の一般公開に際して、延べ11名を派遣し、立会い説明等を行った。また、一般公開にあたり新型コロナウイルス感染症拡大への対応について助言を行った。
- 古墳壁画保存関連の事業全般について情報共有を行い、効率的で正確な作業を行うために、奈良文化財研究所と古墳壁画保存対策プロジェクトチーム会議を2回開催した。
- 文化庁主催の「古墳壁画の保存活用に関する検討会」（第28、29回）に、奈良文化財研究所とともに事務局として出席した。

備 考 本事業は、文化庁より委託された。

特別史跡キトラ古墳保存対策等調査業務

研究組織 建石徹、朽津信明、犬塚将英、秋山純子、早川典子、佐藤嘉則、芳賀文絵、倉島玲央、島海秀実、島田潤（以上、保存科学研究センター）、片山葉子、宇高健太郎（以上、客員研究員）、水谷悦子（保存科学研究センター併任、文化財防災センター）

目 的 文化庁が行う高松塚古墳・キトラ古墳の壁画の調査及び保存・活用に関して技術的に協力する。

成 果

特別史跡キトラ古墳から取り出された壁画の保存修復措置に係る資料整備、古墳・壁画の保存・活用に係る調査・研究の業務を実施した。

○キトラ古墳壁画の制作技法に関する事項

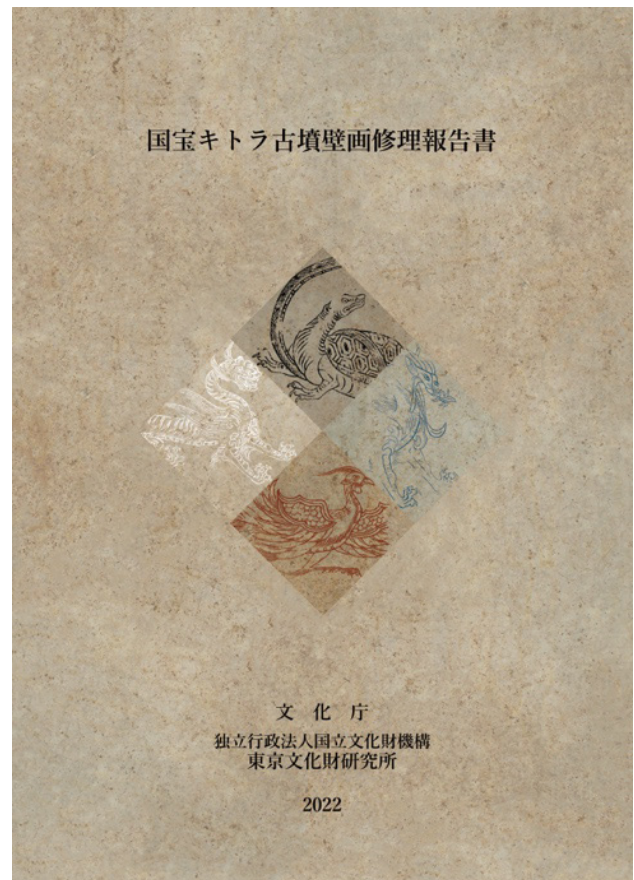
これまでに可搬型蛍光X線分析装置を用いて実施した元素分析調査結果について、データ解析及び調査報告書刊行のための準備を行った。

- キトラ古墳壁画の保存活用に資するため、壁画構成部材の物性評価（細孔径分布・水蒸気吸脱着等温線）を行った。
- 壁画の修理作業に関する各種データの整理とアーカイブ化を行い、報告書の作成を行った。
平成16年の発掘調査直後からの修復に関する報告書原稿を作成し刊行した。併せて、保管している関連資料全てをリスト化し、アーカイブとしてイントラネットでの検索可能な状態とした。

○キトラ古墳壁画の保存環境の維持管理に関する事項

- 再構成されなかった漆喰片を含むキトラ古墳壁画（5面）の最適な保存管理方法について、キトラ古墳壁画保存管理施設（キトラ古墳壁画体験館四神の館内）等で、関係者の協議を行い、必要な指示を行った。
年間4回行われるメンテナンス作業と、毎週の点検作業において報告の多かった埃対策として、蓋を作成する可能性を検討し、試作品内部の環境調査を奈良文化財研究所と連携して行った。

- キトラ古墳壁画の保存管理に最適な設備環境に関し、保存科学・生物学等の観点から、必要な検討を行い、壁画の適切な保存・活用のための知見を提供した。



『国宝キトラ古墳壁画修理報告書』の刊行

備 考 本事業は、文化庁より委託された。

美術工芸品保存修理用具・原材料調査事業

研究組織 早川典子、倉島玲央（以上、保存科学研究センター）、江村知子（文化財情報資料部）、前原恵美、佐野真規（以上、無形文化遺産部）

目 的 美術工芸品の修理材料及びその生産・製造に用いる用具の原材料について、それらを安定的に供給し続けるために生じている現在の課題に関して調査を行い、調査結果に基づき具体的な支援策を実施するための枠組み作成を検討する。

成 果

用具の原材料を安定的に供給し続ける上での現況の課題（生産量・流通体制・品質など）の調査を行い、調査結果に基づき具体的な支援策を実施するための枠組み作成を検討した。令和3年度は、美術工芸品の修理に使用する原材料・用具のうち、ノリウツギ・名塩和紙・本美濃紙・彫刻修理用具について調査を行った。また、本事業の委員として本事業スタッフ3名と建石センター長の4名が5月10日及び2月17日の委員会に出席した。

1) ノリウツギ（北海道）

① ノリウツギの生産確保に関する調査

掛軸や巻子の修復に必要不可欠な宇陀紙には原料にノリウツギが必要だが、現在、その採取を行う唯一の採取者が今年度以降の採取を行わない予定である。そのため、今後の材料確保のための調査を行なった。

調査日：7月11日～13日

調査地：豊岬木材工業株式会社、北海道大学手塩研究林、浜頓別

調査日：7月27日～28日

調査地：標津町

② ノリウツギ保存方法に関する実験と調査

新規生産地において、従来使用してきたホルマリン同封による保存に難色を示されているため、代替薬品の検討を開始した。実際にノリウツギを使用する宇陀紙製作者の協力を得て、現地にて実験をスタートさせた。

2) 名塩和紙（兵庫県）

ノリウツギを使用する紙として、名塩和紙について調査した。

調査日：11月19日

調査地：谷徳製紙所、馬場和比古氏

3) 本美濃紙（岐阜県）

楮・トコロアオイなどの材料確保にも積極的な産地として本美濃紙についての調査を行なった。

調査日：12月1日

調査地：美濃和紙の里会館

4) 彫刻修理用具（京都府・兵庫県）

木彫の修理には彫刻刀や鑿などの刃物が必要不可欠であるが、この刃物を製作する会社が後継者不足や原料の鋼が入手できなくなるなどの問題によって廃業の危機にある。実際にこうした刃物を使って彫刻の修理をしている美術院と、道具のデータベースを構築している竹中大工道具館で調査を行った。

調査日：12月21日～22日

調査地：美術院、竹中大工道具館

備 考 本事業は、文化庁より委託された。



標津町でのノリウツギの試験採取の様子

文化遺産国際協力コンソーシアム事業

研究組織 友田正彦、西和彦、藤井郁乃、邱君妮（2021年9月から）、前田康記（2021年10月から）、廣野都未、牧野真理子（2021年8月まで）、五嶋千雪（2021年7月まで）、七五三葉子（2021年6月から9月まで）（以上、文化遺産国際協力センター）

目 的 文化遺産国際協力コンソーシアム（以下、コンソーシアム）が掲げる、「海外の文化遺産保護に関する国内の連携・協力を推進する」という目標のもと、事務局として各種分科会活動や情報データベースの構築、シンポジウム・研究会の開催等を行うことによって、日本の文化遺産国際協力を支援・促進する役割を担う。

成 果

（1）コンソーシアムの会議の開催

ア）運営委員会を2回開催し、活動方針を協議したほか、総会の開催に代えて、本年度の事業報告を会員に送付した。

イ）企画分科会、東南アジア・南アジア分科会、西アジア分科会、東アジア・中央アジア分科会、欧州分科会、アフリカ分科会、中南米分科会を計18回開催した。また、国際協力調査ワーキンググループを2回開催した。

＊上記の会議等については全てオンラインにて行った。

（2）情報収集と情報発信

ア）文化遺産国際協力事業の基礎情報データベースに新たな情報を追補した。

イ）文化遺産の不法輸出入等防止のための情報収集を行った。

ウ）WEBサイト、SNS、メールニュース等を通じて、コンソーシアム活動のPRを行った。

エ）第29回研究会「文化遺産にまつわる情報の保存と継承～開かれたデータベースに向けて～」、第30回研究会「文化遺産×市民参画＝マルチアクターによる国際協力の可能性」をオンラインにて開催するとともに動画を配信した。

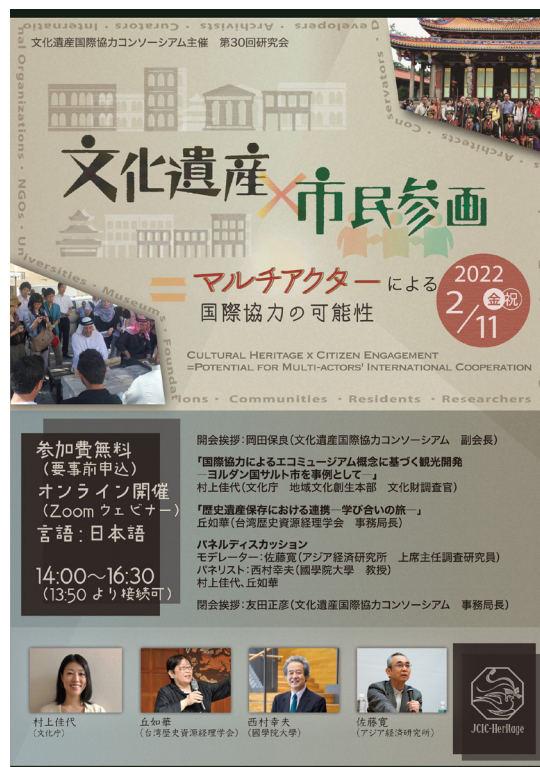
オ）下記(3)の調査と連動して、シンポジウム「海と文化遺産—海が繋ぐヒトとモノ—」をオンラインにて開催するとともに、動画を配信した。

カ）会員向けのメールニュース（コンソーシアムイベント告知、国内外文化遺産関連イベントの案内等）を配信したほか、Twitter等のSNSを通じて関連情報の周知をはかった。

キ）会員向けウェブサイトに分科会議事録・配布資料などを掲載し会員との情報共有をはかった。

（3）文化遺産国際協力の推進に資する調査

令和2年度に引き続き「海域交流ネットワークと文化遺産」をテーマに、世界各地域の現状を把握するため、アンケート調査及びヒアリング調査を行い、得られた結果を整理・分析の上、報告書に取りまとめた。



第30回研究会ポスター

刊行物

- 『第29回文化遺産国際協力コンソーシアム研究会（ウェビナー）「文化遺産にまつわる情報の保存と継承～開かれたデータベースに向けて～」報告書』 22.3
- 『第30回文化遺産国際協力コンソーシアム研究会（ウェビナー）「文化遺産×市民参画＝マルチアクターによる国際協力の可能性」報告書』 22.3
- 『令和3年度文化遺産国際協力コンソーシアムシンポジウム（ウェビナー）「海と文化遺産—海が繋ぐヒトとモノ—」報告書』 22.3
- 『文化遺産国際協力コンソーシアム令和3年度国際協力調査「海域交流ネットワークと文化遺産」報告書』 22.3

備 考 本事業は、文化庁より委託された。

文化遺産国際協力拠点交流事業「ブータンの歴史的建造物保存活用に関する拠点交流事業」

研究組織 金井健、友田正彦、西和彦、浅田なつみ、ヴァル エリフ ベルナ（以上、文化遺産国際協力センター）、福島啓人（奈良文化財研究所）、江面嗣人（岡山理科大学）、津村泰範（長岡造形大学）、海野聡（東京大学）、マルティネス アレハンドロ（京都工芸繊維大学）、菅澤茂、金出ミチル、向井純子（以上、文化財建造物保存修理技術者）

目 的 これまでに蓄積したブータンとの協力事業の成果と文化遺産保護における我が国の経験をもとに、ブータン政府が成立を目指している文化遺産基本法（新法）によって新たに保護の対象となる民家を含む歴史的建造物全般について、文化遺産としての適切な保存と自立的かつ持続的な活用を推進することができるよう、必要な技術的支援及び人材育成支援を実施する。

成 果

令和2年度から新型コロナウイルス感染症対策による現地渡航の困難が続く中、令和3年度は日本又はブータンの国内での実施が可能な参考書及び教材の作成と頒布、オンラインによる人的交流を中心に事業を行った。

1. 民家建築参考書及び社会教育教材の制作、頒布並びに多言語化

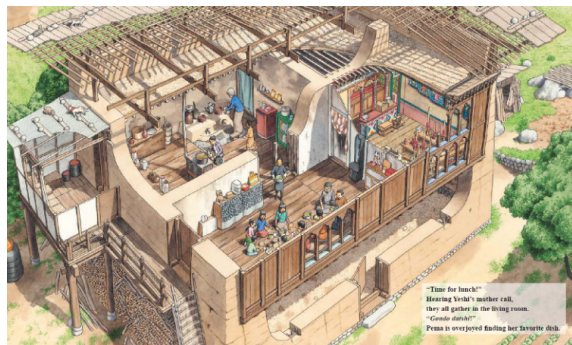
令和2年度に刊行した文化財保護行政担当職員等を対象とした民家建築参考書のブータン国内での頒布を行うとともに、協力事業の実務を担う日本国内の専門家等に還元することを目的に同書の日本語版を制作、刊行した。また、令和2年度から引き続きDCHSとの共同で同国の中学生を対象とした社会教育教材の制作を進め、刊行した。社会教育教材は同国の教育言語である英語としたが、公用語であるゾンカ語版もあわせて制作、刊行した。

2. ブータンの伝統的民家建築の価値評価に関する支援
令和3年度当初は、年度内に新型コロナウイルス感染症が収束することを期待し、ブータン中部及び東部地域での民家建築の悉皆的調査とブータン人専門家の招へいによる民家建築の保存活用をテーマとした実習を予定していた。しかし、収束が見通せないことからこれらを中止し、代替措置としてブータン中部及び東部地域の民家建築をテーマとしたブータン内務文化省文化局との合同調査会をオンラインで開催した。

刊行物

- 『ブータンの伝統的民家 西部中央編ーティンブー、プナカ、パロ、ハー』東京文化財研究所、ブータン内務文化省文化局 22.3
- 『Understanding Our Heritage / Pema Visits A Rammed Earth House』Department of Culture, Ministry of Home and Cultural Affairs, Royal Government of Bhutan / Tokyo National Research Institute for Cultural Properties 22.3
- 『令和3年度文化庁委託文化遺産国際協力拠点交流事業ブータン王国の歴史的建造物保存活用に関する拠点交流事業成果報告書』東京文化財研究所 22.3

備 考 本事業は、文化庁より委託された。



社会教育教材『Pema Visits A Rammed Earth House』の1ページ（伝統的民家の生活）

航空資料保存の研究

研究組織 建石徹、芳賀文絵、中村舞（以上、保存科学研究センター）、中山俊介（特任研究員）、苅田重賀（客員研究員）

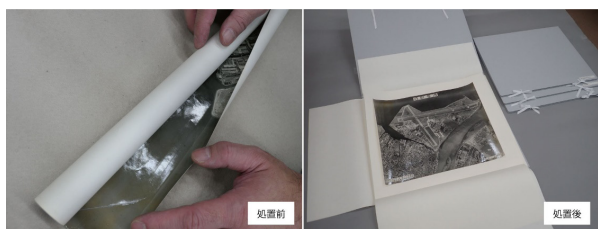
目 的 航空に関する資料は多様な材料が使用され、活用に重点が置かれてきたこともあり保存状態が悪いものが多く、このままでは貴重な資料の散逸を免れない状況にある。したがって、原資料を損わずに有効に活用するために、令和2年度に引き続き資料の種類や劣化の状態を調査し保存方法・修復方法の開発を行った。

成 果

膨大な個人資料の記録・保存

平成24年度から続いている、以下の資料に関する整理、記録、デジタル化、保存処置を実施した。

- 通常の写真アルバムに収まらないサイズの写真がロールした状態で長年保存され、印画紙の紙質により強い巻き癖が付いてしまっていた。そのままでは写真の内容を確認することも困難だったので、今後の保存と活用のため、専門業者に外注してフラットニングと専用タトゥフォルダーによる保存を実施した。



- 中性紙保存箱（内寸1800×900×50 mm）にグライダーの製作図面を格納したところ、箱の強度が不足だったため、ポリプロピレン製のプラスチックダンボール（以下、プラダン）のシートを使った保存箱の作成を試みた（内寸1800×900×50 mm）。プラダンは厚さ4～5mmのものを使用し、底面にはV字型の補強リブを追加した。部材の結合にはプラネジ（ポリエチレン製）を使用した。作成した箱は、図面を格納した状態にて成人2人で持ち上げることが可能な強度があった。ただし、プラダンは静電気を帯びてホコリを吸着しやすいため、中性紙で表面を覆う等の処置が望ましいが、今年度の作業では予算の都合で実施しなかった。



報 告

- 苅田重賀：「日本航空協会の航空遺産継承への取り組みについて」『陸軍四式戦闘機「疾風（1446号機）」保存状態調査報告書 1 知覧特攻平和会館文化財調査報告書（1）』知覧特攻平和会館 pp.68-70 22.3

発 表

- 八巻聡ほか：「知覧特攻平和会館における四式戦闘機「疾風」の保存と活用に関する取り組み」第43回文化財保存修復学会大会 紙上開催 21.7.15

備 考 本研究は一般財団法人日本航空協会と共同で実施した。

沖縄県立芸術大学所蔵 重要文化財琉球芸術調査写真 (鎌倉芳太郎撮影) のデジタル化に関する共同研究

研究組織 早川泰弘(副所長)、二神葉子、城野誠治(以上、文化財情報資料部)

目的 沖縄県立芸術大学所蔵 重要文化財琉球芸術調査写真原板(ガラス乾板)の保全を図ることを目的に、画像情報のデジタル化を行い、その画像情報を長期間安定的に保持・活用する。

3

外部資金等による研究活動

成 果

沖縄県立芸術大学が所蔵する重要文化財琉球芸術調査写真原板(ガラス乾板)は、鎌倉芳太郎が1924~25(大正13~14)年、及び1926~27(大正15~昭和2)年の2回にわたり沖縄県で行った「琉球芸術調査」に関わる写真群である。全1,268枚のガラス乾板(四切判及びキャビネ判)から成り、首里城をはじめ円覚寺など首里城周辺の寺社建造物、琉球国王肖像画(御後絵)、さらには琉球王朝尚家伝来の絵画や工芸品類などを中心に、沖縄に所在した多くの文化財が撮影されている。被写体の中には沖縄戦で灰燼に帰してしまったものも多く、本写真原板は琉球文化研究を行う上で高い資料価値がある。2019(令和元)年10月31日に焼失した首里城の復元にあたっては本写真原板が参照されている。全1,268枚のうち541点についてはその画像が『沖縄文化の遺宝』(岩波書店、1982)に収められているものの、写真原板の劣化の進行は否めず、画像情報のデジタル化は急務の課題である。

令和3年度は、全1,268枚の写真ガラス乾板のうち250枚についてデジタル撮影を実施し、その一部を対象に画像編集を行った。撮影にあたっては、ライトによる熱線や紫外線の影響を極力排除し、ガラス乾板に写し込まれている情報をできるだけ忠実にかつ詳細に写し取るための様々な対応を行った。

備 考 本研究は、沖縄県立芸術大学と共同で実施した。



首里城正殿 『沖縄文化の遺宝』(岩波書店、1982)



令和3年度のデジタル撮影画像。首里城正殿の窓越しの室内など、細部の情報が取得できている。

エアロゾル消火薬剤が文化財に与える影響

研究組織 早川泰弘（副所長）、犬塚将英（保存科学研究センター）、水谷悦子（保存科学研究センター併任、文化財防災センター）

目 的 2019（令和元）年に発生した首里城火災では、収蔵庫内に保管されていた多くの文化財にも甚大な被害が発生した。文化財収蔵施設では、一般的に不活性ガス系の消火薬剤が利用されることが多いが、設備の誤作動により死傷者を出す事例も発生している。このような背景に鑑みて、近年新たに開発されたエアロゾル消火薬剤が文化財の展示収蔵施設へ適用可能かどうかを判断するために、文化財を構成する材料に対してどのような影響を及ぼすかを評価することが本研究の目的である。

成 果

- 本研究では、5種類の金属試料（銀、銅、鉄、鉛、錫）と3種類の木材試料（ヒノキ、スギ、キリ）に新規エアロゾル消火薬剤を作用させ、東京文化財研究所と千葉科学大学にて分析調査を実施した。東京文化財研究所では、試料の顕微鏡観察、測色、光沢測定、蛍光X線分析、X線回折分析による分析調査を実施した。
- 分析調査の結果、新規消火薬剤から生成される化合物を同定するとともに、金属及び木材の状態変化を評価することができ、文化財の展示収蔵施設への適用指針を提示した。
- 以上の調査結果について報告及び協議を行うために、東京文化財研究所のスタッフ、千葉科学大学、消火薬剤メーカーの関係者によるオンライン会議を8回開催した。

備 考 本研究は千葉科学大学と共同で実施した。



消火薬剤を塗布した金属試料と木材試料

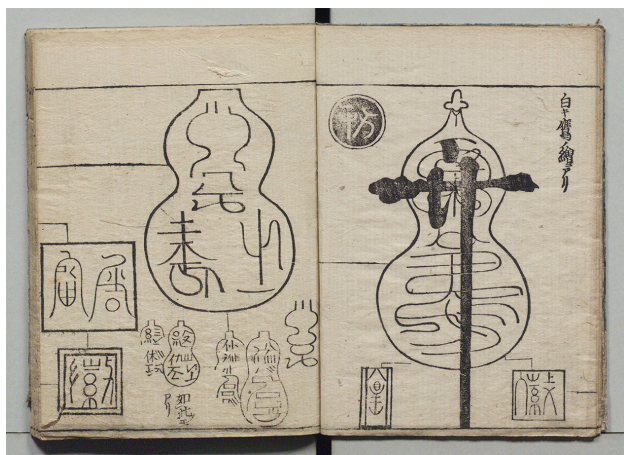
ゲッティ・リサーチ・ポータルへの デジタル資料の提供・公開

研究組織 江村知子、橘川英規、阿部朋絵、田村彩子（以上、文化財情報資料部）、山梨絵美子（客員研究員）

目 的 本事業はゲッティ研究所との共同研究によって、東京文化財研究所が所蔵する明治・大正・昭和前期の展覧会目録や江戸期の版本などのデジタル化とウェブ公開を行うものである。近代の美術展覧会資料には内国勸業博覧会、万国博覧会、主要美術団体によるものが含まれ、設立から90年余を経過した当研究所ならではの貴重なコレクションである。また、本事業はその発展性・効率性が認められたことにより、さらにデジタル化の対象として、江戸時代の版本についても取り上げている。いずれも稀覯本であり、これらのデジタル化資料がオープン・アクセスで世界中のインターネット・ユーザーに提供できることの意義は大きい。ゲッティ・リサーチ・ポータルを通じて日本美術に関する情報を国内外に発信することで、日本美術への理解向上に貢献することを目的とする。

成 果

2016（平成28）年2月に締結したゲッティ研究所と日本美術の共同研究に関する協定書が5年の期限を迎えたため、さらに5年間延長する覚書を取り交わした。2021（令和3）年度は東京文化財研究所が所蔵する江戸時代の絵師の印譜や明治期の大型美術本などについてデジタル化を行う準備を行った。



ウェブ公開した『和漢印書』寛文5年（1665）刊

ゲッティ・リサーチ・ポータルに掲載可能なデータ形式について、ゲッティ研究所副所長のKathleen Salomon氏、プロジェクト責任者のAnne Rana氏らと協議を重ね、日本語文献のローマ字表記を添えることにより、海外の日本美術史研究者、特に初学者に対しては有益な情報であることを確認した。こうした協議や事業の成果をふまえて、ARLIS/NA（北米美術図書館協会）の年次大会にて、口頭発表を共同で行い、成果公開を行い日本美術の国際情報発信に努めた。

備 考 本研究は、ゲッティ研究所と共同で実施した。

Record Detail

和漢印書 3巻 (存2巻) / Wakan inzukushi 3kan zon2kan
Date: 寛文5 [1665] / Kanbun 5 [1665]
[View Digital Item](#)

Date 1665-00-00
 寛文5 [1665] / Kanbun 5 [1665]

Publisher [出版地不明] : [出版者不明] / [s.l.] : [s.n.]

Extent 2 vol. ; 17.5x12.9cm

Description 本タイトルは見返しより
 序題の書名: 群印宝鑑
 国書館目録の書名: 和漢印書
 題葉はば欠
 序「万治二續仲夏朔日」
 [3] 巻末「寛文五乙巳唐季春吉辰/開板」
 3巻3冊の内、[2] (唐繪中筆、唐繪下筆) 欠
 存巻の収録内容: 「唐繪上筆」および「日本繪、和漢墨蹟」
 成立年: 万治2年序

Language Japanese

Alternate Title 群印宝鑑 / Gun-in hōkan
 和漢印書 / Wakan inzukushi

Relation The Getty/Tokyo National Research
 Institute for Cultural Properties
 Collaboration Project
 Japanese Wood Print Books

ゲッティ・リサーチ・ポータルでの表示画面

バガン遺跡群(ミャンマー) 寺院祠堂壁画の保存修復

研究組織 前川佳文（文化遺産国際協力センター）、ダニエラ・マリア・マーフィー（文化協会バステオーニ）、ステファニー・フランチェスキーニ（壁画保存修復士）、マリア・レティツィア・アマドーリ（ウルビーノ大学）

目 的 ミャンマーのバガン遺跡は、11世紀から13世紀にかけて栄えたビルマで初めての統一王朝バガン朝の時代に建てられた仏教遺跡群である。遺跡内には煉瓦造の仏塔や寺院が約3000基建ち並んでおり、その中のひとつであるローカティパン（Loka-Hteik-Pan）寺院の内壁は、12世紀前半に描かれた仏教壁画で埋め尽くされている。本研究では、このうち南壁に描かれた壁画を対象にその技法材料や損傷傾向の調査を行い、適切な保存修復方法を確立することを目的とする。

成 果

本事業は、対象の寺院祠堂壁画の保存修復を目的とするが、今年度は新型コロナウイルス感染症拡大の影響により現地への渡航が困難であったことから、事業全体を令和4年度に繰り越すこととした。

備 考 本事業は、住友財団の助成を得た。

収蔵庫・展示室の建材等から放散する有機酸等の 定量評価のための開発研究

研究組織 犬塚将英、高橋佳久（以上、保存科学研究センター）、古田嶋智子（客員研究員）

目 的 漆工芸品などの美術品には装飾として鉛が用いられていることがある。このような鉛の腐食に対して、保存環境中の空気に含まれる有機酸（酢酸、ギ酸）が大きな影響を及ぼしている。収蔵庫等における空気中の有機酸の濃度を測定する方法は確立されているが、発生源を特定する方法については実用化されていないのが実情である。本研究では、床や壁に用いられている内装材料から放散される化学物質を現場で採取するための新しい方法の開発・普及を目的とする。

成 果

- 収蔵庫の床や壁に用いられている内装材料からの空気採取を行うための新しい手法の開発を行った。開発を行った新しいシステムはガスを捕集するためのサンプリングバッグとそれを調査対象に密着させるための治具で構成する。このようなシステムのデザインと試作を行い、東京文化財研究所にて性能評価を行った。
 - 以上のように採取した空気質の分析及びデータ解析の結果は、床から発せられる化学物質を捕らえることができたことを示唆するものであったが、今後さらに詳細なデータ解析を行い、次年度以降にこれらの成果の報告を行う予定である。
- 備 考** 本事業は、ポーラ美術振興財団の助成を得た。
- 2021（令和3）年10月と2022（令和4）年3月に、以上のように開発を行った空気採取システムを、有機酸濃度が高いことがわかっている収蔵庫を有する美術館にて適用し、床から放散される化学物質の定量評価を行うための空気採取を実施した。



収蔵庫における調査風景

コロナ禍における伝統芸能の「グッド・プラクティス」に関する研究

研究組織 前原恵美 (無形文化遺産部)

目 的 新型コロナウイルス感染拡大 (以下、「コロナ禍」) の影響を受け続けている伝統芸能は、2度の緊急事態宣言を経た現在、再出発の指標として「グッド・プラクティス」(以下、「G P」) すなわち「優れた取組」の研究が可能かつ必要なフェーズに差し掛かっている。本研究は、コロナ禍にあって伝統芸能の継承・普及に取り組む事例の調査を行い、G Pの要件を整理し、その成果公表を通して、コロナ禍での伝統芸能の再起に資することを目的とする。

成 果

4月: 「グッド・プラクティス」の定義・要件の検証とともに、12月に成果発表の場として設定したフォーラム3全体の企画の検討を開始。

5月～10月: 2020(令和2)年4月より収集している「伝統芸能における新型コロナウイルス禍の影響」の情報分析を行う。

10月～11月: 公立文化施設におけるコロナ禍での伝統芸能の公演についての聞き取り調査及び実地調査を行う (兵庫県立芸術文化センターについて、東京・兵庫で調査)

10月: 若手～中堅実演家の新たな試みについて聞き取り調査を行う (The Shakuhachi5)。

11月: 関西の実演家のコロナ禍での試みについて聞き取り調査を行う (片山九郎右衛門氏)。

: 文化庁「邦楽普及拡大推進事業」採択サークルについての聞き取り調査及び実地調査を行う (上智大学箏曲部、弘前大学津軽三味線サークル)、また当該事業事務局担当者から聞き取り調査を行う (凸版印刷株式会社)。

: 独立行政法人日本芸術文化振興会のコロナ禍での試みについて聞き取り調査を行う。

: 楽器製作者の現状調査を行う (株式会社 東京和楽器)。

12月3日: 参加者を限定し、本研究の成果発表を含めたフォーラム3「伝統芸能と新型コロナウイルスーGood Practice とは何か」を実施する。

12月28日:

上記フォーラムの記録映像を編集の上、東文研ウェブサイト上で公開。

2月: 「邦楽普及拡大推進事業」にかかる上智大学箏曲部及び弘前大学津軽三味線サークルに追加の聞き取り調査 (リモート) を行う。

3月: 以上の成果を『「伝統芸能における新型コロナウイルス禍の影響」現状報告』に執筆、刊行した。なお、報告書は今後、東文研ウェブサイト上でPDF公開予定である。

発 表

- 前原恵美: 『「伝統芸能における新型コロナウイルス禍の影響」現状報告』ほか2件 フォーラム3 伝統芸能と新型コロナウイルスーGood Practice とは何か 2021.12.3

刊行物

- 前原恵美: 『「伝統芸能における新型コロナウイルス禍の影響」現状報告』『伝統芸能とクラウド・ファンディング』『邦楽器製作技術が国の選定保存技術に選定』『フォーラム3 伝統芸能と新型コロナウイルスーGood Practice とは何か』報告書 東京文化財研究所 pp.13-20、33-38、39-42 22.3
- 江副淳一郎、前原恵美: 「文化庁『邦楽普及拡大推進事業』の現場から」上掲報告書 pp.94-112

備 考 本研究は、一般財団法人カワイサウンド技術・音楽振興財団の研究助成 (音楽振興部門) の助成を得て実施した。

第29回文化遺産国際協力コンソーシアム研究会(ウェビナー)「文化遺産にまつわる情報の保存と継承～開かれたデータベースに向けて～」

デジタルアーカイブをはじめとした記録技術の応用によって、モノ自体だけでなく、モノの有する多面的な情報をデータベースに記録することが可能になるとともに、例えば音声や動画といったように、記録の対象となる要素も拡大している。そうした中、文化遺産にまつわる情報をどう残し、誰に伝えるかという課題について考えるため、データベースの活用に関する国内外の事例を取り上げ、文化遺産にまつわる情報の保存と継承の望ましいあり方について議論した。

日 時：2021(令和3)年8月9日(月・休) 14:00～16:00

会 場：オンライン(ウェビナー)

主 催：文化遺産国際協力コンソーシアム

参加者：139名

講 演：

- ・齋藤玲子(国立民族学博物館人類文明誌研究部 准教授)
「フォーラム型情報ミュージアムプロジェクトとアイヌ民族資料の活用」
- ・久保田裕道(東京文化財研究所無形文化遺産部 無形民俗文化財研究室長)
「無形文化遺産に関わる情報の記録と活用について」
- ・林憲吾(東京大学生産技術研究所 准教授)
「アジア近代建築遺産データベースの40年：その展開・変容・課題」

パネルディスカッション；

モデレーター：近藤康久(総合地球環境学研究所 准教授)

パネリスト：齋藤玲子、久保田裕道、林憲吾

令和3年度文化遺産国際協力コンソーシアムシンポジウム(ウェビナー)「海と文化遺産—海が繋ぐヒトとモノ—」

文化遺産国際協力コンソーシアムでは、令和2年度から「海域交流ネットワークと文化遺産」をテーマとした国際協力調査を継続して行っている。本年度のシンポジウムでは、その成果も踏まえつつ、「ヒトと海の出会い、交流の舞台としての「海」を見つめ直すために、海に関わる文化遺産の国際的な研究や保護の動向、世界各地の海の文化遺産への取り組みの事例や日本人研究者の関わりを紹介し、この分野で日本が果たしうる国際協力の役割について議論を行った。

日 時：2021(令和3)年11月28日(日) 14:00～17:00

会 場：オンライン(ウェビナー)

主 催：文化遺産国際協力コンソーシアム

共 催：文化庁

参加者：198名

講 演：

- ・石村智(東京文化財研究所無形文化遺産部 音声映像記録研究室長)
「趣旨説明」
- ・佐々木蘭貞(一般社団法人うみの考古学ラボ 代表)
「沈没船研究の魅力と意義 —うみのタイムカプセル」
- ・木村淳(東海大学海洋学部 准教授)
「海の路を拓く —船・航海・造船」
- ・田村朋美(奈良文化財研究所都城発掘調査部 研究員)

「海を越えたガラスビーズ ―東西交易とガラスの道」

- 四日市康博(立教大学文学部 准教授)

「海を行きかう人々 ―海を渡ったイスラーム商人、特にホルムズ商人について」

- 布野修司(日本大学生産工学部 客員教授)

「海と陸がまじわる場所 ―アジア海域世界の港市：店屋(ショップハウス)と四合院(コートハウス)」

フォーラム：

モデレーター：石村智

コメンテーター：周藤芳幸(名古屋大学文学部 教授)、伊藤伸幸(名古屋大学文学部 助教)

パネリスト：佐々木蘭貞、木村淳、田村朋美、四日市康博、布野修司

事業の一部として実施した研究集会・講座等

受託「文化遺産国際協力コンソーシアム事業」の一部として実施

第30回文化遺産国際協力コンソーシアム研究会(ウェビナー)「文化遺産×市民参画＝マルチアクターによる国際協力の可能性」

近年、文化遺産保護においては文化的多様性を尊重し、価値観の違いを乗り越えて、異なる立場の関係者が互いに協力しあうことが成功のための重要な要素と認識されている。第30回研究会では、地域住民の主体的な参画がとりわけ不可欠な歴史遺産を活かしたまちづくりに焦点を当て、文化遺産国際協力において、多様なアクターの取り込みによって期待される今後の可能性について議論を行った。

日 時：2022(令和4)年2月11日(金・祝) 14:00~16:30

会 場：オンライン(ウェビナー)

主 催：文化遺産国際協力コンソーシアム

参加者：109名

講 演：

- 村上佳代(文化庁地域文化創生本部 文化財調査官)

「国際協力によるエコミュージアム概念に基づく観光開発ーヨルダン国サルト市を事例としてー」

- 丘如華(台湾歴史資源經理学会 事務局長)

「歴史遺産保存における連携ー学び合いの旅ー」

パネルディスカッション：

モデレーター：佐藤寛(アジア経済研究所 上席主任調査研究員)

パネリスト：西村幸夫(國學院大學 教授)、村上佳代、丘如華

受託研究の一環として刊行された刊行物

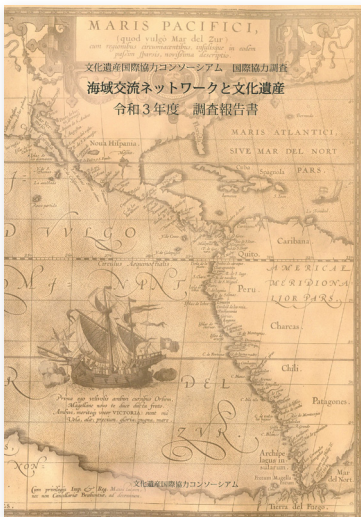


『国宝キトラ古墳壁画修理報告書』

本報告書は、2004(平成16)年から始まり、2016(平成28)年の展示公開に至るまでのキトラ古墳壁画の取り外しと再構成を中心とした修理報告書である。壁画の保存修理に至る流れから、具体的な作業工程をたどる。併せて展示公開の記録と壁画の科学分析についても修理期間中に行われたものを収録した。

2022年3月刊行、122ページ。

(受託研究「特別史跡キトラ古墳保存対策等調査業務」の一環として刊行)



『文化遺産国際協力コンソーシアム国際協力調査「海域交流ネットワークと文化遺産」令和3年度 調査報告書』

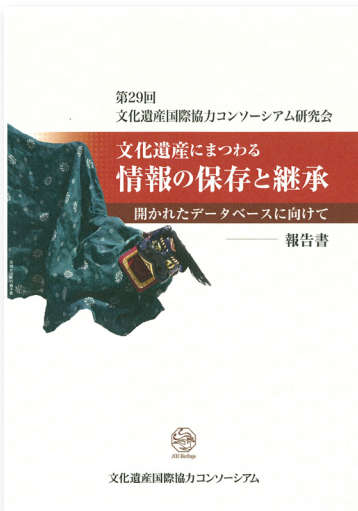
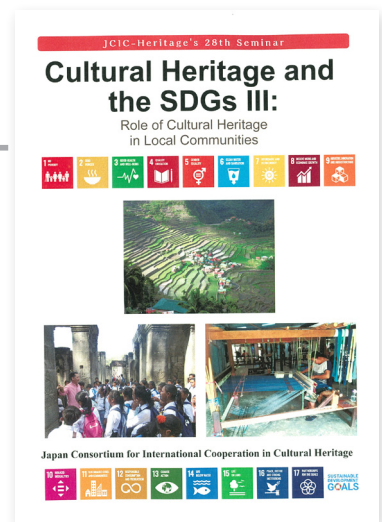
本冊子は、文化遺産国際協力コンソーシアムが令和3年度に行った国際協力調査「海域交流ネットワークと文化遺産」(令和2年度から継続)の最終報告書である。世界各地域の現状を把握するために行ったアンケート調査、ヒアリングの結果をもとに、各地域の状況について掲載している。日本語、2022年3月刊行、140ページ。

(文化遺産国際協力コンソーシアム事業の一環として刊行)

『Report on the 28th JCIC-Heritage Seminar "Cultural Heritage and the SDGs III: Roles of Cultural Heritage in Local Communities"』

本冊子は、2021(令和3)年1月31日に開催された第28回文化遺産国際協力コンソーシアム研究会(ウェビナー)「文化遺産とSDGs IIIー地域社会における文化遺産の役割を考えるー」の内容をまとめた報告書について、広く海外に発信するために英語版を作成したものである。英語、2022年3月刊行、42ページ。

(文化遺産国際協力コンソーシアム事業の一環として刊行)



『第29回文化遺産国際協力コンソーシアム研究会(ウェビナー)「文化遺産にまつわる情報の保存と継承～開かれたデータベースに向けて～」報告書』

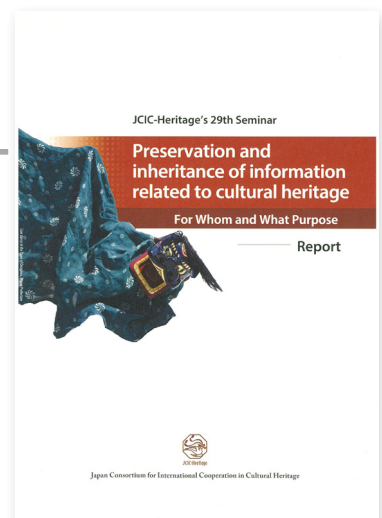
本冊子は、2021(令和3)年8月9日に開催された第29回文化遺産国際協力コンソーシアム研究会(ウェビナー)「文化遺産にまつわる情報の保存と継承～開かれたデータベースに向けて～」の内容をまとめた報告書である。日本語、2022年3月刊行、36ページ。

(文化遺産国際協力コンソーシアム事業の一環として刊行)

『Report on the 29th JCIC-Heritage Seminar "Preservation and inheritance of information related to cultural heritage-For Whom and What Purpose-"』

本冊子は、上記内容の英語版報告書である。英語、2022年3月刊行、36ページ

(文化遺産国際協力コンソーシアム事業の一環として刊行)



『令和3年度文化遺産国際協力コンソーシアムシンポジウム（ウェビナー）「海と文化遺産—海が繋ぐヒトとモノ—」報告書』

本冊子は、2021（令和3）年11月28日に開催された令和3年度文化遺産国際協力コンソーシアムシンポジウム（ウェビナー）「海と文化遺産—海が繋ぐヒトとモノ—」の内容をまとめた報告書である。日本語、2022年3月刊行、72ページ。
（文化遺産国際協力コンソーシアム事業の一環として刊行）

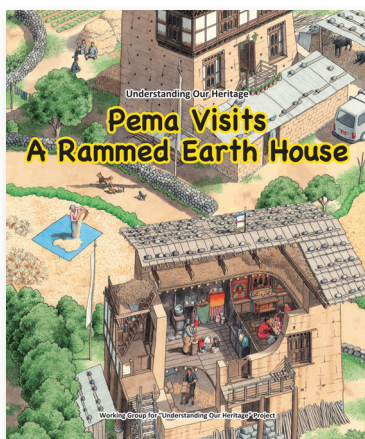


『第30回文化遺産国際協力コンソーシアム研究会（ウェビナー）「文化遺産×市民参画＝マルチアクターによる国際協力の可能性」報告書』

本冊子は、2022（令和4）年2月11日に開催された第30回文化遺産国際協力コンソーシアム研究会（ウェビナー）「文化遺産×市民参画＝マルチアクターによる国際協力の可能性」の内容をまとめた報告書である。日本語、2022年3月刊行、56ページ。
（文化遺産国際協力コンソーシアム事業の一環として刊行）

『ブータンの伝統的民家 西部中央編 ティンブー、プナカ、パロ、ハー』

ブータンの文化遺産保護関係者の伝統的民家に対する認識を高めることを目的として2年度に英語で刊行した民家建築の参考図書の日本語版。ブータン内務文化省文化局（DoC）との共同調査を通じて把握した、顕著な特徴をもつ同国西部地域所在の民家41件の解説を中心に、集落と民家に関する考察、民家の保存に向けた措置の提案、民家建築保存のためのワークショップの記録を収録。日本語、2022年3月刊行、238ページ。
（ブータン王国の歴史的建造物保存活用に関する拠点交流事業の一環として刊行）



『Understanding Our Heritage / Pema Visits A Rammed Earth House』

版築造の伝統的民家について、文化遺産としての重要性をブータンの社会に広く理解してもらうことを目的とした絵本。ブータンの中学校社会科の副教材とすることを前提に、ブータン内務文化省文化局（DoC）と共同で企画し、絵本作家の青山邦彦氏に作画を依頼して制作した。英語、2022年3月刊行、36ページ、DoCとの連名による刊行。
（ブータン王国の歴史的建造物保存活用に関する拠点交流事業の一環として刊行）

4. 個人の研究業績

秋山 純子 | AKIYAMA Junko (保存科学研究センター)

- (3 論文) ガラス外壁を有する博物館建造物における衝突野鳥の傾向分析と青色LEDライト、音声、植栽剪定などによる衝突対策の試み(木川りか、渡辺祐基、富松志帆、松尾美香、和泉田純子、秋山純子、大城戸博文、柿本大典、岡部海都)『環動昆』32(4) pp.155-169 21.10
- (3 論文) プレハブ式高気密高断熱収蔵庫におけるアセトアルデヒドの放散挙動の把握と換気量による低減(水谷悦子、中尾真梨子、秋山純子、芳賀文絵、佐野千絵)『保存科学』61 pp.43-55 22.3
- (5 学会発表) 特定波長域を遮光した光照射下における黄色系染料の変退色挙動(秋山純子、相馬静乃、佐野千絵) 日本文化財科学会第38回大会 Web開催 21.9.18
- (6 講演) 文化財所有者及び文化財保存展示施設設置者におけるウイルス除去・消毒作業に係る対応について 令和3年度公開承認施設担当者会議 Web開催 21.6.3
- (6 講義) 博物館におけるIPM活動 文化財修復を目指す人のための実践コース Web開催 21.11.1-30
- (6 司会) 第3回保存環境調査・管理に関する講習会—空気清浄化のための化学物質吸着剤— 第3回保存環境調査・管理に関する講習会 東京文化財研究所 22.1.31
- (7 所属学会) 日本文化財科学会、東アジア文化遺産保存学会、文化財保存修復学会
- (7 委員会等) 「法隆寺金堂壁画保存活用委員会」保存環境ワーキング・グループ専門委員、文化財保存修復学会理事、国立アイヌ民族博物館運営会議構成員、国立アイヌ民族博物館ワーキング会議構成員、文化財保存修復学会44回大会実行委員、文化財保存修復学会44回大会プログラム作成委員会

浅田 なつみ | ASADA Natsumi (アソシエイトフェロー)

- (1 共著) Yeshi Samdrup, Pema Wangchuk, Junko Mukai, Michiru Kanade, Yasunori Tsumura, Masahiko Tomoda, Ken Kanai, Kazuhiko Nishi, Natsumi Asada, Elif Berna Var *Understanding Our Heritage: Pema Visit A Rammed Earth House* TOBUNKEN, DoC MoHCA 36p 21.12
- (4 編集) (Ken Kanai, Natsumi Asada) *Understanding Our Heritage / Pema Visits A Rammed Earth House* 36p TOBUNKEN, DoC MoHCA 21.12
- (4 編集) (友田正彦、金井健、浅田なつみ) 『ブータンの伝統的民家西部中央編 ティンプー、プナカ、パロ、ハー』238p ブータン王国国内務文化省文化局、東京文化財研究所 22.3
- (7 所属学会) ICOMOS、都市史学会、日本建築学会

安倍 雅史 | ABE Masashi (文化遺産国際協力センター)

- (1 公刊図書) 「第6章 バハレーン ワーディー・アッ=サイル古墳群—ディルムンの起源を探る—」『オリエント古代の探求—日本人研究者が行く最前線—』(清岡央編) 中央公論新社 pp.135-156 21.4
- (1 公刊図書) 『謎の海洋王国ディルムン—メソポタミア文明を支えた交易国家の勃興と崩壊—』中央公論新社(中公選書) 228p 22.1
- (2 報告) 「20年を経てパーミヤーン大仏の破壊を振り返る」『文化遺産の世界Webサイト』 21.7
- (2 報告) 「ディルムンを掘る—バハレーン、ワーディー・アッ=サイル考古学プロジェクト—」『第29回西アジア発掘調査報告会報告集』日本西アジア考古学会 22.3
- (2 報告) 「カビール砂漠を超えたウルク文化—東部イラン、南ホラーサーン州のカレ・クブ遺跡の発掘調査—」(安倍雅史・ホセイン・アジジ・ハラナギ)『研究成果報告2021年度 都市文明の本質—古代西アジアにおける都市の発生と変容の学際的研究—』 pp.37-42 22.3
- (3 論文) Eastern Iran Prehistoric Archaeological Project: First Season of Archaeological Excavations at Kale Kub, South Khorasan Province (2018), Relative and Absolute Chronology (Mohammad Hossein Azizi Kharanashi, Masashi ABE, Sepideh Jamshidi Yeganeh and Afshin

Akbari) *Journal of Archaeological Studies* 12 (24) pp.127-151 21.6

- (4 連載) 「海外発掘調査の流儀—中東もてなしジュース—」、「海外発掘調査の流儀—古代人へ鎮魂の思い—」、「海外発掘調査の流儀—西アジア考古学 次世代へ—」、「海外発掘調査の流儀—現地住民に成果 いち早く—」『読売新聞』 21.6.16、6.23、6.30、7.7
- (4 記事) 「アフガンの人類遺産守れ」『読売新聞』 21.8.18
- (4 テレビ出演) 『国際報道2021 危機迫る東西文明の十字路』 NHK BS1 21.10.7
- (4 テレビ出演) 『News Room Tokyo』 NHK World 21.10.5
- (5 学会発表) Japanese Archaeologists' Activities for the Syrian Heritage The ARWA Heritage Forum オンライン 21.6.19
- (5 学会発表) Sixth Season of Excavations at Wadi al Sail, Bahrain (Masashi Abe, Akinori Uesugi, Kenji Okazaki, Randy Sasaki, Hiroo Kansha) 54th Seminar for Arabian Studies オンライン 21.7.3
- (5 学会発表) Spatial Analysis on Early Dilmun Burial Mounds in Bahrain (Akinori Uesugi, Yuji Yamaguchi, Nobuya Watanabe, Satoru Sugita, Masashi Abe, Takehiro Miki and Gregg M. Jamison) 54th Seminar for Arabian Studies オンライン 21.7.3
- (5 学会発表) 『カビール砂漠を超えたウルク文化—東部イラン、南ホラーサーン州カレ・クブ遺跡第2層出土の物質文化の研究—』(安倍雅史、ホセイン・アジジ・ハラナギ) 「日本西アジア考古学会第26回大会」 オンライン 21.7.4
- (5 学会発表) Preliminary Results of the Excavations at Kale Kub in South Khorasan Province, Eastern Iran (Masashi Abe, Hossein Azizi Kharanaghi) The Third International Conference on Archaeology of Southeastern Iran オンライン 21.12.4
- (6 発表) 『イラン・カレ・クブ考古学プロジェクト』「第1回文化遺産国際協力センター定例勉強会」 オンライン 21.4.22
- (6 講演) 『イラン・カレ・クブ遺跡考古学プロジェクト—最果ての南メソポタミア・ウルク文化の交易拠点の発見—』「オリエント古代の探求出版記念セミナー」 オンライン 21.5.30
- (6 講演) 「考古学における3Dドキュメンテーションの現状」『東京藝術大学文化財保存学専攻科学情報交換会2021』 オンライン 21.7.20
- (6 講演) Wadi al Sail Archaeological Project Bahrain National Museum Lecture Series オンライン 21.9.29
- (6 講演) 『ディルムン形成期・文明期の古墳群』「中東部族社会の起源第3回シンポジウム」 オンライン 22.2.5
- (6 講演) 『ワーディー・アッ=サイル古墳群出土のメソポタミア系土器』「基盤研究(S) 中東部族社会の起源第4回研究会」 オンライン 22.2.12
- (6 講演) The 8.2 ka Event and Re-microlithization in Southern Zagros Online International Conference for the Iranian Archaeological Webinar オンライン 22.2.19
- (6 講演) 『ディルムンを掘る—バハレーン、ワーディー・アッ=サイル考古学プロジェクト—』「第29回(2021年度)西アジア発掘調査報告会」 広島県民文化センター 22.3.13
- (7 所属学会) 日本オリエント学会、日本西アジア考古学会、the International Association for Archaeological Research in Western and Central Asia
- (7 委員会等) 日本西アジア考古学会企画役員、文化遺産国際協力コンソーシアム西アジア分科会委員、the International Association for Archaeological Research in Western and Central Asia Heritage Liaison Group, Editorial Board of Iranian Journal of Archaeology and Archaeological Sciences
- (8 教育) 東京藝術大学大学院美術研究科文化財保存学専攻システム保存学研究室修復材料学連携准教授

飯島 満 | IJIMA Mitsuru (特任研究員)

- (1 公刊図書) 『義太夫節浄瑠璃未翻刻作品集64 将門冠合戦』玉川

- 大学出版部 142p 22.2.25
- (3 論文) 文楽座一五〇年前史—文楽小屋から文楽座へ『国立文楽劇場第165回文楽公演解説書』 pp.20-21 独立行政法人日本芸術文化振興会 22.1.3
- (4 校閲)『義太夫節浄瑠璃未翻刻作品集63 前内裏島王城遷』 pp.13-103 玉川大学出版部 22.2.25
- (4 校閲)『義太夫節浄瑠璃未翻刻作品集66 柿本紀僧正旭車』 pp.13-138 玉川大学出版部 22.2.25
- (4 校閲)『義太夫節浄瑠璃未翻刻作品集67 萬葉女阿漕』 pp.13-124 玉川大学出版部 22.2.25
- (4 校閲)『義太夫節浄瑠璃未翻刻作品集68 歌枕棗棠花合戦』 pp.13-138 玉川大学出版部 22.2.25
- (4 校閲)『義太夫節浄瑠璃未翻刻作品集69 東鑑御狩巻』 pp.13-154 玉川大学出版部 22.2.25
- (7 所属学会) 楽劇学会、歌舞伎学会、日本演劇学会、日本近世文学会
- (7 委員会等) 文化審議会専門委員(文化財分科会)、日本芸術文化振興会(国立劇場)本館文楽公演専門委員会、芸術文化振興基金運営委員会、地域文化財総合活用推進事業に係る協力者会議、令和3年度「伝統芸能用具・原材料に関する調査事業」実施業務に係る技術審査委員会、令和4年度「邦楽普及拡大推進事業」に係る広報等推進業務に係る技術審査委員会

石村 智 | ISHIMURA Tomo (無形文化遺産部)

- (2 報告)「オセアニアにおける無形文化遺産保護条約の現状と課題」『日本オセアニア学会Newsletter』132 pp.1-11 22.3
- (2 報告)「マウイの釣針・ネズミのしっぽ：ポリネシア考古学における釣針研究の現状」『海洋考古学会第11回研究会資料集』 pp.55-65 海洋考古学会 21.11
- (3 論文)「パラオに沈んだ日本船」『図説 世界の水中遺跡』グラフィック社 pp.214-219 22.2
- (3 論文)「人類のオセアニア拡散にともなう芸術表現の変化について：アオテアロア（ニュージーランド）を例に」『心とアートの人類史(季刊考古学別冊36)』雄山閣 pp.53-60 22.3
- (3 論文)「無形文化遺産としてのカヌー文化」『モノ・コト・コトバの人類史：総合人類学の探究』雄山閣 pp.203-218 22.3
- (4 資料紹介) 石井雅子撮影歌舞伎舞台写真デジタルデータベース (1)『無形文化遺産研究報告』16 pp.147-157 22.3
- (5 学会発表) Lagoon as a port: Reconstructing topography and seascape of the past The Asia-Pacific Regional Conference on Underwater Cultural Heritage 2021 國立臺灣海洋大学(オンライン) 21.11.1
- (5 学会発表) 無形文化遺産としてのカヌー文化：近年の動向 日本オセアニア学会第39回研究大会 オンライン 22.3.17
- (6 発表) リモートオセアニアの初期居住民・ラピタ人の食と健康：貝塚出土の動物遺存体・出土人骨の安定同位体およびストレスマーカーの分析から 出ユーラシアの統合的人類史学 第4回食と栄養ユニット研究会 オンライン 21.7.30
- (6 発表) 趣旨説明 文化遺産国際協力コンソーシアムシンポジウム「海と文化遺産」文化遺産国際協力コンソーシアム(オンライン) 21.11.28
- (6 発表) 世界から見た Good Practice フォーラム 伝統芸能と新型コロナウイルス3「伝統芸能と新型コロナウイルス：Good Practice とは何か」東京文化財研究所 21.12.3
- (6 発表) Geoarchaeological information and cultural heritage disaster risk management: Cases in Japan ユネスコ・イコモス共催国際会議「Culture, Heritage and Climate Change (ICSM CHC)」オンライン 21.12.7
- (6 発表) ラピタ文化複合の斉一性の評価 出ユーラシアの統合的人類史学 第六回全体会議 オンライン 22.1.8
- (6 発表)「南海の文明：文明の崩壊と持続可能性について 金沢大学超然プロジェクト「古代文明の学際研究の世界的拠点形成」成果報告会「世界の古代文明を探る」金沢市文化ホール 22.3.19

- (6 司会) ディスカッション 文化遺産国際協力コンソーシアムシンポジウム「海と文化遺産」文化遺産国際協力コンソーシアム(オンライン) 21.11.28
- (6 パネリスト) アジア太平洋無形文化遺産研究センター(IRCI)研究者フォーラム「無形文化遺産研究の進展と課題：持続可能な未来に向けて」オンライン 21.10.29
- (6 パネリスト) 討論 フォーラム 伝統芸能と新型コロナウイルス3「伝統芸能と新型コロナウイルス：Good Practice とは何か」東京文化財研究所 21.12.3
- (6 パネリスト) アジア太平洋無形文化遺産研究センター(IRCI)国際シンポジウム「無形文化遺産の貢献—より良い学びと持続可能なまちづくりに向けて—」オンライン 21.12.21-22
- (7 所属学会) ICOMOS、考古学研究会、史学研究会、東南アジア考古学会、日本オセアニア学会
- (7 委員会等) 滋賀県草津市「青花紙保存継承懇話会」専門家委員、文化庁工芸技術記録映画「結城紬」制作監修委員
- (8 教育) 金沢大学人間社会環境研究科客員准教授

稲葉 政満 | INABA Masamitsu (客員研究員)

- (3 論文) Changes in the Degree of Degradation with Position of Painting Papers in Japanese Hanging Scrolls by Accelerated Ageing Using Open and Sealed Tube Methods (Kang LEE, Toshiharu ENOMAE and Masamitsu INABA) *Studies in Conservation*, doi.org/10.1080/00393630.2021.1956185 21.8
- (4 記事)「ネットワーク資料保存」安江さんとの思い出『ネットワーク資料保存』124 pp.9-10 21.6
- (5 学会発表) Application of pyrolysis-comprehensive two-dimensional gas chromatography to the study of paper-based artefacts (B. HAN, M. SABLIER, J. VIAL and M. INABA) The 19th ICOM-CC Triennial Conference (Virtual conference) 21.5.17-21
- (5 学会発表) Degradation behaviour of Japanese painting paper in naturally aged hanging scrolls (K. LEE, T. ENOMAE and M. INABA) The 19th ICOM-CC Triennial Conference (Virtual conference) 21.5.17-21
- (5 学会発表) 和紙の緑青焼けと裏打ち層の効果(貴田啓子、柏谷明美、稲葉政満、早川典子) マテリアルライフ学会第26回春期研究発表会 WEB大会 21.2.24
- (5 学会発表) 日本画掛軸から生成される揮発性有機化合物を用いた紙の自然劣化と加速劣化との比較(李暉、SABRIER, Michel、江前敏晴、稲葉政満) 文化財保存修復学会第43回大会 紙上開催 21.7.15
- (5 学会発表) ナノセルロース製造法を応用した修復用繊維材料の評価(貴田啓子、加瀬谷優子、半田昌規、稲葉政満、西田典由、藤本真人、殿山真史、小瀬亮太、岡山隆之) 文化財保存修復学会第43回大会 紙上開催 21.7.15
- (6 発表) 紙漿蒸煮薬劑對於手工竹紙の物理性質影響(鍾佳榮、稲葉政満、陳剛) 2021 中国文化大學美術學系《藝術創思實踐》國際學術檢討會 中国文化大學(台北市)WEB会議 21.6.2
- (6 発表) 和紙より優秀な“伝統韓紙”、耐久性は8000年?? 和紙文化研究会 月例会 21.2.19
- (7 所属学会) ICOM、ICOM-CC、特定非営利活動法人文化財保存支援機構、日本文化財科学会、文化財保存修復学会、マテリアルライフ学会、紙パルプ技術協会、和紙文化研究会
- (7 委員会等) 和紙文化研究会会長、Editorial board of Restaurator International Journal for the Preservation of Library and Archival Material、青梅市文化財保護審議会副会長、膠文化研究会運営委員、(公)美術文化振興協会 常務理事
- (8 教育) 昭和女子大学環境デザイン学部学位論文審査委員

犬塚 将英 | INUZUKA Masahide (保存科学研究センター)

- (3 論文) 蛍光X線分析によるキトラ古墳壁画の泥に覆われた部分の調査(犬塚将英、早川典子、紀芝蓮、他7名)『保存科学』61 pp.57-

- 65 22.3
- (3 論文) 文化財の2次元的な分光分析を行うためのハイパースペクトルカメラの性能評価 (紀芝蓮、犬塚将英) 『保存科学』61 pp.93-107 22.3
- (2 報告) 春日神社能装束類の科学分析調査 (紀芝蓮、高橋佳久、菊池理予、犬塚将英) 『春日神社文化財詳細調査』第2巻 pp.152-200 関市文化財保護センター 22.3
- (2 報告) 壁画調査記録 『キトラ古墳壁画修復報告書』 pp.74-80 東京文化財研究所 22.3
- (4 解説) 赤外線を利用した文化財の調査 『フォトリクスニュース』No.3 Vol.7 pp.109-113 日本応用物理学会 21.11
- (5 学会発表) Acetic acid emissions from traditional Japanese kiri-bako wooden boxes and their influence on lead (Tomoko Kotajima, Masahide Inuzuka) International Council of Museums Committee for Conservation 19th Triennial Conference Online 21.5.17-21
- (6 発表) 蛍光X線分析による泥に覆われたキトラ古墳壁画の調査 (犬塚将英、早川典子、紀芝蓮、他7名) 日本文化財科学会第38回大会 Web開催 21.9.18-19
- (6 発表) 壁画構成材料の乾湿による膨張、収縮の測定 (水谷悦子、犬塚将英、脇谷草一郎、前川佳文) 日本文化財科学会第38回大会 Web開催 21.9.18-19
- (6 発表) 虎塚古墳の壁画剥落片に形成された独特な微生物叢 (松野美由樹、片山葉子、犬塚将英、稲田健一、矢島國雄、佐藤嘉則) 日本文化財科学会第38回大会 Web開催 21.9.18-19
- (6 発表) 鉛金属の腐食と空気環境との関係についての調査事例 (犬塚将英、古田嶋智子、高橋佳久、紀芝蓮) 文化財保存修復学会第43回大会 紙上開催 21.7.15
- (6 発表) 常陸太田市・直隰洞の光環境と緑色生物 (朽津信明、犬塚将英) 文化財保存修復学会第43回大会 紙上開催 21.7.15
- (6 講義) 美術工芸品の科学調査 文化財保存修理講習会 文化庁 21.12.16
- (7 所属学会) IIC、日本建築学会、日本物理学会、日本文化財科学会、文化財保存修復学会
- (7 委員会等)「法隆寺金堂壁画保存活用委員会」壁画ワーキング・グループ材料調査班専門委員、ひたちなか市史跡保存対策委員、文化財の保存と公開における熱湿気環境WG委員、岩手県立博物館における文化財への不適切な行為事案に係る調査チームアドバイザー、文化財保存修復学会選挙管理委員会委員長
- (8 教育) 東京藝術大学大学院美術研究科文化財保存学専攻システム保存学研究室保存環境学連携教授

今石 みぎわ | IMAISHI Migiwa (無形文化遺産部)

- (3 論文) 近代における石鎚黒茶の生産と利用 『石鎚黒茶製造技術調査報告書』 pp.37-50 西条市教育委員会 22.3
- (4 記事) 箕一自然を編む知恵とわざ 『月刊みんぱく』527号 pp.16-17 国立民族学博物館 21.8
- (4 解説) 展示解説 箕のかたちー自然と生きる日本のわざ 『民具研究』162号 pp.64-66 日本民具学会 21.8
- (4 解説) 「木の花」の話ー山の神のケズリバナを中心に 『奈良県無形文化遺産ガイドブック 2022』 pp.12-13 奈良地域伝統文化保存協議会 22.3
- (6 講義) 日本における無形文化遺産ー多文化共生の観点から 講座多文化フォーラム 亜細亜大学 21.5.31
- (6 発表) 映像による記録作成とアーカイブ化にかかる実践的課題 歴博共同研究「映像による民俗誌の叙述に関する総合的研究」第1回研究会 リモート開催 21.6.12
- (6 発表) 箕の素材と加工 科研費基盤B「バスケタリーをめぐる植物生態と民族技術の文化人類学的研究」2021年度第2回研究会 リモート開催 21.6.19
- (6 講演) 祈りのかたち 日本と世界の削りかけ文化 第105回企画展「アイヌのくらしー時代・地域・さまざまな姿」講演会 群馬県立

博物館 22.2.12

- (6 発表) 民俗世界における樹木利用ー桜を中心に 第15回公開学術講座「樹木利用の文化ー桜をつかう、桜で奏でるー」 東京文化財研究所 22.3公開(リモート収録)
- (7 所属学会) 東北民俗の会、日本民具学会、日本民俗学会
- (7 委員会等) 石鎚黒茶製造技術調査委員会、岐阜市・関市長良川鶴飼総合調査専門委員会、国立民族学博物館共同研究員、国立歴史民俗博物館共同研究員、文化庁文化財部調査員、山形県文化財保護審議委員

ヴァル エリフ ベルナ | VAR Elif Berna (アソシエイトフェロー)

- (1 共著) Yesi Samdrup, Pema Wangchuk, Junko Mukai, Michiru Kanade, Yasunori Tsumura, Masahiko Tomoda, Ken Kanai, Kazuhiko Nishi, Natsumi Asada, Elif Berna Var *Understanding Our Heritage: Pema Visit A Rammed Earth House* TOBUNKEN, DoC MoHCA 36p 21.12
- (4 編集) (TOMODA Masahiko, KANAI Ken, VAR Elif Berna) *Exploring the Ancient Wooden Architecture in Mainland Southeast Asia* 201p Tokyo National Research Institute for Cultural Properties 22.3
- (4 編集) (友田正彦、金井健、ヴァル エリフ ベルナ) 『大陸部東南アジアの古代木造建築を考える』 199p 東京文化財研究所 22.3
- (4 記事) コンニチハニッポンー日本で文化財に関わる仕事をしている外国人2 『文化遺産の世界』 オンライン 21.6
- (3 論文) (ヴァル エリフ ベルナ、小林広英) トルコ・トラブゾンの農村地域における伝統住居の変容状況ーウスタンダル村とカラジャカヤ村を事例としてー『日本建築学会2021年度大会 (東海) 学術講演梗概集』 pp.79-80 21.9
- (6 講義) トルコの風土建築遺産等の保存に関する研究 東京藝術大学大学院美術研究科文化財保存学専攻システム保存学研究室【修復計画論】授業 オンライン 21.5.6
- (6 発表) トルコ・トラブゾンの農村地域におけるヴァナキュラー建築保存等に関する事例研究 第4回文化遺産国際協力センター定例勉強会 オンライン 21.10.26
- (7 所属学会) 日本建築学会、Chamber of Architects of Turkey
- (7 委員会等) 日本建築学会 比較居住文化小委員会

牛窪 彩絢 | USHIKUBO Saaya (アソシエイトフェロー)

- (2 報告) (前川佳文、牛窪彩絢) 『スタッコ装飾及び塑像に関する研究 令和3年度報告書』 69p 東京文化財研究所 22.3
- (3 論文) 琉球における「殯」の基礎的考察 『東洋文化研究』24 pp.35-78 学習院大学東洋文化研究所 22.3
- (6 発表) 琉球における「殯」の諸相 日本宗教学会第80回学術大会 オンライン 21.9.8
- (6 発表) 玉陵の「殯」ー琉球における「殯」の基礎的考察 第161回首里城研究会 首里城公園管理センター 22.3.12
- (7 所属学会) 日本民俗学会、文化財保存修復学会、日本文化人類学会、日本宗教学会

宇高 健太郎 | UDAKA Kentaro (客員研究員)

- (5 学会発表) 伝統的煤及び膠を用いた近似墨液インク並びに機械的料紙加工等を含む文化財リマスターシステムの開発 (宇高健太郎、寺師太郎、加藤清隆、平諭一郎、間瀬康夫) 文化財保存修復学会 第43回大会 紙上開催 21.7.15
- (6 講演) 膠の概要と関連資料等について 膠2021オンライン公開研究会 電子開催 21.11.27
- (7 所属学会) 文化財保存修復学会
- (7 委員会等) 膠文化研究会運営委員会

江村 知子 | EMURA Tomoko (文化財情報資料部)

- (3 論文) 太平記絵巻の制作工程についてー色注の考察を中心に 『国立歴史民俗博物館 研究報告』230 pp.15-37 21.12
- (3 論文) 「国立歴史民俗博物館蔵「南蛮屏風」の表現について 『国立歴

- 史民俗博物館 研究報告』230 pp.75-92 21.12
- (4 資料紹介) 新出の住吉廣行筆「酒呑童子絵巻」(ライプツィヒ民族学博物館蔵)について 『美術研究』435 pp.49-71 22.1
- (5 学会発表) Building Bridges: Working Together to Disseminate Japanese Art Literature (研究の架橋: 日本美術資料の情報発信についての国際協働) (Annie Rana, Emura Tomoko) 49th Annual Congerence, Art Libraries Society of North America オンライン開催 21.5.13
- (6 発表) 新出の住吉廣行筆「酒呑童子絵巻」(ライプツィヒ民族学博物館蔵)について 令和3年度第2回文化財情報資料部研究会 東京文化財研究所 21.5.25
- (6 講演) 海を渡った住吉派絵画—ライプツィヒ民族学博物館蔵「酒呑童子絵巻」を中心に「土佐派と住吉派 其の二—やまと絵の展開と流派の個性—」展・記念講演会 和泉市久保惣記念美術館 21.10.16
- (6 講演) A Great Tale of Exterminating Ogres: Shuten-dōji Handscrolls of GRASSI Museum für Völkerkunde zu Leipzig (鬼退治のものがたり—ライプツィヒ民族学博物館所蔵酒呑童子絵巻について) Exhibition《Love, Fight, Feast—the World of Japanese Narrative Art》Symposium オンライン参加 (リートベルク美術館) 21.10.23
- (6 発表) 田中一松資料にみるコレクション形成の足跡—個人コレクターとの親交 オンラインシンポジウム日本美術の記録と評価—美術史家の調査ノート 22.1.8
- (7 所属学会) アート・ドキュメンテーション学会、美術史学会
- (7 委員会等) 国立歴史民俗博物館運営委員、国際交流基金・欧米ミュージアム基盤整備支援事業評価委員

大川 柚佳 | OKAWA Yuka (アソシエイトフェロー)

- (4 編集) (加藤雅人、五木田まきは、大川柚佳) 『国際研修「紙の保存と修復」リモート開催の可能性』35p 東京文化財研究所 22.3
- (4 校閲) (加藤雅人、五木田まきは、大川柚佳) 『国際研修「紙の保存と修復」リモート開催の可能性』35p 東京文化財研究所 22.3
- (4 校閲) (加藤雅人、清水綾子、片淵奈美香、大川柚佳) 『在外日本古美術品保存修復協力事業 親鸞聖人絵伝 No.2015-4』146p 東京文化財研究所 22.3
- (7 所属学会) Institute of Conservation、文化財保存修復学会、The British Association of Paintings Conservator-Restorers

大河原 典子 | OKAWARA Noriko (客員研究員)

- (2 報告) 日本画技法の研究—絵絹に関する彩色技法と表現の変遷—『鎌倉女子大学学術研究所所報』22 pp.53-62 22.3
- (4 連載) 桜を描く流儀 『読売新聞』(関東版夕刊) 読売新聞社 21.4
- (6 講習会) 文化財講座 鎌倉女子大学社会人講座 オンライン 21.11
- (7 所属学会) 日本美術院、文化財保存修復学会
- (8 教育) 鎌倉女子大学児童学部児童学科准教授

岡田 健 | OKADA Ken (客員研究員)

- (2 報告) 文化財レスキューから防災ネットワークへ—文化財防災センター設置の意義—『月刊文化財』691 pp.16-18 第一法規 21.4.1
- (4 編集) 『文化財の放射線対策ガイドブック2021』(監修/佐野千絵、編集/岡田健、内藤百合子) 独立行政法人国立文化財機構文化財防災センター 21.12.1
- (4 記事) テーブルトーク/文化財防災センターの立ち上げに携わった奈良大教授 岡田健さん 『朝日新聞』(関西版) 21.9.16
- (4 記事) 特集/「文化財防災センター」の本部がある奈良、文化財防災や文化財レスキューのマネジメント専門家として活動する、奈良大学・岡田健さんに聞く 奈良経済新聞(web版) 22.01.23
- (6 講演) 中国三大石窟と日本古代の仏教美術 奈良大学1日・短期講習会「奈良の歴史再発見—仏教美術を学ぶ—」近鉄文化サロン阿倍野 21.11.20
- (6 発表) 平泉の彼岸と此岸の造形に係る比較研究(その二) 地域全体を見る—山西省の寺観建築の立地について 令和3年度「第2回平泉

- 学フォーラム」ホテル武蔵坊(岩手県平泉町)リモート 22.2.6
- (6 講義) 被災ミュージアムの実情と防災対策 多摩美術大学美術館/博物館実習/レクチャー実習 リモート 21.9.12
- (6 講義) 中国龍門石窟の初唐造像(二)—龍門と長安 東京藝術大学保存修復彫刻研究室集中講義 リモート 21.12.24
- (6 発表) 文化財防災が映し出す社会の多様な課題 日本学術会議史学委員会文化財の保護と活用に関する分科会(参考人招致) リモート 22.3.30
- (7 所属学会) 東アジア文化遺産保存学会、美術史学会、文化財保存修復学会
- (7 委員会等) 東京都文化財保護審議会、法隆寺金堂壁画保存活用委員会ワーキング・グループ美術史班
- (8 教育) 多摩美術大学美術館博物館実習講座非常勤講師、東京藝術大学大学院美術研究科非常勤講師

小野 真由美 | ONO Mayumi (文化財情報資料部)

- (7 所属学会) デジタルアーカイブ学会、美術史学会、ADADA

小山田 智寛 | OYAMADA Tomohiro (文化財情報資料部)

- (2 報告) 『日本美術年鑑』所載物故者記事データベースの活用について 人名による検索と関連データの表示について 『デジタルアーカイブ学会誌』5 (s2) pp.168-171 21.12
- (5 学会発表) 『日本美術年鑑』所載物故者記事データベースの活用について 人名による検索と関連データの表示について DAフォーラム(中間研究発表会) オンライン開催 21.12.19
- (6 発表) WordPressの運用について—7年目のWordPress— WordCamp Japan 2021 オンライン開催 21.6.26
- (7 所属学会) アート・ドキュメンテーション学会、デジタルアーカイブ学会、美学会

片淵 奈美香 | KATAFUCHI Namika (アソシエイトフェロー)

- (3 論文) 初期合成染料が用いられた着物地の光による変退色—色彩画像解析を用いた評価法の検討—(片淵奈美香、森俊夫、谷田貝麻美子) 『保存科学』61 pp.79-92 22.3
- (4 編集) (加藤雅人、清水綾子、片淵奈美香) 『在外日本古美術品保存修復協力事業 親鸞聖人絵伝 No.2015-4』146p 東京文化財研究所 22.3
- (4 校閲) (加藤雅人、清水綾子、片淵奈美香、大川柚佳) 『在外日本古美術品保存修復協力事業 親鸞聖人絵伝 No.2015-4』146p 東京文化財研究所 22.3
- (6 発表) 明治期の着物地と初期合成染料 第2回文化遺産国際協力センター定例勉強会 オンライン 21.6.25
- (7 所属学会) 文化財保存修復学会

片山 葉子 | KATAYAMA Yoko (客員研究員)

- (1 共著) Chapter 2. Microbiota and biochemical processes involved in biodeterioration of cultural heritage and protection. Ji-Dong Gu, Yoko Katayama *Microorganisms in the Deterioration and Preservation of Cultural Heritage*. Springer, Cham pp.37-58 21.5
- (2 報告) 4.3 Microbiological Surveys/4.3 微生物学調査 (Katayama Yoko, Someya Takeshi, Gu Ji-Dong/片山葉子、染谷孝、顧繼東) 『Technical Report on the Survey of Angkor Monument 2016-2021/アンコール遺跡調査報告書』 pp.115-121 Japanese Government Team for Safeguarding Angkor/日本国政府アンコール遺跡救済チーム 2021.12.
- (3 論文) Fungal carbonyl sulfide hydrolase of *Trichoderma harzianum* strain THIF08 and its relationship with clade D β -carbonic anhydrases. (Yoshihito Masaki, Ryuka Iizuka, Hiromi Kato, Yuka Kojima, Takahiro Ogawa, Makoto Yoshida, Yasuhiko Matsushita, Yoko Katayama) *Microbes and Environments*, 36 (2) ME20058 21.2
- (3 論文) Direct comparison of bacterial communities in soils

- contaminated with different levels of radioactive cesium from the first Fukushima nuclear power plant accident. (Ihara Hideyuki, Kumagai Ayako, Hori Tomoyuki, Nanba Kenji, Aoyagi Tomo, Takasaki Mitsuru, Katayama Yoko) *Science of the Total Environment*, 756 143844 21.2
- (3 論文) The active microbes and biochemical processes contributing to deterioration of Angkor sandstone monuments under the tropical climate in Cambodia – A review. (Li Jing, Deng Maocheng, Gao Lin, Katayama Yoko, Gu Ji-Dong.) *Journal Cultural Heritage*, 47 218-226 21.1
- (3 論文) Increase in sedimentary organic carbon with a change from hypoxic to oxic conditions. (Mukseet Mahmood, Shunsuke Taki, Satoshi Nakai, Takehiko Gotoh, Wataru Nishijima, Akira Umehara, Tomo Aoyagi, Yuya Sato, Tomoyuki Hori, Yoko Katayama, Reka Hajdu-Rahkama, Jaakko A Puhakka.) *Marine Pollution Bulletin*, 168 112397 21.7
- (3 論文) Nitrate-driven trophic association of sulfur-cycling microorganisms in tsunami-deposited marine sediment revealed by high-sensitivity ¹³C-bicarbonate probing. (Tomo Aoyagi, Yoko Katayama, Hidenobu Aizawa, Mitsuru Takasaki, Tomoyuki Hori) *Environmental Science & Technology*, 55 8410-8421 21.6
- (3 論文) An internal recycling mechanism between ammonia/ammonium and nitrate driven by ammonia-oxidizing archaea and bacteria (AOA, AOB, and Comammox) and DNRA on Angkor sandstone monuments (Xinghua Ding, Wensheng Lan, Yiliang Li, Aixin Yan, Yoko Katayama, Keisuke Koba, Akiko Makabe, Keitaro Fukushima, Midori Yano, Yuji Onishi, Qinya Ge, Ji-Dong Gu.) *International Biodeterioration & Biodegradation*, 165 105328 21.11
- (5 学会発表) 劣化した焼成煉瓦における微生物調査 (河崎衣美、片山葉子、松井敏也、結城雅則、川本真由美) 日本文化財科学会第38回大会 Web開催 21.9.18-19
- (5 学会発表) 虎塚古墳の壁画剥落片に形成された独特な微生物叢 (松野美由樹、片山葉子、犬塚将英、稻田健一、矢島國雄、佐藤嘉則) 日本文化財科学会第38回大会 Web開催 21.9.18-19
- (5 学会発表) 糸状菌の硫黄代謝におけるガス状硫化カルボニルを介した代謝系に関する研究 (飯塚瑠翔、小坂優介、正木啓仁、吉田誠、片山葉子、大津巖生) 第37回日本木材保存協会年次大会 Web開催 21.5.25-26
- (5 学会発表) 糸状菌における気体状硫化カルボニルを基質とする硫黄獲得経路に関する研究 (飯塚瑠翔、正木啓仁、小嶋由香、吉田誠、片山葉子、大津巖生) 第72回日本木材学会大会 Web開催 22.3.15-17
- (7 所属学会) 日本土壌微生物学会、日本微生物生態学会、日本水環境学会、日本環境科学会、日本生化学会、日本微生物資源学会、日本農芸化学会、環境バイオテクノロジー学会、ASM、ISME
- (7 委員会等) 経済産業省産業構造審議会臨時委員、公益財団法人クリタ水・環境科学振興財団評議員・選考委員、認定NPO法人富士山測候所を活用する会理事
- (8 教育) 香港大学理学部学位取得審査外部審査員

加藤 雅人 | KATO Masato (文化遺産国際協力センター)

- (2 報告) II-2 リモート研修の検討 『国際研修「紙の保存と修復」リモート開催の可能性』 pp.25-35 東京文化財研究所 22.3
- (4 編集) (加藤雅人、五木田まきは、大川柚佳) 『国際研修「紙の保存と修復」リモート開催の可能性』 35p 東京文化財研究所 22.3
- (4 校閲) (加藤雅人、五木田まきは、大川柚佳) 『国際研修「紙の保存と修復」リモート開催の可能性』 35p 東京文化財研究所 22.3
- (4 編集) (加藤雅人、清水綾子、片渕奈美香) 『在外日本古美術品保存修復協力事業 親鸞聖人絵伝 No.2015-4』 146p 東京文化財研究所 22.3
- (4 校閲) (加藤雅人、清水綾子、片渕奈美香、大川柚佳) 『在外日本古

- 美術品保存修復協力事業 親鸞聖人絵伝 No.2015-4』 146p 東京文化財研究所 22.3
- (4 翻訳) 1 修復報告 (加藤雅人、清水綾子) 『在外日本古美術品保存修復協力事業 親鸞聖人絵伝 No.2015-4』 pp.6-92 東京文化財研究所 22.3
- (3 論文) 2 表装の保存と修復 2.1 基本方針 『在外日本古美術品保存修復協力事業 親鸞聖人絵伝 No.2015-4』 pp.94-98 東京文化財研究所 22.3
- (6 講義) 紙の基礎 国際研修におけるIT技術導入のための実証実験 東京文化財研究所(オンライン) 21.9.1
- (6 講義) 紙の保存と修復 保存修復科講義 東洋美術学校 21.5.15-6.12
- (6 講義) 修理報告書について学ぶ 文化財保存修復学科「西洋絵画修復演習」 東北芸術工科大学(オンライン) 21.7.23
- (7 所属学会) 日本文化財科学会、日本木材学会、文化財保存修復学会
- (8 教育) 東洋美術学校保存修復科非常勤講師、東北芸術工科大学芸術学部客員教授

金井 健 | KANAI Ken (文化遺産国際協力センター)

- (3 論文) 近現代建造物に適応した文化財保存理念の展開に向けた基礎的研究(その1): 文化財保護法下における「文化財」概念の創出と変容 『日本建築学会計画系論文集』 86 pp.1804-1814 日本建築学会 21.6
- (2 報告) 序文: 本書作成の背景、アジアにおける木造建築文化の地域性と普遍性 『大陸部東南アジアの古代木造建築を考える』 pp. iii -v 東京文化財研究所 22.3
- (2 報告) FOREWORD: Background of this Book, Regional and Universal Features of the Wooden Architectural Culture in Asia (KANAI Ken) *EXPLORING THE ANCIENT WOODEN ARCHITECTURE IN MAINLAND SOUTHEAST ASIA*, pp. iii -v TOBUNKEN 22.3
- (4 編集) (友田正彦、金井健、ヴァルエリフ ベルナ) 『大陸部東南アジアの古代木造建築を考える』 199p 東京文化財研究所 22.3
- (4 編集) (TOMODA Masahiko, KANAI Ken, VAR Elif Berna) *EXPLORING THE ANCIENT WOODEN ARCHITECTURE IN MAINLAND SOUTHEAST ASIA*, 199p TOBUNKEN 22.3
- (4 編集) (友田正彦、金井健、浅田なつみ) 『ブータンの伝統的民家西部中央編 ティンブー、プナカ、パロ、ハー』 238p 東京文化財研究所、ブータン内務文化省文化局 22.3
- (4 編集) (Ken Kanai, Natsumi Asada) *Understanding Our Heritage / Pema Visits A Rammed Earth House*, 36p TOBUNKEN, DoC MoHCA 21.12
- (4 編集) 『伊藤延男資料目録』 55p 東京文化財研究所 22.3
- (4 記事) 「物故者(令和元年) 川崎清」 『日本美術年鑑』令和元年版 p.512 東京文化財研究所 21.5
- (6 発表) 建築遺産における写真の役割 ACCU奈良事務所別研修(インドネシア) オンライン 21.10.14
- (6 講演) 文化財保護行政の仕組みと実務一有形文化財(建造物)の場合ー 科学研究費基盤研究: 将来世代への「資源」継承のための財産法理論の再構築 研究会 京都大学(オンライン) 21.12.18
- (6 司会) 研究会: 考古学と国際貢献: イスラエルの考古学と文化遺産 東京文化財研究所(オンライン) 22.2.20
- (6 司会) ブータン内務文化省文化局合同調査会: ブータン中部及び東部地域の伝統的民家の成立背景と建築的特徴 東京文化財研究所(オンライン) 22.3.7
- (7 所属学会) ICOMOS、日本建築学会、日本遺跡学会
- (7 委員会等) 旧長崎英国領事館修理委員会、長崎市伝統的建造物群保存審議会、旧佐世保無線電信所(針尾送信所)施設整備検討委員会、常願寺川砂防施設(本宮堰堤)保存管理計画検討委員会

鎌田 紗弓 | KAMATA Sayumi (無形文化遺産部)

- (3 論文) 「明治前期東京の歌舞伎囃子方一劇場出勤動向および共演関

- 係の解明に向けてー』『無形文化遺産研究報告』16 pp.41-85 22.3
- (4 解説)『国立劇場歌舞伎音楽既成者研修発表会 第二十三回 音の会』pp.2-5 独立行政法人日本芸術文化振興会 21.8
- (4 解説)『書評 前島美保著『江戸中期上方歌舞伎囃子方と音楽』』『東洋音楽研究』86 pp.77-81 東洋音楽学会 21.8
- (4 編集)(鎌田紗弓、齋藤百萌、仲辻真帆)『東京藝術大学音楽学部 大学史料室のあゆみ:記録、記憶、想いを受け継ぐ』東京藝術大学音楽学部大学史料室 21.9
- (6 発表)「新型コロナウイルス禍における伝統芸能支援の現状」(鎌田紗弓、前原恵美)【シリーズ】無形文化遺産と新型コロナウイルスフォーラム3『伝統芸能と新型コロナウイルス Good Practice とは何かー』東京文化財研究所 21.12.3
- (7 所属学会)楽劇学会、歌舞伎学会、東洋音楽学会、The International Council for Traditional Music、European Seminar in Ethnomusicology、日本音楽学会

間舎 裕生 | KANSHA Hiroo (アソシエイトフェロー)

- (3 論文)「はざま」としての南レヴァントー後期青銅器時代〜鉄器時代Ⅰ期『古代文化』73(4) pp.58-72 22.3
- (6 発表) A Symbolic Gate of Tel Rekhes?: In the Context of the Late Bronze-Early Iron Age in the Lower Galilee and Jezreel Valley JPS-ISF Research, On-Line Colloquium on the Archaeology of Northern Israel, "Between Tel Rekhes and Horvat Tevet: New Insights on Connectivity in the Eastern Jezreel Valley during the Late Bronze and Early Iron Ages" online 21.11.25
- (6 講演)日本の調査隊によるイスラエルの考古学調査の歴史 研究会「考古学と国際貢献:イスラエルの考古学と文化遺産」東京文化財研究所(オンライン) 22.02.20
- (6 パネリスト)考古学と国際貢献(ゼエヴ・マルガリート、ドロール・ベン・ヨセフ、長谷川修一、岡田真弓、間舎裕生)研究会「考古学と国際貢献:イスラエルの考古学と文化遺産」東京文化財研究所(オンライン) 22.02.20
- (7 所属学会)日本オリエント学会、日本建築学会、日本西アジア考古学会、文化財保存修復学会、三田史学会

橘川 英規 | KIKKAWA Hideki (文化財情報資料部)

- (1 共著)「平成時代の洋画年表」平成の洋画:1989-2019 次代への架け橋 美術年鑑社 pp.421-434 21.6
- (1 共著)「1951年の松澤有:RATIの会の疾走、詩から総合芸術へ」生誕100年松澤有 長野県立美術館 pp.67-68 22.3
- (4 記事)「物故者」加藤好弘、上前智祐、小杉武久、堀尾貞治、水沼啓和『日本美術年鑑』令和元年版 pp.499、506-507、525-526、528、533 21.5
- (6 発表)松澤有によるアーカイブ・プロジェクト Data Center of Contemporary Art (DCCA)について 令和3年度第9回文化財情報資料部研究会「松澤有アーカイブズに関する研究会」東京文化財研究所 22.3.17
- (7 所属学会)アート・ドキュメンテーション学会

朽津 信明 | KUCHITSU Nobuaki (保存科学研究センター)

- (3 論文)文化財としての自然史資料の現地保存『保存科学』61 pp.13-31 22.3
- (3 論文)論文はどのように書かれるべきか『文化財保存修復学会誌』65 pp.51-60 22.3
- (5 学会発表)常陸太田市・直牒洞の光環境と緑色生物(朽津信明、犬塚将英)文化財保存修復学会第43回大会 紙上開催 21.7.15
- (5 学会発表)過去の写真・三次元データを用いた薬師堂石仏の崩落の検証(白石明香、朽津信明)文化財保存修復学会第43回大会 紙上開催 21.7.15
- (5 学会発表)新宮市・九重の土砂災害慰霊碑の三次元印刷(朽津信明、

白石明香、藤隆宏、後誠介、柳沼由可子、西山賢一)日本文化財科学会第38回大会 Web開催 21.9.19

- (5 学会発表)和歌山県新宮市九重地区で発生した土砂災害とその伝承(西山賢一、後誠介、朽津信明、藤隆宏)日本応用地質学会2021年度研究発表会 オンライン開催 21.10.14
- (5 学会発表)天草市・アンモナイト館における化石の現地保存とその評価(朽津信明、白石明香、廣瀬浩司)日本応用地質学会2021年度研究発表会 オンライン開催 21.10.14-15
- (7 所属学会)日本応用地質学会、日本地質学連合、日本地質学会、日本文化財科学会、文化財保存修復学会
- (7 委員会等)特別史跡王塚古墳保存活用計画策定委員会委員、清戸迫横穴保存委員会委員、臼杵磨崖仏保存修理査査委員、史跡下藤キリシタン墓地保存活用計画策定委員会委員、大悲山石仏保存修理指導委員会委員、重要文化財羅漢寺石仏防災施設整備事業、「通潤橋」保存活用検討委員会委員、大野窟古墳の復旧方法等に対する意見聴取委員会委員、史跡吉見百穴保存活用計画検討委員会委員、史跡屋形古墳群整備基本計画策定委員会委員、後閑3号墳及び下増田上田中1号墳保存活用計画策定委員会委員、築瀬子塚古墳保存活用計画策定委員会委員、史跡原城跡、日野江城跡専門委員会委員、嘉島町史跡保存整備検討委員会委員、長崎市出島史跡整備審議会委員、高島炭鉱整備活用委員会委員、金沢市石製文化財保存検討委員会委員、熊野磨崖仏 附 本宮磨崖仏及び鍋山磨崖仏保存活用計画策定検討委員会委員
- (8 教育)東京藝術大学大学院美術研究科文化財保存学専攻システム保存学研究室保存環境学連携教授、東京大学非常勤講師

久保田 裕道 | KUBOTA Hiromichi (無形文化遺産部)

- (2 報告)無形文化遺産に関わる情報の記録と活用について『第29回文化遺産国際協力コンソーシアム研究会報告書』22.3
- (3 論文)無形文化遺産としての「生活文化」『無形文化遺産研究報告』16 22.3
- (4 解説)東ブータンのヤクの踊り 世界無形文化遺産フォーラムプログラム 21.8
- (4 連載)ブータンの獅子舞『神社新報』6月14日号 21.6.14
- (4 連載)沢沢栄一が愛した獅子舞『神社新報』9月13日号 21.9.13
- (4 連載)女神の禁忌『神社新報』12月13日号 21.12.13
- (4 連載)酒と無形文化遺産『神社新報』3月21日号 22.3.21
- (5 学会発表)民俗芸能の体系的把握を目的とした芸態研究の可能性 民俗芸能学会大会 早稲田大学 21.11.14
- (6 発表)Diversity in intangible cultural heritage as seen through lion dances Unesco Mongolian National Commission / ichcap オンライン 21.9.10
- (6 パネリスト)無形文化遺産に関わる情報の記録と活用について 文化遺産国際協力コンソーシアム研究会 オンライン 21.8.9
- (6 講演)日本人の民間信仰〜その起源と八百万の神たち【前編】森羅万象、あらゆるものへの祈りと感謝 令和3年度公民館東分館市民講座 小金井市公民館東分館 21.12.11
- (6 講演)日本人の民間信仰〜その起源と八百万の神たち【後編】季節の風習にみる、祖霊信仰とマレビト信仰 令和3年度公民館東分館市民講座 小金井市公民館東分館 21.12.18
- (6 講義)民俗芸能のカタとカタチ 儀礼文化講座 儀礼文化学会 21.5.9
- (6 公演)解説 第63回関東ブロック民俗芸能大会 山梨県立県民文化ホール 21.11.7
- (6 公演)方相氏四方舞解説 第53回東京都民俗芸能大会 練馬文化センター 22.3.26
- (6 司会)総合討議(映像記録の力ー危機を乗り越えるためにー)(森本仙介、村上忠喜、川村清志、関孝夫、石山祥子、谷部真吾、大島信彦、久保田裕道)第16回無形民俗文化財研究協議会 東京文化財研究所 21.12.17
- (6 パネリスト)東ブータンのヤクの踊り解説/トークセッションモ

デレーター 世界無形文化遺産フォーラム ヒューリックホール
東京 21.8.1

(7 所属学会) 静岡県民俗学会、日本民俗学会、民俗芸能学会、儀礼文化学会、日本ブータン学会

(7 委員会等) 文化審議会無形文化遺産部会臨時委員、山梨県文化財保護審議会委員、神奈川県民俗芸能記録保存調査企画調整委員会委員、千葉県博物館資料審査委員会委員、東京都民俗芸能大会実行委員会委員、島根県古代文化センター客員研究員、静岡市文化財保護審議会委員、武蔵野市文化財保護委員、京都芸術センター伝統芸能文化創成プロジェクト推進会議委員、公益社団法人全日本郷土芸能協会理事、一般財団法人日本青年館第69回全国民俗芸能大会企画委員、ポーラ伝統文化振興財団伝統文化ポーラ賞選考委員

倉島 玲央 | KURASHIMA Reo (保存科学研究センター)

(2 報告) 白竹の一次加工についての報告 『第14回東京文化財研究所無形文化遺産部公開学術講座「竹材と日本の伝統的な管楽器と竹材」報告書』 pp.30-42

(3 論文) Assessing the Interaction of Commonly Used Wood Adhesives and Fillers in Conservation for Hardwood and Softwood, and Their Behavior in Monsoon Conditions, Cindy Shin Yee Lau, Noriko Hayakawa, and Reo Kurashima AIC Wooden Artifacts Group Postprints, Virtual Meeting, 2021

(4 編集) 令和3年度「美術工芸品保存修理用具・原材料調査事業」報告書 東京文化財研究所保存科学研究センター 22.3

(5 学会発表) Characteristics of lacquer coating films extracted from *Gluta usitata* before and after UV irradiation (KURASHIMA Reo and HAYAKAWA Noriko) ICOM-CC 19th Triennial Conference Virtual conference 21.5.17-21

(5 学会発表) タンパク質を混合した漆塗膜の表面状態と機械的強度の関係 (倉島玲央、早川典子) 文化財保存修復学会第43回大会 紙上開催 21.7.15

(5 学会発表) 多変角測色計による貝類切片の分光分析 (倉島玲央、早川典子、小林公治) 日本文化財科学会第38回大会 Web開催 21.9.18-19

(6 講義)「実験器具・薬品の取り扱い」文化財修復技術者のための科学知識基礎研修 (令和3年) 東京文化財研究所 21.9.30

(7 所属学会) 高分子学会、日本文化財科学会、文化財保存修復学会、漆を科学する会

(7 委員会等) 保存修復学会編集委員会委員

黒崎 夏央 | KUROSAKI Natsuo (アソシエイトフェロー)

(7 所属学会) 仏教芸術学会、成城美学美術史学会

五木田 まきは | GOKITA Makiha (アソシエイトフェロー)

(2 報告) I 実証実験の記録 『国際研修「紙の保存と修復」リモート開催の可能性』 pp.2-18 東京文化財研究所 22.3

(2 報告) II-1 対面研修とオンライン研修の比較 『国際研修「紙の保存と修復」リモート開催の可能性』 pp.20-24 東京文化財研究所 22.3

(4 編集) (加藤雅人、五木田まきは、大川柚佳) 『国際研修「紙の保存と修復」リモート開催の可能性』 35p 東京文化財研究所 22.3

(4 校閲) (加藤雅人、五木田まきは、大川柚佳) 『国際研修「紙の保存と修復」リモート開催の可能性』 35p 東京文化財研究所 22.3

(6 講義) 博物館展示の技術と方法 金沢大学(オンライン) 21.4.30

(6 講義) 美術館の展示 金沢大学(オンライン) 21.5.21

(6 講義) 地域における博物館:地域博物館とエコミュージアム 金沢大学(オンライン) 21.6.18

(6 講義) コパンデジタルミュージアム 金沢大学(オンライン) 21.7.2

(6 発表) マヤ地域の文化遺産と地域社会 東京文化財研究所令和3年度第4回総合研究会 東京文化財研究所 21.11.3

(7 所属学会) 古代アメリカ学会、日本ラテンアメリカ学会、文化財保存修復学会

古田嶋 智子 | KOTAJIMA Tomoko (客員研究員)

(3 論文) 平面形のアイヌ民族資料を対象としたX線CTによる構造調査の有効性ー樹皮衣・木綿衣・ござを中心としてー(大江克己、古田嶋智子、北嶋由紀、八幡巴絵、中井貴規) 『北海道民族学』18 北海道民族学会 22.3

(5 学会発表) Acetic acid emissions from traditional Japanese *kiri-bako* wooden boxes and their influence on lead (Tomoko Kotajima, Masahide Inuzuka) International Council of Museums-Committee for Conservation 19th Triennial Conference Online 21.5.17-21

(5 学会発表) 国立アイヌ民族博物館 開館から1年間の展示室および展示ケースの温湿度推移(古田嶋智子、大江克己、霜村紀子、田村将人、佐々木史郎) 文化財保存修復学会第43回大会 紙上開催 21.7.15

(5 学会発表) 国立アイヌ民族博物館の開館に伴う展示環境の整備 (大江克己、赤田昌倫、古田嶋智子、霜村紀子、田村将人、佐々木史郎) 文化財保存修復学会第43回大会 紙上開催 21.7.15

(5 学会発表) 国立アイヌ民族博物館の新造展示ケースの有機酸及びアンモニア濃度の推移について(大江克己、赤田昌倫、古田嶋智子、霜村紀子、田村将人、佐々木史郎) 文化財保存修復学会第43回大会 紙上開催 21.7.15

(5 学会発表) 鉛金属の腐食と空気環境との関係についての調査事例 (大塚将英、古田嶋智子、高橋佳久、紀芝連) 文化財保存修復学会第43回大会 紙上開催 21.7.15

(5 学会発表) X線CT装置によるアイヌ民族資料「樹皮衣」・「木綿衣」の模様の構造(大江克己、北嶋由紀、八幡巴絵、古田嶋智子、霜村紀子) 日本文化財科学会第38回大会 Web開催 21.9.18-19

(5 学会発表) 陸前高田市立博物館所蔵津波被災資料の安定化処理改善のための研究ー古書の含有する塩化物量ー(佐野千絵、林美木子、内田優花、古田嶋智子、浅川崇典、熊谷賢) 日本文化財科学会第38回大会 Web開催 21.9.18-19

(7 所属学会) ICOM-CC、室内環境学会、日本建築学会、文化財保存修復学会

後藤 知美 | GOTO Tomomi (文化財防災センター、無形文化遺産部)

(5 学会発表) 地域社会に残された水害の記憶ー水害常襲地・埼玉県の事例からー 東京文化財研究所令和3年度第5回総合研究会 東京文化財研究所 22.2.1

(7 所属学会) 日本民俗学会、現代民俗学会、歴史人類学会

(8 教育) 東京家政学院大学非常勤講師

小林 公治 | KOBAYASHI Koji (文化財情報資料部)

(6 発表) 近現代日本における「南蛮漆器」の出現と変容ーその言説をめぐってー 令和3年度第4回文化財情報資料部研究会 東京文化財研究所 21.7.16

(5 学会発表) 多変角測色計による貝類切片の分光分析 (倉島玲央、早川典子、小林公治) 日本文化財科学会第38回大会 Web開催 21.9.18-19

(6 バネリスト) 秋草と螺鈿ー岬町理智院蔵秀吉像厨子から見る輸出器物としての南蛮漆器ー 九州大学国際シンポジウム「越境する文化:モノ、ひと、思想の軌跡と交流」九州大学(オンライン) 22.2.13

(7 所属学会) 考古学研究会、漆工史学会、東南アジア考古学会、日本考古学協会、早稲田大学考古学会

(8 教育) 武蔵野美術大学造形学部非常勤講師

小林 達朗 | KOBAYASHI Tatsuro (文化財情報資料部)

(6 講演) 皆金色阿弥陀絵像の出現とその意味ー転換期の時代思潮の表象 第55回オープンレクチャー 東京文化財研究所セミナー室

21.11.5

(7 所属学会) 九州藝術学会、美術史学会

齊藤 孝正 | SAITO Takamasa (所長)

(7 所属学会) 東洋陶磁学会

(7 委員会等) 東洋陶磁学会常任委員、文化庁文化審議会文化財分科会専門委員、文化庁文化審議会無形文化遺産部会作業部会構成員、文化庁登録美術品(工芸品)調査研究協力者会議委員、法隆寺金堂壁画保存活用委員会委員、芸術文化振興基金運営委員会運営委員、文化財虫害研究所評議員、文化財保護・芸術研究助成財団事業委員、文化遺産国際協力コンソーシアム運営委員会委員

齋藤 達也 | SAITO Tatsuya (客員研究員)

(4 資料紹介) 書簡にみる黒田清輝・久米桂一郎の交流(二)(塩谷純、伊藤史湖、田中潤、齋藤達也)『美術研究』434 pp.71-105 21.8
書簡にみる黒田清輝・久米桂一郎の交流(三)(塩谷純、伊藤史湖、田中潤、齋藤達也)『美術研究』435 pp.73-97 21.12

(6 発表) Expositions d'estampes ukiyo-e autour de 1890 Festival de l'histoire de l'art フォンテーヌブロー城、アーティゾン美術館 21.6.6

(7 所属学会) ジャポニズム学会、日仏美術学会、美術史学会、明治美術学会

(8 教育) 東京都立大学人文社会学部非常勤講師、明治学院大学文学部非常勤講師、名古屋外国語学部非常勤講師

酒井 清文 | SAKAI Kiyofumi (客員研究員)

(7 所属学会) 文化財保存修復学会、日本農芸化学会、日本生物工学会、高分子学会

(7 委員会等) バイオインダストリー協会、近畿化学協会

(8 教育) 園田学園女子大学人間健康学部非常勤講師

境野 飛鳥 | SAKAINO Asuka (客員研究員)

(2 報告) 第44回世界遺産委員会の報告『令和3年度世界遺産研究協議会「整備」をどう説明するか(第二部)』 pp.7-16 東京文化財研究所 22.3

(7 所属学会) ICOMOS、日本建築学会、日本歴史学会

佐藤 嘉則 | SATO Yoshinori (保存科学研究センター)

(2 報告) 国宝高松塚古墳壁画仮設修理施設における微生物環境管理指針の検討(岡部迪子、高鳥浩介、佐藤嘉則)『保存科学』61 pp.33-42 22.3(4 解説) 博物館・美術館収蔵物のカビ対策システム化の現状と課題『博物館研究』56(12) pp.11-14 21.11.25

(3 論文) 竹材から得たフラスを用いて加害種を特定する分子生物学的手法の確立(篠崎(矢花) 聡子、小峰幸夫、島田潤、佐藤嘉則)『保存科学』61 pp.1-12 22.3

(4 解説) 微生物による文化財の劣化と対策 ～古墳・洞窟壁画の微生物劣化～『日本防菌防黴学会誌』50(1) pp.19-24 22.1.10

(4 解説) 文化財の加害生物種特定に向けた新たな試み『木材保存誌』48(2) pp.1-6 22.3

(5 学会発表) Application of Cell Lytic Enzymes to Remove Biofilm from the Surface of East Asian Paintings (Noriko Hayakawa, Yoshinori Sato, Shinoko Oba, Tomoko Ogasawara) ICOM-CC Virtual conference 21.5.17-21

(5 学会発表) 博物館におけるATP拭き取り検査ーカビ集落の活性評価と機器の特徴についてー(間瀬創、佐藤嘉則) 文化財保存修復学会第43回大会 紙上開催 21.7.15

(5 学会発表) 文化財を加害したシバンムシ科甲虫のDNAバーコーディングによる同定法の検討(小峰幸夫、篠崎(矢花) 聡子、佐藤嘉則、原田正彦、齊藤明子、木川りか、藤井義久) 文化財保存修復学会第43回大会 紙上開催 21.7.15

(5 学会発表) 低酸素濃度殺虫法に用いる脱酸素剤からの有機酸発生

(佐藤嘉則、岡部迪子、犬塚将英) 文化財保存修復学会第43回大会 紙上開催 21.7.15

(5 学会発表) 空調設備のない収蔵施設の保存環境改善ー岐阜県関市春日神社の事例研究ー(小野寺裕子、小峰幸夫、森島一貴、佐藤嘉則) 文化財保存修復学会第43回大会 紙上開催 21.7.15

(5 学会発表) 法隆寺金堂収蔵庫における壁画の保存・公開に関する研究ー収蔵庫の限定公開時と建具隙間の気密化を考慮した非公開時の環境調整方法の検討ー(小椋大輔、和田拓也、木川りか、和田浩、吉田直人、秋山純子、佐藤嘉則、藤井義久、鉾井修一、伊庭千恵美、森井順之) 日本文化財科学会第38回大会 Web開催 21.9.19
(5 学会発表) 虎塚古墳の壁画剥落片に形成された独特な微生物叢(松野美由樹、片山葉子、犬塚将英、稲田健一、矢島國雄、佐藤嘉則) 日本文化財科学会第38回大会 Web開催 21.9.19

(5 学会発表) 国宝高松塚古墳壁画仮設修理作業室におけるカビ環境管理指針の検討(岡部迪子、高鳥浩介、佐藤嘉則) 日本防菌防黴学会第48回年次大会 Web開催 21.9.9

(6 講演) 微生物による文化財の劣化と対策 ～古墳・洞窟壁画の微生物劣化～ 日本防菌防黴学会第48回年次大会 Web開催 21.9.9

(5 学会発表) 歴史的建築物における甲虫類駆除のための湿度制御温風処理(北原博幸、藤井義久、木川りか、原田正彦、佐藤嘉則、藤原裕子) 日本建築学会第50回熱シンポジウム 建築会館ホール 21.10.31

(6 講義) 環境制御(虫害対策) 令和3年度 アーカイブズ・カレッジ 史料管理学研修会 Web開催 21.9.7

(6 講義) 有害生物対策 令和3年度 アーカイブズ研修Ⅲ/公文書管理研修Ⅲ 国立公文書館 21.9.17

(6 講義) 修理工房における文化財IPM ～虫害の防除を中心に～ 文化財修復技術者のための科学知識基礎研修 東京文化財研究所 21.10.1

(6 講義) 水損紙資料の微生物被害と応急処置 水損紙資料の応急処置ワークショップ 奈良文化財研究所 21.10.26

(6 講義) 美術工芸品の生物被害 令和3年度文化財(美術工芸品)保存修理講習会 オンライン配信 21.12.16

(7 所属学会) International Biodeterioration & Biodegradation Society、日本土壌微生物学会、日本微生物生態学会、日本文化財科学会、文化財保存修復学会

(7 委員会等) ひたちなか市史跡保存対策委員会、日本文化財科学会編集委員、国立民族学博物館共同研究員、日本土壌微生物学会事務局企画幹事、(公財)文化財虫害研究所文化財IPMコーディネータ委員会委員、AIを利用した文化財建造物の見守りシステム事業に係る有識者会議委員、文化財保存修復学会第43回大会プログラム作成委員会委員、国立歴史民俗博物館資料保存環境検討委員会委員、「法隆寺金堂壁画保存活用委員会」保存環境ワーキング・グループ専門委員、文化財保存修復学会学会理事、国宝高松塚古墳壁画新施設基本構想ワーキンググループ委員

(8 教育) 東京藝術大学大学院美術研究科文化財保存学専攻システム保存学研究室保存環境学連携准教授

佐野 真規 | SANO Masaki (アソシエイトフェロー)

(4 記事)「物故者 高畑勲」『日本美術年鑑』令和元年版 pp.504-505 東京文化財研究所 21.5.25

(4 記事) 東京文化財研究所の取り組み「映像記録を拡張するー研究資料としての映像の在り方ー」『月刊文化財』697 pp.36-39 第一法規 21.10.1

(4 編集/映像撮影・監修)「琵琶製作の記録(短編) 石田克佳」(前原恵美、佐野真規) 東京文化財研究所 21.7.27

(4 編集/映像撮影・監修)「大鼓の革製作の記録(短編) 畑元徹」(前原恵美、佐野真規) 東京文化財研究所 22.3

(4 編集/映像編集) 網代箕を 兵庫県加西市北条町(今石みぎわ、森一人、佐野真規) 東京文化財研究所 22.3

(4 編集/映像撮影・監修) 第15回公開学術講座「樹木利用の文化ー桜を

- つかう、桜で奏でる」演奏『水』（藤舎呂英、藤舎呂近、藤舎雪丸、藤舎英心、福原寛瑞）東京文化財研究所 22.3
- (6 発表/映像発表)「地紙について」「道具について」「伝承について」(富永圭祐、生田ゆき、菊池理予、森下愛子、佐野真規) 研究会「型紙と型染」(無形文化遺産 [伝統技術] の伝承に関する研究会) 泉屋博古館 21.7.3

塩谷 純 | SHIOYA Jun (文化財情報資料部)

- (3 論文)近代日本画の“新古典主義”再考 『近代画説』30 pp.41-48 明治美術学会 21.12
- (4 解説)花鳥画以前の省亭 師・菊池容斎に学んだ頃 『別冊太陽 渡辺省亭 花鳥画の絢爛』 pp.22-23 平凡社 22.2
- (4 資料紹介)書簡にみる黒田清輝・久米桂一郎の交流(二)(塩谷純、伊藤史湖、田中潤、齋藤達也) 『美術研究』434 pp.71-105 21.8
- (4 資料紹介)書簡にみる黒田清輝・久米桂一郎の交流(三)(塩谷純、伊藤史湖、田中潤、齋藤達也) 『美術研究』435 pp.73-97 21.12
- (6 パネリスト)近代日本画の“新古典主義”と柿内青葉 シンポジウム「美人画・熟考」 東海大学文明研究所 21.6.5
- (7 所属学会等)美術史学会、明治美術学会
- (8 教育)明治学院大学大学院非常勤講師、東京大学大学院人文社会系研究科・文学部非常勤講師、金沢美術工芸大学芸術学専攻非常勤講師

島田 潤 | SHIMADA Megumi (アソシエイトフェロー)

- (3 論文)竹材から得たフラスを用いて加害種を特定する分子生物学的手法の確立(篠崎(矢花)聡子、小峰幸夫、島田潤、佐藤嘉則) 『保存科学』61 pp.1-12 22.3
- (7 所属学会)文化財保存修復学会、日本昆虫学会

清水 綾子 | SHIMIZU Ayako (アソシエイトフェロー)

- (4 編集)(加藤雅人、清水綾子、片淵奈美香)『在外日本古美術品保存修復協力事業 親鸞聖人絵伝 No.2015-4』146p 東京文化財研究所 22.3
- (4 校閲)(加藤雅人、清水綾子、片淵奈美香、大川柚佳)『在外日本古美術品保存修復協力事業 親鸞聖人絵伝 No.2015-4』146p 東京文化財研究所 22.3
- (4 翻訳)(加藤雅人、清水綾子)『在外日本古美術品保存修復協力事業 親鸞聖人絵伝 No.2015-4』 pp.6-14、129-130 東京文化財研究所 22.3

城野 誠治 | SHIRONO Seiji (文化財情報資料部)

- (2 報告)ものの記憶ー記憶を遺し伝えるー 『ものの記憶ー読み解き・伝え・遺すー』 pp.108-133 東京文化財研究所 21.6
- (2 報告)東京国立博物館所蔵 准胝観音像および准胝仏母像の蛍光X線分析(早川泰弘、城野誠治)『東京国立博物館所蔵 平安仏画ー光学調査報告書ー重要文化財 准胝観音像 重要文化財 准胝仏母像』 pp.150-159 東京国立博物館、東京文化財研究所 21.9
- (2 報告)春日権現験記絵の彩色材料調査(巻十一・巻十二)(早川泰弘、城野誠治)『宮内庁三の丸尚蔵館 所蔵 国宝 絹本着色 春日権現験記絵 巻十一・巻十二 光学調査報告書』 pp.32-63 東京文化財研究所 22.3
- (2 報告)Photographing the Lacquered Door Materials of Wat Rajpradit Lacquered Door Panels of Wat Rajpradit-Study of the Japan-made Lacquerwork Found in Thailand-, pp.63-70 Tokyo National Research Institute for Cultural Properties 22.3
- (4 解説)截金、裏箔、背景の著色、撮影写真の比較 東京国立博物館所蔵 平安仏画ー光学調査報告書ー重要文化財 准胝観音像 重要文化財 准胝仏母像、pp.74-79、81 東京国立博物館、東京文化財研究所 22.3
- (4 編集)(城野誠治、谷口母子)『ものの記憶ー読み解き・伝え・遺すー』 135p 東京文化財研究所 21.6

- (4 編集)(城野誠治、谷口母子)『東京国立博物館所蔵 平安仏画ー光学調査報告書ー重要文化財 准胝観音像 重要文化財 准胝仏母像』 159p 東京国立博物館、東京文化財研究所 21.9
- (4 編集)(城野誠治、谷口母子)『宮内庁三の丸尚蔵館 所蔵 国宝 絹本着色 春日権現験記絵 巻十一・巻十二 光学調査報告書』 114p+口絵 141p 東京文化財研究所 22.3
- (7 所属学会)日本写真家協会、日本写真学会、日本法科学技術学会

杉山 恵助 | SUGIYAMA Keisuke (客員研究員)

- (3 論文)2 表装の保存と修復 2.2 親鸞聖人絵伝に見る表装技術 『在外日本古美術品保存修復協力事業 親鸞聖人絵伝 No.2015-4』 pp.99-109 東京文化財研究所 22.3
- (7 所属学会)Institute of Conservation、文化財保存修復学会
- (8 教育)東北芸術工科大学芸術学部文化財保存修復学科准教授(文化財保存修復研究センター研究員兼務)

建石 徹 | TATEISHI Toru (保存科学研究センター、文化財防災センター)

- (1 公刊図書)大工原豊、長田友也、建石徹 編『縄文石器提要(第2版)』ニューサイエンス社 509p 21.10
- (1 公刊図書)廣瀬覚、建石徹『極彩色壁画の発見 高松塚古墳・キトラ古墳』新泉社 93p 22.3
- (2 報告)事業の概要 『国宝キトラ古墳壁画修理報告書』 pp.6-9 文化庁・東京文化財研究所 22.3
- (3 論文)連載 模擬古墳④ー遺跡と遺物の保存と活用を考えるための実験的取り組みー(脇谷草一郎、小椋大輔、建石徹、富井眞)『考古学研究』68(1) pp.17-21 21.6
- (4 解説)Talking about World Heritage(2).(松浦晃一郎、青柳正規、荒井正吾、建石徹) Nara Prefecture World Heritage Journal, 2 pp.1-5 奈良県 21.4
- (4 解説)高松塚古墳壁画発見50周年記念 紙上座談会(和田林道宜、本中眞、建石徹、岡林孝作、相原嘉之)『飛鳥びと』14 pp.1-4 古都飛鳥保存財団 22.3
- (6 発表)The History of Japan's System for the Protection of Cultural Properties and Fire, Disaster and Crime Prevention Measures for Museums, Temples and Shrines(建石徹、水谷悦子、芳賀文絵) ICCROM, PREVENT: Building Capacities for Mitigating Fire Risk at Heritage Places リモート開催 21.11
- (6 講演)文化財防災センターについて 文化庁、ミュージアムマネージメント研修 黒田記念館 21.11
- (6 講演)持続可能な文化財の活用 NPO JCP、文化財保存修復を目指す人のための実践コース リモート開催 21.11
- (6 講演)よみがえる高松塚古墳 明治大学博物館、第68回考古学ゼミナール リモート開催 21.11
- (6 講演)高松塚古墳壁画の恒久保存 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館「よみがえる極彩色壁画」講演会 奈良県立橿原考古学研究所 22.3
- (6 司会)未来に伝えたい「飛鳥・藤原」の魅力(本中眞、青柳正規、木下正史、田辺征夫、荒井正吾、亀田忠彦、松井正剛、森川裕一、建石徹) 奈良県、世界遺産「飛鳥・藤原」登録推進シンポジウム奈良県橿原文化会館 21.10
- (6 司会)高松塚が目覚めた日ー極彩色壁画の発見ー(有賀祥隆、青柳正規、森岡秀人、大杉栄嗣、岡林孝作、建石徹、吉村和昭) 文化庁・日本芸術文化振興会・奈良県・明日香村・朝日新聞社、高松塚古墳壁画発見50周年記念シンポジウム 有楽町朝日ホール 22.3
- (7 所属学会)ICOM、ICOM-CC、ICOM-DRMC、考古学研究会、日本考古学協会、日本文化財科学会、文化財保存修復学会、法隆寺金堂壁画保存活用委員会ワーキング・グループ委員
- (8 教育)慶應義塾大学文学部非常勤講師(後期)、愛知県立芸術大学大学院美術研究科非常勤講師(集中)、東京藝術大学大学院美術研究科非常勤講師(集中)

田中 淳 | TANAKA Atsushi (客員研究員)

- (3 論文) 萬鐵五郎とマティス、そして受容史のための素描 『ユリイカ』53(5) pp.298-310 21.5
(4 エッセイ) 川上涼花の没後100年の展覧会によせて 『川上涼花 没後100年記念展』 pp.6-8 齋藤朋子 21.5
(7 所属学会) 美術史学会、明治美術学会

田中 潤 | TANAKA Jun (客員研究員)

- (2 報告) 近代の大札と有職故実—装束の変化について— 『美術研究』435 pp.243-250 21.8
(3 論文) 村上藩主内藤家歴代当主肖像画に見る公家装束 『ものの記憶—読み解き・伝え・遺す—』 pp.86-99 東京文化財研究所 21.6
(4 資料紹介) 書簡にみる黒田清輝・久米桂一郎の交流(二) (塩谷純、伊藤史湖、田中潤、齋藤達也) 『美術研究』434 pp.71-105 21.8
(4 資料紹介) 書簡にみる黒田清輝・久米桂一郎の交流(三) (塩谷純、伊藤史湖、田中潤、齋藤達也) 『美術研究』435 pp.73-97 21.12
(4 解説) 春日権現験記絵 巻九・巻十にみられる装束表現—女性装束を中心に— 『宮内庁三の丸尚蔵館 所蔵 国宝 絹本着色 春日権現験記絵 巻十一・巻十二 光学調査報告書』 pp.100-104 東京文化財研究所 21.3
(4 ラジオ出演) 令和に伝えられた有職故実—宮中行事にみる装束・染織の世界— NHKラジオ第2 芸術と文化 (全13回) 21.10.6、10.13、10.20、10.27、11.3、11.10、11.17、11.24、12.1、12.8、12.15、12.22、12.29
(6 講演) 令和に伝えられた有職故実 NHK文化センター NHK文化センター青山教室 21.8.6、8.20、8.27、9.3、
(7 所属学会) 東洋陶磁学会
(8 教育) 学習院大学史料館 EF 共同研究員、学習院大学文学哲学科・学芸員課程非常勤講師、お茶の水女子大学生活科学部非常勤講師、國學院大学神道文化学部兼任講師、國學院大學博物館客員研究員、杉野服飾大学非常勤講師、山形県立米沢女子短期大学非常勤講師

谷口 母子 | TANIGUCHI Maiko (アソシエイトフェロー)

- (4 編集) (城野誠治、谷口母子) 『ものの記憶—読み解き・伝え・遺す—』 135p 東京文化財研究所 21.6
(4 編集) (城野誠治、谷口母子) 『東京国立博物館所蔵 平安仏画—光学調査報告書—重要文化財 准胎観音像 重要文化財 准胎仏母像』 159p 東京国立博物館、東京文化財研究所 21.9
(4 編集) (城野誠治、谷口母子) 『宮内庁三の丸尚蔵館 所蔵 国宝 絹本着色 春日権現験記絵 巻十一・巻十二 光学調査報告書』 114p + 口絵 141p 東京文化財研究所 22.3

邱 君妮 | CHIU Chunni (アソシエイトフェロー)

- (1 共著) 日本國公立博物館の獨立行政法人經營機制 林曼麗、張瑜倩、陳彥伶、邱君妮 『博物館／美術館の未來性：行政法人制度研究』典藏藝術家庭股份有限公司 pp.260-365 22.1
(4 編集) 『第30回文化遺産國際協力コンソーシアム研究会「文化遺産×市民参画＝マルチアクターによる國際協力の可能性」報告書』 56p 文化遺産國際協力コンソーシアム 22.3
(4 記事) 城市博物館の力量—ICOM布拉格大會國際城市博物館委員會開始徵稿 中華民國博物館學會博物之島新訊，中華民國博物館學會ウェブサイト 22.3.9
(6 講演) 從國際博物館網絡發展研究視野 輔仁大學博物館學研究所「國際視野養成工作坊X深耕計畫」オンライン 21.11.25
(6 講演) 國際交流與組織革新 國立歷史博物館2021線上專業講座「博物館與創意：觀點、詮釋及實踐」オンライン 21.12.9
(6 講演) 傳統的未來：日本博物館的趨勢觀察 輔仁大學博物館學研究所「國際發展計畫」オンライン 22.3.5
(6 講義) 博物館經營論—台灣事例 國際基督教大學 (ICU) 学芸員課程博物館經營論 オンライン 21.10.9
(6 講義) 台灣における博物館教育の事例 國學院大學学芸員課程博物

館教育論 オンライン 21.12.11

- (7 所属学会) ICOM、全日本博物館学会、日本展示学会、中華民國博物館學會、ICOM内部規則改正委員会 (WGSF) 委員、ICOM-CAMOC 都市博物館委員会委員

津田 徹英 | TSUDA Tetsuei (客員研究員)

- (1 共著) 「上代から平安末期の仏像・神像—近江八幡市域における祈りのかたち—」「近江八幡市域における中世真宗の文化財」近江八幡市史編纂室編『近江八幡市の歴史』第9巻・地域文化財近江八幡市 pp.186-205、254-258 21.3
(4 資料紹介) 「東寺観智院金剛藏本 (建武二年写)『諸説不同記』巻第10 (上) 解題・翻刻・校註・影印」(津田徹英、坂田将馬)『パラゴネ』8 pp.25-75 22.3
(5 学会発表) 「画像アノテーションを活用した画像データベースの構築」(津田徹英、永崎研宣) アート・ドキュメンテーション学会第14回秋期研究集会 (オンライン開催) 21.10.23
(6 講演) 「新しい文化館開館に向けての期待と展望」(仮称)新・琵琶湖文化館に関する県民フォーラム「新しい文化館を考える」コロボしが21 21.11.7
(6 講演) 「金沢文庫における仏像研究と展示」連続講座「県立金沢文庫、研鑽の90年」第1回 神奈川県立金沢文庫 22.1.8
(7 所属学会) 美術史学会、密教図像学会
(7 委員会等) 滋賀県顧問、台東区文化財審議委員、本山 (西本願寺) 文化財管理委員
(8 教育) 青山学院大学文学部比較芸術学科教授、東京大学文学部非常勤講師

友田 正彦 | TOMODA Masahiko (文化遺産國際協力センター)

- (1 共著) Yeshi Samdrup, Pema Wangchuk, Junko Mukai, Michiru Kanade, Yasunori Tsumura, Masahiko Tomoda, Ken Kanai, Kazuhiko Nishi, Natsumi Asada, Elif Berna Var *Understanding Our Heritage: Pema Visit A Rammed Earth House* TOBUNKEN, DoC MoHCA 36p 21.12
(2 報告) 2.1 考古学的知見から見た北部ベトナムの古代木造建築、総論：東南アジアにおける木造建築史研究と木造建築遺産保護をめぐる課題 『大陸部東南アジアの古代木造建築を考える』 pp.71-90、187-190 東京文化財研究所 22.3
(2 報告) 2.1 Ancient Wooden Architecture in Northern Vietnam Seen from Archaeological Evidence, OVERVIEW: Issues on the Study of Wooden Architectural History and the Protection of Wooden Architectural Heritage in Southeast Asia *Exploring the Ancient Wooden Architecture in Mainland Southeast Asia*, pp.71-90, 189-192 Tokyo National Research Institute for Cultural Properties 22.3
(2 報告) 3 民家建築(友田正彦、マルティネス アレハンドロ、江面嗣人、海野聡、前川歩、福嶋啓人、ペマ・ワンチュク) 『ブータンの伝統的民家 西部中央編 ティンブー、プナカ、パロ、ハー』 pp.37-201 東京文化財研究所、ブータン内務文化省文化局 22.3
(2 報告) 4-2 文化遺産として保護すべき伝統的民家の候補3件 『ブータンの伝統的民家 西部中央編 ティンブー、プナカ、パロ、ハー』 pp.208-211 東京文化財研究所、ブータン王国内務文化省文化局 22.3
(4 編集) (友田正彦、金井健、ヴァル エリフ ベルナ) 『大陸部東南アジアの古代木造建築を考える』 199p 東京文化財研究所 22.3
(4 編集) (Masahiko TOMODA, Ken KANAI, Elif Berna VAR) *Exploring the Ancient Wooden Architecture in Mainland Southeast Asia*, 201p Tokyo National Research Institute for Cultural Properties 22.3
(4 編集) (友田正彦、金井健、浅田なつみ) 『ブータンの伝統的民家西部中央編 ティンブー、プナカ、パロ、ハー』 238p 東京文化財研究所、ブータン内務文化省文化局 22.3
(6 講演) Protection of Cultural Heritage in Japan and Southeast Asian Countries -history, concept and issues- JENESYS オンラインブログ

- ラム日・アセアン AOIP 交流 オンライン 22.2.21
 (6 講演) 古代クメールの宗教建築とその建設 伝塾オンラインセミナー オンライン 22.3.19
 (6 講演) Exchanging the Perspectives on Cultural Heritage, a case study of the preservation project of vernacular houses in Bhutan 東京学芸大学 ISSUP 春季オンラインプログラム オンライン 22.2.28
 (6 司会) 文化遺産国際協力コンソーシアム第29回研究会「文化遺産にまつわる情報の保存と継承ー開かれたデータベースに向けてー」オンライン 21.8.9
 (6 司会) 令和3年度文化遺産国際協力コンソーシアムシンポジウム「海と文化遺産ー海が繋ぐヒトとモノー」 オンライン 21.11.28
 (6 司会) 文化遺産国際協力コンソーシアム第30回研究会「文化遺産」市民参画=マルチアクターによる国際協力の可能性」 オンライン 22.2.11
 (6 パネリスト) セッション2 討論 令和3年度世界遺産研究協議会『「整備」をどう説明するか』 オンライン 21.10.11
 (7 所属学会) ICOMOS、東南アジア考古学会、日本建築学会、一般社団法人日本イコモス国内委員会理事、文化遺産国際協力コンソーシアム事務局長

鳥海 秀実 | TORIUMI Hidemi (アソシエイトフェロー)

- (3 論文) 絵画修復における欠損部分の補完と補彩に関する考察 『文化財保存修復学会誌』65 pp.36-49 22.3
 (4 編集) 国宝キトラ古墳壁画修理報告書 文化庁、東京文化財研究所 22.3.25
 (5 学会発表) Restoration of the ceiling and wall paintings in the Asahino-ma (Room of the Rising Sun) in the State Guest House, Akasaka Palace, Tokyo (WATANABE Ikuo, TANAKA Chieko, KIRIU Satoshi, TORIUMI Hidemi) ICOM-CC 19th Triennial Conference (Virtual conference) 21.5.17-19
 (6 講義) 西洋絵画の保存修復 (1部: 歴史・理論概説、2部: レオナルド・ダ・ヴィンチ絵画作品の技法と保存修復) 東京藝術大学大学院美術研究科文化財保存学専攻 オンライン講義 22.2.18
 (7 所属学会) 文化財保存修復学会
 (8 教育) 東京藝術大学大学院美術研究科文化財保存学専攻ゲスト講師

中村 舞 | NAKAMURA Mai (アソシエイトフェロー)

- (4 編集) *Conservation and Restoration of Concrete Structures*, 145p Tokyo National Institute for Cultural Properties 21.8.30
 (5 学会発表) 産業遺産における活用ー文化財の活用に関するアンケート調査結果ー(中村舞、中山俊介) 産業遺産学会 2021 年度全国大会(佐渡大会) オンライン 21.11.27
 (7 所属学会) 産業考古学会、文化財保存修復学会

中山 俊介 | NAKAYAMA Shunsuke (特任研究員)

- (5 学会発表) 産業遺産における活用ー文化財の活用に関するアンケート調査結果ー(中村舞、中山俊介) 産業遺産学会 2021 年度全国大会(佐渡大会) 新潟県佐渡市(オンライン開催) 21.11.27
 (7 所属学会) 日本船舶海洋工学会、文化財建造物保存修理研究会、文化財保存修復学会
 (7 委員会等) 長崎県高島炭鉱整備活用委員会、伊豆の国市史跡等整備調査委員会並山反射炉部会、佐渡市毛嚢物保存活用に関する専門家会議、史跡原爆ドーム保存技術指導委員会、国立科学博物館重要科学技術史資料登録委員会、第五福竜丸船体等保存検討委員会、伊豆の国市文化財保存活用地域計画作成協議会
 (8 教育) 公立大学法人長岡造形大学非常勤講師

西 和彦 | NISHI Kazuhiko (文化遺産国際協力センター)

- (4 編集) 『各国の文化財保護法令シリーズ[26] カナダ【史跡モニュメント法、カナダ国立公園庁法】』 117p 東京文化財研究所 22.3
 (4 解説) 『令和3年度世界遺産研究協議会「整備」をどう説明するか

- (第二部)』 pp.85-86 東京文化財研究所 22.3
 (4 編集) 『令和3年度世界遺産研究協議会「整備」をどう説明するか(第二部)』 104p 東京文化財研究所 22.3
 (6 講義) 建築空間における文化遺産の考え方 東京大学(オンライン) 21.5.21
 (6 講義) 修復理念と国際憲章 東京藝術大学(オンライン) 21.6.1
 (6 講習会) 近現代建築保護における諸制度 奈良文化財研究所 21.7.6
 (6 講演) 世界文化遺産の現状 国際文化観光都市70周年記念 松江城シンポジウム 松江市(オンライン) 21.7.11
 (6 パネリスト) パネルディスカッション 国際文化観光都市70周年記念 松江城シンポジウム 松江市(オンライン) 21.7.11
 (6 講義) 文化遺産保護に関する国際協力を知る 帝京大学(オンライン) 21.7.19
 (6 講習会) Heritage Impact Assessment for World Cultural Heritage ACCU奈良事務所集団研修 ACCU奈良事務所(オンライン) 21.9
 (6 講義) 文化遺産の再建を考える 帝京大学 21.12.6
 (6 講演) ル・コルビュジェと国立西洋美術館 国立西洋美術館オンラインレクチャー 国立西洋美術館(オンライン) 22.3
 (7 所属学会) ICOMOS、日本建築学会、建築史学会
 (7 委員会等) 彦根城世界遺産登録にかかる学術検討委員会、平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会、(公財) ユネスコ・アジア文化センター文化遺産保護協力事務所文化遺産保護協力事業委員会、国立西洋美術館活用・公開方針検討委員会、東京国立博物館本館保存活用計画検討WG、萩反射炉整備委員会、「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群専門家会議、ICCROM 理事会
 (8 教育) 東京理科大学講師(非常勤)

芳賀 文絵 | HAGA Ayae (保存科学研究センター)

- (5 学会発表) 空調機が稼働していない収蔵庫における木質材料の吸放湿挙動ータイプの異なる部屋の比較ー(芳賀文絵、森谷朱、及川規) 文化財保存修復学会第43回大会 紙上開催 21.7.15
 (5 学会発表) 宮城県における被災資料の保管環境管理について(芳賀文絵、森谷朱、及川規) 文化財保存修復学会第43回大会 紙上開催 21.7.15
 (5 学会発表) 宮城県における被災資料の保全活動について(森谷朱、芳賀文絵、及川規) 文化財保存修復学会第43回大会 紙上開催 21.7.15
 (6 発表) 被災文化財の保存と活用ー東北歴史博物館における文化財保存の取り組みー 東京文化財研究所令和3年度第2回総合研究会 東京文化財研究所 21.9.1
 (6 講義) The History of Japan's System for the Protection of Cultural Properties and Fire, Disaster and Crime Prevention Measures for Museums, Temples and Shrines (Toru TATEISHI, Etsuko MIZUTANI, Ayae HAGA) Prevent: Mitigating Fire Risk for Heritage ウェビナー 21.11.16
 (7 所属学会) ICOM-CC、日本文化財科学会、文化財保存修復学会

早川 典子 | HAYAKAWA Noriko (保存科学研究センター)

- (3 論文) 文化財修復に使用されるフノリの精製効果に関する評価(早川典子、金受貞、柏屋明美) 『保存科学』61 pp.67-77 22.3
 (4 編集) 国宝キトラ古墳壁画修理報告書 文化庁、東京文化財研究所 22.3.30
 (5 学会発表) Application of Cell Lytic Enzymes to Remove Biofilm from the Surface of East Asian Paintings (Noriko HAYAKAWA, Yoshinori SATO, Shinoko OBA, and Tomoko OGASAWARA) ICOM-CC 19th Triennial Conference Virtual conference 21.5.17-21
 (5 学会発表) 植物由来染織文化財の種同定における非破壊赤外分光分析利用の可能性ー葛・芭蕉を中心にー(早川典子、八木千尋、山府木碧、安永拓世、菊池理予、高柳正夫) 文化財保存修復学会第43回大会 紙上開催 21.7.15

- (5 学会発表) 蛍光X線分析による泥に覆われたキトラ古墳壁画の調査 (犬塚将英、早川典子、紀芝蓮、中田愛乃、亀井亮子、辻本与志一、早川泰弘、高妻洋成、宇田川滋正、森井順之) 日本文化財科学会 第38回大会 Web開催 21.9.18-19
- (5 学会発表) タンパク質を混合した漆塗膜の表面状態と機械的強度の関係 (倉島玲央、早川典子) 文化財保存修復学会第43回大会 紙上開催 21.7.15
- (5 学会発表) 和紙の緑青焼けと裏打ち層の効果 (貴田啓子、柏谷明美、稲葉政満、早川典子) マテリアルライフ学会「第32回研究発表会、特別講演会」オンライン大会 21.7.1
- (5 学会発表) Characteristics of lacquer coating films extracted from Gluta usitata before and after UV irradiation (KURASHIMA Reo and HAYAKAWA Noriko) ICOM-CC 19th Triennial Conference Virtual conference 21.5.17-21
- (5 学会発表) 多変角測色計による貝類切片の分光分析 (倉島玲央、早川典子、小林公治) 日本文化財科学会第38回大会 Web開催 21.9.18-19
- (6 講義) 科学知識基礎 1、2 文化財修復技術者のための科学知識基礎研修 東京文化財研究所 21.9.29
- (6 講義) 伝統接着剤 1 (糊、フノリ) 文化財修復技術者のための科学知識基礎研修 東京文化財研究所 21.9.29
- (6 講義) 合成接着剤 1、2 文化財修復技術者のための科学知識基礎研修 東京文化財研究所 21.9.30
- (6 講義) 伝統接着剤 2 (漆、膠等) 文化財修復技術者のための科学知識基礎研修 東京文化財研究所 21.10.1
- (6 講義) 美術工芸品修理における接着/工房の安全管理 文化庁保存修理講習会 オンライン 21.12.16
- (6 講義) 修復技術 (保存科学) 文化庁建造物保存修理主任技術者講習会 黒田記念館 22.1.27
- (6 講習会) 修理に用いられる接着材料・薬品管理 社寺建造物美術保存技術協会 令和3年度文化財修理共通座学研修会 オンライン 22.2.24
- (6 講演) 絹本絵画の科学分析 国宝修理装演師連盟令和3年度定期研修会 オンライン 21.12.17
- (6 講義) 修理技術者に必要な自然科学 国宝修理装演師連盟令和3年度新入者研修会 京都国立博物館 21.4.16
- (6 講義) 修理技術者に必要な自然科学 国宝修理装演師連盟令和3年度上級・中級研修会 オンライン 21.7.16
- (6 講演) 文化財修復に関する科学 保存担当学芸員研修 (上級コース) 東京文化財研究所 21.7.7
- (7 所属学会) IIC、高分子学会、日本文化財科学会、文化財保存修復学会、マテリアルライフ学会
- (7 委員会等) 「法隆寺金堂壁画保存活用委員会」壁画ワーキング・グループ 材料調査班専門委員、国宝修理装演師連盟修理技術者資格制度委員会委員、厳島神社修理委員会委員、鎌倉芳太郎資料修理委員会委員
- (8 教育) 東京藝術大学大学院美術研究科文化財保存学専攻システム保存学研究室修復材料学連携教授

早川 泰弘 | HAYAKAWA Yasuhiro (副所長)

- (2 報告) 琉球の美術工芸品 『ぶんせき』7 pp.318-319 日本分析化学会 21.7
- (2 報告) 東京国立博物館所蔵 准胝観音像および准胝仏母像の蛍光X線分析 (早川泰弘、城野誠治) 『東京国立博物館所蔵 平安仏画光学調査報告書』 pp.150-159 東京文化財研究所 21.9
- (2 報告) 「伊能図」の種類と伊能図調査 (平井松午、地主智彦、早川泰弘、村岡ゆかり、島津美子) 『伊能図研究図録』 pp.11-20 創元社 22.2
- (2 報告) 春日権現験絵の彩色材料調査 (巻十一・巻十二) (早川泰弘、城野誠治) 『宮内庁三の丸尚蔵館 所蔵 国宝 絹本着色 春日権現験絵巻 巻十一・巻十二 光学調査報告書』 pp.32-63 東京文化財研究

所 22.3

- (2 報告) X-ray Fluorescence Analysis of Colored Lacquer Maki-e and Mother-of-Pearl Inlay (Raden) Door Panels at Wat Rajpradit Lacquered Door Panels of Wat Rajpradit-Study of the Japan-made Lacquerwork Found in Thailand- pp.87-92 東京文化財研究所 22.3
- (2 報告) 琉球絵画の科学調査と模造復元 『琉球王国文化遺産集積・再興事業報告書』第2巻 P.248 沖縄県立博物館・美術館 22.3
- (3 論文) 蛍光X線分析によるキトラ古墳壁画の泥におおわれた部分の調査 (犬塚将英、早川典子、紀芝蓮、田村朋美、中田愛乃、辻本与志一、亀井亮子、早川泰弘、高妻洋成、森井順之) 『保存科学』61 pp.57-65 22.3
- (5 学会発表) 日本絵画における白色顔料の変遷 中国伝統色彩学術年会 Web開催 2021.11.12-13
- (5 学会発表) 蛍光X線分析による泥に覆われたキトラ古墳壁画の調査 (犬塚将英、早川典子、紀芝蓮、中田愛乃、亀井亮子、辻本与志一、早川泰弘、高妻洋成、宇田川滋正、森井順之) 日本文化財科学会 第38回大会 Web開催 21.9.18-19
- (6 発表) 真鍮が使われている美術工芸品 科研「真鍮」研究会 奈良大学 2022.1.19
- (6 講演) 首里城火災による美術工芸品の被害について 首里城美術工芸品の現状とこれから 沖縄県立博物館・美術館 2022.2.12
- (6 講演) 平等院鳳凰堂の科学調査 「平等院鳳凰堂と浄土院」展覧会講演会 静岡市美術館 2022.3.19
- (7 所属学会) 日本文化財科学会、日本分析化学会、文化財保存修復学会
- (7 委員会等) 中城御殿跡地整備検討委員会委員、法隆寺金堂壁画保存活用委員会壁画ワーキンググループ材料調査班専門委員、岩手県立博物館における文化財への不適切行為事案に係る調査チームアドバイザー、石川県文化財保存修復工房運営委員会委員
- (8 教育) 千葉科学大学招聘教授、金沢美術工芸大学非常勤講師

藤井 郁乃 | FUJII Ikuno (アソシエイトフェロー)

- (2 報告) 第4章 オンライン現地調査、第5章 地域分科会(海域フォーラム)の成果、第6章 シンポジウム「海と文化遺産ー海が繋ぐヒトとモノー」の成果、第8章 まとめと展望 『文化遺産国際協力コンソーシアム 国際協力調査 海域ネットワークと文化遺産 令和3年度調査報告書』 pp.64-96, 103-105 文化遺産国際協力コンソーシアム 22.3
- (2 報告) 第29回文化遺産国際協力コンソーシアム研究会〈報告〉『カレントアウェアネスーE』424 オープンアクセス 国立国会図書館 21.11
- (4 編集) 『文化遺産国際協力コンソーシアム 国際協力調査 海域ネットワークと文化遺産 令和3年度調査報告書』 140p 文化遺産国際協力コンソーシアム 22.3
- (4 編集) 『令和3年度 文化遺産国際協力コンソーシアム シンポジウム「海と文化遺産ー海が繋ぐヒトとモノー」報告書』 72p 文化遺産国際協力コンソーシアム 22.3
- (4 編集) 『第29回文化遺産国際協力コンソーシアム研究会「文化遺産にまつわる情報の保存と継承ー開かれたデータベースに向けてー」報告書』 36p 文化遺産国際協力コンソーシアム 22.3
- (4 編集) Report on the 29th seminar “Retention and Succession of the Information associated with Cultural Heritage -For whom and what purpose-” 36p Japan Consortium for International Cooperation in Cultural Heritage 22.3
- (4 記事) 文化遺産コラム『国際記念物遺跡会議 (ICOMOS) 名誉会長から見る ICOMOS 前編』 文化遺産国際協力コンソーシアムウェブサイト 22.1
- (4 記事) 文化遺産コラム『国際記念物遺跡会議 (ICOMOS) 名誉会長から見る ICOMOS 後編』 文化遺産国際協力コンソーシアムウェブサイト 22.1

- (5 学会発表) A study on the holistic utilization of geological, nature, cultural heritage in Muroto UNESCO Global Geopark and its backgrounds (FUJII Ikuno, ITO Hiromu) 日本造園学会 2021 年度全国大会 オンライン 21.5
- (7 所属学会) ICOMOS、日本造園学会

二神 葉子 | FUTAGAMI Yoko (文化財情報資料部)

- (2 報告) An Overview of the Flower and Bird Patterns in Mother-of-Pearl with Underpaint on Door Panels at Wat Rajpradit *Lacquered Door Panels of Wat Rajpradit-Study of the Japan-made Lacquerwork Found in Thailand-*, pp.49-61 Tokyo National Research Institute for Cultural Properties 22.3
- (3 論文) 無形文化遺産の保護に関する第 16 回政府委員会の概要と課題 無形文化遺産研究報告, 16 pp.1-28 22.3
- (4 解説) Background of the study of Wat Rajpradit and its lacquered door panels *Lacquered Door Panels of Wat Rajpradit-Study of the Japan-made Lacquerwork Found in Thailand-*, pp.19-26 Tokyo National Research Institute for Cultural Properties 22.3
- (4 編集) *Lacquered Door Panels of Wat Rajpradit-Study of the Japan-made Lacquerwork Found in Thailand-*, Tokyo National Research Institute for Cultural Properties 22.3
- (6 発表) 世界遺産条約の履行に関する最近の国内外の動向 令和 3 年度第 6 回文化財情報資料部研究会 東京文化財研究所 21.11.30
- (6 講演) 文化財の記録作成の意義 文化財の記録作成に関するセミナー「文化財保護と記録作成・画像圧縮の原理」 東京文化財研究所 21.9.21
- (6 司会) 文化財の記録作成に関するセミナー「文化財保護と記録作成・画像圧縮の原理」 東京文化財研究所 21.9.21
- (7 所属学会) ICOMOS、地理情報システム学会、日本第四紀学会、日本文化財科学会、文化財保存修復学会
- (7 委員会等) 文化審議会世界文化遺産部会臨時委員

米沢 玲 | MAIZAWA Rei (文化財情報資料部)

- (3 論文) 不動明王と毘沙門天を脇侍とする尊像構成について一法華経信仰との関わりを中心にー 『哲学』148 pp.251-267 21.10
- (4 解説) 作品解説「親鸞聖人絵伝」『在外日本古美術品保存修復協力事業 親鸞聖人絵伝 No.2015-4』 pp.143-146 東京文化財研究所 22.3
- (4 記事)「物故者」田村隆照、宇野茂樹、明珍昭二、松浦正昭『日本美術年鑑』令和元年版 pp.494-495、502、527、531 東京文化財研究所 21.5
- (6 発表) 光明寺所蔵の羅漢図についてー光学調査とアーカイブの活用事例ー 東京文化財研究所令和 3 年度第 3 回総合研究会 東京文化財研究所 21.10.05
- (6 発表) モントリオール美術館所蔵熊野曼荼羅図について 令和 3 年度文化財情報資料部第 7 回研究会 東京文化財研究所 22.1.25
- (7 所属学会) 美学会、美術史学会、仏教芸術学会、三田芸術学会
- (8 教育) 清泉女子大学学芸員課程非常勤講師

前川 佳文 | MAEKAWA Yoshifumi (文化遺産国際協力センター)

- (1 共著) 前川佳文、嶋原由美『世界遺産 ミャンマー・バガン遺跡 華麗なる壁画の世界』雄山閣 197p 21.11
- (2 報告) (前川佳文、牛窪彩絢)『スタッコ装飾及び塑像に関する研究令和 3 年度報告書』 70p 東京文化財研究所 22.3
- (2 コメント) 特別展ボンペイ 朝日新聞(朝刊) pp.29-30 朝日新聞社 22.2.16
- (2 コメント) ニッポン絵ものがたり「競技場と壁画」 読売新聞(日曜版よみほっと) p.2 読売新聞社 22.3.20
- (2 コメント) 高松塚壁画 保存の葛藤 読売新聞(朝刊) p.13 読売新聞社 22.3.30
- (3 論文) Organic Matter and Pigments in the Wall Paintings of Me-Taw-

Ya Temple in Bagan Valley, Myanmar (Maria Letizia Amadori, Valeria Mengacci, Manuela Vagnini, Antonella Casali, Parviz Holakooei, Negar Eftekhari, Kyi Lin, Yoshifumi Maekawa, Giulia Germinario) *MDPI*, open access *MDPI* 21.11

- (5 学会発表) コンスウエムヘブ墓壁画保存修復に係る充填処置の施工実験(前川佳文、ダニエラ・マーフィー、ステファニア・フランチェスキーニ、近藤二郎、河合望) 文化財保存修復学会第 43 回大会 紙上開催 21.7.15
- (5 学会発表) ミャンマー・バガン遺跡における複合文化財として捉えた煉瓦造寺院の保存修復(前川佳文、ダニエラ・アンジェロット、デニス・ザネッティ、マリア・レティツィア・アマドーリ、チー・リン) 日本文化財科学会第 38 回大会 Web 開催 21.9.18-19
- (7 所属学会) Associazione Bastioni、ICOMOS、日本文化財科学会、文化財保存修復学会
- (7 委員会等) 金沢市石製文化財保存検討委員会委員
- (8 教育) 東京藝術大学大学院美術研究科文化財保存学専攻システム保存学研究室修復材料学連携准教授

前田 康記 | MAEDA Koki (アソシエイトフェロー)

- (2 報告) 第 4 章 オンライン現地調査『文化遺産国際協力コンソーシアム 国際協力調査 海域ネットワークと文化遺産 令和 3 年度調査報告書』 pp.66-67、74-75、85-87 文化遺産国際協力コンソーシアム 22.3
- (4 編集) *Report on the 28th seminar "Cultural Heritage & SDGs III: Roles of Cultural Heritage in Local Community"*, 41p Japan Consirtium for International Cooperation in Cultural Heritage 22.3
- (4 解説) 文化遺産国際協力における新たなテクノロジー 文化遺産国際協力コンソーシアムウェブサイト 22.3
- (4 解説) Emerging Technologies for International Cooperation in Cultural Heritage Japan Consirtium for International Cooperation in Cultural Heritage Website 22.3
- (6 講義) International Cooperation in Cultural Heritage Tokyo Gakugei University ISSUP Spring Online Programme 2022 Online 22.2.28
- (7 所属学会) 日本建築学会、建築史学会

前原 恵美 | MAEHARA Megumi (無形文化遺産部)

- (1 共著)「新型コロナウイルス禍と伝統芸能と保存技術」 近藤誠一、緒方規矩子、矢野誠一、大笹吉雄、松岡知子、原田真澄、後藤隆基、吉見俊哉、岡室美奈子、内田洋一、山口宏子、児玉竜一、伊達なつめ、萩尾瞳、徳永京子、下野歩、長田(吉田) 明子、工藤千夏、多和田真太良、前原恵美、奥田和明『ロスト・イン・パンデミック 失われた演劇と新たな表現の地平』春陽堂書店 pp.252-256 21.6
- (2 報告)【シリーズ】無形文化遺産と新型コロナウイルスフォーラム 3「伝統芸能と新型コロナウイルスー Good Practice とは何かー」報告書 124p 東京文化財研究所 22.3
- (2 報告) 第 14 回公開学術講座「竹材と日本の伝統的な管楽器」報告書 88p 東京文化財研究所 22.3
- (2 報告) 楽器を中心とした文化財保存技術の調査報告 5『無形文化遺産研究報告』16 pp.29-40 22.3
- (2 報告) 目録「及川尊雄収集紙媒体資料目録」 88p 東京文化財研究所 22.3
- (3 論文) 常磐津節《将門》の音楽分析ー〈オトシ〉と〈ナガシ〉の機能をめぐってー『桐朋学園大学研究紀要』47 pp.1-17 桐朋学園大学 21.10
- (4 解説) 伝統芸能を支える技 VIII 能装束 佐々木能衣装 東京文化財研究所 22.3
- (4 連載) 音の浮世絵第 15 回 遠山の鹿の啼き声に深まる秋を聴く「百人一首うはかゑとき猿丸太夫」『宮城會々報』236 巻頭カラー 2 頁 等曲宮城會 21.6
- (4 連載) 音の浮世絵第 16 回 夜更けの雪うさぎに新春の華やぎを聴く

- 「東源氏雪乃庭」『宮城會々報』237 巻頭カラー 2頁 箏曲宮城會 22.1
- (4 資料紹介) 説経節研究「薩摩派説経節 十代目薩摩若太夫集」『楽劇学』27 pp.83-92d 21.5
- (4 エッセイ)「支える技」の印象的なコマ 『観世』令和3年7・8月号 pp.34-35 檜書店 21.7
- (6 講演) コロナ禍における研究機関の取り組み(鼎談:児玉竜一、三浦裕子、前原恵美) 第29回楽劇学会大会 オンライン開催 21.7.11
- (6 発表) *A diversity-focused approach to musical instruments Conference on the Exploring and Safeguarding Shared ICH in East Asia* オンライン開催 21.9.10
- (6 発表) 趣旨説明、「伝統芸能における新型コロナウイルス禍の影響」現状報告、新型コロナウイルス禍における伝統芸能支援の現状—伝統芸能とクラウドファンディング、「邦楽器製作技術」が国の選定保存技術に選定、文化庁「邦楽普及拡大推進事業」の現場から(対談)以上5件 フォーラム3「伝統芸能と新型コロナウイルス—Good Practiceとは何か」 東京文化財研究所 21.12.3
- (6 パネリスト) 座談会(大和田文雄、古屋靖人、田辺遼山、野村哲朗、江副淳一郎、石村智、前原恵美) フォーラム3「伝統芸能と新型コロナウイルス—Good Practiceとは何か」 東京文化財研究所 21.12.3
- (6 発表) 無形文化財と桜—つかう桜、奏でる桜 第15回 公開学術講座「樹木利用の文化—桜をつかう、桜で奏でる—」 東京文化財研究所 22.2.11収録
- (6 パネリスト) 座談会(川尻秀樹、藤舎呂英、今石みぎわ、前原恵美) 第15回 公開学術講座「樹木利用の文化—桜をつかう、桜で奏でる—」 東京文化財研究所 22.3.8収録
- (7 所属学会) 楽劇学会、東洋音楽学会、文化財保存修復学会、International Council for Traditional Music (国際伝統音楽学会)
- (7 委員会等) 教科用図書検定調査審議会第6部会音楽小委員会委員、文化庁文化財第一課非常勤調査員、文化庁伝統芸能用具・原材料に関する調査委員
- (8 教育) 桐朋学園大学非常勤講師

松浦 一之介 | MATSUURA Kazunosuke (アソシエイトフェロー)

- (4 解説) 考古遺跡保護の国際思潮—環境・文脈・景観について—の概念から—『令和3年度世界遺産研究協議会「整備」をどう説明するか(第二部)』 pp.87-92 東京文化財研究所 22.3.31
- (4 編集)『令和3年度世界遺産研究協議会「整備」をどう説明するか(第二部)』 104p 東京文化財研究所 22.3.31
- (4 編集)『各国の文化財保護法令シリーズ [26] カナダ』 117p 東京文化財研究所 22.3.31
- (4 記事) 令和3年度世界遺産研究協議会についての報告『ICOMOS Japan Information』12-no.1/2022 p.15 日本イコモス国内委員会 22.3.9
- (7 所属学会) ICOMOS、日本遺跡学会

丸川 雄三 | MARUKAWA Yuzo (客員研究員)

- (3 論文) データベースと編集機能を用いた写真整理の支援『国立民族学博物館研究報告』46(1) pp.197-215 21.7
- (4 エッセイ) 美術雑誌『みづゑ』の世界 (1)「海か山か」、(2)「夏期講習会」、(3)「写生の旅」、(4)「波濤を超えて」『毎日新聞(夕刊)』21.8.7、8.14、8.21、8.28
- (6 発表) 美術研究資料デジタルアーカイブの活用と発信 京都市立芸術大学特別研究課題「井上隆雄撮影の仏教壁画のアーカイブ実践による仏教美術研究ネットワークの構築」第5回研究会 オンライン開催 21.11.24
- (6 講演) 文化遺産オンラインの機能や登録方法等の紹介 第69回全国博物館大会特別プログラム かでる2・7かでるホール 21.11.17
- (7 所属学会) アート・ドキュメンテーション学会
- (8 教育) 総合研究大学院大学比較文化学専攻担当教員、立命館大学文学部授業担当講師

三上 豊 | MIKAMI Yutaka (客員研究員)

- (1 共著)「〈水鏡〉シリーズによせて」『井上雅之』なるせ美術座 pp.2-3 21.4
- (1 編著)『現代美術 ロック 1964-1974 宮澤壯佳エッセイ選集』私家版 22.3
- (4 解説)「第七画廊のこと」 ときの忘れものブログ 21.12
- (7 委員会等) 町田市立国際版画美術館運営協議会委員、埼玉県立近代美術館協議会委員、文化庁プラットフォーム事業画廊調査作業部会委員

水谷 悦子 | MIZUTANI Etsuko (文化財防災センター、保存科学研究センター)

- (1 刊行図書) 歴史的組積造建築における塩類風化メカニズムと多孔質材料中の塩溶液の移動性状に関する研究 京都大学大学院工学研究科博士論文 260p 22.2
- (1 刊行図書) Evaluation of change in pore network structure caused by halite crystallisation Etsuko MIZUTANI, Daisuke OGURA, Masaru ABUKU, Hannelore DERLYUN *PROCEEDINGS OF SWBSS 2021 TU Delft Open* (ISBN : 978-94-6366-439-4) pp.173-182 21.9
- (3 論文) プレハブ式高気密高断熱収蔵庫におけるアセトアルデヒドの放散挙動の把握と換気量による低減(水谷悦子、中尾真梨子、秋山純子、芳賀文絵、佐野千絵)『保存科学』61 pp.43-55 22.3
- (5 学会発表) 壁画構成材料の乾湿による膨張、収縮の測定(水谷悦子、犬塚将英、脇谷草一郎、前川佳文) 日本文化財科学会第38回大会 Web開催 21.9.19
- (5 学会発表) Evaluation of change in pore network structure caused by halite crystallisation (Etsuko MIZUTANI, Daisuke OGURA, Masaru ABUKU, Hannelore DERLYUN) Salt Weathering Symposium on Building and Stone Sculpture 2021 ウェビナー 21.9.24
- (6 講義) The History of Japan's System for the Protection of Cultural Properties and Fire, Disaster and Crime Prevention Measures for Museums, Temples and Shrines (Toru TATEISHI, Etsuko MIZUTANI, Ayae HAGA) Prevent: Mitigating Fire Risk for Heritage ウェビナー 21.11.16
- (7 所属学会) ICOMOS、日本建築学会、日本文化財科学会
- (7 委員会等) 文化財の保存と活用のための熱湿気環境WG (湿気小委員会)

安永 拓世 | YASUNAGA Takuyo (文化財情報資料部)

- (1 共著)「文人性と文人画 近代日本への継承と海外での受容—アンドレ・マルローが注いだ眼差しを発端に」 高階秀爾、板倉聖哲、大橋美織、守安収、安永拓世『浦上玉堂関係叢書 浦上玉堂親子の藝術』別冊浦上家史編纂委員会 pp.37-45 21.5.30
- (1 共著) 藤岡穰、安永拓世、橋本遼太ほか『新版 八尾市史 美術工芸編』八尾市史編纂委員会 22.3.31
- (3 論文) 与謝蕪村筆「十宜図」(川端康成記念会蔵)の史的位置『美術研究』434 pp.35-62 21.8.30
- (4 解説) 野呂介石筆 山水図屏風『國華』1514 pp.34-41 國華社 21.12.20
- (4 記事) 2020年の歴史学界—回顧と展望— 日本 近世 一四 美術『史學雑誌』130(5) pp.143-147 史学会 21.5.20
- (4 記事) 東京文化財研究所の写真資料から浮かび上がる与謝蕪村筆「寒山拾得図襖」(妙法寺蔵)『TOBUNKEN NEWS』76 pp.1-3 東京文化財研究所 21.12.16
- (5 学会発表) 植物由来染織文化財の種同定における非破壊赤外分光分析利用の可能性—葛・芭蕉を中心に—(早川典子、八木千尋、山府木碧、安永拓世、菊池理予、高柳正夫) 文化財保存修復学会第43回大会発表 紙上開催 21.7.15
- (6 発表) 香川・妙法寺の与謝蕪村筆「寒山拾得図襖」—画像資料を活用した復原的研究—香川・妙法寺の与謝蕪村筆「寒山拾得図襖」—画像資料を活用した復原的研究— 第55回オープンレクチャー 東

京文化財研究所セミナー室 21.11.5
 (7 所属学会) 美術史学会、和歌山地方史研究会
 (7 委員会等) 八尾市史専門部会員
 (8 教育) 慶應義塾大学文学部非常勤講師

山田 大樹 | YAMADA Hiroki (客員研究員)

(3 論文) 天授局圖卒の分析による初代嘉隆帝陵墓及び周辺領域の風水計画原理の解明 ヴェトナム・フエ京城都市の変容に関する研究 (25) (山田大樹、田中滋夫、川原晋、佐藤滋) 『日本建築学会 大会学術講演梗概集 都市計画』 pp.421-422 日本建築学会 21.9
 (3 論文) 明命帝陵周辺地域における主変集落の成立過程と文化的景観 ヴェトナム・フエ京城都市の変容に関する研究 (26) (中西美裕、川原晋、山田大樹、田中滋夫、佐藤滋) 『日本建築学会 大会学術講演梗概集 都市計画』 pp.423-424 日本建築学会 21.9
 (3 論文) 孝陵局圖卒による明命帝陵墓の構成原理の解明と阮朝初期 2 代皇帝の世界観 ヴェトナム・フエ京城都市の変容に関する研究 (27) (佐藤滋、中西美裕、川原晋、山田大樹、田中滋夫) 『日本建築学会 大会学術講演梗概集 都市計画』 pp.425-426 日本建築学会 21.9
 (3 論文) 嘉隆帝陵エコスタディーツアーとオンラインツアーの組合せに見るエコツーリズムとの親和性 ヴェトナム・フエ京城都市の変容に関する研究 (28) (狭間辰之、海老沢結、川原晋、山田大樹、田中滋夫、佐藤 滋) 『日本建築学会 大会学術講演梗概集 都市計画』 pp.405-408 日本建築学会 21.9
 (6 発表) Cultural Heritage and Gender in Japanese Context ICOMOS IDMS 2021 webinars | ICOMOS EPWG Global Café: Journey to Inclusive Narrative online 21.4.18
 (6 発表) ジェンダーと文化遺産 日本イコモス EP ウェビナーシリーズ 2021 第 1 回「ジェンダーからみた文化遺産～ジェンダー平等とオーセンティシティの問題を考える」 オンライン 21.7.24
 (7 所属学会) ICOMOS、日本建築学会
 (7 委員会等) 日本イコモス国内委員会 EP (若手専門家) 常置委員会主査

山梨 絵美子 | YAMANASHI Emiko (客員研究員)

(3 論文) 文化財を遺し伝える写真をめぐって 『ものの記憶ー読み解き・伝え・遺すー』 pp.66-84 東京文化財研究所 21.6
 (3 論文) 春日権現験記絵を写すということ 『宮内庁三の丸尚蔵館 所蔵 国宝 絹本着色 春日権現験記絵 巻十一・巻十二 光学調査報告書』 pp.9-13 東京文化財研究所 22.3
 (3 論文) 研究資料 ゲッティ研究所が所蔵する矢代幸雄と画商ジョセフ・デュヴィーンの往復書簡 『美術研究』436 pp.59-78 22.3
 (6 講義) 日本近代洋画の複線性 美術史講義 学習院大学 21.4.1-7.31
 (7 委員会等) 秋田市千秋美術館協議会美術作品等評価審査委員会委員、江戸東京博物館資料収蔵委員会委員、大分市美術館美術品収集委員会委員、迎賓館の改修に関する懇談会委員、東京都美術館運営委員会委員、千葉県文化財保護審議会委員日光市美術作品等収集審査会委員、文化庁文化審議会美術品補償制度部会委員、文化庁文化審議会文化財分科会委員、静岡県立美術館専門委員、横須賀市美術館美術品選定評議委員、日本博物館協会理事
 (8 教育) 学習院大学文学部非常勤講師

ヤンセ ヘルガ | JANSE Helga (日本学術振興会特別研究員)

(3 論文) Intangible cultural heritage and societal gender structures: An interview study focusing on changes in gender roles and gender restrictions in Japanese float festivals *International Journal of Intangible Heritage*, 16 pp.46-61 21.11
 (6 講義) Intangible Cultural Heritage and Gender International workshop on Intangible Cultural Heritage and Sustainable Development, organized by Ahmedabad University, UNESCO ICHCAP, and UNESCO Bangkok. オンライン 21.10.5

(7 所属学会) ICOMOS、文化資源学会、ICOMOS International Committee on Intangible Cultural Heritage、Association of Critical Heritage Studies (ACHS)
 (7 委員会等) ACHS Intangible Cultural Heritage Network Committee

吉田 暁子 | YOSHIDA Akiko (文化財情報資料部)

(6 発表) 岸田劉生による「手」という図像ー静物画を中心にー 令和 3 年度第 8 回文化財情報資料部研究会 東京文化財研究所 22.2.14
 (7 所属学会) 美術史学会

5. 研究交流

1. 職員の海外渡航	131
------------------	-----

1. 職員の海外渡航

氏 名	渡 航 先	期 間	目 的	経 費
間舎 裕生	ネパール	R3.12.3 ~ 12.19	国際協力機構の依頼による、考古学発掘調査及び測量調査手法に関するネパール文化観光航空省考古局職員への技術移転、ならびにハヌマンドカ王宮内シヴァ寺院基壇部の現状調査	先 方 負 担 (JICA)
友田 正彦	カンボジア	R4.1.9 ~ 1.24	タネイ寺院遺跡における建築調査	コ02
浅田 なつみ	カンボジア	R4.1.9 ~ 1.24	タネイ寺院遺跡における建築調査	コ02
間舎 裕生	カンボジア	R4.1.9 ~ 1.24	タネイ寺院遺跡における考古調査	コ02

6. 資料

1. 主な所蔵資料	133
1. 図書資料	133
2. その他の資料	133
2. 研究所関係資料	134
1. 設立の経緯	134
2. 年代別重要事項	134
3. 歴代所長（昭和5年～令和3年度）	137
4. 名誉研究員	138
5. 2021（令和3）年度予算等	139
3. 独立行政法人国立文化財機構中期計画	143
4. 東京文化財研究所関係事業索引	164

1. 主な収蔵資料

1. 図書資料

(1) 美術関係図書

日本・東洋・欧米の美術に関するものを中心に、各地方公共団体刊行の文化財関係調査報告書、展覧会の図録・目録類、売立目録など、和文・欧文あわせて174,945冊の図書に加え、和文5,491種、韓文54種、中文153種、欧文507種におよぶ美術関係雑誌170,527冊を所蔵している。その他江戸期の写本・版本をはじめ、明治大正期刊行の大型美術図録や美術雑誌、また明治から昭和初期に開催された各種博覧会・展覧会資料など、多くの貴重書を所蔵している。

(2) 無形文化遺産関係図書

古典芸能・民俗芸能・寺事・伝統的な技術、その他我が国の無形文化遺産の研究に必要な図書19,139冊を所蔵している。そのなかには、雅楽画報・演劇画報・歌舞伎新報・歌舞伎（第1次）・テアトロ（第1次）・新劇・上方・民俗芸能・日本民俗・芸能復興・郷土研究・旅と伝

説など現在では入手しにくい雑誌、国立劇場ほかで行われる芸能公演の上演資料や声明本・謡本・囃子手付本・丸本などの台本・譜本など、多くの貴重書を含んでいる。令和2年度は344冊を登録し、現在進行中である。

(3) 保存科学・修復技術関係図書

伝統的生産及び工芸技術書、技術史またはそれらの科学的究明を試みたもの、修理工事報告書及び化学・物理学・生物学部門の保存科学の関連和洋書、あわせて11,578冊を所蔵している。

(4) 日本国外の文化遺産関係図書

国際資料室では、海外の文化遺産や文化財保存、文化財国際協力や文化財保護制度に関する国内外の図書資料を約15,000点所蔵する。また、文化財保護関連機関のパンフレットなど図書以外の文献資料の収集、さらに国内外の文化財保護関連法令資料の収集を実施している。

令和3年度における収集数（韓文・中文図書は、和漢書として計上）

区 分	美術関係	無形文化遺産関係	保存修復関係	日本国外の文化遺産関係	計
和漢書	1,796冊	339冊	747冊	128冊	3,010冊
洋書	138冊	5冊	21冊	20冊	184冊
合 計	1,934冊	344冊	768冊	148冊	3,194冊

2. その他の資料

(1) 美術関係資料：文化財情報資料部が管理している写真資料は、絵画・彫刻・工芸・建築等の台紙貼写真、売立目録カードなど総数約26万点である。写真原板は、モノクロ4×5フィルム約49,740点、カラー4×5フィルム約8,980点、半切ほかガラス乾板約21,000点をはじめとして、各種サイズのモノクロフィルム約3,450点、X線フィルム・赤外線フィルム約3,300点などを所蔵している。また、当研究所旧職員梅津次郎、秋山光和、田中一松、久野健、中村傳三郎、松島健各氏寄贈研究資料の公開に向けた整理のほか、鈴木敬氏旧蔵写真資料の整理を行っている。このほか、拓本類、作家伝記資料、落款印章資料、近現代作家・団体・画廊・作品資料、資料スクラップ等と図版カード、各種索引類などを管理している。

(2) 無形文化遺産関係資料：無形文化遺産部では、雅楽・能・歌舞伎・邦楽・寺院行事・民俗芸能その他の伝統芸能の技法を、録音・録画、写真撮影等の形で記録することを重要な業務としてきた。これまでに、現地での実況や所内の実演記録室等での演奏を記録したオープンリールテープ約2,300点、ビデオ1,191点、スチル写真は関連する文書の記録写真等も含め約19万点、CDはオ

ープンリールテープをデジタル化した物を中心に1,986点、DVD3,839点、BD752点を作成してきた。令和3年度は、DVD2点、BD153点を登録した。また、市販された伝統芸能関係の資料の収集も進めている。ことに、1960（昭和35）年度文部省機関研究費によって購入した安原コレクションは、明治・大正・昭和3代にわたって発売された各種邦楽のSPレコードを網羅した約6,000枚の一大コレクションで、近代における邦楽の実態と変遷を知る上で貴重な資料である。レコードの収集枚数は現在約7,300枚に及んでいる。その他これまでに、市販のビデオ530点、CD1,915点、DVD1,629点、BD12点を収集してきた。うち令和3年度は、市販のCD6点、DVD108点、BD3点を登録した。なおSPレコードコレクションの詳細は『音盤目録Ⅰ～Ⅴ』（東京国立文化財研究所刊1966～1996）で公表している。また令和2年度に当研究所に寄附された、日本の伝統楽器や関連資料の蒐集家・及川尊雄氏旧蔵紙媒体資料（2,209点）について、『及川尊雄氏旧蔵紙媒体資料目録』（2021年3月）を刊行するとともに、「及川尊雄氏旧蔵紙媒体資料データベース」（2022年3月公開）にて目録を公開している。

- (3) 保存科学・修復技術関係資料：保存科学研究センターでは、考古遺物や美術工芸品など、諸部門の文化財を撮影したX線フィルムを多数所蔵する。X線透過撮影は昭和20年代から力を注いで行っており、近年それらのデータをデジタル化し、整理する作業を進めている。
- (4) 国際関係資料：文化遺産国際協力センターでは、日本の文化財保護に関する国際協力の分野で活躍した専門家の資料を受け入れている。関野克氏旧蔵資料には、国際機関での会議や、個別の文化遺産保存に関わる記録が含まれている。特に、UNESCOの条約や勧告に関わる資料には、草案や日本政府の意見書なども含まれ、その成

立の経緯や日本政府の関与なども知ることができる。伊藤延男氏旧蔵資料は、戦後の文化財保護行政に関する諸資料のほか、関野克氏の後継者として関わった国際機関の会議等の資料が多く含まれており、関野克氏旧蔵資料と併せて戦後の文化財保護行政における国際関係の動向を知りうる幅広い資料群となっている。また、千原大五郎氏旧蔵資料には、ポロブドゥール修復事業関連の会議録、書簡類、修復案、図面、オランダ統治時代の研究書や、その他の東南アジア諸国の遺跡に関する文献や図面、写真も数多く含まれる。さらに、野口英雄氏が収集した、文化財の危機管理やユネスコ日本信託基金による保存修復事業などに関する資料を受け入れている。

2. 研究所関係資料

1. 設立の経緯

東京文化財研究所は、2001（平成13）年4月1日に東京国立文化財研究所が独立行政法人化され独立行政法人文化財研究所東京文化財研究所となり、さらに2007（平成19）年4月1日に独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所となり、現在に至っている。その前身である東京国立文化財研究所は、1952（昭和27）年4月1日に発足し、その母体となったものは、1930（昭和5）年に創設された政府機関の帝国美術院附属美術研究所である。

この美術研究所は、1924（大正13）年7月、帝国美術院長子爵故黒田清輝の遺言により美術奨励事業のために寄附出捐した資金で遺言執行人が選択決定した事業である。すなわち遺言執行人代表伯爵樺山愛輔は、故子爵の遺志にしたがってこの資金で行うべき事業の選択を伯爵牧野伸顕に一任した。牧野伯爵は帝国美術院長福原鏝二郎及び東京美術学校長正木直彦とはかつて諸方面の意見を徴し、またわが国美術研究の必要に照らして次の事業を行うこととした。

- (1) 美術に関する基礎的調査研究機関として美術研究所を設けること。
- (2) 黒田子爵の作品を陳列して同子爵の功績を記念すること。
- (3) 前二項の目的を達するために適当な建物を造営すること。
- (4) 事業成立の上は一切これを政府に寄附すること。

2. 年代別重要事項

期 日	事 項
昭和元年12月25日	前記の事業を遂行するため委員会が組織され、東京美術学校長正木直彦が委員長に就任し、美術研究所事業については東京美術学校教授矢代幸雄、黒田子爵作品陳列については東京美術学校教授久米桂一郎・岡田三郎助・同和田英作・同藤島武二及び大給近清、建物造営については東京美術学校教授岡田信一郎、会計事務については遺言執行人打田伝吉を各委員として事務を分掌進行させた。
昭和2年2月1日 10月28日	美術研究所準備事業を開始した。 東京市上野公園内に鉄筋コンクリート造、半地階2階建、延面積1,192㎡の建物1棟を起工した（本館）。
昭和3年9月	前記の建物が竣工したので、黒田記念館と名付け、美術研究所開設のため必要な備品・図書・写真等の研究資料を設備し、また館内に黒田子爵記念室を設け、黒田清輝の作品を陳列した。
昭和3年5月29日	遺言執行人代表者樺山愛輔は、建物・設備・研究資料等一切の外に金15万円をそえて帝国美術院長に寄附を願い出た。
昭和5年6月28日 10月17日	勅令第125号により帝国美術院に附属美術研究所が置かれ、東京美術学校長正木直彦が同研究所の主事に補せられた。 美術研究所開所式を挙行了た。

期 日	事 項
昭和 7 年 1 月 1 日 4 月 18 日 5 月 26 日	美術研究所の研究成果発表機関誌として、定期刊行物『美術研究』を創刊した。 株式会社朝日新聞社より明治大正美術史編纂費として本年から向う 5 か年間毎年 5 千円、合計 2 万 5 千円を帝国美術院に寄附したいとの申出があった。 帝国美術院はこの申出を受理した。 明治大正美術史編纂委員会規程を設け、美術研究所は明治大正美術史の編纂に関する事務を行うことになった。
昭和 9 年 10 月 18 日	毎年 10 月 18 日を開所記念日と定めた。
昭和 10 年 1 月 28 日 昭和 10 年 4 月 6 月 1 日	鉄筋コンクリート造、2 階建、延面積 129㎡の書庫が竣工した。 『日本美術年鑑』の編纂事務を開始した。 勅令第 148 号により美術研究所官制が公布された。 研究資料閲覧規程を制定し、閲覧事務を開始した。
昭和 12 年 6 月 24 日 11 月 29 日	勅令第 281 号により美術研究所官制中改正の件が公布され、従来、帝国美術院に附置されていたのを文部大臣の直轄に改められた。 美術研究所長職務規程、美術研究所事務分掌規程が制定された。
昭和 13 年 2 月 12 日	木造、平屋建、延面積 97㎡の写真室 1 棟が竣工した。
昭和 19 年 8 月 10 日	黒田清輝の作品、並びに写真原版を東京都西多摩郡小宮村谷間家倉庫に疎開した。
昭和 20 年 5 月 28 日 7～8 月	美術研究所の図書・諸資料全部を山形県酒田市本町 1 丁目日本間家倉庫 3 棟に疎開した。 酒田市本間家倉庫に疎開した図書資料を爆撃の危険を避けるため、さらに酒田市外牧曾根村松沢世喜雄家倉庫・観音寺村村上家倉庫・大沢村後藤作之丞家倉庫にそれぞれ分散疎開した。
昭和 21 年 3 月 29 日 4 月 4 日 4 月 16 日	酒田市疎開中の図書・諸資料等の東京向け発送を終了した。 酒田市疎開中の図書・諸資料等が東京に到着し、引揚げを完了した。 東京都西多摩郡に疎開中の黒田清輝作品並びに写真原版の引揚げを完了した。
昭和 22 年 5 月 3 日	美術研究所官制が廃止され、国立博物館官制が制定された。美術研究所は同館の附属美術研究所となった。国立博物館に保存修理課発足。同課内に保存技術研究室を置いた（保存科学部の前身）。昭和 23 年度より専任の職員を配置し、研究を開始した。研究室は国立博物館本館地下の修理室の一室（66㎡）に設けた。
昭和 25 年 8 月 29 日	文化財保護法の制定にともない、美術研究所は文化財保護委員会の附属機関となった。 文化財保護委員会事務局設置にともない、保存科学研究室は国立博物館保存修理課から文化財保護委員会事務局保存部建造物課に所属換えとなった。
昭和 26 年 1 月 31 日	美術研究所組織規程が定められ、第一研究部・第二研究部・資料部・庶務室が置かれた。
昭和 27 年 4 月 1 日 7 月 1 日	文化財保護法の一部が改正、東京文化財研究所組織規程が定められ、美術部・芸能部・保存科学部・庶務室の 3 部 1 室が置かれ、美術研究所組織規程が廃止された。 また文化財保護委員会事務局保存部建造物課保存科学研究室も廃止された。 芸能部研究室として東京藝術大学音楽学部邦楽科教室 2 室を同大学から借用し、研究を開始した。
昭和 28 年 4 月 26 日	保存科学部研究室として、東京国立博物館構内の倉庫 132㎡を改造のうえ移転した。
昭和 29 年 7 月 1 日	東京文化財研究所組織規程の一部が改正され、東京国立文化財研究所となった。
昭和 32 年 3 月 22 日 11 月 30 日	東京国立博物館構内に木造、外部鉄網モルタル塗、平屋建、8 ㎡の保存科学部の薬品庫が竣工した。 従来の 2 階建書庫の上にさらに 1 階を増築 3 階建とし、増築分延面積 71㎡が竣工した。
昭和 34 年 4 月 30 日	東京国立文化財研究所研究受託規程が定められ、この年度から受託研究が開始された。
昭和 36 年 9 月 16 日	東京国立文化財研究所組織規程の一部が改正され、従来の庶務室は庶務課となった。
昭和 37 年 3 月 31 日 7 月 1 日 7 月 20 日	東京国立博物館内に保存科学部庁舎（保存科学部実験室）として、鉄筋コンクリート造、2 階建、延面積 663㎡の建物 1 棟が竣工した。 東京国立文化財研究所組織規程の一部が改正され、新たに保存科学部に修理技術研究室が置かれた。 芸能部研究室は、保存科学部庁舎の竣工にともない、旧保存科学部庁舎に移転した。
昭和 43 年 6 月 15 日	文部省設置法の一部が改正され、本研究所は文化庁附属機関となった。
昭和 44 年 8 月 23 日	保存科学部庁舎に隣接して新営される別館庁舎（延 1,950.41㎡）の起工式が行われた。
昭和 45 年 3 月 25 日	前記の別館が竣工したので、同年 5 月 26 日竣工式が行われた。芸能部は、別館 3 階に移転した。

期 日	事 項
昭和45年 5月8日 6月29日 11月2日	保存科学部は別館の地階～2階に実験用機械類の移転据付を完了した。 保存科学部庁舎の1階の模様替工事に着手し、同年10月15日工事が完了した。 所長及び庶務課は、本館から保存科学部庁舎の1階に移転した（本館は、美術部庁舎となる）。これにより研究所の所在地表示は「12番53号」から「13番27号」に変更された。
昭和46年 4月1日	保存科学部庁舎及び別館の敷地2,658㎡を東京国立博物館から所管換えされた。
昭和48年 4月12日	文部省設置法施行規則の一部が改正され、新たに修復技術部が設けられ4部1課となり、修復技術部に第一修復技術研究室及び第二修復技術研究室が置かれ、保存科学部修理技術研究室は廃止された。
昭和52年 4月18日	文部省設置法施行規則の一部が改正され、情報資料部の新設により5部1課となり、情報資料部に文献資料研究室及び写真資料研究室が置かれ、美術部資料室は廃止された。
昭和53年 3月20日 4月5日	本館構内の写真等（木造、平屋建、延面積144㎡）を取りこわし、情報資料部研究棟として、鉄筋コンクリート造、地下1階、地上3階、延面積569.95㎡の建物が竣工した。 文部省設置法施行規則の一部が改正され、新たに修復技術部に第三修復技術研究室が置かれた。
昭和59年 6月28日	文部省組織令が改正され、本研究所は文化庁施設等機関となった。
平成3年10月1日	文部省設置法施行規則の一部が改正されて、新たにアジア文化財保存研究室が置かれ、5部1室1課となった。
平成5年 4月1日	文部省設置法施行規則の一部が改正されて、アジア文化財保存研究室は、国際文化財保存修復協力室となった。
平成7年 4月1日	文部省設置法施行規則の一部が改正されて、国際文化財保存修復協力室が廃止され、新たに国際文化財保存修復協力センターが設置された。同センターには、企画室及び環境解析研究指導室が置かれ、1センター5部1課となった。 東京藝術大学と「東京芸術大学大学院美術研究科文化財保存学専攻の教育研究に対する連携・協力に関する協定書」が交わされ、連携併任分野として独立専攻大学院文化財保存学専攻（システム保存学）が設置された。
平成9年10月1日	文部省設置法施行規則の一部が改正されて、国際文化財保存修復協力センターに保存計画研究指導室が置かれた。
平成12年 2月4日 2月21日 3月6日 3月22日 5月11日	新宮庁舎として、鉄筋コンクリート造、地上4階地下1階、延面積10,557.99㎡（建築面積2,258.48㎡）が竣工した。 新宮庁舎の竣工にともない、別館（庶務課・芸能部・保存科学部・修復技術部・国際文化財保存修復協力センター）部分の移転が開始された。 新宮庁舎の竣工にともない、本館（美術部・情報資料部）の移転が開始された。 建設省関東地方建設局営繕部より、新宮庁舎の外構工事、植栽等の引き渡しを受け、新宮庁舎関係の工事が完了した。 新宮庁舎の竣工を記念し、開所記念式典を挙行了した。 この式典の挙行に際し、毎年5月11日を開所記念日と定めた。
平成13年 3月29日 4月1日	黒田記念館改修工事が竣工し、展示スペースが黒田記念室及び展示室の2室になった。 東京国立文化財研究所は、奈良国立文化財研究所と統合され、独立行政法人文化財研究所東京文化財研究所となった。 この独立行政法人化にともない、東京文化財研究所は、管理部、協力調整官・情報調整室、美術部、芸能部、保存科学部、修復技術部、国際文化財保存修復協力センターの1センター5部1協力調整官・情報調整室となった。
平成15年 9月19日	黒田記念館にエレベーターを設置し、門扉、外構の改修工事を行った。
平成18年 4月1日	文化財研究所組織規程の一部が改正されて、協力調整官・情報調整室は企画情報部に、芸能部は無形文化遺産部に、国際文化財保存修復協力センターは文化遺産国際協力センターとなった。
平成19年 4月1日	独立行政法人文化財研究所東京文化財研究所は、独立行政法人文化財研究所と独立行政法人国立博物館との統合により、独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所となり、黒田記念館は、東京国立博物館に移管された。 この統合にともない、東京文化財研究所は、美術部を企画情報部に、保存科学部と修復技術部は保存修復科学センターに統合し、3部2センターとなった。
平成22年 4月1日	国立文化財機構組織規程等の一部が改正されて、管理部は研究支援推進部となった。
平成28年 4月1日	国立文化財機構組織規程等の一部が改正されて、企画情報部は文化財情報資料部に、保存修復科学センターは保存科学研究センターとなった。

3. 歴代所長

(昭和5年～令和3年度)

正木 直彦	主事	昭和 5. 6.28～昭和 6.11.24
矢代 幸雄	主事	昭和 6.11.25～昭和10. 5.31
和田 英作	所長事務取扱	昭和10. 6. 1～昭和11. 6.21
矢代 幸雄	所長	昭和11. 6.22～昭和17. 6.28
田中 豊蔵	所長事務取扱	昭和17. 6.29～昭和22. 8.15
田中 豊蔵	所長	昭和22. 8.16～昭和23. 5.10
福山 敏男	所長代理	昭和23. 5.11～昭和24. 8.30
松本 栄一	所長	昭和24. 8.31～昭和27. 3.31
矢代 幸雄	所長事務代理	昭和27. 4. 1～昭和28.10.31
田中 一松	所長	昭和28.11. 1～昭和40. 3.31
関野 克	所長	昭和40. 4. 1～昭和53. 3.31
伊藤 延男	所長	昭和53. 4. 1～昭和62. 3.31
濱田 隆	所長	昭和62. 4. 1～平成 3. 3.31
西川 杏太郎	所長	平成 3. 4. 1～平成 8. 3.31
渡邊 明義	所長	平成 8. 4. 1～平成13. 3.31
(独立行政法人文化財研究所 東京文化財研究所に移行)		
渡邊 明義	所長	平成13. 4. 1～平成16. 3.31
鈴木 規夫	所長	平成16. 4. 1～平成19. 3.31
(独立行政法人国立文化財機構 東京文化財研究所に移行)		
鈴木 規夫	所長	平成19. 4. 1～平成22. 3.31
亀井 伸雄	所長	平成22. 4. 1～平成30. 7.17
山梨 絵美子	所長事務代理	平成30. 7.18～平成30.12.31
齊藤 孝正	所長	平成31. 1. 1～現在

4. 名誉研究員

氏 名	退 職 時 官 職 名	在 所 期 間	名誉研究員発令年月日
江上 綏	情報資料部主任研究官	昭和38.5.18～昭和59.3.31	昭和59.10.18
猪川 和子	情報資料部文献資料研究室長	昭和22.6.27～昭和60.3.31	昭和60.10.18
三隅 治雄	芸能部長	昭和27.10.1～昭和63.3.31	昭和63.10.18
濱田 隆	所長	昭和62.4.1～平成3.3.31	平成3.10.18
関口 正之	美術部長	昭和42.2.1～平成3.3.31	平成3.10.18
馬淵 久夫	保存科学部長	昭和50.10.1～平成4.3.31	平成4.10.18
新井 英夫	保存科学部長	昭和45.9.1～平成5.3.31	平成5.4.1
西川 杏太郎	所長	平成3.4.1～平成8.3.31	平成8.4.1
三輪 英夫	美術部第二研究室長	昭和53.8.1～平成8.3.31	平成8.4.1
蒲生 郷昭	芸能部長	昭和56.4.1～平成10.3.31	平成10.4.1
中里 壽克	修復技術部第一修復技術研究室長	昭和39.4.1～平成10.3.31	平成10.4.1
宮本 長二郎	国際文化財保存修復協力センター長	平成6.4.1～平成11.3.31	平成11.4.1
羽田 昶	芸能部音楽舞踊研究室長	昭和51.4.1～平成12.3.31	平成12.4.1
中村 茂子	芸能部民俗芸能研究室長	昭和39.7.1～平成13.3.31	平成13.4.1
増田 勝彦	修復技術部長	昭和48.8.1～平成13.3.31	平成13.4.1
米倉 迪夫	情報資料部長	昭和50.9.1～平成13.3.31	平成13.4.1
星野 紘	芸能部長	平成10.4.1～平成14.3.31	平成14.4.1
平尾 良光	保存科学部化学研究室長	昭和62.4.1～平成15.3.31	平成15.4.1
井手 誠之輔	協力調整官－情報調整室長	昭和62.7.1～平成16.3.29	平成16.3.30
斎藤 英俊	国際文化財保存修復協力センター長	平成11.4.1～平成16.3.30	平成16.3.31
西浦 忠輝	保存科学部長	昭和50.7.1～平成16.3.31	平成16.4.1
鈴木 廣之	美術部日本東洋美術研究室長	昭和54.9.1～平成17.11.30	平成17.12.1
青木 繁夫	文化遺産国際協力センター長	昭和49.7.1～平成19.3.31	平成19.3.31
三浦 定俊	副所長	昭和48.8.1～平成20.3.31	平成20.4.1
鎌倉 恵子	無形文化遺産部無形文化財研究室長	昭和63.4.1～平成20.3.31	平成20.4.1
鈴木 規夫	所長	平成16.4.1～平成22.3.31	平成22.4.1
中野 照男	副所長	平成4.4.1～平成23.3.31	平成23.4.1
清水 真一	文化遺産国際協力センター長	平成19.4.1～平成23.3.31	平成23.4.1
石崎 武志	副所長	平成8.12.1～平成26.9.30	平成26.10.1
田中 淳	副所長	平成6.11.1～平成28.3.31	平成28.4.1
川野邊 渉	文化遺産国際協力センター長	昭和63.10.1～平成28.3.31	平成28.4.1
岡田 健	保存科学研究センター長	平成4.4.1～平成29.3.31	平成29.4.1
津田 徹英	文化財情報資料部長	平成11.1.1～平成30.3.31	平成30.4.1
飯島 満	無形文化遺産部長	平成16.4.16～平成31.3.31	平成31.4.1
中山 俊介	文化遺産国際協力センター長	平成18.2.1～平成31.3.31	平成31.4.1
佐野 千絵	保存科学研究センター長	平成1.4.1～令和2.3.31	令和2.4.1
山梨 絵美子	副所長	昭和59.4.1～令和3.3.31	令和3.4.1
高桑 いづみ	特任研究員	平成4.4.1～令和3.3.31	令和3.4.1

5. 2021(令和3)年度予算等

(単位：千円)

(1) 予算

事 項	予 算 額
一般管理費	115,516
基礎研究事業費	55,514
応用研究事業費	60,368
国際遺産保護事業費	89,886
情報公開事業費	76,657
研修協力事業費	2,891
合 計	400,832

予算とプロジェクトとの対応

文化財情報資料部

略番	分 類 項 目	プロジェクト名	事 業 区 分
シ01	①有形・無形の文化財に関する調査研究事業	文化財に関する調査研究成果および研究情報の共有に関する総合的研究	情報公開事業費
シ02	①有形・無形の文化財に関する調査研究事業	日本東洋美術史の資料学的研究	基礎研究事業費
シ03	①有形・無形の文化財に関する調査研究事業	近・現代美術に関する調査研究と資料集成	基礎研究事業費
シ04	①有形・無形の文化財に関する調査研究事業	美術作品の様式表現・制作技術・素材に関する複合的研究と公開	基礎研究事業費
シ05	④情報収集・成果公開に関する事業	文化財情報の分析・活用と公開に関する調査研究	情報公開事業費
シ06	④情報収集・成果公開に関する事業	専門的アーカイブと総合的レファレンスの拡充	情報公開事業費
シ07	⑤刊行物に関する事業	令和元年版『日本美術年鑑』刊行事業・出版事業『美術研究』	情報公開事業費
シ08	④情報収集・成果公開に関する事業	令和3年度オープンレクチャー(調査・研究成果の公開)	情報公開事業費

無形文化遺産部

略番	分 類 項 目	プロジェクト名	事 業 区 分
ム01	①有形・無形の文化財に関する調査研究事業	無形文化財の保存・継承に関する調査研究	基礎研究事業費
ム02	①有形・無形の文化財に関する調査研究事業	無形民俗文化財の保存・活用に関する調査研究	基礎研究事業費
ム03	④情報収集・成果公開に関する事業	無形文化遺産に関わる音声・画像・映像資料のデジタル化	情報公開事業費
ム04	⑤刊行物に関する事業	無形文化遺産部出版関係事業	情報公開事業費
ム05	①有形・無形の文化財に関する調査研究事業	無形文化遺産保護に関する研究交流・情報収集	基礎研究事業費

保存科学研究センター

略番	分 類 項 目	プロジェクト名	事 業 区 分
ホ01	②保存修復に関する調査研究事業	文化財生物劣化の分子生物学的手法による機構解明と環境調和型対策	応用研究事業費
ホ02	②保存修復に関する調査研究事業	文化財の保存環境にかかる調査研究	応用研究事業費
ホ03	②保存修復に関する調査研究事業	文化財の材質・構造・状態調査に関する研究	応用研究事業費
ホ04	②保存修復に関する調査研究事業	屋外文化財の保存修復計画に関する調査研究	応用研究事業費
ホ05	②保存修復に関する調査研究事業	文化財修復材料と伝統技法に関する調査研究	応用研究事業費
ホ05(1)	②保存修復に関する調査研究事業	伝統材料・技法に関する複合的調査研究	応用研究事業費
ホ05(2)	②保存修復に関する調査研究事業	文化財修復のための技術と材料に関する調査研究	応用研究事業費
ホ06	②保存修復に関する調査研究事業	多様な文化財の修復技術に関する調査研究	応用研究事業費
ホ07	⑤刊行物に関する事業	『保存科学』第61号の出版	情報公開事業費
ホ08	⑥指導助言・研修等に関する事業	博物館・美術館等保存担当学芸員研修(上級コース)	研修協力事業費

略番	分類項目	プロジェクト名	事業区分
コ01	③国際協力・交流等に関する事業	文化遺産保護に関する国際情報の収集・研究・発信	国際遺産保護事業費
コ02	③国際協力・交流等に関する事業	アジア諸国等文化遺産保存修復協力	国際遺産保護事業費
コ03	③国際協力・交流等に関する事業	文化遺産の保存修復技術に係る国際的研究	国際遺産保護事業費
コ04	②保存修復に関する調査研究事業	在外日本古美術品保存修復協力事業	応用研究事業費
コ05	③国際協力・交流等に関する事業	国際研修	国際遺産保護事業費

(2) 科学研究費助成事業交付一覧

(単位：円)

研究種目	研究課題	研究代表者	交付額
基盤研究 (A)			
	アジア螺鈿文化交流史の構築－物質文化史の視点から	小林 公治	7,930,000
基盤研究 (B)			
	対外交渉史の視点によるアジア螺鈿の総合的研究－大航海時代を中心に－	小林 公治	- *
	日本美術の記録と評価についての研究－美術作品調書の保存活用	江村 知子	1,560,000
	絵画に使用された絹・自然布の非破壊分析方法の開発と製法・修復に関する総合的調査	早川 典子	2,210,000
	ポンペイ遺跡壁画における無機物を主体とした保存修復材料による補強技法の確立	前川 佳文	3,250,000
	白鳳時代の壁画の構造と材料に関する研究	犬塚 将英	3,250,000
	紙文化財補修用材料としての高機能化楮繊維の開発	稲葉 政満	5,200,000
新学術領域研究 (研究領域提案型)			
	イラン東部へのウルク文化の拡大に関する考古学的研究	安倍 雅史	2,600,000
特別研究員奨励費 (外国人)			
	日本の無形文化遺産保護におけるジェンダーに関する研究	久保田 裕道	400,000
研究成果公開促進費 (学術図書)			
	旅館おかみの誕生	後藤 知美	1,300,000
基盤研究 (C)			
	常磐津節の音楽分析のための基盤研究	前原 恵美	- *
	江戸時代の絵画における基底材に関する基礎的研究	安永 拓世	- *
	ポスト 1968年表現共同体の研究：松澤有アーカイブズを基軸として	橘川 英規	- *
	鍾乳洞における照明植生を軽減する光環境に関する実験的研究	朽津 信明	1,170,000
	様々な文化財に使用された彩色材料への赤外線画像による画的調査の検討	秋山 純子	910,000
	地域文化の表象としての「箕」の形態に関する学際的研究	今石 みぎわ	1,560,000 **
	従属栄養微生物による硫黄化合物の分解とそれに伴う腐食性ガス生成	片山 葉子	1,430,000
	イランの乾燥地帯における農業施設の建築構法および建築技術者の存在形態に関する研究	浅田 なつみ	390,000
	近現代建造物の価値評価における同時代性に着目した文化財の現状変更概念の再考	金井 健	1,040,000
若手研究			
	マヤ地域の博物館における文化遺産保全と地域発展に向けた文化資源マネジメントの研究	五木田 まきは	1,040,000
	中世日本における中国美術の受容と羅漢の作例に関する調査研究	米沢 玲	- *
	木材からの化学物質放散挙動の解明と博物館における選定指標の提案	古田嶋 智子	260,000
	古典的膠の製造方法と各用途適性の体系化	宇高 健太郎	1,040,000
	南西諸島における風葬の定着過程に関する研究	牛窪 彩絢	1,170,000 **
	組積造建造物の通電による脱塩の適応可能性に関する検討	水谷 悦子	1,560,000
	初期合成染料の染色堅牢性評価と変退色挙動の検討	片淵 奈美香	1,430,000
研究活動スタート支援			
	近現代建造物に適應した文化財保存理念の展開に向けた基礎的研究	金井 健	- *
	近代の河川工事給馬にみる河川管理のあり方と地域社会の接点：利根川中流域を中心に	後藤 知美	1,560,000
	被災文化財保全のための一時保管と処置方法の最適化に向けた研究	芳賀 文絵	1,430,000
	カジリムシ目昆虫における外部寄生性の進化に伴う形態変化の解明	島田 潤	1,560,000

* 令和2年度から繰り越し

** 全額を令和4年度に繰り越し

(3) 受託調査研究一覧

(単位：円)

研究課題	依頼元	研究代表者	受入額
文化遺産国際協力コンソーシアム事業	文化庁	友田 正彦	34,487,631
ブータン王国の歴史的建造物保存活用に関する拠点交流事業	文化庁	金井 健	5,742,697
国宝高松塚古墳壁画恒久保存対策に関する調査等業務	文化庁	建石 徹	36,644,577
特別史跡キトラ古墳保存対策等調査業務	文化庁	建石 徹	19,228,632
美術工芸品保存修理用具・原材料調査事業	文化庁	早川 典子	940,500

(4) 共同研究等一覧

(単位：円)

研究課題	共同研究者	研究代表者	受入額
航空資料保存の研究	一般財団法人日本航空協会	建石 徹	400,000
沖縄県立芸術大学所蔵 重要文化財琉球芸術調査写真（鎌倉芳太郎撮影）のデジタル化に関する共同研究	公立大学法人 沖縄県立芸術大学	早川 泰弘	3,300,000
エアロゾル消火薬剤が文化財に与える影響に関する共同研究	千葉科学大学	早川 泰弘	500,000
ゲッティ・リサーチ・ポータルへのデジタル資料の提供・公開	The J. Paul Getty Trust	江村 知子	-

(5) 助成金一覧

(単位：円)

研究課題	助成元	研究代表者	受入額
バガン遺跡群（ミャンマー）寺院祠堂壁画の保存修復	公益財団法人住友財団	前川 佳文	3,500,000
近世の奄美・沖縄諸島における風葬の普及に関する文献史学的研究	公益財団法人 高梨学術奨励基金	牛窪 彩綯	530,000 *
無形文化遺産における木材の伝統的な利用技術および民俗知に関する調査研究 *	公益財団法人 三菱財団	今石 みぎわ	6,500,000 *
収蔵庫・展示室の建材等から放散する有機酸等の定量評価のための開発研究	公益財団法人 ポーラ美術振興財団	犬塚 将英	1,750,000
コロナ禍における伝統芸能の「グッド・プラクティス」に関する研究	一般財団法人カワイサウンド 技術・音楽振興財団	前原 恵美	700,000

* 全額を令和4年度に繰り越し

(6) 寄付金一覧

(単位：円)

研究課題	助成元	研究代表者	受入額
東京文化財研究所における研究事業の助成	株式会社東京美術倶楽部	文化財情報資料部	1,000,000
東京文化財研究所における研究成果の公表（出版事業）	東京美術商協同組合	文化財情報資料部	1,000,000

年度内主要事業一覧

期 日	事 業 名
書面開催	独立行政法人国立文化財機構外部評価委員会研究所・センター調査研究等部会
書面開催	独立行政法人国立文化財機構外部評価委員会総会
3年 7月 5日～9日	令和3年度博物館・美術館等保存担当学芸員研修(上級コース)
3年 7月 8日	第29回文化遺産国際協力コンソーシアム研究会「文化遺産にまつわる情報の保存と継承～開かれたデータベースに向けて～」(オンライン)
3年 8月 9日	令和3年度世界遺産研究協議会 『整備』をどう説明するか(録画配信)
3年 9月 1日～15日 11月24日～25日	国際研修におけるIT技術導入のための実証実験(オンライン併用)
3年 9月21日	文化財の記録作成に関するセミナー「文化財保護と記録作成・画像圧縮の原理」
3年 9月29日～10月1日	「文化財修復技術者のための科学知識基礎研修」
3年11月 5日	第55回オープンレクチャー「かたちを見る、かたちを読む」
3年11月 9日	令和3年度国立文化財機構文化財防災センター研修事業「なぜ災害発生後に文化財を救うのかー文化財レスキューと心理社会的支援ー」(東北芸術工科大学、オンライン)
3年11月28日	令和3年度文化遺産国際協力コンソーシアムシンポジウム「海と文化遺産ー海が繋ぐヒトとモノー」(オンライン)
3年12月 3日	【シリーズ】無形文化遺産と新型コロナウイルス フォーラム3「伝統芸能と新型コロナウイルスーGood Practiceとは何かー」(録画配信併用)
3年12月17日	第16回無形民俗文化財研究協議会「映像記録のカー危機を乗り越えるためにー」(録画配信併用)
4年 1月31日	第3回保存環境調査・管理に関する講習会ー空気清浄化のための化学物質吸着剤ー(オンライン併用)
4年 2月20日	研究会「考古学と国際貢献 イスラエルの考古学と文化遺産」(オンライン)
4年 2月11日	第30回文化遺産国際協力コンソーシアム研究会「文化遺産×市民参画=マルチアクターによる国際協力の可能性」(オンライン)
4年 3月30日～5月31日	第15回無形文化遺産部公開学術講座「樹木利用の文化ー桜をつかう、桜で奏でるー」(録画配信)

令和3年3月25日

(序 文)

独立行政法人通則法（平成十一年法律第百三号）第三十条の規定により、独立行政法人国立文化財機構が中期目標を達成するための中期計画（以下「中期計画」という。）を次のとおり定める。

(基本方針)

平成29年6月に「文化芸術基本法」（平成十三年法律第百四十八号）が改正、令和2年5月には、「文化観光拠点施設を中核とした地域における文化観光の推進に関する法律」（令和2年法律第十八号）が制定され、文化芸術の振興にとどまらず、2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会を契機に、文化資源の積極的な活用を図り、国内外の幅広い来訪者にその魅力を分かり易く紹介することで、我が国の文化観光に資することが求められている。

また、令和元年9月に開催された第25回国際博物館会議（ICOM）京都大会（以下「2019年ICOM京都大会」という。）で採択された「文化をつなぐミュージアム」をはじめとする決議も踏まえ、持続可能性、多様性、社会包摂などのキーワードに示される博物館政策の国際的な動向も注視しながら、新たな時代の博物館の役割を果たしていくことも求められている。

平成31年2月には東京国立博物館、令和元年10月には京都、奈良及び九州国立博物館において新時代プランを公表し、日本の文化を世界へ発信するための中心的な役割を担うために、展示解説の工夫や情報発信力の強化、快適な鑑賞環境の実現に向けて挑戦することとし、プラン実現のための運営基盤確保等も進めているところである。

上記を踏まえ、独立行政法人国立文化財機構（以下「機構」という。）は、我が国の博物館及び文化財研究に関するナショナルセンターとしての政策実施機能を的確に発揮しつつ効果的かつ効率的な業務運営を確保するため、第4期中期目標期間に行ってきた事務・事業を継続して実施することを基本とし、以下の内容については、今中期目標において重要事項として位置付け、重点的に取り組む。

1. 文化財活用センターの機能強化

平成30年に設置した文化財活用センターにおいて、高精細画像等を用いた文化財のレプリカやVR等の映像コンテンツの開発、文化財のデジタル資源化の推進と国内外への情報発信、地域の博物館等への所蔵品の貸与の促進により、文化財が持つ新たな魅力や価値を引き出し、内外に向けて文化財を通じた豊かな体験と学びを提供すること、また、地域の博物館等の保存環境向上に貢献することにより、文化財の次世代への確実な継承のみならず、地方創生、観光振興につながる新たな活用のあり方を目指す。

2. 文化財防災センターの機能強化

昨今、災害によって被害を受けた多様な文化財の保存・修復に関する専門的・技術的支援や助言に関する社会からの期待等を踏まえ、令和2年10月に設置した文化財防災センターの機能を向上させ、文化財の防災・救援のための連携・協力体制を構築し、専門的な知見から必要な支援を行うとともに、文化財防災に関する地域の専門的人材の育成を図る。

3. 業務運営及び組織に関する事項

理事長のリーダーシップの下で内部統制を推進する体制を整備・運用し、引き続き想定される鑑賞環境の変化等に的確に対応するための業務改善や柔軟な組織体制の見直しとこれに必要とされる職場環境を整備するとともに、長期的な視点に立って人材育成に取り組むなど、適切な業務運営を行う。

4. 財務内容に関する事項

展覧会、文化財の収集、調査研究、教育普及等の様々な事業を高い質で継続的に実施するためには、適切な運営費交付金や施設整備補助金の確保は必要不可欠ではあるが、コロナ禍における「新しい生活様式」を踏まえた事業展開に伴う収益の獲得や寄附金の獲得など多様な財源確保に努め、運営費交付金等の国費のみに頼らない財務構造へのシフトを目指す。

また、各施設においては中期目標に掲げた任務を果たすため、以下の役割を担う。

(東京国立博物館)

我が国を代表する人文系の総合博物館として、日本を中心にして広くアジア諸地域等にわたる文化財について、収集、保存、管理、展示、調査研究、教育普及事業等を行う。

(京都国立博物館)

平安時代から江戸時代の京都文化を中心とした文化財について、収集、保存、管理、展示、調査研究、教育普及事業等を行う。

(奈良国立博物館)

仏教美術及び奈良を中心とした文化財について、収集、保存、管理、展示、調査研究、教育普及事業等を行う。

(九州国立博物館)

日本とアジア諸地域等との文化交流を中心とした文化財について、収集、保存、管理、展示、調査研究、教育普及事業等を行う。なお、事業の実施に当たっては、福岡県等との連携協力を行う。

(東京文化財研究所)

我が国の文化財の研究を、有形・無形文化財等を対象に、基礎的なものから先端的、実践的なものまで総合的に行い、我が国の文化財研究の拠点としての役割を果たすとともに、この成果をもとに文化財の保護に貢献する。また、文化財担当者の研修、地方公共団体への専門的な助言を行う。さらに、保存科学・修復技術に関する我が国の中核としての役割を果たす。

また、世界の文化遺産保護に関する国際的な研究交流、保護協力、人材育成、情報の収集と活用等を実施するとともに、これらに係る国内外での連携の推進を通じ、文化遺産保護における国際協力の拠点としての役割を担う。

(奈良文化財研究所)

主に遺跡・建造物・庭園等土地に結び付いた文化財に関する調査研究の中核的拠点としての役割を果たす。また、平城宮跡、飛鳥・藤原宮跡等の発掘調査に基づく古代都城の総合的研究とその成果の公開・展示、南都諸大寺を中心とする歴史資料・建造物並びに全国的な文化的景観・伝統的建造物群等の調査研究、保存科学や遺跡整備等の文化財の保存・活用に関する調査研究、遺跡探査等の調査手法の研究開発を行うとともに、データベースの充実と発信、文化財研修や専門的助言等による文化財行政への協力を行う。

あわせて、海外研究機関との研究交流並びにアジア地域等での文化遺産保護事業と専門家養成に協力する。

(アジア太平洋無形文化遺産研究センター)

ユネスコの「無形文化遺産の保護に関する条約」(以下、「無形文化遺産保護条約」という。)の観点から、アジア太平洋地域における無形文化遺産保護研究の実態把握、無形文化遺産保護の政策や多様な方法論、無形文化遺産保護の優良事例の調査研究を通じて、無形文化遺産保護及びそのための研究に貢献する。

I 国民に対して提供するサービスその他業務の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置

1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信

(1) 有形文化財の収集・保管、次代への継承

①有形文化財の収集等

1)有形文化財の収集

体系的・通史的にバランスのとれた所蔵品の蓄積を図る観点から、次に掲げる各博物館の収集方針に沿って、調査研究及び情報収集の成果、並びに外部有識者の意見等を踏まえ、適時適切な収集を行う。

(東京国立博物館)

日本を中心にして広くアジア諸地域等にわたる美術、考古資料及び歴史資料等を収集する。

(京都国立博物館)

京都文化を中心とした美術、考古資料及び歴史資料等を収集する。

(奈良国立博物館)

仏教美術及び奈良を中心とした美術、考古資料及び歴史資料等を収集する。

(九州国立博物館)

日本とアジア諸地域等との文化交流を中心とした、美術、考古資料及び歴史資料等を収集する。

2) 寄贈・寄託品の受入れ等

収蔵品の体系的・通史的なバランスに留意し、寄贈・寄託品の受け入れを推進するとともに、積極的に活用する。また、既存の寄託品については、継続して寄託することを働きかけ、積極的に活用する。

②有形文化財の管理・保存・修理等

1)有形文化財の管理

国民共有の貴重な財産である文化財を永く次代へ伝えるため、収蔵品の管理を徹底し、特に収蔵品の増加に伴い収蔵に必要な施設設備の充実、改善を図る。また、収蔵品の現状を確認の上、管理に必要なデータ（画像データ、テキストデータ等）を整備して、展示・調査研究等の業務に活かし、博物館活動を充実させる。

2)有形文化財の保存

適切な展示・保存環境の保持のため、収蔵・展示施設の温湿度、生物生息、空気汚染及び地震等への対策、並びに保存等に関する調査研究とそのデータの解析・蓄積を引き続き実施する。

3)有形文化財の修理

修理を要する収蔵品は、機構の保存科学技師と機構内外の修復技術担当者の連携のもと、伝統的な修理技術とともに科学的な保存技術の成果を適切に取り入れながら、緊急性の高い収蔵品から順次、計画的に修理する。また、修理に必要な調査研究のための基本設備の充実を図る。

4)文化財修理施設等の運営

文化財保存修理所等については、国と協力して整備充実を図る。

(2) 展覧事業

展覧事業については、我が国の博物館の中核的拠点として、国民のニーズ、学術的動向等を踏まえ、かつ国際文化交流にも配慮しながら、開催目的、期待する成果、学術的意義を明確にして、質の高い魅力あるものを目指す。また、2019年 ICOM 京都大会の成果も踏まえつつ2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会及び2025年日本国際博覧会（以下「大阪・関西万博」という。）等に向けた政府の文化政策と連動した活動を実施する。

さらに、見やすさ分かりやすさに配慮した展示や解説、並びに音声ガイド等の導入により、日本及びアジア諸地域等の歴史・伝統文化についての理解を深められるよう工夫するとともに、「新しい生活様式」にも配慮しながら展覧事業について常に点検・評価を行い、改善を図る。

①平常展

平常展は、展覧事業の中核と位置付け、各博物館の特色を十分に発揮した体系的・総合的も

のとするとともに、最新の研究成果を基に、日本及びアジア諸地域等の歴史・伝統文化の理解の促進に寄与する展示を行い、展示に関する説明の充実、多言語化に取り組み、国内外からの来館者の増加を図る。

なお、平常展の来館者アンケートの満足度については、前中期目標の期間と同程度の水準の維持を目指す。

②特別展等

1) 特別展

特別展等については、積年の研究成果を活かしつつ、国民の関心の高い時宜に適った企画を立案し、国内外の博物館と連携しながら我が国の中核的拠点にふさわしい質の高い展示を行う。

特別展の来館者数については、展示内容・展覧環境を踏まえた目標を年度計画において設定する。また、特別展等の開催回数は概ね以下のとおりとし、各施設の工事等による影響を勘案しつつ、その達成に努める。

(東京国立博物館)

年3～4回程度

(京都国立博物館)

年1～2回程度

(奈良国立博物館)

年2～3回程度

(九州国立博物館)

年2～3回程度

なお、特別展来館者アンケートを実施し、その満足度については、前中期目標の期間と同程度の水準の維持を目指し、常に展示内容等の改善を図る。

2) 海外展等

海外からの要請等に応じて、海外において展覧会等を行うことにより、日本の優れた文化財をもとにした歴史と伝統文化を紹介する。

③観覧環境の向上等

国民に親しまれる博物館を目指し、来館者と「新しい生活様式」に配慮した観覧環境の整備や利用者の要望を踏まえた管理運営を行う。

1) 快適な観覧環境の提供

博物館内の施設の多言語化、バリアフリー化、ユニバーサルデザイン化並びに各種案内の充実、研修等の実施等を通じて、高齢者、障がい者、外国人、乳幼児連れの来館者等の利用にも配慮した快適な観覧環境の提供を行う。

2) 来館者の満足度調査等の実施、サービスの改善等

来館者を対象とする満足度調査及び専門家からの批評聴取等を定期的実施する。これらの調査結果を踏まえ、事業、管理運営についての見直しや改善を行う。特に開館時間の延長、混雑時の対応、ミュージアムショップやレストランのサービスの改善等、来館者に配慮した運営を行い、観覧環境に関する来館者アンケートの上位評価が前中期目標の期間と同程度の水準の維持を目指す。

(3) 教育・普及活動

日本及びアジア諸地域等の歴史・伝統文化の理解促進に寄与するよう、「新しい生活様式」にも配慮しながら教育活動、広報の充実を図る。また、展覧事業同様、2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会及び大阪・関西万博等に向けた関係機関の文化政策と連動した活動を実施する。

①教育活動の充実等

日本及びアジア諸地域等の歴史・伝統文化の理解促進に寄与するよう、新型コロナウイルスの

感染防止対策を講じた上で、機構の人的資源・物的資源・情報資源を活用した教育活動を実施する。なお、講演会等のアンケートの上位評価が前中期目標の期間と同程度の水準の維持を目指す。

1) 学習機会の提供

講演会、ギャラリートーク、スクールプログラム、ワークショップ及び職場体験等による学習機会を提供する。その際、対象やテーマに応じて学校、社会教育関係団体、国内外の博物館等との連携協力を行う。

2) ボランティア活動の支援

教育活動の充実及び来館者サービスの向上、さらに、生涯学習活動に寄与するため、ボランティアを育成し、その活動を支援する。

3) 大学との連携事業等の実施

インターンシップ、キャンパスメンバーズ制度、大学との連携事業等の実施を通じて人材育成に寄与する。

4) 国内外の有形文化財の保存・修理に関する人材育成への寄与

保存科学、修理技術及び博物館関係者等を対象とした人材育成に係る事業を関係機関と連携しながら検討、実施する。

5) 博物館支援者増加への取組

企業との連携や会員制度の活性化等により博物館支援者の増加を図る。

② 有形文化財に関する情報の発信と広報の充実

文化財に関する情報の発信を推進するとともに、展覧事業及び各種事業に関し、積極的な広報を行う。

1) 有形文化財に関する情報の発信

ウェブサイト等において、文化財その他関連する資料の情報を公開する。公開データの件数は継続的に増加させる。

2) 資料の収集と公開

美術史学・考古学・歴史学・博物館学・保存科学その他の関連諸学に関する基礎資料及び国内外の博物館等に関する情報及び資料について広く収集し、蓄積するとともに、その情報の発信と充実を図る。

3) 広報活動の充実

展示や教育事業等について、個々の企画の目的、対象、内容及び学術的な意義並びに各種アンケート等分析結果も踏まえて戦略的な広報計画を策定し、情報提供を行う。また、広報印刷物やウェブサイト、SNS等の自主媒体の活用、並びにマスメディアや各博物館の近隣施設との連携強化等により、積極的な広報を行う。

ウェブサイトの運用においては、アクセス件数の向上を図り、各施設の工事等による影響を勘案しつつ、前中期目標の期間の実績以上を目指す。さらに、時宜的なニーズに応じたウェブサイトの構築等について、一層の改善を図る。

(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究

文化財に関する調査研究を実施し、その保存と活用を推進することにより、次代への継承及び我が国の文化の向上に寄与する。

① 有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究

収蔵品をはじめとする文化財に関する基礎的かつ総合的な調査研究、各博物館の特色に応じた歴史・伝統文化に関する基礎的かつ総合的な調査研究、及び歴史・伝統文化の理解促進に資する展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究等を実施し、その成果を展覧事業・教育普及活動等に反映し、広く一般に発信する。

② その他有形文化財に関連する調査研究

文化財の収集・保存・修理・管理ほか、文化財及び博物館の業務に関連する調査研究を実施する。また、将来的に展覧事業や教育活動等に結びつく基礎的な調査研究を実施する。

③ 国内外の博物館等との学術交流等

2019年 ICOM 京都大会の成果も踏まえつつ、我が国における博物館活動の先導的役割を果たすとともに、文化財とその活用等に関する博物館活動について、先進的かつ有用な情報を集積するため、海外の優れた研究者を招へいし、国際シンポジウムや研究会・共同調査等を実施する。また職員を海外の博物館・文化財研究所等の研究機関及び国際会議等に派遣し、積極的に研究発表を行う。

④調査研究成果の公表

文化財等に関する調査研究の成果を図版目録、研究紀要、学術雑誌並びに展覧事業に関わる刊行物などで発表するとともに、ウェブサイトでの公開等、調査研究成果の発信を更に拡充する。

(5) 国内外の博物館活動への寄与

①国内外の博物館等への有形文化財の貸与

収蔵品については、その保管・展示状況、コンディション、貸出先の施設の状況等を総合的に勘案しつつ、国内外の博物館等の要請に応じて、展示等の充実に寄与するため、貸与を実施する。

②国内外の博物館等への援助・助言等

国内外の博物館等からの要請に応じて、専門的・技術的な援助・助言を行うとともに、ICOM、ICOMOS 等の国際機関とも連携しつつ、博物館関係者の情報交換を推進し、人的ネットワークの形成等を図る。

(6) 文化財の積極的な活用による文化財の継承につなげる新たな取組

①文化財に親しむためのコンテンツの開発とモデル事業の推進

高度な技術で制作された複製や、VR・AR、8K 映像などの先端技術を使った企画コンテンツ事業を積極的に推し進めることで、文化財の新しい活用方法を探り、これまで文化財に触れる機会のなかった人々にも、学ぶ喜びや、楽しい時間を創出する。

②国立博物館の収蔵品の貸与の促進を行う。

国立博物館が収蔵する文化財を全国の博物館・美術館等での展示で活用するため、貸与促進事業を実施し、地方創生・観光振興にも寄与する。実施にあたっては、作品の輸送費や広報費等を負担するとともに、文化財の魅力と価値を広く伝える活動に取り組む。

③文化財のデジタル資源化の推進と国内外への情報発信を行う。

ColBase（国立文化財機構所蔵品統合検索システム）、e 国宝（文化財高精細画像公開システム）の内容の充実を図る。

④文化財の保存等に関する相談・助言・支援を行う。

「活用との両立」の観点より、文化財の展示・収蔵環境向上に資するための、相談や協議対応、改善のための調査協力や技術支援、研修会や講習会を通じた環境管理に携わる人材育成を行う。また、環境管理に係る調査研究を行う。

2. 文化財及び海外の文化遺産の保護に貢献する調査研究、協力事業等の実施

貴重な文化財を次代へ継承していくために必要な知識・技術の基盤の形成に寄与するため、以下の調査研究を行う。

(1) 新たな知見の開拓につながる基礎的・探求的な調査研究

国内外の機関との共同研究や研究交流を含め、文化財に関する基礎的・体系的な調査研究や文化財の保存・活用のための調査研究に取り組む。その成果は、基礎的データの増大や学術的知見の蓄積、文化財指定等の基礎資料の提供につながり、国・地方公共団体における文化財保護施策の企画・立案、文化財の評価等に関し、個別的・総合的に寄与する。

①有形文化財、伝統的建造物群に関する調査研究

有形文化財、伝統的建造物群に関する基礎的・体系的な調査研究として以下の課題に取り組み、我が国の美術工芸品や建造物の価値形成の多様性及び歴史・文化の源流の究明等、並びに有形文化財の保存修復等に寄与する。

1) 我が国の美術を中心とする有形文化財等に関する調査研究

我が国において古代から近現代までに制作された絵画・彫刻・工芸等を中心とする有形文化財、及びそれらに関連する国内外の文化財について、その文化財の製作技法、制作背景等と受容の様相、その後の評価の変遷、今日に至るまでの保護等に関する調査研究、文化財やその保護に関する文献・画像資料及びその他の文化財情報に関する調査研究とそれらの収集・整理、データベースの構築手法等の文化財情報の公開・活用手法に関する調査研究を行い、調査研究成果を公開する。

2) 建造物及び伝統的建造物群に関する調査研究

建造物に関しては、古代建築の研究に資するため、古材調査を中心とする古代建築調査を行う。また、近世・近代の建造物等の調査研究及び保存活用計画の策定への協力を行い、成果を公開する。伝統的建造物群については、その保存と活用に資するため、重要伝統的建造物群保存地区を目指している地区の調査を行い、成果を公開するとともに、各地の歴史的建造物の保存に協力する。

3) 歴史資料・書跡資料に関する調査研究

我が国の歴史、文化の解明及び理解の促進等を図るため、近畿地方を中心とした寺社の歴史資料・書跡資料等に関する調査研究を行う。

②無形文化財、無形民俗文化財等に関する調査研究

無形文化財、無形民俗文化財等に関する以下の課題に取り組み、その伝承・公開に係る基盤の形成に寄与する。

1) 重要無形文化財等の保存・活用に資する調査研究

重要無形文化財を中心とする古典芸能・伝統工芸技術及びそれらに関わる文化財保存技術について、調査研究・情報収集・記録作成に努め、その保存伝承に資する成果を公開する。

2) 重要無形民俗文化財等の保存・活用に資する調査研究

無形民俗文化財においては、全国の民俗芸能・風俗慣習・民俗技術の情報を収集記録し、その保存及び活用に貢献しうる研究成果を公開する。

③記念物、文化的景観、埋蔵文化財に関する調査研究

記念物、文化的景観、埋蔵文化財に関する基礎的・体系的な調査研究として以下の課題に取り組み、記念物の保存・活用、古代国家の形成過程や社会生活等の解明、文化的景観に関する保存・活用並びに研究の進展、埋蔵文化財に関する学術研究の深化に寄与する。

1) 史跡・名勝の保存・活用に資する調査研究

記念物のうち史跡については、その保存・活用のための調査研究を地域振興の観点に基づき進める。名勝については、庭園に関する調査研究を実施し、成果を公開する。

2) 古代日本の都城遺跡に関する調査研究

古代日本の都城の解明等を図るため、平城地区では平城宮跡東院地区及び東方官衙地区並びに平城京内の寺院遺跡の調査研究を進め、飛鳥・藤原地区では藤原宮跡大極殿院地区等及び飛鳥地域の寺院・宮殿遺跡等の調査研究を進める。

3) 重要文化的景観等の保存・活用に資する調査研究

文化的景観の保存・活用の促進等を図るため、重要文化的景観に関する情報を収集・整理し、成果を公開する。あわせて、複数の事例研究により文化的景観の調査手法の体系化を行う。

4) 全国の埋蔵文化財に関する基盤的な調査研究

遺物及び遺構の解明とその保存・活用の促進等を図るため、官衙・集落遺跡、古代瓦等に関し全国的な情報収集及び連携に基づく調査研究を実施し、成果を公開する。

5) 水中文化遺産に関する調査研究

国内の水中文化遺産保護等に関する調査を行う。

(2) 科学技術を応用した研究開発の進展等に向けた基盤的な研究

文化財の価値や保存に関する研究の進展を図るため、下記の研究開発及び調査研究に取り組む。

①文化財の調査手法に関する研究開発

文化財の調査手法に関する研究開発を推進し、科学技術を的確に応用し、文化財の調査手法の正確性、効率性等の向上に寄与する。また、文化財を生み出した文化的・歴史的・自然的環境等の背景やその変化の過程を明らかにすることに寄与する。

1) 視覚情報からのデジタル情報の形成方法等の研究開発

文化財の現状及び劣化状態、材料、制作技法等の情報の記録や解析に応用するため、デジタル画像の形成や3D記録製作等の手法について研究開発を進める。

2) 埋蔵文化財の調査手法の研究開発

遺跡調査の質的向上及び作業の効率化等を図るため、遺跡の探査・計測・分析等の調査手法に関する研究開発を進める。

3) 年輪年代学を応用した文化財の科学的分析方法の研究開発

年輪年代調査による木造文化財の年代確定を推進するとともに、分析に必要不可欠となる各地の年輪データを収集・整理し、その地域性に関する研究等を進める。また、デジタル技術等を活用した年輪年代の調査に関する研究開発を進める。

4) 動植物遺存体の分析方法の研究開発

過去の生活・生業活動の解明等を図るため、基礎研究として、分析に必要不可欠な現生の動植物標本を収集・整理するとともに、発掘調査等で出土した動植物遺存体等の調査手法に関する研究開発を進める。

5) 文化財の調査・研究成果を社会・教育実装するためのICTを用いた普及・啓発手法の開発

AR・VR技術やゲーム、データベース等の手段を用いた文化財の調査・研究成果の公開・普及を促進するための基礎研究を進める。

6) 物質文化・地質情報等を基とした防災・減災・復興・復旧の歴史的研究

遺構、遺物、石造物、地質などの遺跡調査において確認される情報を統合した災害史の基礎研究を行い、防災・減災に資する情報活用、普及啓発に向けた調査研究を行う。

②文化財の保存修復及び保存技術等に関する調査研究

文化財の保存科学や修復技術・修復材料・製作技法に関する中核的な研究拠点として、最新の科学技術を応用し、文化財研究としての新たな技術の開発を進め、国内外の機関との共同研究や研究交流を図り、先端的な調査研究を推進する。

以下の調査研究に取り組むとともに、その成果を広く公開することにより、文化財の保存や修復の質的向上に寄与する。

1) 生物被害の機序解明と対策に関する調査研究

生物被害の機序解明を通して、虫菌害対策のシステム化を行う。文化財建造物や古墳など生物制御が困難な場所では、環境と調和した新しい対策法の検討を進める。博物館等施設内の生物被害モニタリングの改良と標準化によって予防保存をより向上させる。また、被災文化財の生物被害を低減するための初期対応方法を研究する。

2) 文化財の保存環境と維持管理に関する調査研究

様々な条件下における建物の特徴と環境との関係を明らかにしつつ、文化財保存に最適な環境を作り出し、維持管理する方法を検討する。被災文化財の一時保管場所を想定した保存環境について、環境整備に必要な温湿度・空気質等の状況を把握し、より良い環境づくりのための調査研究を行う。

3) 文化財の材質・構造、及び保存状態に関する調査研究

各種の可搬型分析装置を用いた文化財の材質・構造・劣化状態に関する調査研究を行う。日本絵画における顔料の変遷等の研究を進めるとともに、美術工芸品等に用いられている金属の腐食に関する調査研究及び対策の検討を行う。

4) 屋外文化財の保存修復計画に関する調査研究

屋外に存在する多様な文化財について、その価値を有効に人々に伝えるための適切な保存

修復計画の構築に資する研究を行う。

5) 文化財の修復技法及び修復材料に関する調査研究

美術工芸品や建造物等の修復に貢献するため、伝統的な修復材料・技法についての科学的調査を行い、その安定性についての評価を行う。また旧来の材料・技法では施工が困難とされてきたものについて、新規の材料・技法の開発に関する調査研究を行う。

6) 文化財の修復技術に関する調査研究

被災文化財の保存修復技術、及び近代以降に使われるようになった新しい材料や技法に関する保存修復技術の調査研究を行う。様々な保存修復技術を現場に効果的に適用するための研究を行う。

7) 考古遺物の保存処理法に関する調査研究

考古遺物の診断調査から得られる情報を活用し、金属製遺物の脱塩・安定化法や木製遺物のシステマティックな含浸処理法等、考古遺物を安定した状態で保存・活用するための新規の保存処理法に関する調査研究を行う。

8) 遺構の安定した保存のための維持管理方法に関する調査研究

遺構周辺の熱水分性状に関する環境調査及び物質移動、埋蔵環境についてモデル化を行い、遺構と埋蔵環境下にある遺物の安定した保存のための維持管理方法に関する調査研究を行う。

9) 考古遺物を中心とした文化財の材質調査に関する調査研究

金属製遺物やガラス製遺物などの無機質遺物を中心に、材質に関する定量分析法の問題点を抽出するとともに、確度の高い分析法の確立を目指した調査研究を行う。

10) 高松塚古墳・キトラ古墳の恒久的保存に関する調査研究

高松塚古墳、キトラ古墳の保存対策事業等、我が国の文化財保護政策上重要かつ緊急に保存及び修復の措置等を行うことが必要となった文化財について、実践的調査研究を迅速かつ適切に行う。

(3) 文化遺産保護に関する国際協働

① 文化遺産保護に関する国際協働の総合的な推進

我が国が有する文化遺産保護に関する知識・技術・経験を活かしながら、下記のような事業を有機的連携のもと総合的に展開することを通じて、人類共通の財産である海外の文化遺産保護に協力することにより、諸外国との文化的交流及び相互理解の促進に貢献する。

1) 文化遺産保護に関する国際情報の収集・研究・発信

海外の文化遺産に関する情報の収集、諸外国の文化遺産保護施策・スキーム等に関する調査研究を行う。

また世界遺産委員会などユネスコ等が行う主要な国際会合に出席して情報の収集を行うとともに、文化遺産の保護をめぐる今日的な課題等に関する調査研究を行い、その成果を国内外に情報発信する。

2) 文化遺産保護に関する研究及び協力事業の推進

諸外国の多様な文化遺産の保存や活用等に関し、研究会の開催や現地におけるワークショップを含む国際共同研究等の実施を通じて、その理念と技術の両面における研究を進めるとともに、国際協力を推進するための基盤を強化する。

また、その成果をもとに、我が国が蓄積してきた調査技術や保存技術、実践的方法論等を活かしつつ、ASEAN 諸国をはじめとするアジア地域を中核としながら、諸外国での文化遺産保護に関する技術支援や体制強化などに資する協力事業を実施する。

3) 文化遺産保護に関する人材育成等

諸外国の文化遺産担当者等を対象とした研修や専門家の派遣を通じて、文化遺産の保存や活用等に関する人材育成を進める。またこのような機会を通じて、国際的な文化遺産保護に関する情報交換や相互協力を促進する。

4) 海外に所在する日本古美術品等の保存に関する協力

諸外国が所蔵している日本古美術品等の保存修復に協力し、さらにその成果を英文報告書等で公開することにより日本が持つ伝統的保存修復に関わる知識と経験の共有を行う。

②アジア太平洋地域の無形文化遺産保護に関する調査研究

アジア太平洋地域において活動する研究者・研究機関と連携のもと、無形文化遺産保護の実践及び方法論についての国際会議やシンポジウム及び専門家会合並びに出版等の事業を通じた研究の活性化、研究情報の収集及びその活用戦略の検討と開発を通じて、当該地域における無形文化遺産保護のための研究を促進する。

(4) 文化財に関する情報・資料の収集・整備及び調査研究成果の公開・活用

文化財に関連する情報・資料の収集・整理・保管を行うとともに、調査研究成果を公開し、国内外の諸機関との連携を強化することにより、広く社会に還元する。

①文化財情報基盤の整備・充実

文化財情報・資料の計画的収集、整理、保管、公開並びにそれらの電子化の推進による文化財に関するアーカイブの拡充を行うとともに、調査研究に基づく成果としての文化財情報データベースを高度化する。また、文化財情報データベースの構築に関する国内外の事例調査を行い、調査研究及びその成果発信のための文化財情報基盤を計画的に整備する。なお、文化財に関するデータベースのアクセス件数については、前中期目標の期間の実績以上を目指す。

②調査研究成果の発信

文化財に関する調査研究の成果を定期刊行物やウェブサイト、公開講演会、現地説明会、シンポジウム等により、多元的に発信する。また、ウェブサイトにおいては、上記の発信手法と併用あるいはそれらを補完するとともに、ウェブの特徴を生かした情報発信を行い、国内外の利用者に向けた日本語はもとより多言語での情報発信を図る。

③展示公開施設の充実

平城宮跡資料館、藤原宮跡資料室、飛鳥資料館については、研究成果の公開施設としての役割を強化する観点からウェブサイトによる動画配信を含め、展示等を充実させ、来館者の理解を促進する。なお、来館者に対する満足度アンケートにおける上位評価が前中期目標の期間と同程度の水準の維持を目指す。また、宮跡等への来訪者に文化財及び文化財研究所の研究成果等に関する理解を深めてもらうため、「新しい生活様式」を踏まえつつ、解説ボランティアを育成し、その活動を支援する。

(5) 地方公共団体等を対象とする文化財に関する研修及び協力等

我が国の文化財に関する調査研究の中核として、これまでの調査研究の成果を活かし、文化財担当者を対象とした各種研修について、研修項目、課程等の体系を示し、地方公共団体等の要望を踏まえた研修計画を策定して実施し、文化財保護に携わる人材を育成する。

また、我が国全体の文化財の調査研究の質的向上に寄与するため、国・地方公共団体等に対する専門的・技術的な協力・助言を行う。

①文化財に関する研修の実施

文化財に関する高度な研究成果をもとに、地方公共団体等の文化財担当者等に対し文化財に関する研修を行うとともに、保存担当学芸員に対し保存科学に関する研修を行う。

なお、研修の評価については、アンケートによる研修成果の活用実績が80%以上となることを目指す。

②文化財に関する協力・助言等

国・地方公共団体や大学、研究機関との連携・協力体制を構築し、これらの機関が有する文化財に関する情報の収集、知見・技術の活用、機構が行った調査研究成果の発信等を通じて、文化財に関する協力・助言を行う。

③平城宮跡、飛鳥・藤原宮跡等の整備及び公開・活用事業への協力

文化庁と国土交通省が行う平城宮跡、飛鳥・藤原宮跡等の整備及び公開・活用事業に協力する。また、NPO法人平城宮跡サポートネットワーク及び周辺自治会等が行う各種ボランティア活動に協力する。

④連携大学院との連携教育等の推進

連携大学院との連携教育や大学への教育協力を実施し、今後の我が国の文化財保護における中核的な人材を育成する。

(6) 文化財防災に関する取組

文化財の防災・救援のための連携・協力体制の構築、文化財防災のための技術開発、専門的な知見から必要となる支援を行うとともに、文化財防災に関する地域の専門的な人材の育成を図るため、次の取り組みを行う。

①地域防災体制の構築

都道府県文化財所管部局を中心とした地域内連携体制、及び近隣都道府県の災害時相互支援体制の構築・促進等を図る。

②災害時ガイドライン等の整備

多様な文化財に関する分野別の防災ガイドライン等の整備を図る。

③レスキュー及び収蔵・展示における技術開発

各種の文化財収蔵施設や設備の安全対策に関する調査研究、被災文化財の応急処置・修復処置に関する事例の収集と技術開発、被災文化財の保管環境や災害時対応の手順等に関する研究を行う。

④文化財防災を促進するための普及啓発

H P 等の活用による各種の広報活動を行う。シンポジウム・講演会を開催するとともに、地方公共団体職員や博物館・美術館学芸員等を対象とする研修を行って、文化財防災に関する普及啓発を行う。また、国際機関・外国機関等との連携を通じ文化財防災に関する国際貢献に資する。

⑤文化財防災に関係する情報の収集と活用

各種文化財データベースの構築を行い、防災に活用するためのシステムの整備・開発を行う。

II 業務運営の効率化に関する目標を達成するためにとるべき措置

1. 業務改善の取組

(1) 組織体制の見直し

組織の機能向上のため、組織・体制等の見直しを行う。機構の事業全体を通じて、体制の整備を図る。

(2) 人件費管理等の適正化

国家公務員の給与水準とともに業務の特殊性を十分考慮し、対国家公務員指数については適正な水準を維持するよう取り組み、その結果について検証を行うとともに、検証結果や取組状況を公表する。

(3) 契約・調達方法の適正化

「独立行政法人における調達等合理化の取組の推進について」（平成 27 年 5 月 25 日総務大臣決定）に基づき、引き続き取組を着実に実施し、文化財の購入等、随意契約が真にやむを得ないものを除き、競争性のある契約への移行を推進することにより、経費の効率化を行い、随意契約によることができる事由を会計規定等において明確化し、公正性・透明性を確保しつつ合理的な調達を実施する。

(4) 共同調達等の取組の推進

各施設の業務内容や地域性を考慮しつつ、コピー用紙等の消耗品や役務について近隣の関係機関等との共同調達等の取組を推進する。

(5) 一般管理費等の削減

運営費交付金を充当して行う事業については、一般管理費及び業務経費の合計について、中期目標期間の最終年度において、令和2年度比5%以上の効率化を図る。ただし、文化財購入費等及び特殊要因経費、新たに追加される業務はその対象としない。また、人件費については(2)及びIX 4.に基づき取り組むこととし、本項の対象としない。このため、事務、事業、組織等の見直しや資源の効率的な利用、ICTの活用等によりサービスの質を維持した上で業務の効率化を図る。

2. 業務の電子化

機構に関する情報の提供、業務・システムの統合・融合化を含む最適化等を図ることとし、ICTを活用した業務の合理化・効率化を図る。

3. 予算執行の効率化

運営費交付金収益化基準として業務達成基準が原則とされていることを踏まえ、収益化単位の業務ごとに予算と実績を管理する。

Ⅲ 財務内容に関する目標を達成するためにとるべき措置

1. 自己収入拡大への取組

コロナ禍における「新しい生活様式」を踏まえた事業展開において、展覧事業の集客力を高める工夫による来館者数の最大化に努め、自己収入の確保を図るとともに、賛助会員等への加入者の増加に継続的に取り組み、寄附金の獲得を目指す。

これらの取組により、寄附金等収入については、第5期中期目標期間の累積額が前中期目標期間の累積実績額以上を目指す。

また、保有資産については、その必要性や規模の適切性についての検証を適切に行うとともに、映画等のロケーションのための建物等の利用や会議・セミナーのための会議室の貸与等を本来業務に支障のない範囲で実施するなどの施設の有効利用を推進する。さらに、競争的資金や寄附金の獲得等財源の多様化を図り、機構全体として運営費交付金等の国費のみに頼らない財務構造へのシフトを目指す。

2. 固定的経費の節減

管理業務の節減を行うとともに、効率的な施設運営を行うことにより、固定的経費の節減を図る。

3. 決算情報・セグメント情報の充実等

財務内容等の一層の透明性を確保し、活動内容を政府・国民に対して分かりやすく示し、理解促進を図る観点から、事業のまとまりごとに決算情報・セグメント情報の公表の充実等を図る。

4. 保有資産の処分

保有資産の見直し等については、「独立行政法人の保有資産の不要認定に係る基本的視点について」（平成 26 年 9 月 2 日付け総管査第 263 号総務省行政管理局通知）に基づき、保有の必要性を不断に見直し、保有の必要性が認められないものについては、不要財産として国庫納付等を行う。

IV 予算（人件費の見積もりを含む）、収支計画及び資金計画

コロナ禍における「新しい生活様式」を踏まえた事業展開において、管理業務の効率化並びに自己収入の確保に向けた取組を踏まえた予算及び収支計画による運営を行う。

1. 予算（中期計画の予算）

別紙 1 のとおり

2. 収支計画

別紙 2 のとおり

3. 資金計画

別紙 3 のとおり

V 短期借入金の限度額

短期借入金の限度額は、20 億円

短期借入金が想定される理由は、運営費交付金の受入れ遅延や展覧会中止に伴う一時的な資金繰りの悪化などである。

VI 不要財産又は不要財産となることが見込まれる財産の処分等に関する計画 なし。

VII 重要な財産の処分等に関する計画 なし。

VIII 剰余金の使途

決算において、剰余金が発生した時は、次の経費等に充てる。

1. 文化財の購入・修理
2. 調査研究、出版事業の充実
3. 展覧事業の充実
4. 来館者サービス、情報提供の質的向上
5. 国際協力
6. 老朽化した施設設備への対応の充実
7. 文化財活用や文化財防災の推進

IX その他業務運営に関する目標を達成するためにとるべき措置

1. 内部統制

理事長のリーダーシップの下で、法人の使命等の周知、コンプライアンスの徹底、理事長のマネジメント強化、リスクマネジメント等を含めた内部統制環境を継続して整備し、運用する。また、内部監査等により定期的にそれらの整備状況・有効性をモニタリング・検証するとともに、監事による監査機能・体制の強化に取り組み、必要に応じて内部統制に関する見直しを行う。さらに、研修等を通じて職員の理解促進、意識や取組の改善を行う。

2. その他

(1) 自己評価

外部有識者も含めた事業評価の在り方について適宜、検討を行いつつ、年1回以上事業に関する自己評価を実施し、その結果を組織、事務、事業等の改善に反映させる。

(2) 情報セキュリティ対策

多様化するサイバー攻撃やセキュリティの脅威に対する組織的対応強化を図るため、政府機関の情報セキュリティ対策のための統一基準群を踏まえた規定の整備及び適時適切な見直し、役職員の研修及び教育を実施する。

計画的な情報セキュリティ対策の点検及び情報セキュリティ監査の実施により、情報セキュリティ対策の実施状況を把握するとともに、その強化を図る。

3. 施設設備に関する計画

施設設備の老朽化度合い等を勘案しつつ、別紙4のと通りの計画に沿った整備を推進する。

国立博物館の施設設備の整備においては、令和2年度策定のメンテナンスサイクル（個別施設計画）に基づき、既存施設の維持管理及び長寿命化改修を進める。重要文化財（建造物）や国宝・重要文化財（美術工芸品）を保管する建物の防火設備の整備や防火対策について検討し、具体的な防火対策プランを作成し計画的に進める。

（東京国立博物館）

開館後約80年が経過した本館の空調設備、収蔵・展示施設について、建物が重要文化財に指定されていることに配慮し、改修等計画を推進する。

（京都国立博物館）

京都国立博物館本館（明治古都館）の改修に当たっては、重要文化財に指定された建造物としての保存とともに展示施設としての活用に配慮した改修計画及び観覧環境の再整備計画を進める。

（奈良国立博物館）

構内のバリアフリー化やエントランスの拡張等観覧環境等の改善及び展示施設の改修等を行うとともに、奈良における文化財の調査研究等の拠点として必要な研究設備を整備する。

（九州国立博物館）

防犯設備や展示照明等、開館から15年が経過し老朽化がみられる施設・設備について、展示環境の維持改善を目的とした改修等計画を推進する。

4. 人事に関する計画

(1) 方針

適切な人事管理、人事交流等を実施することにより、効率的かつ効果的な業務運営を行い、人事計画等に基づき、デジタル分野など新たな業務等にも対応した人材の確保・育成を図る。

国家公務員の制度改革や社会一般の動向を勘案しつつ、職員の能力や業績を適切に反映できる人事・給与体制を整備し、人材の確保を図る。

職員のキャリアパスの形成に寄与するために、研修・人事交流等を多角的に企画し、人材の育成を図る。

(2) 人員に係る指標

給与水準の適正化等を図りつつ、業務内容を踏まえた適切な人員配置等を推進する。

中期目標期間中の人件費総額見込額

14,278百万円

但し、上記の額は、役職員に対し支給する報酬（給与）、賞与、その他の手当の合計額であり、退職手当、福利厚生費を含まない。

5. 中期目標期間を超える債務負担

中期目標期間を超える債務負担については、機構の業務運営に係る契約の期間が中期目標期間を超える場合で、当該債務負担行為の必要性及び資金計画の影響を勘案し、合理的と判断されるものについて行う。

6. 積立金の使途

前中期目標期間の最終年度において、独立行政法人通則法第44条の処理を行ってなお積立金があるときは、その額に相当する金額のうち文部科学大臣の承認を受けた金額について、次期へ繰り越した経過勘定損益影響額等に係る会計処理に充当する。

(別紙1) 予算 (中期計画の予算)

令和3年度～令和7年度 予算

(単位: 百万円)

区 分	国立博物館等	文化財研究所等	合 計
収 入			
運営費交付金	32,318	12,936	45,254
施設整備費補助金	7,732	1,063	8,795
展示事業等収入	4,842	317	5,159
受託収入	1,399	2,582	3,981
その他寄附金等	3,350	644	3,994
計	49,641	17,542	67,183
支 出			
管理経費	6,023	2,052	8,075
うち人件費	2,840	1,429	4,269
うち一般管理費	3,183	623	3,806
業務経費	32,890	11,207	44,097
うち人件費	8,656	4,592	13,248
うち収集保管事業費	12,733	0	12,733
うち展覧事業費	5,832	0	5,832
うち教育普及事業費	463	0	463
うち博物館研究事業費	3,297	0	3,297
うち博物館支援事業費	149	0	149
うち文化財活用事業費	1,760	0	1,760
うち基礎研究事業費	0	1,473	1,473
うち応用研究事業費	0	1,609	1,609
うち国際遺産保護事業費	0	854	854
うち情報公開事業費	0	1,849	1,849
うち研修協力事業費	0	59	59
うち文化財防災事業費	0	771	771
新型コロナウイルス感染症拡大防止に伴う自己収入減額見合いの事業費要節約額	(1,753)	(6)	(1,759)
施設整備費	7,732	1,063	8,795
受託事業費	1,399	2,582	3,981
その他寄附金等	3,350	644	3,994
計	49,641	17,542	67,183

【人件費の見積り】 期間中総額14,278百万円を支出する。

但し、上記の額は、役職員に対し支給する報酬（給与）、賞与、その他の手当の合計額であり、退職手当、福利厚生費を含まない。

[運営費交付金の算定ルール]

○運営費交付金

毎事業年度に交付する運営費交付金（A）については、以下の数式により決定する。

$$A(y) = P(y) + Pk(y) + R(y) + Rk(y) + \varepsilon(y) - E(y)$$

〈凡例〉

- A(y) : 当該事業年度の運営費交付金
- P(y) : 当該事業年度の業務経費の人件費（役職員に対する報酬・給与、賞与、手当の合計額であり、退職手当、福利厚生費を含まない。）
- Pk(y) : 当該事業年度の管理経費の人件費（役職員に対する報酬・給与、賞与、手当の合計額であり、退職手当、福利厚生費を含まない。）
- R(y) : 当該事業年度の業務経費（特殊要因を除く。）
- Rk(y) : 当該事業年度の一般管理費（特殊要因を除く。）
- $\varepsilon(y)$: 当該事業年度における特殊要因経費
- E(y) : 当該事業年度における自己収入の見積額

○人件費

$P(y) = P(y-1) \times \alpha \times \sigma$ （中期計画の初年度である令和3年度のP(y)は見積額とする。）

$Pk(y) = Pk(y-1) \times \alpha \times \sigma$ （中期計画の初年度である令和3年度のPk(y)は見積額とする。）

〈凡例〉

- P(y) : 当該事業年度の業務経費の人件費（役職員に対する報酬・給与、賞与、手当の合計額であり、退職手当、福利厚生費を含まない。）
- P(y-1) : 直前の事業年度のP(y)
- Pk(y) : 当該事業年度の管理経費の人件費（役職員に対する報酬・給与、賞与、手当の合計額であり、退職手当、福利厚生費を含まない。）
- Pk(y-1) : 直前の事業年度のPk(y)
- α (アルファ) : 効率化係数。各事業年度の予算編成過程において、当該事業年度における具体的な係数値を決定。
- σ (シグマ) : 人件費調整係数。各事業年度の予算編成過程において、給与昇給率等を勘案し、当該事業年度における具体的な係数値を決定。

○業務経費

$R(y) = R(y-1) \times \beta \times \theta \times \gamma$ （中期計画の初年度である令和3年度のR(y)は見積額とする。）

〈凡例〉

- R(y) : 当該事業年度の業務経費（特殊要因を除く。）
- R(y-1) : 直前の事業年度のR(y)
- β (ベータ) : 効率化係数。各事業年度の予算編成過程において、当該事業年度における具体的な係数値を決定。

- θ (シータ) : 消費者物価指数。各事業年度の予算編成過程において、当該事業年度における具体的な係数値を決定。
- γ (ガンマ) : 業務政策係数。自己収入に係る支出を勘案し、また事業の進展により必要経費が大幅に変わること等を勘案し、各事業年度の予算編成過程において、当該事業年度における具体的な係数値を決定。

○一般管理費

$R_k(y) = R_k(y-1) \times \pi \times \theta$ (中期計画の初年度である令和 3 年度の $R_k(y)$ は見積額とする。)

〈凡例〉

- $R_k(y)$: 当該事業年度の一般管理費 (特殊要因を除く。)
- $R_k(y-1)$: 直前の事業年度の $R_k(y)$
- π (パイ) : 効率化係数。各事業年度の予算編成過程において、当該事業年度における具体的な係数値を決定。
- θ (シータ) : 消費者物価指数。各事業年度の予算編成過程において、当該事業年度における具体的な係数値を決定。

○特殊要因経費

ε (イプシロン) : 毎事業年度の見積額

○自己収入

$E(y) = E(y-1) \times \mu \times \lambda$ (中期計画の初年度である令和 3 年度の $E(y)$ は見積額とする。)

〈凡例〉

- $E(y)$: 当該事業年度の自己収入 (受託収入等を除く)
- $E(y-1)$: 直前の事業年度の $E(y)$
- μ (ミュー) : 収入政策係数。各事業年度の予算編成過程において、当該事業年度における具体的な係数値を決定。
- λ (ラムダ) : 収入調整係数。事業の見直し等による自己収入への影響等を勘案し、各事業年度の予算編成過程において、当該事業年度における具体的な係数値を決定。

[上記の算定式に基づき、以下の仮定の下に中期計画の予算を試算]

- ・運営費交付金の見積りについては、文化財購入費等及び特殊要因経費、新たに追加される業務を除いて、令和 2 年度予算額を基準額として、中期計画期間中に、人件費 (±0%)、一般管理費物件費及び業務経費物件費の合計 (△5%) とし、中期計画期間中に想定される特殊要因経費を加算して試算。
- ・退職手当については、中期計画期間中に想定される額を試算。
- ・施設整備費補助金については、令和 3 年度以降の施設・設備整備計画に基づき試算。

(別紙2) 収支計画

令和3年度～令和7年度 収支計画

(単位：百万円)

区 分	国立博物館等	文化財研究所等	合 計
費用の部	31,035	16,068	47,103
経常費用	31,035	16,068	47,103
管理経費	5,712	2,020	7,732
人件費	2,872	1,438	4,310
一般管理費	2,840	582	3,422
業務経費	22,618	13,297	35,915
人件費	9,215	4,752	13,967
収集保管業務費	1,573	0	1,573
展覧業務費	5,639	0	5,639
教育普及業務費	405	0	405
博物館研究業務費	2,806	0	2,806
博物館支援業務費	126	0	126
文化財活用業務費	1,455	0	1,455
基礎研究業務費	0	1,252	1,252
応用研究業務費	0	1,362	1,362
国際遺産保護業務費	0	794	794
情報公開業務費	0	1,717	1,717
研修協力業務費	0	191	191
文化財防災業務費	0	647	647
受託業務費	1,399	2,582	3,981
減価償却費	2,702	745	3,447
財務費用	3	6	9
収益の部	31,035	16,068	47,103
運営費交付金収益	19,842	11,780	31,622
展示事業等の収入	4,842	317	5,159
受託収入	1,399	2,582	3,981
寄附金収益	2,250	644	2,894
資産見返負債戻入	2,702	745	3,447
財務収益	0	0	0
純利益	0	0	0
目的積立金取崩額	0	0	0
総利益	0	0	0

(別紙3) 資金計画

令和3年度～令和7年度 資金計画

(単位：百万円)

区 分	国立博物館等	文化財研究所等	合 計
資金支出	49,641	17,542	67,183
業務活動による支出	28,333	15,323	43,656
投資活動による支出	21,240	2,167	23,407
財務活動による支出	68	52	120
資金収入	49,641	17,542	67,183
業務活動による収入	41,909	16,479	58,388
運営費交付金による収入	32,318	12,936	45,254
展示事業等による収入	4,842	317	5,159
受託収入	1,399	2,582	3,981
その他寄附金による収入	3,350	644	3,994
投資活動による収入	7,732	1,063	8,795
施設整備費補助金による収入	7,732	1,063	8,795
財務活動による収入	0	0	0
受取利息等による収入	0	0	0

(別紙 4)

施設設備に関する計画

(単位：百万円)

施設設備の内容	予 定 額	財 源
・東京国立博物館 平成館空調設備更新工事 (令和 4 年度～6 年度) 本館リニューアル工事 (令和 5 年度～7 年度)	6,082 710 5,372	施設整備費補助金
・京都国立博物館 本館(明治古都館)耐震改修等工事 (令和 3 年度～7 年度)	320 320	施設整備費補助金
・奈良国立博物館 環境整備(設備機器更新等)工事 (令和 4 年度～7 年度) 東新館エレベーター更新工事 (令和 4 年度)	1,019 856 163	施設整備費補助金
・九州国立博物館 入退室管理設備更新工事 (令和 4 年度) 展示室内壁付ケース照明 LED 化 (令和 4 年度)	311 156 155	施設整備費補助金
・東京文化財研究所 空調用ガスボイラー更新工事 (令和 4 年度)	58 58	施設整備費補助金
・奈良文化財研究所 老朽空調設備改修 (令和 4 年度) 飛鳥資料館老朽改善整備 (令和 4 年度)	1,005 123 882	施設整備費補助金

(脚注)

金額については見込みである。

また、施設・設備の老朽度合等を勘案した改修(更新)等が追加されることがあり得る。

4. 東京文化財研究所関係事業索引

凡 例

- (1) この索引は、令和3年度に東京文化財研究所が実施したすべての事業を、財源の種類を問わず網羅している。
(2) 事業は五十音順に配列し、各事業名称の末尾に次の略号を付すとともに、掲載頁を示した。

運営費交付金によるプロジェクト	【交付】
科学研究費助成事業	【科研】
受託調査研究	【受託】
共同研究	【共同】
助成金	【助成】
その他の調査研究	【その他】

- (3) ＊は次年度に繰越したものを示す。

あ	アジア諸国等文化遺産保存修復協力	【交付】	40
	アジア螺鈿文化交流史の構築－物質文化史の視点から	【科研】	70
	イラン東部へのウルク文化の拡大に関する考古学的研究	【科研】	77
	イランの乾燥地帯における農業施設の建築構法および建築技術者の存在形態に関する研究	【科研】	86
	エアロゾル消火薬剤が文化財に与える影響	【共同】	105
	江戸時代の絵画における基底材に関する基礎的研究	【科研】	81
	屋外文化財の劣化要因と保存対策に関する調査研究	【交付】	35
	沖縄県立芸術大学所蔵 重要文化財琉球芸術調査写真（鎌倉芳太郎撮影）のデジタル化に関する共同研究	【共同】	104
か	絵画に使用された絹・自然布の非破壊分析方法の開発と製法・修復に関する総合的調査	【科研】	73
	カジリムシ目昆虫における外部寄生性の進化に伴う形態変化の解明	【科研】	97
	紙文化財補修用材料としての高機能化楮繊維の開発	【科研】	76
	近現代建造物に適応した文化財保存理念の展開に向けた基礎的研究	【科研】	94
	近現代建造物の価値評価における同時代性に着目した文化財の現状変更概念の再考	【科研】	87
	近世の奄美・沖縄諸島における風葬の普及に関する文献史学的研究	【助成】	＊
	近・現代美術に関する調査研究と資料集成	【交付】	27
	近代の河川工事絵馬にみる河川管理のあり方と地域社会の接点：利根川中流域を中心に	【科研】	95
	Getty・リサーチ・ポータルへのデジタル資料の提供・公開	【共同】	106
	航空資料保存の研究	【共同】	103
	国際研修	【交付】	43
	国宝高松塚古墳壁画恒久保存対策に関する調査等業務	【受託】	98
	古典的膠の製造方法と各用途適性の体系化	【科研】	91
	コロナ禍における伝統芸能の「グッド・プラクティス」に関する研究	【助成】	109
さ	在外日本古美術品保存修復協力事業	【交付】	42
	様々な文化財に使用された彩色材料への赤外線画像による面的調査の検討	【科研】	84
	収蔵庫・展示室の建材等から放散する有機酸等の定量評価のための開発研究	【助成】	108
	従属栄養微生物による硫黄化合物の分解とそれに伴う腐食性ガス生成	【科研】	85
	鍾乳洞における照明植生を軽減する光環境に関する実験的研究	【科研】	83
	初期合成染料の染色堅牢性評価と変退色挙動の検討	【科研】	93
	専門的アーカイブと総合的レファレンスの拡充	【交付】	46
	組積造建造物の通電による脱塩の適応可能性に関する検討	【科研】	92
た	対外交渉史の視点によるアジア螺鈿の総合的研究－大航海時代を中心に－	【科研】	71

	高松塚古墳・キトラ古墳の恒久的保存に関する調査研究	【交付】	38
	多様な文化財の修復技術に関する調査研究	【交付】	37
	中世日本における中国美術の受容と羅漢の作例に関する調査研究	【科研】	89
	地域文化の表象としての「箕」の形態に関する学際的研究	【科研】	*
	東京藝術大学との間での連携大学院教育の推進	【交付】	64
	『東京文化財研究所概要』、『TOBUNKENNEWS』	【交付】	56
	常磐津節の音楽分析のための基盤研究	【科研】	80
	特別史跡キトラ古墳保存対策等調査業務	【受託】	99
な	南西諸島における風葬の定着過程に関する研究	【科研】	*
	日本東洋美術史の資料学的研究	【交付】	26
	日本の無形文化遺産保護におけるジェンダーに関する研究	【科研】	78
	日本美術の記録と評価についての研究－美術作品調書の保存活用	【科研】	72
は	バガン遺跡群（ミャンマー）寺院祠堂壁画の保存修復	【助成】	107
	博物館・美術館等保存担当学芸員研修（上級コース）	【交付】	60
	白鳳時代の壁画の構造と材料に関する研究	【科研】	75
	被災文化財保全のための一時保管と処置方法の最適化に向けた研究	【科研】	96
	美術館・博物館等の環境調査と援助・助言	【交付】	63
	美術工芸品保存修理用具・原材料調査事業	【受託】	100
	美術作品の様式表現・制作技術・素材に関する複合的研究と公開	【交付】	28
	プロジェクトの一環として刊行された刊行物	【交付】	57
	プロジェクトの一部として実施した研究集会・講座等	【交付】	49
	文化遺産国際協力拠点交流事業「ブータンの歴史的建造物保存活用に関する拠点交流事業」	【受託】	102
	文化遺産国際協力コンソーシアム事業	【受託】	101
	文化遺産保護に関する国際情報の収集・研究・発信	【交付】	39
	文化財修復材料と伝統技法に関する調査研究	【交付】	36
	文化財情報の分析・活用と公開に関する調査研究	【交付】	44
	文化財に関する調査研究成果および研究情報の共有に関する総合的研究	【交付】	25
	文化財の材質・構造・状態調査に関する研究	【交付】	34
	文化財の材質・構造に関する調査・助言	【交付】	63
	文化財の収集・保管に関する指導助言	【交付】	60
	文化財の修復及び整備に関する調査・助言	【交付】	62
	文化財生物劣化の分子生物学的手法による機構解明と環境調和型対策	【交付】	32
	文化財の虫菌害に関する調査・助言	【交付】	61
	文化財の保存環境にかかる調査研究	【交付】	33
	文化財防災センター事業	【その他】	65
	ポスト1968年表現共同体の研究：松澤有アーカイブズを基軸として	【科研】	82
	『保存科学』第61号の出版	【交付】	56
	保存修復技術の国際的応用に関する研究	【交付】	41
	ポンペイ遺跡壁画における無機物を主体とした保存修復材料による補強技法の確立	【科研】	74
ま	マヤ地域の博物館における文化遺産保全と地域発展に向けた文化資源マネジメントの研究	【科研】	88
	無形文化遺産における木材の伝統的な利用技術および民俗知に関する調査研究	【助成】	*
	無形文化遺産に関わる音声・画像・映像資料のデジタル化	【交付】	48
	無形文化遺産に関する助言	【交付】	61
	無形文化遺産部出版関係事業	【交付】	55
	無形文化遺産保護に関する研究交流・情報収集	【交付】	31
	無形文化財の保存・継承に関する調査研究	【交付】	29
	無形民俗文化財の保存・活用に関する調査研究	【交付】	30
	木材からの化学物質放散挙動の解明と博物館における選定指標の提案	【科研】	90
ら	旅館おかみの誕生	【科研】	79
	令和元年版『日本美術年鑑』刊行事業・出版事業『美術研究』（調査・研究成果の公開）	【交付】	55
	令和3年度オープンレクチャー（調査・研究成果の公開）	【交付】	47

独立行政法人国立文化財機構
東京文化財研究所年報 2021

発行日：2022年6月30日

発行所：独立行政法人国立文化財機構
東京文化財研究所

〒110-8713
東京都台東区上野公園13-43

TEL 03-3823-2241 (番号案内)

FAX 03-3828-2434

<https://www.tobunken.go.jp/>

info@tobunken.go.jp

編集：文化財情報資料部

制作：CURIO EDITORS STUDIO (柴田 卓)

印刷：ヨシミ工産株式会社

Independent Administrative Institution National Institutes for Cultural Heritage
Tokyo National Research Institute for Cultural Properties

ANNUAL REPORT 2021

Issued on 30 June, 2022

Published by Tokyo National Research Institute for Cultural Properties
13-43, Uenokoen, Taito-ku, Tokyo 110-8713, JAPAN

Edited by Department of Art Research, Archives and Information Systems

Designed and DTP by Curio Editors Studio (SHIBATA Takashi)

Printed by Yoshimi Kohsan Corporation

© Tokyo National Research Institute for Cultural Properties, 2022